THE KAIZO

改造

十月号

1924


クラブ煉歯磨

一番書きよい萬年筆

プラトン萬年筆

現代の文化生活から取離すことの出來ぬプラトン萬年筆



色澤鮮美の

プラトンインキ

萬年筆用
學生用
事務室用

プラトン文具製造株式會社特製　クラブ齒磨本店發賣



改造拾月號 目次

財政整理と軍制改革

サクラビール

魂の解放

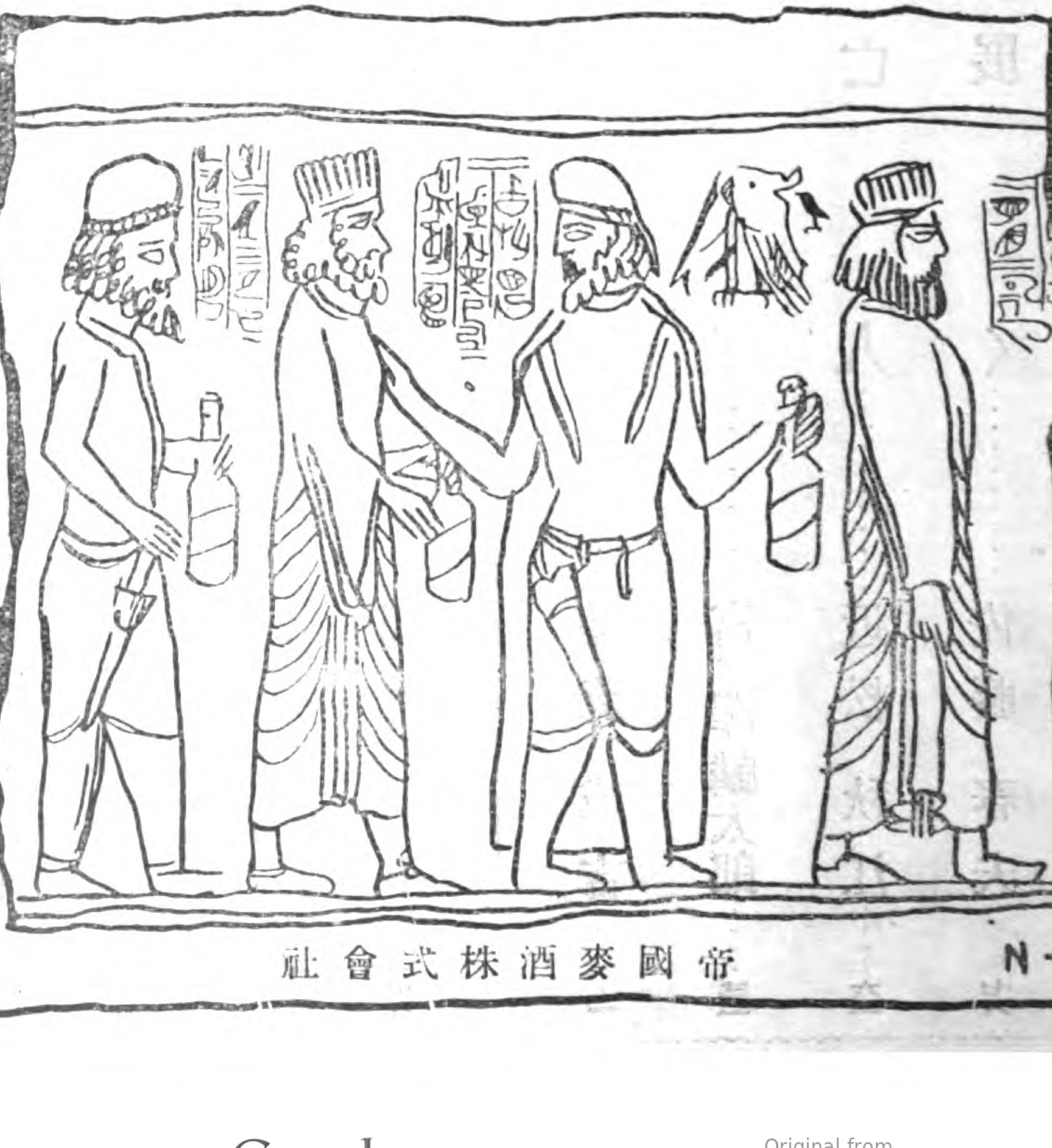
血と肉との浄化

バッカスによつて

撰ばれたる

至上至醇の

この美酒



帝國麥酒株式會社

N-1

成功者は何れも熟慮果斷の人！

煙草の害を知りつゝ永年禁煙の出來なかつた人も

一度「カロット」を口にすれば斷じて再び煙草は吸へぬ、乞ふ明かなる事實に聞け!!

實業之日本代理部と榮川堂主人

先年十月十三日煙草代用品「カロット」發賣元の榮川堂へ電話があつて實業之日本社代理部から「カロット」の御註文がありました店員が此事を主人に報告しますと主事は「明日私自身で代理部へ上つて「カロット」を御說明申さう」と云て主人は翌十五日午前十時「カロット」一組を携へて實業之日本社代理部を御訪問申しました、丁度社員の諸君は熱心に執務の最中でありましたが快く迎へて吳れました、其處で榮川堂主は自身來社せる所意を述べて「カロット」發賣に至る迄の苦心と確信を申上げました、そして先づ一社員の煙草好な方に御試しを願ひました、すると其社員の方は早速「カロット」を取上てお試しになりました、暫くして其方は「カロット」を口より放して今度は卷煙草をお吸ひになりましたが社員の方、やつ、之は驚いた、之は全く煙草が吸へない、煙草がいやになりました到底煙草等吸へないですね—、驚いたと仰有いました。此時迄發賣主の言葉に對して半信半疑の眼を持つて見てお出になつた他の社員の方々も「どれ僕も一つ」「僕もやつて見やう」「僕も」と云ふ風に全社員の方が總立ちになつて「カロット」を取上げてお試しになりました。「やあこれでは煙草は吸へませんね—」「全く煙草が不味くなつて仕舞つた、驚いた」と口々に御賞賛下さいました、其處で更に店主は口を開いて「カロット」を御用ひになれば何等の努力を要せずして斷じて再び煙草は吸へなくなると云ふ事と、幸ひに近來「カロット」が多くの人に認められて來た事の本懐を述べて暇乞をして參りました、歸るに先だつて社員の方々は此品の將來に對する御奬勵の言葉を述べて下さいました。

特徴

外見人も卷煙草を用ゆるに異ならざるを以て手持無沙汰の事なく適量朝鮮人蔘の精氣を含有せるを以て朝鮮人蔘が具有せる諸效用の凡てを少體に與ふると同時に溫雅なる香氣と忘れ難き淸涼なる甘快味とは輕き刺戟と快感とを永く口中に殘し一度之を口に試みたる者は全く煙草に對するべき嗜好を必ず離れて斷じて再び試みざるに至る殊に口中惡臭を發する時又は食後夜中に至りて口中「ねばり」を生する時其他散歩等に之を常用する者は身心の健康期して待つべく且永年の「ニコチン」中毒を完治すべし。

カロット（凡百日分）

パイプ ベークライト製付	壹組	貳圓五十錢
パイプ 象牙製サック入付	壹組	參圓五十錢

送料（內地十八錢 臺、朝、樺四十五錢

引替送料（內地三十錢 臺、朝、樺五十五錢

御註文は振替利用を便とすれども御都合によりては端書にて御申越次第引換小包にて送品可仕候

東京府大森入新井町不入斗四五一

榮川堂

振替東京五二一九壹壹

東京市京橋區瀧山町十三番地

代理店 天下堂

編輯

岡本綺堂
中村吉藏
菊池寛
山本有三
仲木貞一

菊判
大本
全十六巻

體裁

菊判 天金 總布製
極美本
全部九ポイント組
紙數五百五十頁余

豫約募集

現代戲曲全集

現代戲曲全集は明治大正の四半世紀に亘る我が劇壇の巨匠大家が、心血を注いだ全劇文學の精粋であり、眞髓である。言ふまでもなく、其の内容と技巧に於いて泰西の名戲曲に拮抗して敢て遜色なく、殊に我が國土に生え抜きの、生一本の純眞無垢なる國民的意志の體現であり、情感の發露である雄篇傑作を網羅したる所に最大の價値がある。

即一切の廣汎なる趣味と、深遠なる智識と、奔放なる情熱と、鋭敏なる感覺との總和總量を藏せる無類の國民的一大寶庫である。

吉田絃二郎著

十二版

芭蕉

四六判上製

定價壹圓六拾錢

送料十七錢

俳聖芭蕉の晩年を流れた思想は何故もつと人間らしき生涯を送らなかつたかの悔恨の涙であつた。吉田氏はその風格にあこがれて彼が臨終の胸を掠めた淋しき人生觀に筆を及ぼし、そしてその弟子「路通」を配して傾向的に二人のニヒリストを描く、芭蕉研究の盛なる今日、先づ第一に奬めたきは氏が感激にあふれた本書である。「芭蕉」篇以外氏の近作中の特に秀れたる數篇を附す。

東京芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二

板垣鷹穗著

美術史論集 表現と背景

◆定價參圓八拾錢　菊判 挿畫四十一葉 美本
◆送料十九錢

新刊

美術批評の新權威板垣氏は本書に於て希臘時代及クリスト教寺院、レオナルド、佛蘭西大革命、モネを對象として各時代の美術的表現と、其時代の文化的背景とが如何に交渉したかを闡明した。美術史の目的が、時代と作品との關係を考察し、作家と作品との關係を考察し、作品と其前後の樣式を考察するにあるは論を俟たず。本書は實に美術史上作品と背景の面白い部面を觀察して時代と共に——そして政治と共に——變化する「表現と背景」との考察に一の新しき觀點を與へたものだ。而して四十一葉の繪が添へられてゐる。美術家たると、でないとに拘らず、必讀の價値がある。

東京市芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

廚川白村著

◇◇出版界の新霸王

苦悶の象徵

四六判天金
表紙別二色
震災後唯
一の美本

定價壹圓八拾錢
送料拾七錢

白村の眞の魂を求めんと欲する者、苦悶の藝術に人生の生命力を見出さんと欲するものは共に本書に就け。藝術の聖地に一日を陶醉せんと欲する者は本書に就け。不世出の名文、稀世の情熱、我之を本書に見る。人本書を讀んで人間にかゝる清境あるかを始めて發見せん。藝術は人生の聖地、人我に聖地あるを知らざれば恥之より大なるはなし。恥を覺ゆる文化人は必ず本書に就く

近代の戀愛觀

113版

定價貳圓五拾錢
送料拾七錢

人間の燃ゆるが如き情熱、感激、憧憬、欲望の白熱化した結晶とも見るべき戀愛には悠久永遠の生命力が[illegible]くと断じ更に戀愛は人間の最高美であり、人生の最高理想だと高く揭置して因襲的結婚、非戀愛的生活に一大痛棒を喰はす。本書を味到し得る者のみが新戀愛の勝利者たり得る。

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

村松梢風著

近世名匠列傳

定價貳圓參拾錢
送料十七錢
四六判上製

美術に志有る者の必讀の書

本書は明治年代の美術界各方面に活躍して最も傑出せる柴田是眞、鳥村俊明、狩野芳崖、橋本雅邦、木内喜八、竹内久一、森寛齋、旭玉山、田崎草雲、海野勝珉の十大家の評傳畫家あり、彫刻家あり、彫金家あり、細工人あり、何れも一代の巨匠にして、其の多くは未だ完全なる傳記を有せざる人々である、著者數年來爰に着眼し、殆んど寢食を忘れて材料蒐集に努力し爰に始めて本書は生れたのである。材料正確、興味豐かにして而も藝術的匂ひの高き筆致は、忽ち人を魅了し、天才藝術家の性格及び生涯を寫し得て遺憾がない、世の美術研究家は論を俟たず、美術の愛好者たると否とを問はず、社會の各方面の人々に推奬すべき名著である。

東京芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二



(十月號)

民國の動亂と我國の態度

蘇浙戰爭は要するに内爭である。國際紛亂ではない。この間に處して我國の態度は嚴正に中立に出でなくてはならぬ。いかに我國民の大多數が係、張、段に諒解、好誼あるとしても、又國民の一部が反直隷軍に加擔、共鳴するにしても、若し我政府及陸軍の一角が、反直隷軍に物質的——精神的に助援、尻押をなすが如きことあらば、これが爲に國際的に不利の地位を招くは彼の西比利出兵、段祺瑞援護の當年の如き苦き經驗を再びせねばならぬのである。

而して隣邦の紛亂、奇貨措く能はずとして軍備の擴張を廣言したり、日米風雲の險惡より折角の減師問題の鋒先きを鈍らすが如きことがあつては、國政の上に由々しき重大錯誤を來たし、我が七千萬民衆は永遠に塗炭の苦惱より脫出する機會を逸して仕舞ふのである。我國唯一の在野黨たる政友本黨は、平常農民の味方なりと稱し乍ら、却つて軍備の縮少に反對を聲明しつつあるは矛盾の太甚しきものである。政友本黨はいかなる款項より三億、四億を削減せんとする。彼等の内面は軍閥の奴隷にして、將に農民正面の仇敵である。又與黨三派　加藤內閣も、由來資本主義的色彩濃厚にして、徹底的に軍費の上に斧鉞を下すことの出來ぬ卑怯曖昧の政黨であり、內閣である。如之、加藤氏の樞府、上院に阿り、その趣味の民衆的ならざることは歷代の首相中比肩するものだにもなし、此首相が財政整理を堂々と閣議に上程し得ず、或は陸軍の巨頭に縋り、陸相を招いてコソ〳〵謀議に數旬を費しつつあるはお國柄とは云へ見にくき限りである。何故に強烈なる輿論を背景として、堂々閣議の一戰を經ざる。かくの如く對內的に躊躇逡巡する現內閣は、對外政策に對して一層の無定見を曝露しつつあることは日露折衝に直面する者の均しく首肯する所だ。

隣邦の動亂は一層火の手が擴がりつつある。此戰爭が何等理義を有たない將軍等の政權爭ひであることは明かだ。無名の師には理義を先にする我帝國は斷じて與する能はざる所である。しかしながら、我國との貿易、我國の經濟的關係の緊密なることは我々をして傍觀的地位に安んぜしめることが出來ないのみならず、彼地にある我國民の生命財產に直接關涉する以上、我政府は速に機宜の措置をとりて我國民をして一日も早く安堵せしむべきだ。

一面に聯省自治を提議して英、日、米、佛の名を以つて干涉すべしとの噂もあるが、現在にては、これは支那民國の綜合的統制力を稀薄にし、支那が愈々歐米の保護國となるの端を開くものなりとして我々は飽くまで反對を宣明す、ただ東洋のため、民國それ自身のため一日も早く民國それ自身が覺醒するやう我々は最善の努力をなすべきだ。



最後の一人の生存權

牧野英一

はしがき

留岡幸助さんの家庭學校が、北見の社名淵に其の農場を開いてからはや十年になつた。あの北見の山の奥に、心持ちのい村が開かれたのである。

ことしの八月二十七日、其の記念の講演會が札幌で開かれた。わたくしは、そこに招かれて、法律家としての立場から、一場のはなしをすることができた。

其の講演を補正して、此の短篇をつくる。さうして、遙かに、其の村の人々に、之を捧げようとおもふ。

——大正十三年九月五日夜——

**

八月十日に、わたくしは、北見の家庭學校を訪問した。さうして、その夜一羊會の招待を受けた。

一昨年の秋、留岡校長から、北見の米を御馳走するから來いといふ招待を受けたことがあつた。網北の北見の野にも、終に米ができたか、と考へざるを得なかつた。

明治の終りころに、わたくしは、一度、北海道の見學にでかけたことがあつた。そのときに、わたくしは、石狩以北に米のできる見込はないと聞いた。しかし、今や、その北見のはてに米がみのることになつたのである。

わたくしは、巣鴨の家庭學校で、其のお米の御馳走になつた。其のお米は、北見の野で、原始林を伐りひらき、熊笹を刈りそけたあとへ、初めてできたお米であるといふのであつた。水を引くのに幾多の苦勞を重ね、種子をえらぶのに様々の失敗をくり返した末で、漸く實つたお米であるといふのであつた。わたくしは數人のお客さまと共に、晩秋の一夜、その貴いお米のはなしを聞きながら、その御馳走になつたことであつた。

***

北見のその田を見るべく、もう一度北海道の見學をしたいとおもひ立つた。

さきの見學の旅のとき、わたくしは、札幌までの豫定を引きのばして、更に北することにした。狩勝の峠を越えて十勝の廣い平原をよぎり、其の時の鐵道の終點であつた釧路まで行つた。池田驛を通過するときに、網走への鐵道はこれから分岐するのだと聞いたのであつたが、しかし、わたくしが北見を旅し得ることにならうとは考へ得なかつた。森と沼地とで成り立つて居る北見であると聞いたのである。しかし、その北見を鐵道が貫通することになつた。大正聖代

の今日では、わたしのかよわい身を、函館から寝台車に託しつつ、北見の平原の眞中に新らしく立てられた町、野付牛まで行くことができることになつた。家庭學校の分校は、野付牛のすこし手前の遠輕驛から降りて、一里ばかり山のなかへはいつたところである。

＊

わたくしの爲めに、家庭學校の生徒が驛までむかひに來てくれた。剝げた馬車で、しかし、車輪のたしかな馬車で、暑い夏の日の下を學校に迎へられた。驛を出て、凸凹の多い道を右左へ廻り、坂を上り、野を越えて、草いきれが止むとおもつたところに、社名淵川がさやさやと流れて居る。其の流を、おぼつかない橋には依らないで、水のまゝわたつた。其の中流で、馬が心ゆくばかり水を飲んだ。かくて、その馬がひと走りしたところに、わたくしは、家庭學校農場といふ門柱を見た。大きなその門柱は伐りたふされた原始林の楢でもあらう。其の雄渾な文字は蘇峰先生の筆であるとのことであつた。

門から緩やかな勾配で坂路が遙かに白く見渡される。校長は、其開墾第一の方法として、農場の眞中に幅廣なその道路をこしらへたのであつた。左右に森と山と野と水田とをながめながら、その坂路を馬車でねつてのぼるときに、わたくしは、長安の大道を聯想した。白馬銀鞍は兎も角として、山からおろす涼しい風と、目にあまねき青葉のいろとが、どの位わたくしの心をして時めかしめたことであらうか。

馬車が數株の大きな楢の森の蔭に止まつたときに、わたくしは、いちはやく『生命の泉』といふ立札に目を止めた。この泉は、如何なる日でりにも、又如何なる霖雨にも、其の水量にちがひを來たしたことがないさうである。氷の如き

つめたさを手に増して、行く人のすべてが息をつぐのである。

馬車を捨てて、かたへのちひさな丘を上ると、ささやかな庵がある。樹下庵といふので、校長の宅である。わたくしは、ここにわたくしの荷物を運び込み、ここで夕餐の御馳走になつた。東京から北見へ一目散に走つた旅のつかれも、忽ちにして忘れることになつた。

＊＊＊

それは、日曜であつた。思惟するうちに、はや十日の月が向うの山から昇つた。かぎりなく晴れわたつた空に、ほんのりと月の影がさし昇つたのである。夕餐を終へると、校長から、山の上の分家の一羊會へ行かうといふ誘があつた。

家庭學校の廣い農場は、固より家庭學校の職員と生徒とが經營して行くのである。しかし、千町歩の其の農場は、その職員と生徒とだけの手にゆだねられるべくあまりに廣い。斯くて、謂ゆる小作人が八十戸もその農場にはいつて居るのである。校長は、謂ゆる小作人を小作人と呼びたくない。それで之を『分家』と稱して居る。之に對して財團法人たる家庭學校そのものは『本家』である。校長は、分家と本家との間に、小作人と地主との間に普通に存立せる關係や感情を持たせたくない。どこまでも、本家と分家とで行かうといふのである。分家の人たちも、勿論本家と呼び分家と呼びかはして居る。

その分家で、今夜、一羊會といふのが開かれるといふのである。羊飼ひの男は、まちがひなく手許に野から歸つた九十九匹の羊よりも、何處にかさまよつて居る一匹の羊のために大きな心配をするといふ神の教から名付けられた會であるさうである。

如何なる人が集まるのか、如何なることをするのかに付いては、校長はあまり說明しなかつた。ただ、わたくしは、今日が日曜であることと、一羊會といふ名稱と、家庭學校との性質とから、それが無論宗教上の會合であることを推知し得たのみである。分家での催ほしであつて、學校の講堂などでの集まりでないといふことに、わたくしの好奇心が少なからず刺戟された。わたくしは、早速、校長に同伴することにした。

生命の泉へ丘を下りて、更に其の谷あひを上るのであつた。森かげの道ながら、矢張、月の光をたのむことにして、提燈を持たなかつた。その谷は惠みの谷と名付けられて居る。其の谷を昇りつめるとやや廣い丘になつて居る。望みの丘である。森がやや疎らになつて、この眞中に禮拜堂が高く聳えて居る。惠みの谷の大通りと共にこの禮拜堂は、校長が最も心をこめたものにちがひない。堂には裝飾と見るべきものはないのである。ただ、白木のにほひがゆたかにただよつて居る。さうして、その高い尖塔のさきに、十日の月がやがてかからうとして居るのである。

望みの丘の森を横ぎつて牧場へ出た。牧場の柵にそひながら山道を辿りのぼるのであつた。かすかながら蟲が啼いて居る。北見ははや秋だといふ感じが深い。十丁あまりを上ると、木の間にちらちらと分家の灯が見える。夜露が下りて居る。

分家の家の前に小さな庭がある。その庭にはいろいろの花が咲いて居た。その花のかげに若干の人人か、火星をものかたり、金星を品評しつつ、われ等を待つて居られたのであつた。若い主婦が、まめまめしく、われ等に果實の汁をすすめられた。野にできたグースベリーに手飼ひの蜜蜂の蜜を調合してこしらへられたものである。其の色にも、其の味にも、都のにほひといふものはない。しかしその清らかさ、その濃さ、その甘さ、そのつめたさは、北見のこの山の、この分家のこの主婦の手に依つて初めて味はされる醍醐味であると謂はねばならぬ。わたくしは、先づ滿足と感謝とを以つて、一羊會の人となつたのであつた。

集會が初まつた。わたくしとしては久しく忘れ果てて居た石油ランプのめづらしきが下に、十幾人かの人々が輪を為して坐つた。分家の人人と、學校の人人とである。八十の翁から年わかき主婦まで、さうして、ややきまりわるくわたくしもその中に座を占めた。灯のかげはうす暗いが人々の顔の色には明るさが漲つて居る。

祈りがあつて、さうして、司會者のS——君がヨハネ傳の一節を朗讀した。二三の人の感想談があつた。校長の祈りがあつて、讃美歌がすむと、夜はすでにやや更けて居たのであつた。

一羊會の人人は、みづからをさまよへる羊と考へて居られるのであらうか。まことや、ここは、朔北の北見の國に、土を掘つてかすかなくらしを立てて行く人人である。しかし、其の人人は、さまよへる一匹の羊のために寢食をわすれてくれる羊飼ひのあることを信じて居るのである。其の人人には確信がある。從つて不平がない。期待がある。從つて煩悶がない。

山の家を出て、また牧場の柵にそひつつ坂路を下つた。禮拝堂の塔に、はや月が傾いて居るのを見た。わたくしは、わたくしが、今、遠く北見のはての山の中に在つて、森と籔との中に田と畑とを開きつつある人人の間に在ることを考へねばならなかつた。

太古の如き靜けさである。うすき夜もやにやゝうるんだ山と森との色をうちながめつつ、わたくしは、その夜、侍從庵にやどつた。侍從庵は、先つ年、東宮殿下が特に侍從を差遣し給はつた記念に、校長がこしらへた庵である。學校を訪問するお客はこの庵に於て校長の心深きもてなしを受けるのが例になつて居るとのことである。

侍從庵の緣先からまともにながめるのは平和山と呼ばれる山である。平和山は、今、その平和な山のすがたを靜かに横たへて、限りなき大空と固き大地との間におだやかに眠つて居る。

其のおだやかな風光の間に、わたくしは、ラスキンのことをおもひ出したのであつた。

校長は、大自然の中に少年を教育することが、その少年に對して特別の影響あるものと信じて居る。北見の國に鐵道のつくといふことのまだ豫期されない前に、地を特に、此の山奥のここに卜してその家庭學校を建てたのであつた。校長はそれに付いてラスキンの語を引用するのである。『人と自然と共にあれば、人も幸福であり、自然もうるはしい。人が自然を離れれば離れるほど、人の幸福は失はれ、自然美も湮滅する。人は自然に歸ることに因つてその幸福を回復する。』ラスキンの此の語が、兒童の教養に關して校長の持つて居る抱負であり、理想であり、標的であるのである。

さて、わたくしは、ラスキンの斯やうな教訓を回想すると同時に、ラスキンのいろいろな教訓をおもひ出すのである。ラスキンは、われわれに、美術の鑑賞を教へて呉れたのである。自然と藝術とに對する批判的精神をわれわれに示唆して呉れたのである。わたくしは、平和山の靜かな黒みに對し、更け行く月の光をうち浴びつゝ、先づ自然のうるはしさを考へたのであつた。

ラスキンは、山のすがたを如何に考へるべきか、雲の色をどのやうに理解すべきかを教へて呉れたのであつた。ラスキンの示すところに從つて、更に山をながめ、雲を望むに於ては、その山のすがたが更に崇高なものになり、その雲の色がますますあでやかなものになるのである。山も雲もさながらにして、しかも、ラスキンの批判を經るに於ては、その山は最早その山でなく、その雲は、その雲を超越せねばならぬことになるのである。

ラスキンは其の立場に於て藝術の意義を批判して呉れた。寺寺の塔や、宮殿の甍や、さては、その壁畫にしても、其

の立像にしても、それは心なき旅客の目には一朵の煙の如く過ぎ去るべきものであるにしても、批判に因つて、そこに玩味し理解せられねばならぬ多くのものゝあることを示して呉れたのであつた。

惟ふに自然はそのまゝでは美でない。若し自然がそのまゝにして美であるならば、寫眞と藝術とがどこで區別さるべきであらうか。されば、人生も亦おなじくそのままにしては美でない。新聞の記事はさながらにしては文學となるべきものでない。自然は藝術家に依つて批判されねばならぬ。さうして、人生は、それが文學となるには、更に文學者に依つて構成されねばならぬ。批判と、それに基づく構成とに因つて、自然と人生とが、自然らしきうるはしさを示し、人生らしき意義を全うするのである。

ラスキンの斯やうな態度は、ラスキンをして、その美術の評論家たる立場から、轉回して、社會の評論家たらしめねばならぬことになつた。八十歳にして沒したラスキンは、其の生涯の半ばに於て、批判の標的を美術から人生に移した。一八六二年かに公にされた「この最後のものに」(Unto this last はラスキンの四十二歳のときであるかと思ふ。學者は、之に依つて、『普通の經濟學史教科書には、ラスキンは、その名前さへ擧げられて居らぬ。けれども、わたくしは、彼を以て經濟思想上看過し難い一人の思想家だとおもふ。即ち、わたくしは、彼を以て「大なる經濟學者の一人」とすることに於て、ショウとおなじ意見を持つ』(河上博士『資本主義經濟學の史的發展』第五六六頁)と謂つて居る。

※

聖人の教に曰く『天國は、勞動人を葡萄園に雇ふために、朝早く出でたる主人の如し。一日一デナリの約束をなして勞動人どもを葡萄園に遣す。また九時ごろ出でて市場に空しく立つ者どもを見て、「なんぢらも葡萄園に行け、相當のもの

を與へん」といへば、彼らも往く。十二時頃と三時頃とに復いでて前のごとくす。五時頃また出でしに、なほ立つ者等のあるを見ていふ「何故に終日こゝに空しく立つか。」かれら言ふ、「たれも我らを雇はぬ故なり。」主人いふ「なんぢらも葡萄園に往け。」夕になりて葡萄園の主人、その家司に言ふ「勞動人を呼びて後のものより始め先の者にまで賃銀をはらへ」call the labourers and give them their hire, beginning *from the last unto the first.* 斯くて五時頃に雇はれし者來りておのおの一デナリを受く。先の者來りて、多く受くるならんと思ひしに、之も亦おのおの一デナリを受く。受けしとき、家主に向ひ呟きて言ふ「この後のものどもは僅に一時間はたらきたるに、汝は一日の勞と暑さとを忍びたる我らと均しく之を遇へり。」主人こたへて其の一人に言ふ「友よ、我なんぢらに不正をなさず。汝は我と一デナリの約束をせしにあらずや、己がものを取りて往け、この後の者に汝とひとしく與ふるは、我が意なり I will give *unto this last,* even as unto thee. わが物を意のまゝに爲るは可からずや。我よきが故に汝の目あしきか」と（馬太傳第二十章）。

**

從來の社會哲學――必しもひとり經濟學と謂はんや――に於ては、生存競爭といふことが第一義に置かれて居る。生存競爭といふことは、自然科學がわれわれに教へる大事實である。恐くは此の事實を度外視しては、社會に關する科學も亦成立し得ないであらう。しかし、生存競爭をそのまゝに放置するに於ては、經濟學、從つて又社會的諸科學は、謂ゆる陰鬱の學 dismal science となり（カーライル）、又は謂ゆる、暗黑の學 science of darkness とならざるを得ないのである。（ラスキン）わたくしは、生產過程や分配過程に關する經濟學上の議論をしようとは思はない。ただ、少くとも、當面の問題としての社會問題といふことが、それを證してあまりあることを考へる。

アダム・スミスは社會組織の基礎として自利心といふことを說いた。さうして、自利心に因つて、社會がおのづから調和を保つであらうといふことを說いた。「見えざる手」が常にわれわれの社會を指導して居るのだと說いた。しかし、自利心は終に社會の調和を全うするわけに行かなくなつた。斯くて、われわれは、少しなりとも、その「見えざる手」を見ようと心がけざるを得ないことになつたのである。社會問題の解決とは、われわれが、その「見えざる手」を少しなりとも見ようとする努力を意味するものに外ならない。

＊＊＊

抑も、自利心であるとか、生存競爭であるとかいふことを、法律家としてのわれわれが、日常用ゐて居る語になほすときは、それは自由及び平等の原則といふことになるのである。一七八九年の人權宣言は、その第一條に規定して「人は出生及び生存に於て自由及び平等の權を有す」として居るのがそれである。

謂ふまでもなく、人權宣言の礎石を爲して居るこの原則は、封建文明の下に成立した階級制度を破壞するために、重要な文化的役目を全うしたものであつた。されば、われわれは、自由平等の原則を批判するに付いては、何事にも先だつて、この文化的意義を回顧せねばならぬのである。

惟ふに、封建文明の樹立には、それに相當する文化的意義があつたのである。しかし、封建文明に狎れて、それが當然視されるやうになると、それが、やがて、封建文明の爛熟であると同時に、その崩壞のはじめであつたと謂はねばならぬ。階級制度が、當然な自明なものと考へられるやうになつたところに、封建制度がおのづから世から退かねばならぬ運命が基礎づけられたのであつた。

封建文明といふテシスに對して、新しく頭をもたげたアンチテシスは資本文明であつた。之はその階級制度に對して自由平等の原理を旗じるしにしたものであつた。斯くして十九世紀の文明が大成されたといふことにならう。

暗黑時代に對して封建文明が成立したといふのには、そこに、大きな努力が豫定されて居る。努力なしには封建文明はでき上らなかつたのである。努力は批判を豫定する。しかも、封建文明が無批判に受け入れられ、努力なしに維持せられるやうになつて、封建文明はおのづから崩れねばならぬ運命にさし迫つたのである。

資本主義の文明が封建文明に對して成立したのにも、また大きな努力が必要であつた。その努力は、文藝復興以後の啓蒙乃至批判といふ偉大なる精神的活動を豫定して居るのである。しかも、その精神的活動が、今や、全く、打忘れられて、自明の理、當然の事とされるにつれて、その文明は、おのづから其の運命を辿らねばならぬことになつたのである。

惟ふに、過去にはすべて過去の文化的意義がある。されば、過去の教訓に對しては、われわれは常に感謝せねばならぬ。しかし、教訓は決して批判をきらふものでない。批判なくしては、教訓に理想的意義がない。從つて、それに因る人類の向上を期待することができない

げに、ラスキンは、美術評論家としてのその立場を徹底することに因つて、當然に社會評論家たらねばならぬことになつたのである。

※

藝術は、人が之に對して批判的構攻と爲すことに因り、その藝術としての意義を全うするのである。

經濟上の價値といふことも亦斯く人を基點として考へられねばなるまい。ラスキンは ただ、此の理を明かにしただけである。人といふことを離れて價値といふことを考へるのは意義なきことである。之を經濟的に謂へば、生産といふやうなことが人生を無視して經營せられることは意味なきことであらう。さうして、おなじやうに、自由平等といふ法律上の觀念――法律的に更に具體的に謂へば、所有權及び契約の自由の原則――も亦、人生を除外して論理的に展開せしめられるといふことは、何の役にも立たないもので、謂ゆる言葉の上での戲れに歸着することになるのであらう。

されば、ラスキンは、ただ、簡單に、次のやうに說くのである。「假に巡洋艦の艦長が彼れ自身の子を普通の水兵の地位に置くことを正しいと考へたか、或は何かの都合でさうすることを餘儀なくされたとする。その場合に彼が彼れの子を取扱ふであらうやうに、彼は常に彼れの部下の人人の各の者を取扱ふの義務を有する。同じやうにまた、工場の主人が彼れ自身の子を普通の職人の地位に置くことを正しいと考へたか、又は何かの都合でさうすることを餘儀なくされたと假定する。その場合に彼が彼れの子を取扱ふであらうやうに、彼は常に彼れの使用人の各の者を取扱ふの義務を有する。これは經濟學上の此の點に關し與へられ得るところの、有效な、眞實な、實際的な唯一の規律である」と（河上博士前掲第五八一頁乃至第五八三頁より引用）。

ただ、わが子のやうにすべての事物を考へたいといふのである。羊飼ひが、さまよへる最後の一匹のために晝食をわすれるやうに、葡萄園の主人が夕方から雇入れた者にも一日分の賃銀を惜しまぬ心持で、もう一度、社會の實相を考へなほさうといふだけである。

現行の法律制度では、所有權及び契約の自由といふことが基本的な原理であるとされて居る。

之に對して、現行の法律制度には、わが邦古來の淳風美俗、固有の美風良習に反するものがある、之は家族制度といふことを基本として考へなほされねばならぬ、とする議論が出て來た。それを少しく考へて見たい。

※

民法七百九十二條には『夫婦間に於て契約を爲したるときは、其契約は婚姻中何時にても、夫婦の一方より之を取消すことを得』と規定してある。換言すれば、約束といふことは、夫婦間では意義のないものであるのである。

民法第十四條は、妻が借財を爲すに付き、夫の許可を必要とする旨を定めて居る。しかし、實際問題として、大審院は、次のやうな判例を與へて居る。曰く『妻が借財を爲すには、民法第十四條に依り夫の許可を受くることを要すれども、其の許可は必しも明示たることを要せず、又各借財を爲すに付特定的に其の都度許可を受くることなく、豫め一般的に之を受くることを妨げず。而して夫が出稼の爲めに妻を故郷に殘して遠く海外に渡航し、數年間妻子に對する送金の途を絶ちたるが如き場合に在りては、其の留守宅に相當なる資産ありて生活費に充つることを得るが如き特別なる事情なき限りは、妻に於て一家の生活を維持し子女の教養を完うするが爲めに其の必要なる程度に於て借財を爲し、以て一家の生計を維持することは、夫に於て豫め之を許可し居りたるものと認むべきは條理上當然にして、斯く解して初めて其の裁判は能く情理を盡くしたるものと謂はざるべからず』と（大正九年九月一日宣告）。大審院の其の見解に依れば、妻が『一家の生活を維持し子女の教養を完うするが爲めに其の必要なる程度に於て』活動するとき、換言すれば、妻が合理的に其の行動を爲す限りに於ては、夫權といふものは最早意義のないものになるのである。

夫婦の間には、所有權とか契約とかいふものがあるべきでない。權利關係とか權力關係とかいふものが存立すべきでない。家庭に所有權がやかましく爭はれるとき、その家庭には最早淳風美俗はない。家族間に契約が事むづかしく主張されるとき、そこには既に美風良習が失はれて居るのである。

家族制度が、家族制度として、社會組織の基本的なものと考へられねばならぬ限り、親子と夫婦とが一體となつて、圓滿な生活を營まねばならぬ限り、そこには、傳統的な法律的な意味に於ての自由平等はない筈である。

民法第七百九十二條はそれだけの意味を明かにしたものである。契約を無視せんとする異端的な規定の裡に偉大な理想があふれて居ると見るべきではあるまいか。夫權に關する大審院の判例は、民法第十四條を眞向から蹴飛ばしつゝ、しかし、條理乃至情理が法律生活に於て占めねばならぬ重要な地位を明かにしたものである。

＊＊

或文學者が、曾て、所有權及び契約の自由を基本として成立して居る家庭を小說にあらはしたことがあつた。亭主は亭主で、女房に祕密な巾着を持つて居ると同時に、女房は女房で、亭主に內所なへそ繰りを持つて居ることを書き、亭主が女房の砂糖壺から幾匙かの砂糖を買ひ受けると同時に、女房は亭主の醬油樽から幾勺かの醬油を受けてこれに代償の金額を支拂ふのである。各自が其の所有權を守り、すべて契約の自由に依つて、賣買、交換等、日常生活が經營されて行くのである。その嚴格な、その生帳面な、さうして極めて論理的な生活が、家庭として如何に唾棄すべく、如何に呪咀すべきかゞ、あらゆるユーモアの間に描出されたのであつた。

しかし、其の家庭の如きが、やがて、われわれの今日の社會生活なのである。所有權及び契約の自由に對して經濟

試みんとするの企ては、法律上からも禁ぜられ、道德上もよくないことになつて居る。しかし、其の所有權と契約の自由との原理の下に、嚴格な、生帳面な、さうして論理的な生活を送ることに對し、丁度、その小說にあらはれた家庭に對して一種の批評が下されねばならぬとおなじやうに、特殊の考察がめぐらされねばならぬことになつたのである。

＊

自由平等の原理――學者は、又之を資本主義ともいふ――は産業革命といふ近世の現象と相俟つて、十九世紀の文明に機械の應用といふ特色を與へた。

機械の應用、即ち大企業に因る産業組織は、生産を豐富ならしめた點に於て、固より文化の進歩したものであるにちがひない。しかし、同時に、それは、二つの事項をわれわれに注意せしめるのである。

機械の應用は、産業をして工場化せしめる。産業の工場化は家族生活の破壞である。母子相共に窓に倚り月の下に絲を紡いだむかしの生活が破れて、今ははなれ〴〵に工場に於ける賃勞働者にならねばならぬのである。自分みづからの消費の爲めに自分みづから生産したむかしに代つて、今は、他人の消費の爲めに、他人の道具となつて生産するといふことになつた。斯やうな産業組織が其の論理的性質に於て果して永續性を持ち得るかは、固より疑はねばならぬところに屬する。しかし、さし當つて、かやうなのが今日の社會での事實である。

機械の應用は産業をして教育化せしめる。新らしい組織に於て生産手段を適當に利用し運轉するが爲めには、少くとも或程度の教育を必要とする。斯くして、その爲めに教育が、義務教育乃至實業教育として發達せねばならぬことになる。日出でて耕やすことを知り、日入つて息ふことに安んずるだけでは、最近の産業技術の能率を擧げることができな

いのである。しかし、其の表白を理解するに必要なる文學、其の雰氣を會得するに役立つ用語は、單に表白や雰氣やに利用せられるに止まらないのである。おのづから、社會、國家、法律、道德といふやうなことが、それ等の文字に依つてしるされ、それ等の用語を介して傳へられることになる。こゝに、また、資本主義的文明の矛盾が包藏せられて居るわけである。

一方に於て家族制度の破壞がある。其の破壞の間に在つて各自が自己の立場を守るのには、一に、所有權及び契約の原則に依るの外がない。しかし、しかく所有權及び契約の自由の原則が高調せらるるに從つて、ますます、家族制度の破壞が其の度をまして行くのである。

家族制度の破壞に因つて生存競爭は、ますます激しくならねばならぬ。それが激しくなるにつれて、其の競爭に於ける敗北の運命が、ますますみじめなものになる。しかも、其の數多き敗北者は、虐待された牛馬や、嬲殺しにされる蟲けらのやうに、默々として死んで行くのではない。かれ等は、生活、人格、公平、正義といふやうなことを考へたから、悶え、もがき、叫び、爭ひつつ、其の痛ましい淘汰作用の間に、悲しく、滅びて行くのである。

❋

生存競爭に於ける敗北者は、其の運命の結局に於て固より敗北者である。しかし、如何なる爭に於ても、それが爭である以上は、敗北者といへども、敗北者に相應な抵抗はするものである。勝者に絕對の勝なきが如く、敗者に絕對の負けはない。

敗北者が、其の最後の抵抗を爲す形式に三種ありと謂ひ得よう。其の一を貧乏とし、其の二を病氣とし、其の三を犯

罪とする。さうして、此の三者はお互に密接に關係して居るので、貧乏なるが故に病氣となり、犯罪者なるが故に貧乏となり、また病氣なるが故に犯罪をもするのである。

貧者は其の貧を以て富者に抵抗する。富者は、其の周圍が貧者なるの故を以て其の富を誇り得ると同時に、其の周圍の貧なるが爲めに常に多大の迷惑を受けねばならぬのである。この故に、富者は決して貧民窟に其の住所を定めることをしない。

病氣は常に世の健康者を苦しめつつあるのである。自己の周圍が病人を以て埋められるといふことは、健康者をして其の健康を恃ましめ得ないことになるのである。

犯罪亦しかり。犯罪に對しては、謂ゆる正義の觀念の要求として、應報的刑罰を科することに因り、事態の解決が全うされるものと信ぜられた。しかし、應報刑制度の下に於ては、犯罪は常に增加の趨勢に在り、殊に累犯の率が高まる一方であつた。世は、ただ、之に驚き、之を恐れるの外ないことになつたのである。

※

生存競爭の敗北者が擧げた最後の聲は社會主義であつた。

廣い意味に於ての社會主義、又政治的意味に於ての社會主義には、直接行動を主張するものもあるし、テロリズムを諾へるものもある。しかし、それ等は、暫く、わたくしの考へるところから除外せねばならぬ。

わたくしは、理論としての社會主義に三段の發展を認める。其の第一は、謂ゆる勞働全收權の思想である。其の第二は、謂ゆる勞働權の觀念である。さうして、其の第三は生存權の考へである。

生産は勞働の成果である。生産とは自然に對する人の征服に外ならぬもので、さうして、其の征服は要するに勞働に外ならぬのである。されば、生産の結果は、全部を擧げて勞働者に歸屬せねばならぬ。——一言にして勞働全收權の思想を謂へば、さういふことになるであらう。

勞働者が斯やうな主張を爲すに於ては、資本家は勞働者を雇傭しないといふ戰術を以て之に對することができる。勞働全收權の理論は、職を失つた勞働者がおのづから沒落せざるべからざることを意味するものである。玆に於て更に勞働權といふことが案出された。

われわれは人間として勞働するの權利がある。されば、われわれには、當然に勞働するの機會が與へられねばならぬ——之が勞働權の理論の要點である。斯くして、野に遺賢あるべからざるが如く、世に失職の者あるべからざることが主張されることになつた。

しかし、世には、老人といふものがある。小兒といふものがある。さうして又病人といふものがある。此の三者は如何に機會が與へられても勞働することのできないものである。しからば、此の三者は當然に共同生活から淘汰されねばならぬものであらうか。

老人に對する社會的處遇の沿革をたづねて、學者は、第一に食老俗、第二に殺老俗、第三に棄老俗、第四に退隱俗と區別して居る（穗積老博士著隱居論第一編）。蓋し、老人は、其の年齢に因る當然の結果として社會から退隱せねばならぬ性質のものであるが、しかし、老人をして社會から退隱せしめるといふことは、必しも當然に、老人の人格を無視し其の生活を度外視することを意味すべきでない。老人の社會的處遇に關する沿革は、むしろ、老人の社會的退隱が其の人格の蹂躪と同一視せらるべきものに非ざることを示すもので、さうして、其の生活を尊重しつつしかも其の社會的退

隠を完成せしめんとするところに、人類文化の發展の意義あることを明かにするものである。

おなじやうに、又、勞働能力なき病者や小兒に對しても、其の人格の尊重せられ、生活の保全せられざるべからざることが考へられ得よう。さうして、茲に、生存權といふ考へが理解せられることになる。人が、苟も正しく生きんとする限り、その生存が尊重せられねばならぬといふ思想である。

＊＊＊

夫權に關して、茲に擧げた判例は、生存權の見地からして、大に興味あるものと謂はねばならぬ。既に民法第八百四條第一項は規定して、「日常の家事に付ては妻は夫の代理人と看做す」として居る。さうして、判例は、此の趣旨を更に徹底せしめ、「妻に於て一家の生活を維持し子女の教養を完うするが爲めに必要なる程度に於て借財を爲し以て一家の生計を維持することは夫に於て豫め之を許可し居りたるものと認むべき」ものとしたのである。夫が妻の借財に對して許可を與へたや否やは、事實の立證上の問題ではなくして、規範の條理上の問題だとしたのである。若し、之を事實の立證上の問題として考へるときは、妻は其の許可を得るによしなかりしために、いさぎよく子と共に餓死すべきものでもあつたらうか。しかし、大審院は、之を規範の條理上の問題なりとし、事實上許可なかりしところに理論上許可を擬制することに因り、妻と子との生存權を全うすると同時に、其の夫を合理化したことになるのである。

わたくしは、更に、内縁問題に關し、一の判例を擧げたい。民法第三百十條は、先取特權に付いて規定し、「日用品供給の先取特權は債務者又は扶養すべき同居の親族並に家族及び其の僕婢の生活に必要なる最後の六ケ月間の飲食品及び薪炭油の供給に付き存在す」として居る。問題は、謂ゆる内縁の妻の爲めに此の規定が適用せらるべきかであつた。大

審院は之を肯定して曰く、「未だ婚姻の屆出を爲さざるも、相當の儀式を擧げ夫婦の事實存在する場合に於ては、其の一方は自己の負擔に於て他の一方を扶養すべき筋合なるを以て、民法第三百十條に所謂債務者の扶養すべき者に包含せらるべきものと解するを妥當とす」と（大正十一年六月三日宣告）。問題は、單に先取特權に關するものに過ぎないけれども、其の包容する原理は廣きにわたつて意義あるものと謂はねばなるまい。從つて、又、次のやうな判例がある。曰く、「元來、夫婦が同居するは、專ら夫の利害の爲めにするものに非ず。夫婦共同の爲めに之を爲すものとす。本件當事者は、婚姻の豫約を爲し、慣習上儀式を擧げて同居し、事實上夫婦同樣の生活を爲したるものにして、右夫婦同居の場合と異るところなく、當事者双方共、互に共同の利益の爲めに家事に從事したる者なれば、其の後双方合意の上婚姻を爲さざることとし、上告人が實家に去りたればとて、上告人の右同居中に爲したる勤勞は全然其の損失に歸し、被上告人は之に依り不當に利得を爲したるものといふことを得ず。故に上告人は被上告人に對し民法第七百三條に依り利得返還の請求を爲すことを得ず」と（大正十年五月十七日宣告）。

わが民法上、戶主の家族に對する居所の指定權は、形式上絕對なものになつて居る。しかし、判例は說明して曰く、「民法第七百四十九條に於て、戶主に、家族に對する居所の指定權を與へたる所以は、戶主をして一家を整理せしむるに必要なりと爲したるが爲めなるを以て、戶主は其の權利を行使するに當り、其の立法の趣旨に適合する範圍に於てせざるべからざるものにして、何等の理由なく、自己の專恣に依り、隨意に行使し得べき絕對無限の權利を有するものに非ず。（中略）。上告人が被上告人に對し居所を轉ずべきの催告を爲したるは、一家の整理上必要なるが爲めに非ずして、全く感情衝突の結果、離籍を爲すの目的を以て之を爲したるものと謂ふべし。斯くの如きは戶主權の適法なる行使といふことを得ざるものとす。故に、被上告人が其の轉居の催告に應ぜざればとて、之を離籍することを得ざるものとす。

而して、如上の場合に於て上告人が轉居の催告を爲すは戸主權の濫用にして、不法の行爲なるを以て、其の爲したる離籍の屆出は無效にして單に取消し得べきものに非ず』と(大正八年十月三十日宣告)。

遺棄罪に關して面白い判例がある。曰く、扶助を要する病者が『被告等の居所たる某寺境内千佛堂に寢臥し居たるを、縱しや被告等に法令若くは契約に基づく扶助の義務なしとするも、之を扶助せずして遺棄するが如きは善良の風俗を害することの甚しきものにして云々』と(明治四十五年七月十六日宣告)。斯くて、病者たる乞食坊主の生存權の前には、和尚の所有權は讓歩せねばならぬとされて、懲役若干月の言渡があつたのである。

暴力を用ゐて家屋明渡を要求した條件に關して、判例がある。曰く、『原判決に依れば、被告は被害者に對し本件家屋明渡の訴を起しながら、其の結果を待ちて適法の手段に出づることを爲さず、名を修繕に藉り、其の實被告の營業を妨害し、因つて以て其の立退を早からしむる目的を以て板圍を爲したるものなれば、修繕に非ずして、營業妨害の手段に外ならざるものとす。而して、被告が、本件家屋に對し所有權を有すると同時に被害者も亦營業の自由を有するが故に、よしや被害者に於て、本件家屋が被告の所有に歸したる結果、之に住居する權利を失ひ、其の占據は被告の權利に對する侵害なりとするも、其の救濟はおのづから他に方法あり、其の侵害を排除する爲め自ら暴力を用ゐるを許さず』と(大正九年二月二十六日宣告)。此の判例は、所有權が營業の自由の前に相當の讓歩をせねばならぬことを說いたことになるのである。

右擧け來つた判例に關聯して、なほ一つの判例を擧げることが許されたい。事實は買戾權に關するのである。曰く『賣方が其の有する買戾權を行使せんとするには買戾の期間内に代金及び契約の費用を提供することを要すること、民法第五百八十三條の明示するところなりと雖も、代金及び契約の費用の合額が、極めて些少の不足あるに過ぎざるとき

は、買主に於て、之に因りし、代金及契約の費用の提供なきを以て賣戻の效力を生ぜずと主張することを得ざるものとす。蓋し、斯かる不足額は之を請求するを得べきこと勿論なりと雖も、斯かる不足あることを口實として賣戻の效力を生ぜずといふが如きは、債權關係を支配する信義の原則に背反するを以て、斯かる不足あるに過ぎざるときは、買戻の效力を生ずと解するを相當とす』と(大正九年十二月十八日宣告)。之は、民法第五百八十三條第一項が、『賣主は期間内に代金及び契約の費用を提供するに非ざれば買戻を爲すことを得ず』と明白に規定して居るのに對する大審院の解釋であるのである。

右のいろいろの判例を綜合することに依つて、われわれは果して如何なる論結に達すべきであらうか。法律學上の技術的な論議を爲さんは、ここでは適當な場所でない。わたくしは、ただ、所有權及び契約の自由といふ從來の原則が、判例上如何に崩壊しつつあるかを、こゝに看取することができるとおもふのである。さうして、其の崩壊の半面に於て、謂ゆる信義誠實Treu und Glaubenの原則が漸次に其の地位を占めつつあることを認めたいのである。――謂ふまでもなく、所有權及び契約の自由といふことが、謂ゆる資本主義といふことに對應すると共に、信義誠實といふことは、生存權といふ思想と同一の標的に向つて居るものである。

信義誠實の原則は、ドイツ民法やスイス民法やの之を明文に載せて明かにして居るところである。しかし、明文は必しも必要でない。わが判例は、或は『條理』、或は『筋合』其の他それに似寄つた言ひまはしの下に之を認めつつあるのである。

※※

斯くの如きは判例の變遷に於てのみ之を認め得るに止まらない。立法も亦漸次に其の面目を改めつゝあるのである。行政法上、最早從來の放任主義が拋棄せられ、謂ゆる助長行政が漸次擴大されつゝある事實は深く論ずるまでもあるまい。

わたくしは、近頃の現象として、借地法借家法(大正十年法律第四十九號及第五十號)の制度が面白いことであると考へる。さうして、其の規定は、實に、借地借家調停法(大正十一年法律第四十一號)に依つて擴大されたわけである。之は所有權が生存權に對して讓歩せねばならぬことを意味するものと解しないで何であらう。

借地借家調停法は大震災に際して其の能率を發揮したことであつた。大震災に引續いて、人々の住居と營業とが、地主と大家との所有權に因つて甚しく脅威された。しかし、其の脅威を斥けて、住居と營業との爲に一應の安全を全うし、復興の基礎を築いたのは、借地借家調停法のおかげであつたと謂はねばならぬ。其の調停の結果を基礎として、借地借家の臨時處理法(大正十三年法律十六號)ができた。復興の爲めの世の努力を保全せんが爲めには、所有權は最小限度に帳搾されねばならぬといふのが、此の處理法の精神である。

調停主義は更に小作調停法(大正十三年法律第十七號)に擴張された。之は、更に、商事に、勞働爭議に、さうして又更に廣く民事一般に擴大せらるべきものである。

健康保險法(大正十一年法律第七十號)がある。之は謂ゆる社會的保險の第一歩である。此の陳與からして、當然に、社會的保險は更に廣く認められねばなるまい。さうして、養老年金の制度を初めとして尙齒敬老に關する各種の法

想ができねばならぬ。兒童の保護に關する事項を手はじめとして、子贊關係の一般法規が整備されねばならぬ。

生を養ひ死に喪して憾なきは王道の始なりと孟子が說いた。まことや、生存權の理論は、七十の者をして、帛を衣、肉を食はしめんとするのである。黎民飢ゑず寒えずして王たらざるものは未だこれあらず。まさに王道を說くことが、社會問題の要旨になつて居るのである。

※

さて、わたくしは、茲に、少しく、少年法（大正十一年法律第四十二號）に論及することを許されたい。

わたくしは、餘に久しく刑法の主觀主義なるものを唱道して居る。主觀主義とは、科刑の基礎を犯罪といふ事實に求めないで、犯人といふ人格に求めようといふのである。社會の秩序を維持するがためには十分に犯人を處罰せねばならぬが、同時に、刑は常に犯人に必要なる限度に止まらねばならぬ。さうして、しかく科するところの刑罰は、應報としての害惡を科して責任を解除しようといふのを目的とするのでなく、改過遷善を促して、犯人を社會に同化せしめようとするのである。――最後の一人としての犯人にまで、其の人格を尊重しようとするのが、わたくし共の主張の要點である。

わたくし共の考へは今なほ學者の普く認めるところとはなつて居ない。しかし事實は常にわたくし共の考へて居るやうに展開しつつあるやうにおもふ。假出獄の要件を寛大にするとか、又、刑の執行猶豫の適用範圍を廣めるかといふが如きは皆それである。さうして、從來むしろ祕密といふことにして實行せられた謂ゆる微罪不檢擧の原則も、近く新刑事訴訟法（大正十一年法律第七十五號）第二百七十九條に於て大つぴらに認められることになつた。曰く『犯人

の性格。年齢及境遇並犯罪の情狀及犯罪後の狀況に因り訴追を必要とせざるときは、公訴を提起せざることを得』と。

右の趣旨に對して一歩を進めたものは、少年法である。少年法の特色は、第一には、少年をできるだけ刑に處しないといふ點に存する。第二には、少年を刑に處する場合には之に不定期刑を科することにするといふことである。此の二つの特色の下に、少年法は、先づ、犯人を以て罰するよりも教ふべきものとし、不良者にも亦其の人格が全うされ得ることを豫定してかかつたのであつた。

馬鹿な子供ほど可愛といふ諺がある。國家が不良少年に對してこの親心を以てせんとするところに、少年法の精神がある。

惡人なればこそ佛は之を救ふのだといふ教へがある。教への眞義はわたくしの敢て論じ得るところでない。しかし、現代の刑法は、少年法を手はじめとして、其の教へのままに發展して行くものとしか解せられない。

※

人權宣言が、其の第一條に自由平等の原則を掲げたことは前に説いた。さうして、そのコロラリーとして所有權の絶對性を第十七條に規定した。曰く『所有權は不可侵にして且神聖なる權利である』と。人權宣言の規定は、十九世紀の諸國憲法の淵源を爲すものである。さうして、わが憲法第十九條が『日本臣民は法律命令の定むる所の資格に應じ均く文武官に任ぜられ及其の他の公務に就くことを得』としたのや、第二十七條第一項が『日本臣民は其の所有權を侵さるることなし』としたのやは、まさしくそこから流れて出たものにちがひない。

人權宣言には固より人權宣言だけの尊重すべき文化的意義があつたのである。これはどこまでも明かに意識してかか

らねばならぬ。しかし、人權宣言を基礎として發展した十九世紀の資本主義的文明は、漸くにして爛熟し、漸くにして崩壞しはじめて居る。

其の爛熟の結果として世界の大戰爭があつた。其の崩壞の手はじめとしてロシヤとドイツとに革命があつた。『働かざる者は食ふべからず』と第十七條に規定したロシヤの革命憲法のことは暫く別論としよう。一九一九年八月十一日のドイツ共和國憲法は、人權宣言に對し興味ある對比を示して居る。

其の憲法の第百九條第一項は『總てのドイツ人は法律の前に平等なり』として居る。これだけでは、人權宣言の第一條と形式上多くのちがひはないが、しかし、第百五十一條第一項は、之を受けて、『經濟生活の秩序は、各人をして人間たるに價する生活を得しむることを目的とし、正義の原則に適合することを要す。各人の經濟上の自由はこの限界内に於て保障せらる』として居る。經濟生活の秩序、換言すれば其の秩序を規定する法令は、すべての人に『人間たるに價ひする生活』menschenwürdiges Dasein を供與するものでなければならぬのである。生存競爭の敗北者の最後の者といへども『人間たるに價ひする生活』だけは保障されねばならぬのである。

又、其の憲法第百五十二條第一項は『經濟上の取引に於ては、法律の定むるところに依り、契約の自由の原則を適用す』とあり、又第百五十三條第一項は『所有權は憲法に依り保障せらる。其の内容及び限界は法律に依りて之を定む』としてある。これも、これだけでは、人權宣言第十七條と相距ることの遠いものではない。しかし、それと同時に、直ちに引續いて、第百五十三條の第三項は、『所有權は義務を伴ふ Eigentum verpflichtet. 所有權の行使は同時に公共の福利の爲めに爲さるることを要す』として居る。又第百五十二條第二項は、『暴利は之を禁ず。善良の風俗に反する法律行爲は之を無效とす』として居る。善良の風俗に反する法律行爲の無效なることは既にドイツ民法第百三十八條の規定し

て居るところであるが——之に對應するわが民法第九十條が、其の形式に於て不完全で、從つて、解釋上、學說の大に努力せねばならぬものあることは、他に於て、わたくしの既に論じて置いたところである。憲法は其の民法上の原則を更に憲法上のものとしたのである。しかし、なほ、特に注意せねばならぬのは、『所有權は義務を伴ふ』の語である。二十世紀の法律思想は、まさに之をその歸趨とし、その標語とすることであらう。曾て學者が、『富は債務を生ず』(Richesse oblige) といふ原則を唱道し、富者は富者なるが故に過失なきに付いても損害賠償の責任を負擔せねばならぬことを說いたとき、それはあまりに社會主義的であるとして非難された。十九世紀の終期に於ては、『社會主義的であること』は、當然に非論理的で、不正なものであるとされたのである。しかし、ドイツ共和國憲法は、之を其の明文に掲げて、『所有權は義務を伴ふ』とすることになつたのである。此の原則から論理的に展開し得べきさしあたりの結論を想像して見るだけで、われわれの視界はすでに廣いものであると謂はねばならぬ。

※

戰敗國にして且革命を免れなかつたドイツのみに斯くの如き現象があるのであらうか。

否、戰勝國にして且平和の裡に其の國政を發展せしめつゝあるイギリスも亦、おなじ經驗を重ねて居るのである。イギリスでは、最近に勞働黨が內閣を組織することになつたのだといふことを回想すればいい。

イギリスの勞働黨にはイギリスらしい特色があるとされて居る。從つて、大陸に於ける社會主義とは區別して考へねばならぬ。しかし、イギリスの其の勞働黨は、昨年（一九二三年）の三月二十三日に謂ゆる社會主義的決議案を提出したのであつた。其の決議案に曰く、『資本主義の制度は、自然の資源を濫用し、その生產力を組織化することに於ても、

英國民の多數にその必要なる生活の標準を維持せしめることに於ても、共に失敗であつた。さうして、この失敗の原因は、生産及び分配の方法の私的管理及び私的所有に存することは明白である。故に、議會は、ここに、將來の立法の方針は、漸次に資本主義の制度を抑へ、之に代ふるに、生産及び分配の方法を公有とし、且之をデモクラチツクに管理せしめるやうにすべきである、と決議する」と。此の決議案は、失敗した。しかし、其の討議は世界的の注意を引いたのであつた。

しかり。其の決議案は破れた。しかし、鈍重なイギリスに、それから一年も立たないうちに、即ち、本年（一九二四年）の一月には勞働黨の内閣が成立したのである。其の政綱とされて居るもので、ここにわたくしが特に擧げて見たいものが二つある。其の一つは謂ゆる朝めし無税論で、其の二つは謂ゆる資本課徴論である。

朝めし無税論は、朝めしに用ゐられる食料、パン、コヒー、砂糖の類を無税にしようといふのである。國民の主たる食料品、殊に下級の民衆の食料品を無税にしようといふのである。富者に利益にして貧者に不利益な消費税を止めようといふのである。

資本課徴論は、イギリスの今日の財政、即ち戰後の財政を整理し、殊に其の多額の國債を適當に緊縮する爲めに、有産階級から其の資本の一部を租税として徴收しようといふのである。租税は之を所得から徴收すべきものだとすることが、從來の原則であつた。しかし、それでは財政が行き詰まらざるを得ないのである。財政の行き詰まりを救濟するが爲めには、財政學上の原則を打破すればいいのである。所得から所得税を徴收する外に、元本から資本課徴をするならば、それですべてが解決されることになるのである。

イギリスの政治を說くは、わたくしの力の及ぶところでない。朝めし無税論と資本課徴論との發展は別に說くべき人

をして說かしめねばならぬ。しかし、更に仍に、その朝めし無税論は、ドイツ憲法第百五十一條が「人間たるに價する生活」を高調して居るのに該當し、その資本課徵論は、ドイツ憲法第百五十三條が「所有權は義務を作ふ」と斷言して居るのに對應するものである。

⁂

社會の發展には革命を作ふことが多いとも謂ひ得ようか。さし當り、十九世紀の文明の成立の爲めには一七八九年にフランス革命が必要であつたし、二十世紀の文明を事はじめするに付いてドイツが一九一八年に革命をしとげた。しかし、革命は社會の發展に必要なものではない。一七八九年の革命はフランスに止まつた。が、わが憲法の規定の或ものは間接ながら其の革命から系統を引いて居る。されば、わが明治の文明が平和裡に大成されたことは、他國の革命を利用したことになる。わたくしは、わが最近の判例と立法との趨向が、また新らしく二十世紀の革命たるドイツの事例を巧妙に利用して居るものと解すべきではなからうかとおもふ。少くとも、われわれは、わが邦の社會的發展を平和裡に大成せんが爲めには、ドイツの其の事例が十分に研究され、十分に利用されねばならぬと考へる。

⁂

其のドイツ憲法第百十九條に曰く、「婚姻は家族生活及び民族の保持並に增殖の基礎なるを以て、憲法上特別の保護を受ける。婚姻は男子と女子とが同等の權利を有することを基本とする。家族の純潔及び健康を保持し其の社會的獎勵を爲すことはドイツ國、各聯邦及び公共團體の任務である。多數の子女を有する家族は相當の扶助を求むる權利を有す

る」と。

其の第百二十條に曰く、「子を養育して其の肉體的、精神的及び社會的能力を完成せしめることは、兩親の最高の義務であつて、且自然の權利である。其の實行に對しては、ドイツ國各聯邦及び公共團體が之を監督する」と。

其の百二十一條に曰く、「私生子に對しては、法律に依り、其の肉體的精神的及び社會的の發育に付き、嫡出子に對すると同じ條件を有せしむべきである」と。

其の百二十二條に曰く、「少年は、過役並に道德上、精神上又は肉體上の遺棄に對して保護せられる。ドイツ國、各聯邦及び公共團體は之に必要なる措置を爲すべきである。強制に依る保護の處分は法律に依るに非ざれば之を命ずることを得ない」と。

其の第百五十五條に曰く、「土地の分配及び利用は、ドイツ國及び各聯邦之を監督し、以て其の濫用を防ぎ、且つすべてのドイツ人に健康なる住居を供し、すべてのドイツの家族、殊に多數の子女ある家族に、其の需要に應ずべき住居及び家政を充たすに足るべき家産を有せしめることを努めねばならぬ。將來制定すべき家産法に於ては出征軍人を顧慮すべきである」と。

右は其の第一項である。續いて第二項に曰く、「土地の取得が、住居の需要を充す爲め、拓殖開墾を獎勵する爲め、又は農業の發達の爲め必要なるときは、之を採用することを得る。世襲財産は之を廢止する」と。

更に第三項に曰く、「土地を開拓し十分に利用することは、土地使用者が公共に對して負ふところの義務である。勞力又は資本を用ゐずして生じたる土地の價格の増加は公共の爲に之を利用することを要する」と。續いて第四項は、「總ての地中物及び經濟上利用し得べき總ての自然力はドイツ國及び各聯邦之を監督する。私の特權は法律により之をドイツ

國有又は聯邦有に移すべし』としてゐる、

進んで第百五十七條に曰く、『勞働力はドイツ國の特別の保護を受ける。ドイツ國は統一的の勞働法を定める』と。第百五十九條に曰く、『勞働條件及び取引條件の維持及び改善の爲めにする結社は、何人に對しても又如何なる職業に對しても、其の自由を保障する。此の自由を制限し又は妨害せんとする約定及び處置は總て之を禁止する』と。

第百六十條に曰く、『雇傭又は勞働關係に於て、被傭者又は勞働者たる者は、公民としての權利を行使し、及び著しく業務の執行を阻害すべき場合を除くの外、其の委託を受けた公の名譽職を執行するに必要な自由の時間を有する權利を有する。之に對する補償の請求權は法律の定むるところに依る』と。

第百六十一條に曰く、『健康及び勞働能力を維持し、産婦を保護し、並に年齡、病弱及び生活の變化に基づく經濟上の結果を防護する爲めに、ドイツ國は、概括的の保險制度を設ける。保險制度は、被保險者をして之に參與し之を支配する力を有せしめる』と。

第百六十三條に曰く、『總てのドイツ人は、其の精神的及び肉體的の力を公共の福利に適する爲めに活用すべき德義上の義務を負ふ、但し人身の自由を妨げない。總てのドイツ人は、其の經濟的勞働に依り、其の生活資料を求めることを得べき機會を與へらるべし。適當なる勞働の機會を與へられない者に對しては、必要なる生活費を支給する。詳細はドイツ國の特別法に於て之を定める』と。

第百六十四條は、階級鬪爭に於てキヤスチング・ヴオートを持つべき中流階級に關する規定を設けて居る。曰く、『農業、工業、及び商業に於ける中流階級は、立法上及び行政上之を奬勵し、其の過重の負擔を負ひ、他の兼併するところとなることに對し、之を防護すべし』と。

もう一つ擧げて見たい。第百六十五條に曰く、『勞働者及び被傭者は企業者と同等の權利を以て、相共同して賃銀及び勞働條件の規律並に生產力の全經濟的發達に參與するものとする。兩者のいづれの側に於ても組織及び其の聯合を爲すことが承認せられる』と。之は第一項である。其の第二項以下に勞働者會議のことが規定されて居る。

從來の諸國の憲法は、民衆の權利自由を、國家に對して明かにすることがその要點であつた。されば、わが憲法に、第二章臣民の權利義務と題して規定せられる第十八條以下の規定も、其の範圍を出ないものであると謂ひ得るものである。しかし、ドイツの新憲法は、斯く、謂ゆる社會事業乃至社會政策に關する事項を、憲法の規定に載せることにしたのである。

社會事業は、曾ては慈善事業だとされた。文明の贅澤仕事だとされたのである。しかし、之はわが邦でも既に遠いことである。次いで、之を救濟事業だと呼ぶことにかはつたが、それでも、之を以て所有階級の溫情の發露と見るべきに過ぎないとする考へが、永く行はれて來た。

今では、之を社會事業と考へることになつた。社會事業とは、社會が社會として社會全體の爲めに經營する事業であるといふの意味にちがひない。之は、各自のことをして各自にやらしめようとする傳統の原理を根本的にくつがへしたものである。——斯くして、それは、社會が社會自體の爲めに、社會の各員が相共にお互に經營する事業であるといふの意味にちがひない。——それは、やがて、社會が、其の最後の一人の生存權を保全せんとするの理想を明かにすることになるのである。

＊＊＊

生存競爭といふことは自然界の大事實にちがひない。さうして、それに大きな文化的意義のあることも亦之を認めねばならぬ。しかし、生存競爭は人生に於ける唯一つの事實でもなければ、又、それだけで、大きな文化的意義を全うし得るわけのものでもない。

生存競爭と相並んで生存共同といふ自然界の大事實を認識せねばならぬ。さうして、生存共同といふ調節機の下にはじめて生存競爭が其の文化的意義を成すものであることを明かに理解せねばならぬ。

社會的といふことが、斯くして考へられねばならぬことになるのである。社會事業乃至社會政策といふことが自由平等の原則と相並んで憲法上の事項とならねばならぬわけが、斯くして明かになるのである。

＊＊＊

わたくしは、社會事業や社會政策やが　今日の程度のもので克くわが邦の國際問題や國內問題を解決し了せるものだと謂ふのではない。この意味に於て、社會事業や社會政策は、政治上問題として、むしろ小さい意味のものであるかも知れない。現に一部の政治家がさう云つて居るのを耳にしたことがある。

政治は、わたくしの玆で論ぜんするところではない。しかし、若し、社會事業の目標とするところ社會政策の本意とするところを急いで徹底的に施設せねばならぬやうな時代が來るならば、それは既に困難のさし迫つたときであらねばならぬ。されば、社會事業乃至社會政策が、政治上まだ大きな問題として取扱はれない今日に於いて、其の事業乃至政策の本當の意義が理解されて居なければならないのである。──否、今日の狀勢として、社會事業乃至社會政策を大きな問題として取扱はないことが、すでに時機におくれた仕業になつて居るのではあるまいか

＊＊

淳風美俗といふことが唱導されて居る。其の意はわが家族制度を基本としてわが社會組織法律組織を改造しようといふのである。さて、家族制度を基本とするといふことは、果して如何なる意味に歸着すべきものであらうか。

又、思想善導といふことが高調されて居る。思想は善導されねばならぬ。思想は軍備の有形的な組織や經濟の外面的な機構よりももつと根本的なものであるからである。しかし、しかく思想を善導するといふには、何をその標的とし、目當てとして行くべきであらうか。

近く、今、勤儉といふことがうたはれて居る。問題は何を勤として何を儉とするかである。勤めんするに於ては勤めるに付いての機會が與へられねばならぬ。勤めるに於ては勤めるだけの能率が上がらねばならぬ。儉に付いても亦しかり。われわれをして節する機會を持たしめよ。さうして節したものに節しただけの價値を持たしめよ。

最後の一人にまで勤めしめ、最後の一人にまで節せしめることに依つて、問題は解決の正しき道に向ふわけである。

＊＊

われわれは、最後の一人まで戰ふといふことを國民の理想としたことがある。しかし、今や、其の國民的大戰爭が昔のことになつてしまつて、われわれは、今何を理想として生きて居るかといふことを考へなほさねばならぬことになつて居る。

是後の一人の生存權を保全しよう！之を以てわれわれの國民的理想として新しく押し立てて行くことができないであ

らうか。さうして、それは、やがて、最後の一人までに、國民としての能力を最大限度に擴充せしめることになるのである。

封建文明の階級制度といふテジスに對し、資本文明といふ個人主義が對立してアンチテジスになつて居る　その兩者をシンテジスしようとするところに、われわれの志が存する。

**

北見のはての山の中で、其の月の夜に訪うた一羊舍のことは、永くわたくしの忘れ得ないところであらう。其の人人と其の事業とは、世には多く知られて居ないのである。げに、其の人人は其の事業をわれわれに知らせようなどとはしないのであるが、しかし、われわれとしては、それを知り、それを解し、さうして、其の精神を十分におし擴げ、徹底的に展開して見る必要がある。

其の山、其の野、其の森、其の家。とこしなへに、其の日の如く平和であれ。さうして、其の人人の如き確信と期待とを、世のすべての人人が持ち得るやうにこの世が經營されたい、とわたくしは考へる。

機械の論理

室伏高信

一

私は資本主義の本質は機械生産にあると考へてゐるものである。從つて資本主義の滅亡は機械生産の滅亡を意味するものであると考へてゐるものである。また從つて機械生産への抗議を起すことなくして資本主義に反對するといふことは一つの矛盾であると考へてゐるものである。更に他のより廣義の立場からいへば、資本主義文明とはその本質において機械文明であるがゆゑに、機械文明への抗議なくして資本主義への抗議はありえないことであると考へてゐるものである。

機械に對する抗議が昔から様々な方法で行はれてきたことは何人も知るところである。英國におけるルデイツト運動のごときはその最も顯著なものである。全歐羅巴を通じてリボン織機に對する暴動の起されたことさへもあつたのである。これ等の暴動はしかしたゞなる一つの短見であるとして嘲笑されてきたに過ぎなかつた。

私たちは如何に多く機械のための讃美歌を聴かされてきたことであつたらう。經濟學者とは機械の讃美のためにこの地上に生れてきた人類であるかに見える。機械の適用によつて如何に多く勞働が便利をうけ、且つ短縮されたことか！これ民富論の聲である。近世經濟學の父が機械のために捧げた最初の裏書であつたのだ。It is unnecessary to give any example.――機械の讃美のためには如何なる事例を擧げるの必要もないのだ。アダム・スミスが早く既にかくの

如く論んじてゐるにもかゝわらず、彼の多くの門弟が、今日に至るまで如何に多く、そして如何に繰返してその事例を擧げたことであらう。まことに機械のために讃美することは近世經濟學の重要な任務の一つであつたのだ。

彼等の讃美は決して彼等を裏切りはしなかつた。機械は彼等の豫言したごとき効用をいよ〳〵發揮した。機械の競爭者は無殘にも敗れ、飢え、降伏し、或は飢えのために死んだ。英國の手織勞働者等は長い間一日二片半の生活をつゞけたのである。手工業者と農民とそして機械破壞者とは日一日と時代の外へと追ひ出された。

機械生産が歴史の舞台に登つてからまだ一世紀若しくは一世紀半にしか過ぎない。それだけの間に歴史は數千年の歩みを歩んだ。眞に朝に一壘を拔き、夕に一城を屠ふり、機械の自然征服戰は凡てのユトピアンの夢想を現實にと引き直した。ゾムバルトの言葉でいふ、機械の發達は遠く人々の夢想を越えた。機械の改良は限りを知らない。昨日不可能と考へられたことは今日は可能である。日日に何ごとかの新らしいものを生みなし、そして新らしき組織の必要を造くつてゆく。オツサのうへにペリオンが積まれた。正に新世界が生れたのだ。

機械の秘密はこゝにある。機械の讃美者はたゞなる經濟學者や、たゞなる資本家だけではないのだ。資本家も勞働者も、機械所有者も機械の奴隷も、かくして機械の讃美者である。Maschinenstürmer は時代後れである。ウウレの謂ふところの短見なのだ。ルデイツトの傳説は今や全く忘れ去られた。ロオド・バイロンは晦々たる短見者流である。ラスキンは田舍者、モリスは天保錢、トルストイは正にイワンの馬鹿である！

學者は常に伊勢蝦のごとくに氣取つてゐなければならぬ。自己を赤裸々に語ることは決して學者としての威嚴を保ちうる所以でないのである。こゝにをいて機械に對する學者の讃美にもまたしば〳〵ある種の條件が附せられてゐる。凡ての機械的發明が人間の勞苦を輕減したかどうかは尙ほ疑問である―ミル の言葉である。マアクスは勿論一歩を進める。機械の資本主義的適用はかくのごとき勞苦の輕減を目的とするものではないのだ。彼はかくのごとき言葉を以て彼の機械論を始めた。機械の資本主義的使用を非難したことにおいて彼はラスキンにもモリスにもトルストイにも若しく

は如何なるエレホニアンにも劣るものではないのである。彼の非難はより「科學的」である。彼の言葉は鋭く、彼の引例は廣汎である。機械は勞働者の間における死亡率を增加し、婦人勞働と幼年勞働を增大し、勞働者の道德を抵下し、勞働時間を延長し、その害はいふべからず。マアクスは實にかくのごとくに論んじてゐるのである。それはしかし彼にとつては機械そのものの害惡であるのではない。彼は用意深く彼の言葉を使用する。die kapitalistische Anwendung der Maschinerie——機械の「資本主義的」使用である。機械の弊害は機械そのものの產物であるのではない。資本主義的使用の產物であるのだ

機械の効用はこゝにおいて二つの世界に屬する。資本主義的適用と社會主義的適用である。機械の使用によつて如何に死亡率が增加し、道德が頽廢し、勞働時間が延長されたにしても、それは機械 an sich の責任とは何のかゝわりもないのだ 彼の言葉通りにいへば、勞働者がその生活の手段から「自由」にされたことの、機械自體の責任でないことは「疑ひなき事實」であるのだ。

機械は Bill Sykes のナイフである。ナイフによつて殺人が行はるゝともナイフは殺人者ではない。マアクスはかくのごとく論ぜんとしたのだ。彼は機械の資本主義的使用の痛擊者であるとともに機械をその資本主義的使用から救はんとする熱烈なる機械論者である。今日が機械の時代であるとともに明日もまた機械の時代であると彼は考へてゐたのだ。科學的社會主義の父は機械の明日に絶望するごとき田舍者でも短見者流でも若しくはイワンの馬鹿でもない。機械は資本主義の世界をもたらしたばかりではなしに、資本主義から共產主義へ、强制から自由への虹の橋であるとを考へてゐたのだ。こゝにをいて科學的社會主義のかゝわる範圍においては、階級闘爭とは機械の爭奪である。南北朝の爭ひが皇帝を狹んで行はれたごとくに、科學的社會主義における階級闘爭とは一つの機械の爭奪であるのだ。

今日は機械のために多幸なる哉。革命も反革命もまた今や機械の擁護者である。今日が機械の時代であるばかりではない。明日もまた機械時代たらんとす。機械のためにはまことに萬々歳である。

機械と資本主義とは可分なるものであらうか？機械と自由とは兩立するであらうか。明日の世界もまた今日あるがごとくに機械の時代であり、或はあらねばならないのであらうか？

二

今日は機械の時代である。社會學者が今日を機械の時代だと名づけてゐることについては何人も異論のあるべきでない。最初に石器時代があり、次に青銅時代があり、やがて鐵器時代がこれに續き、そして今日は機械時代となるに至つたことに何人も異論はないであらう、

機械とともに資本主義の始まつたことも多く論んずる必要のないことである。ある社會學者、例へばミュラア・リイアのごとき人は、外國貿易をもつて資本主義の起原であるとなしてゐる。この種の學説はしかしたゞ資本主義と商業主義との混同である。外國貿易がカルタゴの時代に既に盛大であつたことは人のよく知るところである。外國貿易はしかしあまりに古るく、資本主義はあまりに新しい。資本主義とわれ〳〵の名づくるところのものは近代の社會、經濟若しくは産業の形態である。即ち産業革命によつてもちきたされたところの社會、經濟、若しくは産業の形態である。

産業革命が機械の兒であることはこゝにいふまでもない。機械の發明は遠くロオジヤ・ベエコンの昔に遡ることができないのではない。彼によつて擴大鏡の發明されたことは近代における機械時代の一つの先驅をなしてゐるといふことができるからである。十四世紀における火藥の發明、十五世紀における印刷術の發明もまた機械史上における顯著なる事實である。就中印刷術の發明がその影響の偉大なること世界における三大發明の一つである——ミラボオのいふたことは必ずしも誇張だといふことができないであらう。それにもかゝわらず蒸氣機關の發明に至るまでは、機械の點においては、古代埃及と撰むところはなかつた——ペシエルはかくのごとくに斷定する權利をもつてゐたのである。アアクライトがあり、ワットがあり、カアトライトがあり、機械時代がこゝに始めてこの地上に開かれたのである。機械時代は、それゆえに、歴史の舞台に登つてから一世紀若しくは一世紀半にしか過ぎないのである。機械時代は正しく

産業革命の時代に相當するのだ、

機械から産業革命が生れた。マアクスもまたもとよりこの點に異論のあるのではない。そこに歴史は一つの新らたなる時代を導いた。一つの新らたなる時代とは、マアクスに從へば、一つの新らたなる生產樣式とともに存在する。資本主義的生產方法 ── kapitalistische Produktionsweise ──と彼の名づけるところのものがこれなのだ。しかも生產の方法とは彼にとつてはたゞなる生產の方法ではない。「物質的生活における生產の方法」が政治的社會的及び精神的生活過程を決定するといふのは彼の有名なる唯物史觀の公式と稱せられてゐるものである。資本主義の本質はそれゆゑにこの點になくてはならない。

こゝにおいて資本主義的生產方法の如何なるものであるかを知ることはマアクス主義の研究者にとつても若しくはその反對者にとつても決定的に必要なのである。マアクスは資本論の第三卷においてこの點に答へてゐる。彼にとつては、資本主義的生產方法とは二ッの要素から成立する。一つは商品主義である。他の一つは餘剩價値の生產である。この二つのものが彼の謂ふところの資本主義的生產方法の要素をなすものである。また從つて彼の謂ふところの人間の政治的、社會的、または精神的生活過程を決定するところのものはこの二つの要素、商品主義と餘剩價値の生產とであるのだ。然り機械生產ではない。機械生產 an sich ではない。機械生產のもとに行はれるところの商品主義と餘剩價値生產とがそれなのだ。

資本主義の本質は何んぞや。資本主義的生產方法とは何んぞや。機械生產 an sich と資本主義的生產方法とは區別さるべきあるものであらうか?

資本主義的生產方法なるものが若しもマアクスの考へてゐたごとくに一つの商品主義、一つの餘剩價値生產であるに過ぎないものだとしたら、それは正しく機械自體と可分なるあるものである。商品主義は商業とともに既に存在しなければならないあるものであり、餘剩價値の生產もまた資本主義とともに始まつたのではない。奴隷使用の行はれたのは一

つの餘剩價値生産の行はれたことを意味するからである。機械なく商業あり、機械なく奴隷あり。機械自體と商品主義、機械自體と餘剩生産とはもとより不可分なる有機的關係をもつてゐたのではないのだ。

マアクス主義の學者は私のこの解剖をもつてマアクスを誤解してゐるとなすかも知れない。勿論マアクスが「商品としての生産」といふてゐる時には、彼は勞働者自身が商品賣却者であり、從つて自由勞働者であることを意味する。「自由なる賃銀勞働者」であることを意味することを私は無視してゐるのではない。Freier Lohnarbeiter は、ある意味において、奴隷とも農奴とも違つたあるものであり、從つてまた自由賃銀勞働者の搾取によつて行はれるところの資本主義的生産と奴隷若しくは農奴の搾取によつて行はれたところの生産方法とはたしかに一つの時代を劃するものであるのだ。それはしかし生産方法そのものの相違であるであらうか。そは生産方法そのものとは何のかゝわりもないのだ。そは社會制度の問題であるのだ。相異れる社會制度がその時代の生産方法に何等のかゝわりもないといふのではない。社會制度の相違は社會制度の相違であり、生産方法そのものの相違と混同してはならないといふのだ。マアクスはこの二つの混同すべからざるものを混同してゐたのだ。資本主義の本質を彼が掴むことのできなかつたのはこのためである。

資本主義の本質が賃銀制度そのもののうへにあるといふ議論はわれ〱のしば〱聽かされたところである。そしてそは却つて多くマアクス主義の反對者によつて叫ばれてきたところである。ギルド社會主義、サンヂカリズムのごときはこれである。ギルド社會主義もサンヂカリズムもこの點においてはマアクス主義に一歩を進めてゐるといふことができるであらう。それはしかし依然として社會制度と生産方法そのものとの混同である。

賃銀制度は資本主義の時代を表徴する。賃銀制度の存在するがためにしかし資本主義的生産方法が成立するものではない。自由契約の原則が存在することなくとも資本主義的生産方法は成立するのだ。即ち純然たる動産奴隷制度を存續するとも資本主義は成立するのだ。リンカアンの奴隷廢止に至るまではかくのごとき奴隷制度が資本主義と相携へて發達してきたのを見よ。

賃銀制度は資本主義の本質をなすものではない。餘剩價値の生産もまたたゞ資本主義における動因であるのではな

い。既成社會主義の理論は誤謬に滿ちてゐる。就中「資本論」は大いなる誤謬のうへに立つてゐる。そは資本主義經濟學の完成ではある。その打破ではないのだ。世界の資本家は宜しく資本論を讀むべし。勞働者の任務は資本論に對する疑問から出發しなくてはならぬ。新社會の理論は再建さるべきあるものであるのだ。

資本主義的生産方法とは機械生産そのものである。新らしい時代はこの理論、この一つの簡單なる理論から出發しなくてはならぬ。

(一)資本主義的生産方法は機械の發明とともに生れた。産業革命が機械の發明によつてもちきたされたことはマアクス自身も既に認めてゐるところであるから私はこの點に多言を費す必要はもとより存在しないであらう。たゞ機械の發達なく資本主義的生産方法なく、資本主義的生産方法なく資本主義なしといへば足るのである。

(二)機械の存在する限り資本主義的生産方法は亡びない。また從つて資本主義そのものは滅亡するものではない

この點には二つの異論が行はれてきた。一つは共産黨宣言、フエビアン社會主義、ボルシエヰキ、社會民主主義のごとき國家社會主義の立場がこれである。他の一つはギルド社會主義、サンヂカリズム、IWWのごときアンチ・アウトリテエレの立場がこれである。前者は生産手段の國有を主張し、後者は賃銀制度の打破によつて自由社會をもちきたさんとするものである。前者についてはあまりに多く論んぜられてきた。そは一つの奴隷國の建設であるに過ぎないこと私のまたしば〳〵論んじてきたところである。こゝに繰返す必要はない。後者についても私は既に論んじたことがある。賃銀制度によつて始めて奴隷制度がこの地上にもちきたされたものでないことは何人もこれを認める。既に農奴あり、動産奴隷あり、賃銀制度の特質はその自由契約のうへに立つことにある。賃銀勞働者はしかし「自由」なるがために奴隷にと落ちたのではない。賃銀契約に入らざるをえなかつたがために奴隷にと落ちたのである。契約の「自由」なるがために奴隷制度が生れたのではない。「自由」契約を强制されたがために奴隷制度が生れたのである。賃銀制度は奴隷制度の原因ではない。たゞその媒介者である。媒介者の一人である。甲の媒介者を廢するも尙ほ乙の媒介者がある。賃銀制

度は打破さるゝも、奴隷制度の要求は依然として變るところはないのである。奴隷制度の要求が存在する限り、自由はこの地上にもちきたされることはできないのだ。

賃銀制度の缺陷は Collective Bargaining の方法によつても、その一部を補ふことができるであらう。更に賃銀制度の廢止によつて資本家階級からの壓迫を廢止することができるであらう。勞働における自由はしかしこれによつて回復することができるであらうか。動産奴隷と賃銀奴隷とを比較せよ。賃銀奴隷における奴隷性はその勞働に參加する條件のうへにあるのでもなく、勞働以外における生活の拘束のうへにあるのでもない。勞働に參加する條件は自由である。勞働以外における生活の條件は自由である。此點においては、今日は勞働者の間における奴隷性は最早や存在しないのだ。

あるものは、そしてあまりに多くの人々がいふ、勞働者は貧困なるがゆえに、また從つて彼の勞働をその資本主に賣ることに於てのみその生活方法を發見することのできるものであるがゆえに、勞働に參加する條件は常に一つの強制のもとにおかれてゐるのである。こゝに賃銀制度における奴隷制度が存在するのだと。かくのごとき誤謬に滿ちた議論が多くの社會主義者によつてしばしば行はれてきた。賃銀制度における奴隷性なるものがしかし若しかくのごときものであつたとしたなら勞働における團體契約、若しくは勞働組合の發達によつて、よく賃制度の缺陷を救ひ、それにおける奴隷性を排除することができたのである。然り、資本主義を仆すことなくして資本主義の本質を覆すことができたのである。それにもかゝわらず勞働組合の發達、勞働團體契約の發達は勞働者の自由に對して寸毫の效果をも擧げることができなかつたではないか。勞働組合は勞働者に團結の精神を與へたことの以外、即ちその教育的効果以外には勞働者の生活のうへに何ものを加へることはできなかつたのである。否、その教育上の効果さへも大いなる疑の眼をもつて見なければならない充分の理由がある。何故ならばその勞働者の間に存在した同僚的ソリダリテの精神の代りに、指導者崇拜、首領專制の奴隷的道德を導き出すに至つてゐるからである。

賃銀制度はこれを廢止することができるであらう。それによつて一つの組合社會主義を實現することはできるであらう。組合社會主義のもとにあつても、しかし機械工業の行はれる限り、次の如き二つの制度を避けることはできない。

分業と産業指導とがこれである、

分業は勞働の分割である。機械生産は必然に勞働の分割を要求する。一つの社會的分業は、一つの交換の要求のために起つたのであらう。アダム・スミスのいふたごとくである。工場分業と稱せられるものはしかし機械生産なくして存在することもなく、また發達することのできるものでは勿論ない。機械生産なく工場分業なしである。機械生産が今日の資本主義時代における勞働の分割の全理由であるのだ。ただに機械生産なく工場分業なきばかりではない。機械生産の存續する限り勞働の分割は廢止することができない。それは分つべからざる二つであるのだ。

勞働の分割はたゞなる勞働の分割ではない。工場分業は人格の分割である。それはバッカスが酒を給し、アポロが唄ひ、ミユウヅが音樂を奏で、アフロヂットが舞ひ、サチルが笛を吹くことではない。一本の針の製造が十八人に分割されることである。こゝにおいてレオナアドはモナ・リザを一人にて畫くことはできない。ラフアエルは一人にてマドンナを畫くことはできない。チチアンがマグダレンを、レムブラントが藝術家の第一の妻を、ロセッチがビアトリスを畫くことはできはない。ラフアエルも、レオナアドも、チチアンも、レムブラントも、ロセッチも一つの仕事の完成者であることを許るされることができない。レオナアドは眼を、ラフアエルは額を、チチアンは頭を、レムブラントは背を、ロセッチは口をのみ畫き、ヴン・アイクスがそれに油を塗らなくてはならぬ。否、その眼を畫き、額を畫くことさへもまた一人の仕事ではない。一人は眼蓋を、他の一人は眼の白き部分を、更に他の一人は黑き部分を畫かなくてはならぬのだ。こゝに勞働の生産物は如何なる人格の産物でもない。分割されたる人格の集合である。雑然たる斷片における機械的集合であるに過ぎないのだ。

分割されたる人格は人格ではない。人格性はその全一なるところに存する。人格は不可分なのだ。最高、獨立、唯一不可分なる統一である。人格の分割は最早や如何なる人格でもない。人格に非ざるある存在である。人格の喪失である。奴隷性である。生産物における人格の分割は生産物における奴隷化であるのだ。

道具と機械との區別はしば〳〵たゞなる程度の相違であるかに思はれてゐる。道具はより單純なものであり、機械はより複雜なものだと一般には考へられてゐる。それはしかし機械の本質について全く無智であることを暴露するものである。機械は道具の發達したものだといふことはできるであらう。それはしかしその進化の段階において一つの新らたなる原理を生み出したあるものなのだ。機械はたゞ複雜であるばかりではない。その中に新らたる要素を含むでゐる。マアタスが機械の要素を三つに分けてゐることは人のよく知るところである。動力裝置、傳達裝置、並に道具がそれなのだ。道具に對する機械の特質はこゝに一、自動的であり二、豫備裝置の存在することである。豫備裝置の存在することは機械それ自體において豫備的過程の存在することを示すものである。豫備的過程の存在は勞働の側からいふと豫備的勞働の必然を意味するのだ

道具によつて行はるゝ仕事はその勞働の第一歩からして仕上げの仕事である。仕上げの意識は常に工匠の心から去ることはないのである。機械の仕事はこれに反して大半は豫備的勞働のうちに費される。例へば印刷術のうへからいふ。凡ての書物は勿論最初は手によつて書かれた。十五世紀の中頃まではさうであつたのだ。チョソサアの詩が常にアダム・スタリブナアの手によつて書かれたことは有名な話である。手刷器の時代はキヤタストンからウヰリアム・モリスの時代まで續いた。今日も尚ほ田舍町の片隅に殘つてゐる。手刷器の時代においては一人の勞働者の手によつて凡ての仕事を完成することができた。こゝにおいて印刷勞働は一つの完成勞働である。たゞなる部分勞働でもなく、またたゞなる豫備勞働であるのでもない。一つの事物の完成である。たゞなる材料から目的物への創造であるのだ。動力機械の時代就中ホアルフエデエル型の時代ではしかし印刷勞働の大部分は豫備的勞働のうちに費される。恐らくその九十何パアセントが豫備的勞働に費されるであらう。その結果は印刷勞働はたゞ機械的な作用となり、勞働者と「仕事」とは分裂し、勞働の生産物と勞働者の個人的、人格的關係は喪失されるのである。こゝにまた印刷勞働は勞働それ自身としては何等の價値をも失ひ、勞働者それ自身は無價値なる勞働のためにその一生を費すこととなるのである

機械の作用は一つの繰返しである。手によつてよりも機械が遙により多くのものを生産することのできるのはたしかである。それはしかし種類においてではない。量においてである。同一物を再び製作することのできないのが手工業である。同一物の無數なる山を築くことのできるのが機械である。前者は藝術であり、若しくは藝術的である。後者は非藝術であり、反藝術である。Ann Draper: this cupp I for you and soe no more.——私は汝のために造つた。そしてもう造らないのだ。繰返すことをしないのだ。繰返すことができないのだ。人格は繰返すべからず。藝術は繰返すことが不可能である。繰返すことが不可能なものにおいてのみ創造がある。創造においてのみ勞働の享樂がある。自己表現の快樂である。自己表現において價値がある。繰返すことのできない仕事はかくして享樂であり、また同時に價値である。終局價値である。自己目的である。眞實なる生産である。生命である。人格である。藝術である。心靈の世界に屬する。中世紀の職匠と、そして多くの農民とは眞にかくのごとき生活を送つたのだ。農民が一粒の種子を蒔き、それに培ひ、それが成長を熟視し、その果實を收穫するのを見よ。そこに利害の打算なく、そこに功名榮達の觀念なく、そこに塵垢粃糠なく、たゞ自己表現の喜びがあるのみである。神人者益遠矣。農民こそ眞の享樂者であり、人格者であり、藝術家であり、至人たることができるのだ。職匠の仕事もまた一つの自己表現である。ゴシツタ建築を見よ。フオリエイチにおける靈的躍動の跡を見よ。自己表現の喜びこそヱストミンスタア・アベイとなり、ストラスブルグの大伽藍となつたのだ。

勞働における喜びの條件は創造である。創造の條件は自己表現である。自己は如何なる停滯でもない。各々の瞬間が各々の創造である。各々の瞬間が各々の創造であるところの自己表現こそ眞に創造であり、喜びであり、靈的躍動であり價値である。機械勞働はしかしたゞなる繰返しである。繰返しには自己はない。各々の瞬間が各々の創造であるところの自己なるものはたゞの一回と雖も繰返すことのできないものである。自己なく、自己表現なく、喜びなく、價値なし。機械勞働はそれ自身無價値である。人生の無用なる消費である。無價値なる生活過程であるのだ。たゞに無價値で

あるばかりではない。無價値であり、無喜悅である。勞働と遊戲、勞働と藝術とはこゝに全く分裂し、勞働は砂を嚙むがごとく、勞働の場所は砂漠のごとくである。單調にして無趣味、無生命にして化石せる勞働、機械の喧噪と殺風景なる工場とは心臟の殺戮者たらずんば止まないのである。こゝに勞働の奴隷性が存在する。機械勞働における奴隷化の必然性が存在するのだ。生產物における奴隷化であるとともに勞働それ自身における奴隷化であり、從つてまた勞働者それ自身の奴隷化であるのだ。

かくして機械生產は一つの奴隷制度である。

機械生產と奴隷制度とは分つべからざる二つである。そは機械の繰返し的性質とその工場分業的性質から不可避的に生ずるところの奴隷制度であるのだ。こゝに現代における奴隷制度が存在する。資本主義的生產方法における奴隷制度とはそれゆえに生產手段の無所有のうへにあるのではなく、また賃銀制度そのもののうへにあるのでもない。機械生產 an sich のうへにあるのだ。資本主義的生產方法とは機械とともに存在し、また機械生產自體とともに存在するのだ。またそれゆえにたゞなる生產手段の國有を主張する共產黨宣言、フエビアン協會、社會民主主義、ボルシエヰキのごとき一切の國家社會主義なるものは資本主義の本質とは何等のかゝわりもないのだ。そは一つの財物の爭ひであり、奴隷制度の爭奪であり滔々たる政權爭奪の一つである。國家社會主義であるよりは國家資本主義であり、プロレタリア政治家とはブルヂョア政治家である。クロポトキンが既に喝破したことのあるごとくに、滔々たる勞働政治家の諸君とは一つのブルジョア・ポリチシアンであるのだ。レニン然り、エエベルト然り、マクドオナルドまた然りである。否なたゞに國家資本主義であり、ブルジョア・ポリチシアンであるばかりではない。機械生產は一つの奴隷制度だと私はいふた。生產手段の國有、機械生產の國營とは奴隷制度の國營である。また從つて奴隷の國有なのだ。彼等の謂ふところの階級鬪爭とは奴隷制度の爭奪なのだ。共產黨宣言は一つの奴隷黨宣言である。共產國家と稱せられるものは奴隷國であるのだ曰く共產黨宣言、曰く社會民主主義、曰くマアクス主義、一切の國家社會主義は奴隷制度の永遠化を目的とする。勞

働者の手につながれたる鐵鎖を永久に保存せんとする奴隷崇拜である。Die Proletarier haben nichts in ihr zuverlieren als ihre Ketten. —— これ大いなる僞りである。機械生產のもとにおいて鐵鎖を失ふことができるもののごとくに論んずるは一つの僞瞞である。大いなる僞瞞である。勞働者は鐵鎖を失ふのではない。鐵鎖を永久化せられるのだ。こゝにおいてパピニの言葉はわれ等を欺かず。「社會主義のドグマは國法よりも壓制である！」

獨り國家社會主義がさうであるばかりではない。賃銀制度の打破によつて自由を約束する反國家的社會主義と雖もまた一つのドグマである。資本主義における奴隷制度は機械生產そのもののうへにあるのだ。賃銀制度そのもののうへにあるのではない。賃銀制度を廢止するとも奴隷制度は依然として殘るのだ。そこに機械があり、工場分業があり。機械的繰返しがあり、奴隷制度は依然として殘るのだ。

三

機械は機械を產む。バラトラアのいふごとくに機械は一つの re roductive system である。一つの機械から他の機械へ、甲の機械の上に乙の機械が積まれて、機械の進化は不斷に複雜化の道を進む。機械の複雜化は分業の複雜化を意味する。今や勞働は悉く一つの斷片である。人々は一つの仕事の一小部分にかゝわるだけである。無意味なる一小部分である。それ自身何等の價値なき一小部分である。機械の力によつて丸ビルが築かれ、摩天樓が建てられ、ドレッドノオトが造られると雖も、鷦鷯巢於深山、不過一枝。勞働者は鷦鷯である。たゞ一枝に巢くうのみである。廣大なるクルップ工場内におけるたゞ一小部分に跼蹐し、機械の小さき一部分に掌つてゐるだけなのだ。完成勞働、目的の仕事の何千分の一、何百分の一にかゝわるだけなのだ。その部分においては一つの知識を專門化することができるかも知れない。それは勞働者の知識を一つの方向に發展せしめるであらう。マアクス即ち曰く　なぜならそは他の多くの方向においてその智力を失ふからであると。

今日の紡績工は着物を仕立てることを知らない。裁縫師は着物を織ることはできない。機械工と稱するものは彼一人

にては如何なる簡單なる道具と雖も仕上げることはできぬ、昔の農民は家を建てることを知り、青年は歌ひ、踊り、村芝居を演んずることを知つてゐたのに對し、今日の勞働者は一つのダンスを踊ることもできないし、杜一本作ることさへも知らないのだ。彼自身技藝家でなく、仕事における熟練を失つてゐるばかりではない。美的鑑賞のごときは彼にとつてはたゞ贅澤なる「ブルジョア」である。俗惡性は「プロレタリアン」である。フリイマン博士の引例に從へば、英國の sub-man は sub-human である。彼は騒音に對して無頓着であり、無意識である。彼は如何なる騒音の間にあつても眠ることができるとともに、他人の眠らんとする場合に自ら歌ひ、騒ぐことの避くべきであることを知らない。彼はたゞなる喧噪に興味を感んじ、絶えず歌ひ　足踏みし、口笛を吹き、物音を立てずにはゐない。そしてまたそれとともに彼は音樂と騒音とを區別することはできないといふ。彼は清濁の觀念に欠乏し、渇すれば如何なる水をも撰まず　共同飲料器を使用して不潔を感ずることがない。彼は文字を殆んど解せず、時計によつて時間を知ることのできないものさへもある。「亞弗利加の土人と比較して多くの點において明らかに劣等である」と。まことに亞弗利加の黑人は文字を解しないにしても　彼は快活であり　自然を樂しみ、その地方に住む動植物に通じ、彼等の宗教、神話、民謡、音樂についての知識をもつてゐる。彼は手細工に長じ、スマイルスの所謂自助的である。彼等は通常家を建て、家根を葺き、食物を料理し、燐寸なくして火を起こし、布を紡ぎ、しば／＼綿布を織り、そして道具を製造し且つ修繕することをよくすといふ。文明の勞働者はこれ等の黑人に比べて果して進歩せる人種であるか。或は退歩せる人種であるか。

エレンブルクに從へば今後百年にして人々は一つの苦役用人種――荷揚人夫　運搬人夫、給仕人等を希望するごとく製造することができる、荷揚人には荷揚力をそして荷揚力をのみ發達させる。十馬力の力　小さい頭　白痴、絶對の服從、植物性の食欲がこれである。給仕人には鍵のごとく發達せる手、退化せる舌、性慾根絶の特性を發達させるのだと。百年を待つまでもない。この種の不具は到るところに發達しつゝあるのだ。マアクス曰く機械的分業は資本家のために勞働者の心身を不具にするものであると。

英國における低能者は今世紀の第一年において約五十萬を算した。狂人は人口千人に對して約五人に増加した。これ

文明の收獲であるのだ。文明の進歩と低能兒若しくは狂人の增加とは正比例する。醫門多病とは莊子の言葉である。醫學衛生が發達して都會に病多し。マンチエスタアにおける死亡率は一八九六年において人口千人に對する二三・五であり、その最高に達したのは二五・六五である。これに對して地方は概ね一〇以下であり、最も低きは五・八であるのだ。

機械的分業はたゞに勞働者の智力を分割し、體力を低下するばかりではない。勞働の分割からきたるところの人格の分割、勞働における享樂の喪失、創造的慾望の死滅、美的鑑賞の滅亡は、必然的に勞働者の間における勞働責任の觀念を殺ろし、勞働を避けんとする傾向を生み、勞働を藝術としてでなく、商品として打算する習慣を養ひ、財に對する勞働者の評價を高め、勞働の享樂の代りに官能享樂を追求するの性質を助長せざるをえない。既に勞働者における自由なく、享樂なく、價値觀念なく、bonne boucheなし。勞働者が勞働を卑しみ、これが苦痛のために勞働を避けんとすることは寧ろ自然の成行きである。內に心に滿たさるゝものなきがゆえに、外に物的生活に心を傾けることは必然なのだ。勞働における bonne bouche なし。人々は官能生活における bonne bouche を求めざるをえないのだ。盜み、飲み、賭博することは、今日の勞働者の生活においては勞働者の責任であるといふことはできないのだ。人々は盜み、飲み、賭博するものを責むることの以前に今日の機械生產、そして機械生產そのものを笞つべきであるのだ。これ機械生產からきたるところの必然の害であり、工場分業からきたるところの不可避の罪惡であるからである。アダム・スミス曰く機械工業からきたるところの單調な劃一的生活は人々の心を腐敗させ、身體の活動さへも墮落させるものであると。

產業自治は今日の勞働者の間における一つの通り言葉にまでなつた。國家社會主義の官僚思想に比較して、一つの思想としては、もとより一大進步ではある。產業自治はしかし可能であらうか。機械生產を廢止することなくして勞働者

の產業自治なるものは可能であらうか？

機械生產が勞働者の心身を不具にすることは既にこれを述べた。そはただなる工場法の施行により、勞働時間の短縮により、賃金の値上により、若しくは幼年勞働の禁止、工場衞生の改善によりて除却さるべき何ものでもあらぬ。勞働者に多くの閑暇を與へ、財物を多給することによつて益々助長さるべき害惡であるのだ。なぜならそは機械生產と工場分業とから必然に發生するところの、勞働における人格性の欠乏、享樂の喪失、藝術的衝動の死滅、そしてまたそれよりきたるところの勞働者の精神的墮落、唯物主義、並に能力低下に基くものであるからである。

かくのごとき勞働者によつてよく產業自治の實を擧げることができるであらうか。今日の大工業が多くの專門の技師、專門の經營的才能を必要とすることは何人もこれを疑ふことはできないことなのだ。こゝに Capt in of Industry が必要である。こゝに Steel Director が必要である。こゝに Railroad King がなくてはならないのだ。複雜なる近代の凡ての大工業は卓越せる經營の才と博學の專門家とがなくては運用すべからざるメキヤニズムである。資本主義のもとにおいても、大工業の指導者は、資本家それ自身であるよりは適材適所の法則が次第に行はれつゝある。資本家は今や益々その自ら投資するところの事業の指導と經營とから遠ざかつて產業經營の實權がこれ等の專門家に向つて移りつつあるのを見よ。

國家社會主義のもとにおいては勿論この傾向は一層助長せられるのである。そは個人的資本主義よりは一層集中的であり、一層大規模であり、從つてより多くの專門家、より卓越せる經營者を要求するからである。國家社會主義に非ずと雖も苟くも機械生產が存續し、產業の集中的大規模生產の行はれる限りこの論理には何の狂ひもきたるべきでないのである。

人々は選擧によつて彼等の代表者を求めるといふであらう。アゼンスの民主主義を見よ。近代のデモクラシイを見よ。選擧とはたゞデマゴオグの跋扈、腐敗、詭辯、無責任、そして遂に專制王の擁立であるに過ぎなかつたではないか。能力なきものが高き地位につき、欺術に長ずるものがよく指導する。選擧した瞬間から主權が失はれるのだ。自治

ではない。指導である。自由ではない。服從である。産業經營における自治といふはたゞ勞働指導者と稱するところのプロレタリヤ・ポリチシアンのために舞台を開くのみである。首領の自由である。勞働者の奴隷である。首領が計劃し、指揮し、權力を養ひ、名聲を高め、そして勞働者がこれに從ひ、無價値なる勞働をつづけ、自らの自由によつて首領の手に鐵鎖を委ぬることとなのだ。

機械生産のもとにおいては産業自治は不可能である。來るべきものは産業自治ではない。産業經營の政治化である。官僚化である。ボルシエヰキ・ロシヤは既に着々としてこの事實を證據立てつゝある。

四

機械は勞働節約者である。labour-saving-machineである。機械の使用のために勞働の如何に多く節約されたかはこゝにいふまでもない。アダム・スミスが早く既に豫言したとほりである。機械は勞働者の間に死亡率を增加し、婦人及び幼年勞働を增加し、勞働時間を延長したとなしたところのマアクスは「費されたる勞働の總計」が減小されたことを認めざるをえなかつたのである。勞働節約が行はれたといふのだ。

機械の目的は勞働節約である。その理想とするところは勞働の根絶である。機械の發達はたしかに一定量の生産においてはマアクスの所謂「費されたる勞働の總計」を減少しつゝある。人力の代りに機械が働いてゐるのだ。肉體の代りに動力装置が働いてゐるのだ。人間的勞働の代りにメキヤニズムが働いてゐるのだ。機械は日日改良され、人間は日一日と本質的生産から遠ざけられてゐるのだ。人間のなすところを機械がなしとげてゐるのだ。

人々の勞働は節約されたであらうか。人間は勞働から除外されることができるであらうか。社會主義の理想郷においてはカウツキイの謂ふところの「勞働からの自由」がありうるであらうか？

機械生産は勞働者における内的生活の死滅である。内的生活の死滅は外的生活への轉化である。機械生産のもとにお

いては、勞働者はその內に失はれたるものを外的條件の滿足によつて補はなくてはならぬ。こゝに勞働者の間における物的要求は必然である。そは機械生産そのもののうちに固有さるるところの必然なのだ

こゝに滿足の標準が變つてきた。乞食のデイゲネスは輕蔑の的である。ブルジョアが支配して貴族的威厳と裝飾とを求めたごとくに、プロレタリヤもまたブルジョアの跡を追ふて財物のうちに彼の滿足を求めなくては止まぬ。彼の問ふところは仕事の性質ではない。報酬の問題である。自己表現の喜びではない。物的陶醉である。裸體で生れ、裸體で歩み、田園に舞踏し、自然の懐ろに眠つた人間が、コルセットを價値とし、石屏を築き、法令を厳にし、日一日と食母から遠ざかつた。一つのものの生産は一つのものの需要である。機械生産が貨物の山を積むで消費の慾望が海のごとくに廣大となつた。新らしい慾望が起つたのだ。無慾而天下足。これ古の聖人である。貪慾にして天下足らざるは今日である。A new want is a potential evil. ──新らしい要需は一つの潜在害惡である。新らしき生産があり新しき潜在害惡がある。現狀維持である。一定量の生産における「費された勞働の總計」が減少して、物的慾望の總計が増大したのだ。ステエタス・クオである。人々の勞働時間は依然として變化するところはないのだ。たゞ勞働から人間性と享樂と價値とが失はれただけなのだ。こゝに勞働節約機械が發達し、 Gesammtsumme der angewandten Arbeit が減少して、勞働者はこれによつて終日汗と油のうちに身をうづめ、資本家は世事多忙にして「時は金である」！

機械が人間のなすところを爲して人間の勞働時間は減少することを知らない。原因よりいへば潜在害惡の成立である。勞働それ自身からいへば一つの機械化である。人間の勞働が機械化して人々の勞働は今や機械の補助にまで墮した。人間は製造者ではない。製造者は機械である。機械自體である。今日の機械勞働者は正しくガリイ船に乘せられてゐるのだ。

機械が一つの生殖組織であることは既に述べた。機械は最初に人間によつて造られたといふであらう。また人間の助力なくしては機械は機械を生むことができないといふであらう。エイレホンは答へる、機械は最初は人間の手によつて

造られた。蒸氣機關でさへさうであつた。やがて機械はしかし系統的に他の機械を生む。それをしも生殖組織でないといふなら生殖組織とは抑も何ものぞや。機械をして機械を生ましめるのは人間であることはたしかである。多くの植物をして生殖させるのは昆蟲であることを思へ。蜂は百蓿生殖組織の一部なのだ。何故に人間は機械の生殖組織の一部でないといふことができるか。蝶が産卵し、卵が毛蟲となり、毛蟲が蛹となり、蛹が蝶になるごとくに、機械が機械を生み、機械が生產物を製造するのだ。「如何に多くの人が今日機械の束縛の狀態のもとに生活しつゝあるか。如何に多くの人が搖籃から墓に至るまで、彼等の全生命を費しつゝあるか。機械への奴隸として束縛されるもの、そして彼等の全心靈を機械國の發達のために捧げるところの人が增大しつゝあることを顧みる時は、機械がわれ／＼のうへに勝利を占めつゝあることが明白であるのではないか?」

機械は主人である。人間が機械を働かすのではない。機械が人間を働かせるのだ。一つの汽車の例について見る。人々は汽車を利用するといふ。フリイマンのいふごとく人々が汽車に乘る時には、人々の乘らんとする時間に汽車が動き、人々の乘らんとする場所から汽車が出發するのではない。人々は汽車の出發の時間に、出發の場所にと行かねばならぬ。機械が人間に適應するのではない。人間が機械に適應するのだ。そして甚だ多數の人間が一列の汽車に適應するのだ。

人々はまた機關手が汽車を動かすといふかも知れない。一大誤謬である。機關が機關手を働かせるのだ。石炭を入れ、水を給し、機械を動かすのはみな一々が機關手の指導ではない。機械への適應であるのだ。機械に應じてのみ機關手は働くことができるのだ。最もよき機關手とは機械に對して最もよく適應する人である。機械に從屬するのだ。機械の欲するところに從屬するのだ。機械はガリイ船である。人間は奴隸であるのだ。

機械生產においては人間は最早や彼の自由に勞働の時間を撰むことはできない。勞働の時間と場所とは機械の條件によつて決定する。人間はたゞその條件に服從するのみである。彼は機械の裝置に應じて用意し、作用に從つて働き、給仕が主人のために食膳を運ぶごとくに機械のために油を注ぎ、黒人が亞米利加人の靴を磨くごとくに機械を磨き、下級屬

僚が大臣の前に文書を運ぶごとくに機械のために原料を運ぶのだ。彼は製造者ではない。製造者は機械である。彼は機械の働きのために奉仕するところの給仕人であり、列車ボオイであり、屬僚であるに過ぎない。複雜なる生產組織の間における補助的要素であるに過ぎないのだ。機械は如何なる場合にも人間の欲するごとく動くものではない。その裝置されたるごとく動くのだ。即ち機械の性質に應じて動くのだ。人間はたゞそれ從ふのみである。機械は立役者である。人間は切符切りである。機械を離れては彼は無意味である。無意味なる存在である。

彼はたゞ機械の欲するところによつて動かねばならぬばかりでない。彼はまた機械の欲するところの場所にさへ住まなくてはならぬ。即ち彼は天然の豐かなる地方に住むことの自由をもつものでない。工場地帶に住まなくてはならぬ。塵垢粃糠の工場附近に住むことを餘儀なくされるのだ。これ一個の勤產奴隸であるのだ。

彼の勞働が機械に適應するばかりではない。機械生產は彼から一切の創造的欲望を奪ひ、美的鑑賞を追ひ、人格的尊敬の代りに、機械的勞働と機械的生產物とに、彼の趣味、彼の評價、彼の知識、彼の生活を適應せしめなくては止まぬ。機械によつての完全な征服である。その完全なる征服が今や行はれつゝあるのだ。「フアウスト的人間が機械を造り、そして人間はその自らの手で造つたものゝ奴隸にと化した」のだ。

五

機械生產から機械文明が生れる。今日はたゞある機械生產の時代であるのではない。また實に機械文明の時代である。

自然の世界は打ち碎かれた。人間は益々食母から遠くへ追ひやられてその廢墟のうへに人工の世界が建てられた。森が開かれ、沼澤は塡められ、橋が架され、鐵道が布かれ、船舶が群り、煙突が林立して世界都市が西洋にも東洋にも新大陸にも建てられた。地球の表面が一變したのだ。新らしい世界が生れたのだ。たゞなる生產方法の革命であるのではない。地球の表面が一變して宇宙についての全思想が一變したのだ。政治はこゝに世界政策となり、哲學は知識學と

なり、音樂は蓄音機となり、詩は小說となり、演劇はキネマとなり、教育は「思想善導」となり、機械は宗教にまで高められた。

ジエラルド・リイが「機械の聲」を書いたのは現世紀の初頭においてゞあつた。二十世紀の聲は機械の聲である。教育は機械である。政府は機械である。商業、社會、文學、新聞、藝術——あらゆるものは機械である。機械であることを見ることのできない人は盲目である。死せる人である。「現代に屬せざる人である。」

機械は惡魔として始まつた。そは勿論神ではない。機械はしかし催眠的な力をもつてゐる。阿片の一種である。バアタス・ドルミテイブをもつてゐるのだ。機械の發達はいよ〳〵催眠的な力を發揮せしめた。ハノオの船がタックの船となり、やがてオリンピックとなる。人々はたゞ驚異の眼をみはるのみである。無線電信が數千里に通じ、飛行機が郵便を運び、地球の表面はたゞに變更されたばかりではない。正しく數百數千分の一に短縮されたのだ。奇蹟的である。秘教的である。神秘的でもあるかに見えた。機械の秘密はこゝにある。文明人は肉眼をもつて神を見ることを求めながら機械の前にはたゞ恍惚として睡眠をつゞけてきた。機械は惡魔として始まり、神に代つたのだ。Absetzung Gottes——神を驅逐して神に代つたのだ。無信仰の文明人がひたすらに機械を信仰し、無恐怖の近代人が機械の前に恐怖する。機械は神なのだ。文明人にとつては機械は神なのだ。

勞働者だけが機械の奴隷であるのではない。資本家も勞働者もともに機械の奴隷である。ともに機械に從屬するのだシペングラアのいふごとくである。

生産における人間の要素は日一日と重要さを減じてゆく。生産においてだけではない。一切の經濟生活について見る。人間の要素は益々輕く且つ蔑しめられてゆくのだ。經濟世界の主人は最早や資本家ではない。銀行家である。高度資本主義においては財界の王がそこに支配する。Nur die Hochfinanz ist ganz frei —— たゞテイ・ピイ・モルガンが自由であると智者がいふ。モルガンでさへもしかし自由ではないのだ。

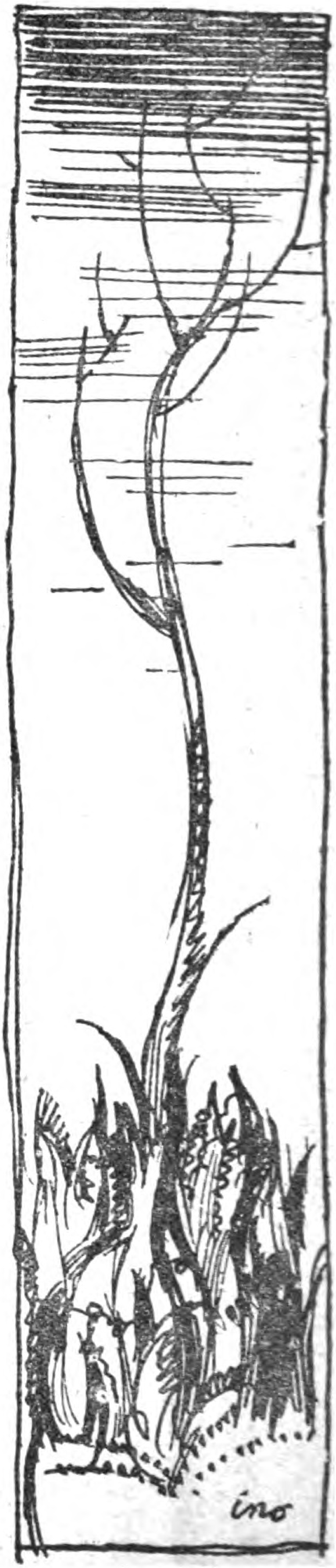
世界は一つのメキャニズムである。微妙なる一つの機制體である。カアライルの夙に喝破したごとくに、世界それ自

體が一つの蒸氣機關であるのだ。三角同盟が全英國の産業を脅威し、露西亞の飢饉が世界に影響し、巴爾幹の一青年の手によつて世界戰爭が始められた。正に一本の蠟燭によつてモスクワを燒き拂ふことができるのだ。支配するは人間ではない。機械的な作用なのだ。彼自身よりは遠く隔つたあるものが彼自身を支配する。たゞなる資本家ではない。財界の王でもない。見えざるものが支配するのだ。神は最早や見えざる王ではない。神でなく、人でなく、見えざる帝國が支配する。メキヤニズムである。機械のサタニスムスである。悪魔の帝國である。

工場においては機械が主權を宣言し、世界においては××××××××××。機械生産は人間の思想と行動との全領域を革命したのだ。

人々はそこに富があり、進歩があり、機械は救濟主であると考へつゝある。富は積まれた。物質の山は築かれた。富とは何んぞや。人間がそのものなくして辨んずるところの事物の數量である。ディオゲネスの言葉は千古不磨である。人々は今や「それなくして辨んずるところの事物」の數量を積み重ねてそこに富があり、價値があり、進歩があると考へてゐるのだ。それは進歩であり、價値であり、向上であるが。Man cl thes himself to descend, un loth s himself to ascend ——人間は下るために着、昇るために脱ぐ。人々は今や降下するために相競ふて衣服を纏ひつゝあるのだ。文明とは降下するための衣服である。降下するための物質がオッサのうへに積まれて生命はこの地上を拂はんとす。機械のサタニズムがいよ〱その悪魔的秘密を發揮して世界は正に一つの奴隷市場と化せんとしてゐるのだ。ポオル・モオランの言葉でいふ、「西班牙は大きな塵芥捨場である。獨り西班牙だけではない。倫敦も然り、巴里も然り、伯林も然り、神が牡牛となり、牡牛が神となる神話の都ロオマもまた今や一つの塵芥捨場である。獨り歐羅巴だけではない。また獨り西洋だけではない。機械の魔力は日本を白化し、印度の神秘を解剖し、支那にきたりて數千年の夢を破らんとす。世界は正に一大塵芥捨場と化しつゝあるのだ。

人々は今や上昇するために着物を脱ぐべきの時となつた。機械に對する抗議から新らしい時代が開けるであらう。機械生産そのものが資本主義の本質であるからである。



農民心理と時代思潮

河田嗣郎

一　農村生活と農民心理

農民も人であるから其の心理狀態は根本に於て普通人と異る所なきは言ふ迄もない。昔は農民が人間以下に取扱はれ家畜に近い待遇を受けた時代もあつたが　斯かる農奴制は今では歴史上の遺物たるに過ぎなくなつた。四民平等の現今では農民も亦完全なる獨立の人格者としてその待遇を受けて居る。固より農民たるが故に別種の心理を有する別種の人間と考へらるゝなどのことはない。そしてそれは洵に事物が事物當然の理に合し當然の狀態に歸つたのであつて　社會生活は正に斯くの如くあつてこそ甫めて平安で愉快であるべき筈だ。

然し暫く斯樣な一般的觀方を休めて　少し立入つて農民の心理を研究して見れば、其所に又農民たるが故に　他の部

類の人々とは多少趣を異にせる心理狀態の認むべきものがある。心理狀態といふことが不適當であるならば、農民共通の思想又は思想の傾向の認むべきものがある。

その農民共通の思想の傾向に就いては、従來多くの人々の之を論じた所であつて、農民に關する書物には大抵書かれてある。又農民に關する政策上や敎育上やの議論は多く之を顧慮して爲さるゝを例とする。從て今や農民心理の如何なるものなるか、又その思想の傾向として表はれたる特徴の如何なるものなるかに就いては　たとへ都會の最中に住む人々と雖も多く之を知らないものはない。

試に之を謂つて見やうならば、先づ農民は一般的に甚だ個人主義的である。又甚だ傳統主義的である。別の言葉でいへば保守主義である。次に又農民は一般的に宿命觀に捕はれ一種の宿命論者である。同時に又その生活を處する上に於て甚だ節儉主義者である。そして此等の性狀や思想の傾向が、農民一般に共通なるは、主として實にその與はれる農業といふ業務の性質と、その行ふ農村生活といふ生活樣式とより生じ來れるものなることも、睹易き所に屬する。居は心を移すといふが、先祖代々農業といふ單一の業務に從事し、狹い農村の天地に生れるから死ぬる迄住むで居るのだから、其所に一種の共通なる農民心理の淘冶されるは當然である。その淘冶されたる共通の心理は、農業といふ業務と農村生活との續く限り、萬事流轉の今日に於ても、依然として持續されて行くのである。

尤も今や大いなる變革の氣運が農業と農村生活との上に襲ひ來つた爲めに、農民思想も亦大いに動搖して來たのは否定し難い事實だが、その變動の氣運を見定むるに就いても、本來の農民精神の如何なるものなるか、その特徴の那邊に存するかを知るは、頗る重要のことゝ謂はねばならぬ。特にその共通の精神と農業々務及び農村生活との間に存する因果關係を探るは、甚だ重要のことゝせねばならぬ。

二　農民の個人主義性

先づ農民の個人主義的傾向に就いて見るに、それと農民の職業、農民の生活様式及び農民の社會組織との間には、頗る密接な關係あるを知るに難くない。即ち農民の從事する職業は、他人との共同一致に待つ所なくとも、たゞ土地を耕し之を培ひ、自分及び一家が其上に働けば、それで或程度までは能くその業務の目的を果し得る農業といふ業務である。勿論農業といへども他人との共同に依つて之を行へば、個人的に之を行ふよりも、より以上の成績を擧げ得られるものだけれど、それは農業が昔時の自給經濟狀態を脱して現時の意味の企業と化し、生産は一家の必要の爲めに行はるるよりも、廣く社會の需要の爲めに、所謂市場を相手とし、之に供給されんが爲めに行はるゝに至つてから、特に然るものあるに至りたるに過ぎぬ。又その生産業務が大規模に行はれ、機械の使用が十分に行はれ、從て分業の利便の其間に生れ出づる所大なるものに於て、特に然るものあるに過ぎぬ。

昔時の自給經濟的な農業、引いて今日も尚ほその俤を留むる所の小規模農業に在つては、それが自作農業であらうと、小作農業であらうと、業務はやはり一家の必要とする所をたす爲めに行はるゝを第一要義とし、一家の所要に餘れる所が市場に供給さるゝを以て本則とするのだから、その自給主義の臭味ある小農業に在つては、多く他人との共同を必要とせない。共同することに依て生ずる利便はあまり大したものでない。

されば昔から廣く小農主義の行はれた所に在つては、農民はその業務を營むに就いては、全く個人主義的である。他人の厄介にならずとも、自分で自分の業務を獨立に經營して行けば、それでともかくも食ふに差支へぬほどの物は出來、獨立の生活が營まれて行くのだから、どうしても農民は唯我獨尊的にならざるを得ない。少くとも他人と共同し其

の業務上に於て他人の助言と助力とを藉る必要を多く認めないのである。

それに農業といふ業務は、之をその技術の上から見るも、新規の機械を使つたり、新種や新肥料を用ゐたりせないで、たゞ父祖傳來のことをやつて居る分ならば、仕事はきまり切つた事ばかりなのだから、何も他人の助言や助力を必要とせない。たゞ一家の勞力を用ひて自己の所有地又は小作地を耕種してさへ行けば、それでよろしい。そしてその耕種に必要なる技術上の裁量や實行は、農民自身で容易に之を爲し得る所である。然かもその勞務は他人と離れ〳〵に自己の經營地に於て各一家單獨に之を行ふに過ぎず、他人との合力の行はるゝ場合は、代掻き植付等極めて限られたる場合だけのことである。又その限られた場合すら全く自家の勞力だけで之を行はうとすれば、その經營規模の小なる限り、又よく之を爲し得るものである。必ず常に他人との合力を必要とするわけではない。自家の勞力の不足する場合には勞働者を雇傭すればそれでよい。他の經營者との合力は避けんとすれば容易に避け得らるゝ。

そんな風だから農業といふ業務本來の性質よりして、之に從事する農民は、自分のことを自分で行ふといふ信念強く、又そんな積極的な信念はなくとも、たゞ自分でやつて行けばやつて行けるものであるが爲めに、その業務に永年從事し、多くは父祖代々之を行ふ農民としては、その氣風が自ら個人主義的となるは、謂はゞ當然のことである。個人主義的だといふて語弊があるならば、共同主義的にあらずと謂はゞ間違ないであらう。

それに又農民の生活は、たとへ集つて村落を造つて居るにしても、各家殆んど孤立して生活するものである。家と家との間に社交的な特に經濟的な交涉關係の存すること頗る薄く、家族的な孤獨生活の行はるゝが、農村の實狀である。成程それは時候の見舞や朝夕の挨拶などのやうな意味に於ける社交關係の存せないわけではなく、山間の三家村裡にあらざる限りは、一種のやゝ頻繁なる社交生活の農民間に存するは否定し難い。けれども見遁がし難い事は、農民の生活

は今も依然として自給經濟的な俤を留めて居ること前述の通りであり、各家は自分だけで生活の資料の大部分を有つて居り、他の農家からその供給を受ける必要なく、從て生活資料其他貨物の賣買交易等の關係に於て、農家の間に交渉關係の存する所甚だ薄きものなりといふ事實これである。

都會の生活は、家と家との間に社交關係の存する以外に密接なる經濟關係が存して居る。即ち各家の生活は自給的ならず交易的なるが爲めに、何れの家も、他人より品物を買取らなければ生活が出來ず、日用品に至つては、日々その賣買交易が盛に行はれ、商人同士は勿論のこと、商人と消費者との間にも、密接で然かも頻繁なる交渉關係が成立つて居る。然るに農家相互の間にはこの交渉關係がない。たとへ軒を並べて農家が存在して居ても、たゞ家が並むで居るといふだけで、共間に經濟的な共同の命脈の存するわけではない。

農家はその必要品に事を缺ぐ場合には、之を近隣の農家より求むることなく、時々都市に出かけて商人から之を買取るか、又は行商人から買取るのである。

這んな生活樣式の下に在る農民が、その生活樣式からも亦個人主義的な、少くとも非共同主義的な心理を養ひ成さるゝは、洵に當然で又已むを得ざる所といふ外はない。

それといふのも畢竟農民は、誰も彼れも農業といふ同一樣の業務に從事し、その有する所は大抵の家に皆之を有し、その缺けたる所は又皆一樣に缺けて居て、とても品物の上で互に有無相通ずる餘地はなく、有つても極めて限られたる範圍を出でないからのことである。都會には人が多いと同時に職業が多い。又生活の樣式が千差萬別である。從てそこに緊密なる共同生活か先づ經濟上の必要からして生れて出て來る。共同生活によつて有無相通じて行かなければ、都會の生活は成立たないのである。然るに農村の住民は、どれもこれも皆農民で、商家や工業者が有つた所で、それは一村

內ほんの數軒數十軒に過ぎぬ。農村には一村落がたとへ千戶を以て成れる大村落であらうと、たゞ同じ職業に從事し、同一樣な生活を營む家族が相並び生存するに過ぎない、盆の上に豆を撒いたようなものに過ぎぬ。それに比ぶれば都會生活は鬪技中の將棋盤に色々の駒が置かれてあるようなもので、駒相互の間に生命ある連絡關係が成立つて居る。

斯るが故に同じく社會生活ながら、都會に於けるそれと、農村に於けるそれとは、その內容が大變に異つて居る。農村の社會生活は、都會の意味に於ける社會生活とは謂ひ得られない有樣であるから、その人々の精神や思想の上に及ぼす働に至つても、同一樣であり得ない。そして此の相違からして、都會人には共同主義が萠み易いに反して、農村に於ける社會生活は、やはり農民に個人主義的な心理をこそ養はしむれ、多く團體主義的な、共同主義的な氣風を養成せしむるに貢獻するものでない、

要するに、之をその職業の上から見るも、その生活樣式の上から觀るも、將又社會生活の上から見るも、農民に個人主義的心理の共通なるは、當然のことゝせなければならぬ。世々代々の農村生活が、農民をして今や殆んど先天的個人主義者たらしめたること、洵に已み難き自然の數である。即ち今や個人主義は農民の本性と謂つても差支ないほどである。

三　農民の傳統崇拜

農民は一般的に個人主義者たると同時に又甚だ傳統主義者である。そして亦主として其の從事する農事といふ業務の性質より來れるものたるを注意せなければならぬ。即ち農業は耕種にしても牧畜にしても、大體一定した業務であつて、年々同じ樣なものを栽培育成するに過ぎず繰返し繰返し之を行つて、其の間多くの變化なきを常とする。種子や作

物や家畜の上に於て、勿論多少の改良の行はれるは否定し難い所だけれど、然し米作は昔からの米作であり、籾を播いて茄子がなつても大變だし、馬が牛の子を産むでも大變である。年々同種のものが出來る所に農業の本性は存する。たゞその品質を多少づゝ好くすることに農業上の努力は向けられ、技術の改良は行はれるのだが、然しその大體の遣方に於ては、古來多くの變化を見ない。

年々同じ物より同じ物を作らん爲めに農業は行はれ、然かもその技術と經營とは父祖傳來のことを行ふを以て本旨とする所から、農業に從事する者は、どうしても傳統を重んじる性狀を有たざるを得ざることゝなる。傳統を無視しては農業といふ業務は行はれず、傳來のことを遣つて行けば兎も角も一通り業務の成績は擧がるものである爲に、農民は一般的に新たなる試み、即ち新しい種子や作物や、新規なる機械や、新式の技術方法やに對しては、甚だ冷淡で寧ろ一種の反感を懷くを例とする。そしてこの業務上の習慣は自ら性と化して、農民一般に保守的な性狀を有たしむることゝなつた。然かもその保守性は進むで頑迷固陋とまでなつてしまう場合が少くない。

謂ふ迄もなく保守主義は既成のものを維持し尊重するを以て本旨とする。されば一般的に傳統を重んじ保守主義的なる農民は、たゞに其の業務の上に於てのみならず、その一家生活に於ても、又社會組織や制度の上に於ても、なるべく在り來りのものを守つて失はざらんとし、既成のもの、現存のもの、傳來的のもの、慣習的のものは、善いものであり、正しいものであり、合理的のものであり、又有利のものであると信ずる。殆んど其間に理知的なる批判を挿む餘地なきものと考へ、敢て之に對して批評の刄を向けやうともせない。たゞ既成狀態なるが故にそれだけの理由で以て正しきもの善なるものと信じてしまうのである。

其狀殆んど盲目的信仰にも近きものあり、理知的によりも寧ろ感情的に之を信じて、苟も疑ふ所なからんとする。そ

してその性狀は右に示すが如く、農業といふ業務本來の性質より養ひ成されたもので、それがたゞ架空の信念でな、現實の職業に依て育成せられた感情である。從て其所にともかくも業務上の現實なる利害が作つて居るのだから、その性狀は中々堅固に造り成されてしまつて居る。かるが故に、その業務上の利害の方面が先づ動いて、新たなるものを迎へざれば利益の舉げ得べからざることの明瞭となつた場合には、農民の性狀も之に連れて新たなるものを容れ、多少變化して來るが、その現實の利害の變化せざる限り、性狀の變化の先づ行はれることは少い。此點は由來農民教育や農事改良やの行はるゝ際、常に顧慮せらるゝ所だが、農民にこの性狀の顯著なる事實は見逃すべからざる所に屬する。

されば之を個人生活の樣式に就いて見るも、又社會組織に就いて見るも、全國民的には隨分大いなる變遷の表はれたる時に於ても、農村と農民の間には、依然として昔乍らの俤が留まつて居る。「漣や志賀の都は荒れにしを」と古人は歌つたが、志賀の都が荒れやうと奈良の都が榮へやうと、將又平安、鎌倉、江戸といふ風に、政治組織と社會生活との、一般樣式が變化しやうと、農民の生活には、今以て太古の俤が殘つて居るやうな有樣である。昔乍らなるは山櫻ばかりではない。

斯くいへばとて、固より農民の生活と社會組織と從て農民の性狀とが、昔乍らに少しも變化しないといふ譯ではないが、その飽迄傳統主義的で、保守性の强き一事に至つては、洵に顯著なるものがある。

之を農業々務の上に就いて見ると、前世紀以來歐洲諸國や我國に於て、新たなる科學知識を入れて、農業技術の改良とその經營方法の改善との爲めに、國家や地方自治體や種々の公共團體やが、苦心し努力した所は非常なものであつて、然も苦心努力の少からざる部分は、先づ農民の傳統崇拜を打破し、保守主義を征服することの爲めに、行はれたるを知らねばならぬ。新種子の使用、品種の改良、栽培方法養育方法の改革、新機械の試用、生産物加工及び販賣方法の

改善、組合的共同經營の實施、その他之に類する多くの事柄に於て、當局の努力は、常に農民の保守主義の爲めに、その少からざる部分を水泡に歸せしめらるゝを免れ得なかつた。

尤も近時に至つては、農民の性狀も大いに變化して來て、新規なものにも從前のやうに一概に反感と疑惑とを向けることは無くなつたが、それでも尙ほ現今我國に於て、町村の農業技術員の如きが、農民の固陋なる保守主義と戰はねばならぬ所の如何に大であり、その傳統主義が常に新技術を嘲笑せんとするに對して、新技術の威光と利益とを示すに、どれほど骨を折つて居るかは、實地の事情を知る者の誰しも之を認むる所である。

然かも忘れてならぬことは、近時やゝ少しく農民の性狀がその保守主義を捨てつゝあるのも、必竟は科學の力による新技術と新經營方法とがその從事する農業業務の上に現實に利益を齎し、目の當りその利益を示すやうになつたからのことたること之である。と同時に又近時一般に敎育の普及により、思想の傾向が變化し、農民またその現代思潮に觸れて、その農民たる特殊の性狀をば漸次に脫ぎ捨てゝしまはうとする風の著しく表はれて來たことも、見逝すべからざる所で、然かも之が爲めに農民經濟と農村生活とは却つて大いに衰微し破壞せられんとしつゝあること之である。此點については、後に今少し評論したいと思つて居るが、先づ事實として斯くの如きもののあるを、玆に一言せなければならぬ。

四　農民の宿命觀

農民は又一般に宿命論者である。そしてこれ亦その從事する農業業務の性質より養ひ成されたる心理なるを、注意せねばならぬ。

農業といふ業務は自然力に依て司配せられ、天然の土質と乾濕と天候と氣溫との之を許す範圍內に於てのみ、農業生

産は行はれる。農業生産が首尾よく行はるも失敗に歸するも、一に天帝の意に在ることで、人の注意と勤務とは、たゞ僅かにその自然力の指圖に從て、之を補ひ得るに過ぎぬ。そして天帝は時に豐饒な收穫を與へて、一茶をして「日本は外ケ濱まで落穂かな」と詠ぜしめたやうな場合も屢次あるが、又凶作饑饉で餓孚道に横はる慘狀を見せしめた場合も稀でない。結局長い眼で見れば、豐凶互に平均して所謂平年作を與へて呉れるのだが、さて其の平年作なるものは、決して有り餘るほどの作柄をいふものではない。たゞ農民が其業を持續し得、その貧弱なる生活を支持するに足るだけの作柄たるに過ぎぬ。

されば農民は一般的には、又永續的には、常に所謂餘剩を得て利得に肥ゆるものではなく、寧ろ常に最少限度を得て滿足せなければならぬ境遇に在る。まして一朝甚しき風水害や旱魃や虫害などに襲はるゝに於ては、一家の辛勞は全く畫餅に歸してしまうのである。然かもその徒勞は誰に訴へん由もなく、恨めばとて呪へばとて、天を相手のことで何の手應へもなく、結局自ら自己の運命を呪ふに過ぎないのだから、諦めてしまう外はない。運命を呪つてばかり居た日には、農業といふ業務はとても不愉快で殘念で遣つて行けるものでない。たゞ運命を甘受し、良いも悪いも天命と觀念して行くに於て甫めて業務上の平和は得られる。從て又生存上の平和は得られる。即ち豐穰な收穫は天の賜として、御酒を供へ天を祭つて、その德を頌し其惠みを感謝するし、旱魃なれば又山に火を焚いたり釣鐘を淵に沈めたりして雨乞をする。害虫がわいたといつては神に驅除を祈り、大風が吹きさうだといつては天帝にその中止をお願する。こんな風な非科學的な（或は超科學的な）態度で遣つて行く所に農民の生命がある。從てその業務と其の生存とには、どうしても多少神秘的な所のあるを免れ難い。

思て見れば、僅か一合播いた種が一斗に稔つたり、胡麻のやうな種子から水々しい大根が出來たりする事からが神秘

的である。雨露の惠や寒暑の適否もたゞ自然的だといつてしまへばそれだけだが、沁みじみ考へて見れば、不可思議な神秘なものである、その不可思議な大自然の力をたよりに只管其業を營み、之に依つて生存を續けて行く農民が、大體に於て運命論者となるは、當然のことゝ謂ふべきである。それも達識の哲人ならば別だが、田夫野人と呼ばるゝ普通一般の農民が、宿命を信じ運命をたよつて、心の平和を保つて行くに何の不可思議があらう。否宿命觀を持するに依てのみ農業は營まれ得、農民生活は爲され得ると謂つても、差支はない位である。

ともかく農民が大自然の力に依賴し、その許す範圍内に於て業務の成績を擧げ得、然もその許す所は永續的には最少限度たるに過ぎざることは、農民の心狀をして、自から都會の商工業者の心狀などとは異つたものたらしむる。そしてその心狀は右の如く宿命論的に傾くと同時に、甚だ消極的で、萬事節儉主義的ならしめらるゝ。宿命論者の人生に對する態度の消極的なるは、言ふ迄もないことだが、宿命論者たる限り、そして消極的態度を持する者である限り、農民はその生活に於て極度にまで節約主義的ならざるを得ない。

常に經濟上の餘剩を利得するものは、積極的で濫費も敢てし得るけれど、常に僅かに最小限度を得て居る者は、節儉主義でなくては、抑も生きて行くことが出來ない。その業務も經濟も成立ち得ない。尤も農民が元來吝嗇ならざる天帝の惠に於て、僅かに最小限度だけしか享け得ないといふは、自然の生產力に對して人口が多過ぎるからのことで、人口さへ相當程度以下に少なければ、農民亦裕かなる天の惠の下に、鼓腹するを得べき筈である。けれども人口の增減には又それ自身の法則が存して、農民の手で之を自由に支配し得ざる限り、歷史あつて此の方、農民が貧弱なる天惠に甘んぜざるを得ざるは、已むを得ない所である。それに又社會一般の組織と政治經濟の實狀とが、農民の手にはたとへ餘剩があつても、之を其手に殘し與へないで　他の部類の人々が取上げてしまい、農民の手にはたゞ僅かにその貧弱なる生存

を支ふるに足るだけのものしか残して置かない仕組になつて居る限りは、その社會的な理由からしても、農民は所謂最小限度を得て滿足する水呑百姓たる外ないのである。

何れにしても、天然的にと、社會的にと、兩方面の理由からして、斯くの如き境遇に置かれたる農民が、その生活を持するに就いて極端に節約主義的なる、洵に氣の毒にも又已むを得ざる所である。人間としてたゞ必要なといふ限度だけの生活を爲し、粗衣粗食に甘んじて、然かも一本の薬一粒の米をも忽かにせず、道で便用を感じても我が田か畑の所まで我慢してするといふ位にまでして、農民は漸くにその經濟を維持し生存を續け得るのである。

農民と宿命觀と節儉主義。兩者互に關聯したこと乍ら、農民心理の二大特徵として、我等の觀察を遁れ能はざるものである。そして此等の特徵が上に揭げたる色々の特徵と相待つて、農民生活と農民經濟と農村社會との上に、種々現實なる關係と事象とを生ぜしめつゝあること、最も注意に値する所たらざるを得ない。

五　農民の個人主義と一般個人主義思潮

以上指摘する處以外に、尙ほ農民性狀の特徵を論ずるならば、幾らも之を論じ得らるゝ。けれども玆に一々之を計へ上げて此上細論する必要はあるまい。それよりも大事なことは、總べて此等の農民心理の特色は、之を現代思潮に照し合はせて、如何によく反りが合ふか合はぬかといふことゝ之である。

所が右等多くの特色は、その何れを見ても、現代思潮一般とは、とかく十分に反りの合ひ兼ねるものばかりである。中には全く背馳するものもあり、中には傾向としては稍や同一方向に向ひながら、然かもよく十分に合致し併行し難きものがある。そして其事は農民と農村生活とに取つては、現代に處する上に於て、甚だ都合よからぬことであり、之が爲

に農民は農業を捨て都門に走り、農村は荒廢して、今日の所謂農村問題の心理的原因と爲す所となる。

そこで先づ農民の有する個人主義思想に就いて見るに、一見之は現代を支配する一般個人主義思想と同一傾向のものであり、從つて此の點に於ては農民は現代思想に觸れて居るものなるが如くに見ゆる。惟ふにこれは一概に誤れる見方といふことは出來ないのであつて、十八世紀以來十九世紀を通じて造り成されたる個人主義思想の一般的傾向は、その思想的根據に於ては、農民の個人主義思想と共通なるものを持つてゐる。然し乍ら、悉細に之を觀察すれば、現代一般の傾向たる個人主義思想は、人格價値を尊重し、人々の自覺に依つて、その人格的存在の獨立と自由とを主張する所に其の根據を有し、そが人生行爲の上に現はるゝ場合には、各人行動の自由といふ原則となつて表はれる。即ち法律上に於ける行爲の自由、例へば契約の自由として表はれ、又は經濟上に於る行動の自由、例へば營業の自由、勞働の自由などゝして表はれるのである。然るに農民の有する個人主義思想に至つては、その出來上りたるものを哲學的に解說するに就いては、一般個人主義思想と同一原理のものとして說明し得らるゝけれど、そが農民心理として出來上がるに就いては、甚だ異なれる基礎を有してゐる。即ちこれは人格主義的なる自覺に基くといふよりも、前にも述べたる如く、農民の生活樣式と其の從事する業務との狀況より、殆んど無意識的に造り成されたるものたるに過ぎぬ。其の生活が孤獨で、又その業務が農業といふ孤立經濟に適するものなるが爲に、人と相倚り相助くることなくとも、自分で自分のことを爲せばそれでよいといふ實地的な態度が、その心理の根據たるに外ならぬ。

されば個人主義的なる農民必ずしも自覺の明瞭なる又人格主義的なる人生價値の尊重者ではない。かなり無自覺で又人格價値の尊重すべき所以を知らざるに拘らず、然も個人主義者たる者多きが、農民普通の有樣である。從て農民に就いていはるゝ所の個人主義は、深き思想的反省より芽生えたる思想的根源を有するものたるよりも、より多く生活と

産業との爲めに慣習的に造りなされたる後天的性狀と謂ふことが出來る次第なりとする。

斯るが故に、之を生活の實地様式や産業々務やの上に表はれたる所だけに就いて見れば、都市の商工業者の如きは、個人主義的立場より行動自由の原則をこそ尊重固執すれ、その生活は孤立的なるを避けて共同一致的なるに益々傾倒しつゝある。又その業務は多人數共同に之を行ひ、個人企業よりも會社企業を有利とし、多くの人々の有する資本を合せて一企業體を造り、その企業の下には又多數の月給取りと勞働者とを使用して、共同に分業合力を行はしめ、以て益々作業能率の増加を圖る方法を講じ、之を實行しつゝある。そしてその集合一致の傾向は、近者年と共に促進され、今や經濟作業は益々社會化せんとする傾向を表はして居る。

更には又近者個人主義に對して社會主義の勢力の漸次增進しつゝあることは、最も注目に値する所で、人格價値の尊重を基礎とし乍らも、社會生活の根本原理としては、個人的なる個別主義を止めて、社會的なる團體主義を確立すべきものなりとする傾向が、漸次馴致されて來た。そして此の傾向は、現代思潮の指導的傾向たらんとすること、呉々も注意すべき所に屬する。

それに又更には、現代人一般の有する個人主義は、人生に對する積極的態度と結び付いたものである。飽迄人格價値の尊重を要求すると同時に、愈々以て人格の内容を充實し、生存上の實地行動に於ては、飽迄奮鬪して地位の向上經濟の發展を圖り、働いて倦むことなく、進むで止まる所を知らないのが、其の特色である。

然るに翻つて農民の個人主義に就いて見れば、人格價値の尊重の下に、人格の内容充實を圖るべく精進邁往するといふ様な氣風は乏しく、之を實地生存上の行動に就いて見るも、保守と消極とを以て始終し、地位の向上經濟の發展の爲めに勇敢に奮鬪する氣風は少ない。寧ろ傳習的なる生活に安住するを以て農民心理の本然とすること、先に之を論じた

通りである。されば農民の有する個人主義は、謂はゞ消極的孤獨主義であつて、現代一般の傾向たる積極的發展主義とは、その人生々存上に於ける發現を異にして居る。

そして農民はその業務と生活とに於ては、飽迄獨自一己を守つて革めず、共同生活と共同事業とに入ることなく、その關係に於ては、寧ろ大いに時代に逆行して居るのである。即ち試に農民の業務を見れば、五段七段の小農地面積を自作若くは小作し、之を行ふにはたゞ自家一家の資本と勞力とを以てし、足らざる所を補充的に少しばかり他より借用雇傭するに過ぎぬ。前にも之を示したやうに、現今農業上に於ける共同作業の如きは、少數の例外的場合に行はるゝに過ぎない。大多數は孤獨作業と孤獨經營とを以てする昔乍らの俤を傳へて居る。従て多く機械の使用さるゝことなく、分業合力の利便の得らるゝ所がない。

然かも農民が斯くの如き意味に於て個人主義を墨守して居ることは其の經濟をして益々時勢後れならしむることたるに外ならず、之が爲めに、一方工業生産の如きは、十八世紀の末葉以來未曾有の大發展を遂げ、現今これを見るが如き隆盛を致せるに拘らず、農業は寧ろ年と共に衰微し、農民疲弊の聲を聞くこと、比年益々甚しからんとする。此の意味に於ては、實に現今農業を亡ぼすものは、農民の個人主義なりとも謂ひ得らるゝ次第で、此點は常に私の指摘力說して居る所である。

されば要するに農民心理の一大特徴としての個人主義は、同じく個人主義ながら、現代一般の個人主義思潮とは、稍々その立場を異にし、とかく十分に反りの合ひ兼ぬるものたるを謂ふことが出來る。そして其の意味の個人主義心理に捕はれたる農民は、それが爲めに益々現代思潮と現代生活とに於て其の地位を危くせられ、段々影の薄いものとなりつつあるを否み難い。農民にして早くその心理の轉換を圖り個人主義に立つにしても、人格主義的にして然かも打開的

な、同時に又生活と業務との上に於ては、共同一致の力を養ふて以て新たなる團體主義を迎ふることを爲さゞるに於ては、農業の衰微と農村生活の沒落とは、所詮免れ難き所たらさるを得ないであらう。農民の抱懷する個人主義甚だ呪ふべきである。排斥すべきである。撲滅すべきである。農民にして飽迄之を固持する限り、時代は之を粉碎せなければ止まぬであらう。

六　思想の撞着と根本改革方針

次に又農民心理の特徴たるその傳統崇拜心や宿命觀的態度やに就いて見るも、何れも今の世には不向なものばかりである。即ち極端な傳統崇拜の如きは、進歩と改良を容るゝ餘地なきものである。農民の有する傳統主義はそれほど極端なものではないにしても、時勢と共に移り行くを妨ぐる點に於て、それは農業々務と農村生活とをして、段々時勢後れのものたらしめる。

昔の時勢は時々大いなる變革こそ行はれたれ、一般的には停滯勝ちの時勢であつた。特に經濟關係に於てさうであつた。その停滯せる時勢の下に在つては、農業亦停滯的なることに何の障りもなく、時勢と共に停滯して、終に農民心理をも停滯的のものと爲してしまつたのである。然るに現代といふ時代は、萬事が目まぐるしき迄に轉移變動して止まることなき時代である。特に經濟と技術とに於て然る時代である。斯かる時代の眞中に在つて、農業が農民心理の保守性よりして、新しき改良や改革を迎ふることを爲さず、爲してもたゞ時勢に引づられて僅かばかりづゝ遲れ遲れに之を爲すに過ぎぬやうであつては、結局は農業そのものが全然時勢後れのものとなつてしまふ外はない。

然るに更に農民の宿命觀的な心狀に至つては、今日の時代を支配する人本主義的な思潮とは、全然相容れさるもので

ある。今の代の人々は、人の力で何物をも征服せんとして居る。現代人は昔の希臘人や大和民族などのやうに、人間本位に物を觀、物を考ふる心的態度に在る。されぱこそ向上とか發展とか充實とか擴張とかいふことの爲めに、努力これ事とする次第であつて、其の態度は飽迄積極的なること上に之を示した通りである。運命に安住し何事も締めて隱忍する氣風は、昔の專制政治に縛ばられた人々の間には、普通の心理であつたけれど、現代の自由なる人々の間には、消えてしまつた氣風である。此の中に在つて獨り農民が、人生に對し飽迄消極的態度を持し、何事も天命と觀念し、經濟上の割け分に於ても、最少限度を得て滿足するといふ氣風は、どう見ても一種の時代錯誤たらざるを得ない。たとへ其の性狀が農業といふ業務の本性より自然的に造り成されたるものなりとも、農民がその性狀に在る限りは、現代一般の思潮と合致し難く、又農民にして現代思潮に觸れ之れに乘つて流れんとするに至れば、最早農村生活に安住出來なくなつて、農業と村落とを捨てゝ都門に流れ行く外はない。

然るに今現時諸國に於ける一般の實狀を見れば、此等種々の心理上の特徵を有する農民は、教育の普及と思想傳播機關の發達との爲めに、漸次益々現代思潮に觸れて、農民固有の思想との間の矛盾に苦み、兩思想の戰はいつも農民思想の敗北に終つて、現代思潮に捕はれたる農民特にその子弟は、相率ゐて農業と農村とを棄て去る傾向が、著明となつて來た。

此事はこれを農民の個人主義思想よりいふも、その宿命觀よりいふも、又その傳統主義よりいふも、洵に止み難き勢である。縷述する如く、此等の農民思想が、現代一般の思潮と一致し得ず、寧ろ之に逆行するものたる限り、力强き一般思潮が勝つて、農民思想の征服せらるゝは、當然のことゝ云ふ外はない。そして教育といふ大いなる社會的努力は、この時代思潮普及の爲めに盡しつゝあるもので、その普及發達は、實に現代人を一樣に現代思潮の大いなる流に乘つて

流れしむることゝ爲すを意味するに外ならぬ。

今や歐洲諸國に於て著明で、我國にも漸次著明とならんとしつゝある所の農民離村といふ大いなる事實は、現代思潮の普及により、その農村浸入の如何に深刻に行はれつゝあるかを物語るものである。即ち現代の一般傾向たる個人主義思想に觸れ、向上發展の氣風に養はれ、經濟の充實や一身の榮達を希ふに至れる農民、特に其の子弟は、農民固有の心理たる傳統主義的な宿命觀を捨てゝ、その傳統主義と宿命觀との沈澱鬱積せる農村を捨てゝ、自由の天地を求めつゝ都門に流れ込むで來る。同じく過ごす一生ならば、變化あり意義多き一生が送りたい、同じく働くほどならば、富貴榮達の道の開けたる所に於て働きたい、働いて運命を開拓し、人生の意義を充實したいといふのが、農村を出づる人々の心理であつて、之れ實に現代思潮への歸順、農民心理への反逆たるに外ならぬ。

何れにしても現時普通の現象たる農民離村といふ事實は、現代思潮と農民思想との矛盾をば主たる原因として表はれ來れる現象である。その原因はどうしても主としてこの心理方面に求めねばならぬ。(詳しくは拙著『農業經濟學』及『農村問題と對策』參照)

そして、この農民離村てふ事實は、有形的には農業の疲弊と農村の荒廢とを意味し、その事が社會生活に取つて由々敷大事であるならば、その有形方面に於て之が對策を講ぜんとする場合、主として其の注意がこの心理的方面に注がれなければならぬ理由甚だ明瞭とせなければならぬ。然るに今その心理的方面に於て、問題の根源は現代思潮と農民思想との撞着に存することと明かなる所なりとせば、偖て之を如何にすべきか其所に大いなる困難が横はらざるを得ない。

問題を簡單に考へる者は、若し兩者の撞着がその根源たるならば、一般は部分よりも有力で又貴いと定まつて居るのだから、農村精神をば時代一般の思潮に順應するやう革むるに努むるが肝要である、特殊なる農民心理を淘冶して、之

を時代思潮に合致せしむる外に問題解決の道はなく、又この道が最も合理的で又有効なる道であると主張するであらう。成程一應は尤もな見方だが、さて實際となれば、さう簡單には行き兼ねる。

前に詳論したやうに、農民の有する性狀は、その從事する農業とその住ふ農村といふ天地との爲めに、自然的に造り成されたものである。そしてその農業なるものと農村生活なるものとは、大いに之を改革することこそ可能なれ、さればとて根本的に之を別種のものとすることは出來ぬものであるから、今農民の性狀を全然現代思潮に一致せしめんとするにも、農民が農村に住ひ農業に從事する限りは、或程度以上にはどうしても目的は達し得られない。强いて其の特殊の心理を亡ぼしてしまへば、輙ち上に示す如く、其等の人々は相率ゐて農村を棄て去ることゝなる外はない。然し斯くては農民心理を變革せんとして農業と農村とを亡ぼすことゝなる。農業を亡ぼしてしまつては改革策は何の役にも立たぬ話で、之れ全く角を矯めんとして牛を殺すものだ。

方策はどうしても農民と農村とを活かす工風として攷へられねばならぬ。人間が霞を吸ふて生くる道の開けざる限り、農業を亡ぼすことは許されぬ。然らば如何にしたらよいか。方策は所詮農民思想の方面と一般時代思潮の方面との二方面より立てらるゝことゝ爲す外はない。即ち一方には農業と農村生活とを改造することに依り、更には又農民精神そのものを新たなる方向に向つて陶冶する道を講ずると同時に、他方には現時の商工本位的なる資本主義制を革め、其他一般的に社會生活の方針と樣式とを改革することに依り、更には又直接に一般思想界の革新を行ひ、新たなる人生觀と社會觀とを造り上ぐることに依つて、兩方面から兩者を一致順應せしむることゝ爲す外に道は存せないのである。

現今の社會生活一般が、その政治に於ても經濟に於ても、甚しく行詰つて居るのは、掩ひ難い事實である。更に善美にして更に安慰なる社會生活創造の爲めに、一大革新の必要とせらるゝは論を俟たぬ。同時に又農村の行詰りの更に甚

しくして、一大解脫の方策の必要とせらるゝは、世の喧しく之を論じつゝある通りである。そして兩者共に不完全で不滿足の狀態にありとせば、兩者共に之を改革して、同一主義同一方針の下に、計畫的なる大事業を行ふことの必要、何人か之を否認し得ん。然かもその改造は有形方面と併せて思想方面に對して行はれ、思想を薰陶することに依て形を整へ、形を革むることに依て思想を馴治する方針の下に行はれねばならぬ。私は思想と有形生活とは同一原理の發現したるに外ならずと信ずる者である。從てその一元論的見地からして、社會改革は行はれねばならぬと信ずる。由來農村問題の如きに對しても、兎角その有形的方面のみ論ぜられて、思想方面の閑却さるゝ嫌あるを思ひ、玆に農民思想に關する一考察を公にする次第である。（完）

ドーズ報告書の世界政治的意義

エミール・レデラー

ヨーロッパが政治的社會的經濟的精神的の單一體として存在しなくなつてからこの方、正に十年の月日が流れた。この十年に於いてヨーロッパ外の文明國殊にアジアの地位は大いに高まつた。今やヨーロッパがその單一體を再興しようとするに當つて、その世界的地位が根本的に變化してゐる事を發見すべく、從つて又全然新たなる政治的經濟的勢力の交錯を考慮に加ふる必要を見るのは言ふまでもないところであるが、一方ヨーロッパの構造それ自身も甚だしく弛緩して、『そもそもヨーロッパなるものが存在するや』と云つたやうな問題すら、起りかねまじき狀態である。今日、世人はロンドン會議の結果について甚だしく樂觀的意見をいだくやうであるが、なほ且つ此問題は依然として一個の問題たるを失はない。

今より十年前ヨーロッパの政府は外交的政治的一體系として一團となつて戰爭に參加した。世界戰爭とまでなつたヨーロッパ戰爭が、或は經濟的或は國家的乖離よりして『避くべからざるもの』であつたとすることは、あまりに大膽なる發明であり、畢竟軍人的外交官的集團の言草たるに過ぎない。あの開戰のときに際しては、どの國に於ても國民の氣分は極めて悲觀的にして、且つ懷疑的ですらあつた。多くの人々は、もう世界は亡びるのではないかと思ひ、又明日の

運命はとてもわからないと考へた。もとより新聞紙の調子を『擧國一致』に向けることには、大した困難はなかつたであらうが、大陸の首都に於て數千の青年子弟をして『敵を膺さんがために』と勇んで國難に赴かしむるためには、もう相當の努力が必要であつた。世界歴史の法廷に證明書として提出されるような輿論は、之を作り出すのは、そんなに六つかしいことではないが、今日になつては從來の假面は大分剝げて、苟くも物を見る眼のある者は、政治權力の爲に徒に弄ばれるヨーロッパの運命が如何に馬鹿らしきものであるかを感ぜざるを得ぬことであらう。

時代は變つた。戰爭の結果殊にベルサイユ條約の結果は、あまりに大きくなり過ぎて、ヨーロッパ政府の手におへなくなつた。打續く政治的不安、貨幣の不安定、將來の租税の負擔の不明は、資本の衰弱せる諸國に移動して行く事を妨げ、其の爲にヨーロッパの經濟生活は大に壓迫され、今日戰後六年にして、やうやく繼續すべき平和の基礎を探しまはらねばならぬやうな有樣である。だが此の基礎を探す政府も、ヨーロッパ國民中の重なる思潮も、――悲しくも――長き間の戰爭のプロパガンダに迷はされ、數年來の變態現象の爲に亂され、敵對國の國權的感情に挑まれて、一般的に思想が軍國的となり、從つて精神的政策と云つたやうな穩やかなる方法に對する信認を欠けるを以て、やゝもすれば理性の均衡を失ひ易く、とかく權力政策によつてその戰を決しやうなどと思ふのである。この點を最も雄辯に語つたものはロンドン會議の經過であつて、この際大いに理性に立ち返つたフランスも、尙ポアンカレーの政策に充分なる尊敬を拂はなければならなかつた、そしてそれがまた、ドイツに於ける國權的感情を刺戟せざるを得なかつた。政治的努力と激情との斯くの如き波瀾の中に一個の統一を求め得べくもないのは云ふまでもなく、從つてまたヨーロッパが自己の力によつて、一個の中間路を發見し得るやうには見えなかつたのである。故に今度の結果は、一に、アメリカの支持するやうな交渉の基礎が與へられたと云ふ事情、即ちウォールストリートが、ヨーロッパの統一、あらゆる政治問題の清算、

及び凡ての政治問題を經濟問題に還元することを望むだと云ふ事情に歸すべきものである。マクドナルドはヨーロッパの理性の代辯者として、この際、極めて巧に極めて力強く、ヨーロッパ政局の回轉期に際してこの新勢力を移入し――勞働と國際的金融資本とが合力して一の新政策を作り、これより先のヨーロッパの政治的問題を平和に論議することを得せしめるやうな基礎を作り上げたのは、とにかくエライと云つていゝが、この際、全體の上より見て興味あることは、アメリカが政治的實力の所有者としてゞはなく、經濟的インテレストの負擔者として政治的の一勢力となつて舞臺に出現して來たことである。アメリカはベルサイユ平和會議の舞臺から退いてより後、今もなほヨーロッパの政治に干與しやうとしないが、こんどは、經濟體として出現して來たのである。戰爭では解くことの出來なかつた世界經濟の障碍を除去しやうと云ふ政治問題が、今日、經濟的勢力の干渉によつて解決せられなければならないやうになつたと云ふ點に於てこのことはこと更に、意味深長である。

かう云ふ風に、政治的實力の代りに經濟的勢力が出現するやうになつて、ヨーロッパの形勢は全く一變した。その意味は、たゞ、從來政治上の問題とせられた問題が、之から經濟的インテレストの負擔者によつて解決せられるやうになると云ふだけではない。それは經濟的のインテレストが政治上より多く占領するやうになつたと云ふことたのである。然らばこの狀勢を作り出したものは果して如何なる力であらうか?。そしてまた、その內に內在する力が、ヨーロッパの將來に對して果して如何なる結果を齎すであらうか?。

主として政治を原因として起つた戰爭は、よく整つてゐた戰前の國際的經濟關係の基礎を見事に破碎してしまつた。戰前に於ては、ヨーロッパ、アメリカの文明的勢力範圍及びその植民地內にある私有財產は、政治的勢力の離合如何に關らず、安全なものと考へられてゐた。然るに戰爭中敵愾心が强くなり、双方の利益の衝突の範圍が擴大されるにつれ

て、交戰國は皆敵國の財産を沒收するの方針を取るやうになつた。イギリスを始めとして聯合諸國がこの交戰權を利用した所以のものは、蓋し、ドイツが債權國であつたがために外ならぬ。即ちドイツは全英國植民地、イギリス、フランス、ロシア、アメリカはもとより日本や支那に於ても可なり貴重なる物件を所有してゐた。そこでそれ等の國に於ける勢力ある經濟的インテレストは、これ等のドイツの物件を安値に獲得するのが彼等の利益だと考へたのであつた。

この經濟上の交戰權を行使したと云ふことは、當時、又はその後暫らくの間、直接の利害關係者にとつて甚だ有利のことのやうに見えたかも知れないが、今となつては、この政策が如何に短見であつたかを暴露するに至つた。なぜなら、それは世界的秩序の安定性に對する資本家連の信任を根本的に破壞したからである。今日、アメリカの資本家が、その政治がその國々に於て勝手の路を辿ると思はれるやうな外國に於て、物件を所有することに不安を感じ、恐怖をいだくのは、まさにこの故に外ならぬ。このやうな沒收政策、通過の膨脹、革命の可能一言にして云へば經濟的企業がとても算盤ではハヂキ出せない政治的變動に從屬せねばならぬと云ふこと、それがアメリカの資本をして、その放資をアメリカ大陸以外の地に向けしめざらんとするに至る原因なのである。アメリカの決定的參加によつてヨーロッパに出來上らうとする政治は今その付て蒔いたところの果實を收めねばならない、そしてそれを種蒔いた人に返さねばならない。まことに、世界の國民が、この歷史よりして何等かを學び得るならば、それは喜ぶべきことたるを失はない。

斯くの如くにして歐洲戰後のヨーロッパは、あたかも百年前のそれの如き地位にある。その時代國際的交易の對象となつたものは――リカルドの示すところに依れば――たゞ商品のみであつて、資本ではなかつた。その時代には資本を輸出すること、換言すれば、外國に對する要求としてそれをもつてゐると云ふやうなことをする人間はなかつたところが事情の必要は、今日資本をして再び全然『國家的』とならしめ、資本をしてその本國よりも危險の少い外國より外の地

へは決して出て行かせないのである。けれども本來國際的交易が單なる貨物の交易にのみ限らるゝと云ふこと、殊にはそれも關稅、通貨膨脹、其他色々のダンピング等の爲に可なりに制限されて居ると云ふことは、我々の世界經濟の根本組織と矛盾すると云はねばならない。こゝに於てか、資本輸出入の困難と世界經濟の長期的危機とは二者同一であるが如き形勢を呈せざるを得ない。而してこれぞウォール・ストリートが自ら手を下して料理すべきと見たその形勢であつたのである。

アメリカ合衆國は戰爭により最大の債權國となつた。戰爭前に於ては、アメリカはヨーロッパに巨額の負債を有つて居たが、今は反對にヨーロッパはアメリカに多額の支拂をなさねばならない。しかのみならず貿易上のバランスはそれでなくてもアメリカに有利である。アメリカがこの壓倒的なる債權關係を決濟する方法は、金を輸出するか、ヨーロッパに於て資本を所有するかの外にない。而も金の輸出には自から限度があり、また資本の輸出には上述の如き考慮すべき困難があるとするならば、アメリカは其の輸出貿易及びその外債償還の決濟に對して一種の不安をもつのは極めて當然と云はざるを得ない。

世界貿易上に於けるアメリカの占むる地位を數字的に考察する時は、此點がいよいよ明かとなる。即ち、千九百二十三年に於ける合衆國の貿易高は三億七千六百萬弗の輸出超過である、このことは、外國が合衆國に對する債務の元利を支拂の外に、又アメリカが外國に所有する資本の收益を受ける外に、ただ貿易上のバランスを決濟するだけに、外國が三億七千六百萬弗をアメリカに渡さねばならぬと云ふことを意味するのである。このアメリカの國債貸借上に於ける優勢は現はれて、千九百二十三年、金輸入二億九千四百萬弗の外に外國の有價證券(株券其他)の輸入四億二千七百萬弗となつて居る。何故にかくの如き巨額の外國證券が輸入せらるゝかと云ふに、アメリカの輸出超過が巨額となるに從

つて、外國は自然之を有價證券の形にて仕拂ふがために外ならない、そしてそれはアメリカにとつて或意味に於てまことに止むを得ざる方法である。蓋し、金による支拂は債務の一部分を蔽ふだけに止まり、しかもこの片務關係が永續すればするほどその部分が小さくならざるを得ないからである。それのみでない金による支拂を受けることはアメリカの經濟生活にとつて一個の當惑の種となる虞がある。なぜなればこの移入されたる異常の金を使用することは、直に通貨膨脹の原因とならざるを得ないからである。故にもしアメリカにしてその經濟を健全に維持しやうと思ふならば、益々多くヨーロッパの經濟に參與せざるを得ないのである。かくの如くにして、アメリカのヨーロッパ經濟への參與は、將來ます〳〵その程度を增さざるを得まいと考へられる。なぜなればこの國にしてヨーロッパに於いての資本所有を拒むならば、輸出をも制限するより外なく、その結果は終に農業的危機を齎らすに相違ないからである。乃ちアメリカの擇ぶべき道は、その傳統を固守するか（販路をアメリカ大陸及アジア諸國に擴張することにも、一見甚だしき困難がある）ヨーロッパを平和にするかにある、もし後者を採るとすればそこにはその資本の安全が確保され、その外國投資が更に發達する望みがある。されば、今日に於けるアメリカの決定的なる經濟的インテレストは、ヨーロッパ問題を解決することにある。曾てウヰルソンが平和會議に於て爲し能はざりしところのもの、それが今日ウオール・ストリートの干與によつて成就されなければならない。

アメリカがその經濟上の理由よりして、ほしいと思ふものが、更に新たなる歐洲戰爭ではなくしてむしろ平和であると云ふことは、今日のヨーロッパの狀勢に鑑みて、何人もそれを喜ぶに相違ない。ヨーロッパよりあらゆる權力政治を除き、あらゆる戰後の問題を經濟問題に還元せむとする努力に對して、吾々は大なる希望をもつことを得ない。從つてまた、徒にヨーロッパ流の神經過敏よりして偏にアメリカの干渉を排斥しやうとするのは誤謬たるに相違ない。なぜな

ればこのアメリカの干渉は出放題なる軍事的侵略の排斥を意味し、サアベルの支配の破滅、中央ヨーロッパに於ける參謀政治の排斥を意味するからである。即ちこのアメリカの政策が妨碍する方面は、疑もなくいゝことに相違なく、たゞ唯一の遺憾とすべきは、この決定が、歐洲諸國の發意に出でなかつたと云ふことである。それはとにかく、アメリカの賠償委員會に於ける代表者は、『賠償支拂管理官』と共に、ドイツに於いて、アメリカの資本の利益を充分に擁護するにつとめるであらう。かくの如くにしてヨーロッパの經濟政策及び『高等』政策には、新しい而も極めて重大なる一勢力が加はつたと云はねばならない。

これが世界の大局に興味ある一閃光を投ずるであらう。即ち、『高等』政策はその影をかくし、ヨーロッパの中心的實力はその發展を阻まれ、その領土的侵略主義はあまりに度に過ぎてゐたことを暴露し、今やまさに退却すべき時となつたことが明白となるであらう。無論非常に大いなる軍隊と外交機關とが今もなほ在るには相違ないがその實力は、千九百十四年と比べては、もう云ふに足らない。またかの軍國資本的權力體系は、大いに崩壞して、今複たその實力を試す勇氣もない。しかのみならず、この古き體系の發達を特別に援助して來た經濟的勢力、一言にして云へば、ヨーロッパの軍需工業は、今日となつてはもはや、世界の運命を決し得るほどに、有力ではない。狀勢かくの如きに際して、上述の形に於いてアメリカの債權者的資本が、ヨーロッパに出現することは、一見幸福と見える、而してそのインテレストは、戰爭ではなくして、平和であり、交戰國に對する疑問の貸金を累積することではなくして、外國を、その資本を、その工業を、その勞働者を、『平和的』に搾取することである。

斯くの如くにしてアメリカは、今日經濟的の世界支配を建設しやうとして居る。これが今の世に成立する『支配』の唯一の形であらう。何となれば『支配』なる社會學的型態は變化するからである。政治的膨脹と之の型態は農業的封建

的な初期資本主義の經濟組織の動的傾向の現はれであつたが、高度の資本主義時代に於ては、一方に於て斯くの如き膨脹に伴ふ危險が增すと同時に、他方に於ては、その收益が不安とならざるを得ない。そこで幾分でも安全なる世界經濟が有利であることを發見するやうになり、それがまた、經濟的大帝國存在の條件として必要のものともなるのである。然しながらかうなれば帝國主義的政策の目的物そのものも亦漸次になくならざるを得ない。民族自決權——從來ヨーロッパ諸國の目的物と認められて居たやうな國々の民族自決權と云ふのも、その根源は要するに、現實的なる政治的支配にいつまでも甘んじてゐない民族の獨立を欲する感情に外ならない。イギリスの領有地(ドミニオン)は、今日何を意味するか？あれでもまだ支配と云ふことが出來るであらうか？世界の最弱國たる支那を支配せむとしたヨーロッパ諸國の夢が、水泡に歸したのは何故であるか？かりに支配がなければならぬとしてもヨーロッパ國民に對する現實的支配と云ふやうなものが果して可能であらうか？十六七世紀が知つて居たやうなさう云ふ外國の支配が！これ等の點を比較考慮するに於て、吾々は一つのことを學ぶ、即ち工業化と云ふことが、ヨーロッパ諸國を自由にしたと云ふこと、換言すればそれが如何なる種類の外國の支配をも不可能としたと云ふこと。ただ農業國のみが支配されるのである。なぜならば土地の貴族階級を取り替へることはやさしいからである。これに反して工業國は他國がそれを制御することは出來ても、それを支配することは出來ない。しかも今日に於て唯一の可能にして有效なる制御の方法は、經濟的のそれであるが故に、吾々は、アメリカがドーズ報告書を採用せることを以て、アメリカがヨーロッパの政治に對して決定的なる役割を演ぜむとする決心をなしたるものと解するのである、何となればこの報告書の採用は、ヨーロッパの經濟問題の中樞の制御をアメリカが握ると云ふことを意味するからである。

しからばヨーロッパの「經濟的支配」とは何を意味するであらうか？アメリカの資本は、他の主權國に對して何を云

はうとするのか？特にこの場合制御とは何を意味するか？この時にあたつて吾々は、アメリカの資本が、ヨーロッパに來る以上は、そしてその來ることが許されるのは、それがヨーロッパの競爭者とならずその協力者となる場合に限らるべきであると云ふ聲を聞く・それは果して何を意味するか？

この反對論は前提の如何によつては極めて正當である。もし吾々にして、自由競爭の時代に住むならば、而して自由市場の作用が全世界に廣がつてゐると前提するならば、經濟的協力によつて利益を得るものは誰であるか——債權者であるか債務者であるかを定め難いであらう。蓋し自由競爭的資本主義經濟に於ては、その位置が自動的によくなるものは、消費者であるからである。けれども之に反して獨占的資本は常に消費者を支配する、そしてその本來の傾向に基き自發的、計畫的に利益を擇出することに——時としては生産制限に依り——專念するため、之によつて一般國民の所得及び收入を減少させることがある。換言すれば自由競爭のもとに於ては、經濟的自利は結局のところ消費者の利益を滿すけれども——獨占的資本主義は究極するところ、一切の個人の創意を滅ぼし、各人をして絶大なる一機械の從屬物たらしめなければ止まない。

一定の精神的な人格型は、一定の經驗的型態に對應する。自由競爭は、自由市民、有能なる企業家、獨立自尊の人物を、その社會的なる民業型態として存在することを可能ならしめた。初期資本主義は、封建時代の絆を打ち切つて、人類を解放せんと企て、たとへ全人類とは云ふことが出來なくても、少くともブルジョア階級を自由にした。然るに獨占的資本主義は、この出來上つた精神的な人格型を使ひ得ない。そこでこの主義はこの從來の型を破り、その代りに劃一的なる人間を作らうとする、即ちその必要とするものは、模型的な人間生活樣式の平凡にして、精神のあまりに突飛ならざる人間である。ゲーテのプロメトイスは、十八世紀のドイツが、まだ社會的に實現するほどにまで成熟してゐなか

つた當時のブルジョアの解放運動に、如何に感激したかを語るに足るものであるが、獨占的資本主義は、たゞにかくの如き意氣を知らないばかりでなく、もしそれを見つけるならば、それを滅ぼさなければならないとさへ考へるのである。この主義は、人間を定まつた一の型にあて嵌やうとする、なぜなれば、人間の精神的活力を失くすることに依つて、又彼等を常に滿足せる從順なる人間とすることに依つて、又彼等をして精神的社會的問題について考へさせないやうにすることに依つて、この主義は、それに必然にして避くべからざる內在的な反抗運動を阻止することを得るからである。

この故に、獨占的資本主義は、相互に相關聯せる二つの目的を持つて居る。そは先づ、一國の經濟的勢力を働かす爲にそれに對する支配力を持たなければならない。株式會社、カルテル、トラスト、事業と銀行との握手等の近代的なる事業形態は、この主義があらゆる主要なる生產方面に於ける勢力獲得の手段である。獨占的資本主義は、この手段を通じてその國の經濟力を利用し得るやうになると、それを通じて或は價格を高め、或はそれを低めもしくは少くとも或る程度まで市場の景氣の狀況を豫知するのである。かくして獨占的資本が、市場に於て優越なる地位を占めるやうになると、それは動的な急激に增加する生產力を支配するのだからして、譬ふれば一個の經濟的吸ひ揚げポンプを持つたのと變りがない、しかもこのポンプは封建時代の獨占的土地所有に比しては、より多く抽象的にしてより多く有效に而もより多く捕捉し難いものである。吾々はかういふ風に出來てゐる、經濟組織の好適例を南米及中米に見る。この場合かくの如き資本によつて國民が支配されてゐると云ふことは、反面から云へば國民がそれに耐え得ること、國民がそれに反抗し得ぬことを意味するものである。獨占資本が第二に目的とするものはこの精神的支配である。かくして表面上のデモクラシイーのもと、實際上は隱密の、從つてまた危險な專制主義が行はれ、極めて少數の支配者が、オリガルキーの實をあげるやうなことになるのである。

獨占的資本主義の制御權が、外國に及ぶ場合に於ては、その影響は更に廣汎なるものがある。即ち、それはただに經濟の方面や精神的生活を侵すのみならず、やがてそれは政治にも及むで行く。それはただにその國の經濟上の機關を操縱（マニプリール）するのみならず、——上述したところに依つてたやすく了解し得るが如く。——その國の政治にも參與するやうになるのである。今日アメリカが——即ちアメリカの金融資本が——八億金マルクを貸し、それの利子及び償還について出來るだけ充分の擔保を取つたと云ふことは明らかにアメリカがヨーロッパの政治に對して深刻なる影響を持つべきことを確保したものである。しかもこの貸付の金高はドイツ帝國の戰費わづかに十二日分を償ふに足る額に過ぎない、言葉をかへて他の例を以て云へば、アメリカのドイツに對する輸出超過は、千九百二十四年の第一四半季に於て三億金マルクに上るから、この貸付高は僅かに八ケ月の輸出超過に相當する額に過ぎない。況やもし此貸付の實行がドイツ又はヨーロッパに現金の引き渡しによつて實行されるものとするならば、それはアメリカにとつては何の犧牲をも意味しない、何となれば、聯邦準備局（フエデラル・リザーブ・ボールド）の金所有高は、あまりに巨額にして現にそれが使ひ切れないでゐるものだからである。こう云ふたやうな貸付の對價として、ヨーロッパの制御權が、アメリカに運ばれたのである、否、捧げられたのである！さうして政治體としてのアメリカではなく、アメリカの私的企業が私的利益の爲にこの制御權を行使するのである。——正に政治的權力の私經濟的權力への讓渡の尤なものと云つてゐゝ。それのみではない、この制御權が一度定まると、その經濟的機關を運轉させて行く必要上、アメリカは更に新しく安全なる投資をするやうになるであらう。かくしてアメリカの資本がヨーロッパに流れるの道は益開かるべくウオール・ストリートの努力が大きくなればなるほど、ヨーロッパの市場、物價、生產の方面、生產量、その他要するに經濟生活の脈搏に、すべてアメリカの資本の營利的要求に依つて動かされると云ふことゝならざるを得ない。もとよりこれ等の要求が常に必ずヨーロッパ國民のインテ

レストと衝突するものとは云へぬであらう。けれども、かうなれば、ヨーロッパ國民の經濟的自立、經濟的自決權從つてきた政治的自決權は、大いに制限されることは疑なかるべく、かうなればアメリカの獨占的資本主義が、その支配權を心理的にも確保せむが爲に、何をなすであらうか、多少の想像を加へて、吾々はこれを容易に描き出すことが出來る。

それにもかゝはらず、今日のヨーロッパにとつては、アメリカが差出して呉れる狹い丸木橋を渡るより外に道がない。けれども吾々はこの際今動き始めた制度に伴なふところの精神的危險なるものを充分によく自覺しなければならない。さうして、なるべくはその內部の獨立を保持し、場合によつては、アメリカの制御に反抗して、再びヨーロッパの獨立を企てなければならない。果してそれは、可能であらうか？そこにどう云ふ道があらうか？

原則的にこれを云へば、そこには二つの道がある。（一）資本主義的方法。この方法は、ヨーロッパがアメリカより得たところ及び將來得るであらうところの一切の債務の償還及び利拂に關して、ヨーロッパが漸次にそれを果すこと。資本經濟主義の機構、殊に工業資本のそれの下に於ては、債務國が（即ちヨーロッパ全體が）アメリカに對して、その貿易關係（直接間接の）を有利に回轉し得る場合に於てのみこのことは可能である。そしてこのことは同時に、アメリカが逆の貿易關係を有たねばならぬと云ふことである。アメリカは原料の生產地であり、その上にあらゆる種類の製品を外國に輸出する國である。如何にしてこの國の貿易關係が考へ得べき期間中に逆となり得るであらうか。戰前の世界經濟の貿易關係はヨーロッパは全體として債權國であり、アメリカはこれに反して債務國であり、これを基礎として世界經濟の大いさと種類とが決まつてゐた。しかるに今日の國際關係は戰前のそれと正反對になつたのにかゝはらずその商業關係はまだそれに應じてその形を變へるには至らない。その故にヨーロッパの債務を、正常なる經濟的の方法を以て償還し得るの望は、殆どないと云つていい、從つてまたこの方法によるヨーロッパがアメリカの制御を免れることも亦甚だ困難だと云つていい。

（二）次に第二の方法としては、ヨーロッパを社會的に立て直す方法がある。この場合、ロシアがヨーロッパの最大の

原料國として存することを忘れてはならない。またアジアことに印度及支那に於ける原料生産地の將來を考へるとき、吾々はヨーロッパは、いつまでも必ずアメリカの獨占的資本に引づられて居なければならないと定まつたものでないと考へざるを得ない。もとよりここに云ふところの結合は、決して政治的のそれではなく、經濟的社會的のものであつて最古の然して最大の大陸の內部的自立をその目的とするものでなければならない。が、とにかくこれがもし次の十年間の新自立運動、或る意味に於ての獨立運動ともなるならば、舊世界の諸國民は政治的方法によらず、一つの社會的なる新組織を建設することによつて、アメリカの金融資本の制御を免れ、且つまた更にそれよりは一層危險なる內部の『アメリカ化』を避ける道を發見することが出來るかも知れない。

アメリカの權力の表現としてのドーズ案が、ヨーロッパの新秩序の基礎たらむとする今日に於て、徒に遠き將來の運動を語るは、恐くはあまりに空想的であるとの譏をまぬかれまい。吾々はただ、ヨーロッパのアメリカ化と云ふことは吾々のヨーロッパばかりではなく全世界に對して、如何なる意味をもつかを考へて見たい。然る時に吾々はこの古き世界が、獨占的資本主義による機械化の攻勢に對してその自らの內的生命を防ぎ得むがために必要であらうところの勢力と衝動とを充分に感じ得べく、いつまでも若やかにして精力旺盛ならむことを希望せざるを得ない。而してヨーロッパの運命はこの點に於て、アジア國民のそれと結び付けられてゐると云ふ事實、あたかもこのときアジアに於ても新社會を作らうとの思想、即ち外國の資本より獨立しやうとの思想が一個の經濟的の運動としてではなく寧ろ一個の精神運動として、その地步を占めやうとしてゐると云ふ事實、吾々はこれをもヨーロッパの運命の將來に對する他の一つの希望と見ざるを得ない。それともまた、全世界はウオール・ストリートの軛のもとに屈し、全世界は一つの巨大なる機械と變じ、あらゆる內的生活を無視した空虛な化けもののやうな組織が出來上ると云ふのが――そこでは人間はたゞ生産するためにのみ消費せねばならぬと云ふのが――それがほんとに正しい說なのであらうか？

（完・一九二四・八）

軍制改革と財政整理

山川均

陸軍の「縮張」

□

第四十四議會には、尾崎行雄氏によつて軍備制限決議案なるものが提出せられたが、議會は大多數を以つて葬り去つた。しかし翌年の初には、國民黨は師團半減の主張を政策中に掲げ、四十五議會には、政國兩黨から提出された軍備縮少案が上程された。軍備の縮少、特に尨大な陸軍を縮少して國費の節減を計ることは、國民全體の要望であつて、若しこのまゝで進んだなら、陸軍は國民の怨府となるべき形勢になつたので、流石の陸軍當局者も不精々々に、十一年度には申譯ばかりの謂ゆる縮少を行ふた。しかしこの程度の經費節約では、ブルジョア政黨すらも滿足しなかつた。そこで第四十六議會に臨んだ當年の在野黨は、陸軍縮少の一項目をこの政策中に挿入することを忘れなかつた。即ち革新俱樂部は國民黨の政策を繼承して、『陸軍は師團半減を目標としてこれを整理縮少すること』を主張し、憲政會もまたその政綱のうちに、『陸軍軍備の整理縮少を期すべし』と云つて居る。

斯ように既成政黨が、つとめて觸れまいとしてゐた政界の暗礁たる陸軍に、よぎなく鋒先きを向けだしたのは、尨大な軍費の壓迫から一般民衆の生活を救ふことが、焦眉の急となつたばかりでなく、この要求を代表しないでは、商工階級の投票よりも集めることが六ケ敷くなつたほど、それほど國費の膨脹が、

日本の經濟界を壓迫するものとなつたからである。そして尨大な國費のうちの大部分の分け前を取つてゐるのは軍事費であつて、特に陸軍の經費に著しい削減が加へられない限り、著しい國費の節減は不可能だからである。

そこでいよ／＼加藤內閣の行政財政の整理緊縮が、喧ましい問題となつて來ると、さすがの軍閥も默つて居る譯にはゆかず、陸軍縮少の國民的要望に對抗するために、乃至は『善處』するために急ごしらへに案出したものが、このほどの巨頭會議で決定したといふ、四個師團減少案である。これに對しては、政友會は六師團の減少と在營年限の短縮を主張し、憲政會は七師團減少、年限短縮案を立て、革新俱樂部は、現想案としては師團半減在營一年說を取つてゐる。

□

これ等の諸案のうちで、いづれが最も合理であらうか。吾々には、これに對して精確な判斷を下すに足る智識がない。恐らく日本の國民は、軍閥の首腦者を除いては、一人といへどもこの問題に對する充分な智識を持つてゐる者はない。相當の調査機關を備へてゐる政黨にしても、固より充分な智識があるとは云はれない。現に軍閥者流は、政黨の縮少案を見て、實際の智識のないものとして嘲つてゐる。今日まで、陸軍は陸軍の陸軍であつて、嘗て國民の陸軍であつたことはない。陸軍は、國民とは全然切り離された一獨立國であつて、國民と陸軍との間は、軍事上の秘密と名づける絕緣體で繫がれてゐた。この獨立國の內部に何事が行はれてゐるかは、國民は少しも知ることが出來ぬ。そこで陸軍王國の內部については、色々の事柄が傳へられてゐる。中には到底、常識を以つては考へ得られぬような事柄さへも傳へられてゐる。國民には、固よりそれを信ずるだけの材料がない。けれども少くとも、それを信ぜぬだけの材料はない。そこで陸軍乃至は參謀本部といふことは、國民の目には、國民の智識の界限を越えた暗黑秘密の王國として映じてゐるのである。

勿論、軍事當局者は、國民の間に『軍事智識』を宣傳し普及することには極めて熱心である。けれども軍事當局者が宣傳し普及しようとするのは、軍事上の智識ではなくて、軍事上の無智識である。彼等は、國民には何時までも、軍事上の問題に付いて獨立の批判を下すことの出來る智識は與へないで、唯だ彼等の命令によつて、××××××となる方法と技術を教へようとする。今日に至るまで、軍備縮少意見の現はれたことはしばしばであるが、この度ごとに、彼等は現在の軍備に少しの變

更でもすれば、明日にも日本が欧國のために征服せらるゝかのやうなことを云つてゐる。彼等は二た口目には、これでは國防の責任が負へぬといふ。さういふ口の下から、國民の要望が高まつて來て、最早や今は進んで僅かなものを與へなければ　明日は止むを得ず多くのものを取られるといふ形勢であると　彼等は一分一厘の變更も出來なかつた筈の計畫から少々を縮少して國民の口を塞さぐことを躊躇せぬ。現に十一年度の小縮少もその通りであつて、當時の正札のにもあれだけの掛け値があつた。今度の四師團減少もその通りであつて、昨日までは四師團の四の字さへおくびにも出さず、四師團どころ二十一師團の一つが欠けても　日本の國が直ぐ様亡びるやうなことを云つてゐたものが、この上輿論の進展に任せておいたなら、一層不利な形勢に陥入るといふことが分ると、彼等は平氣で、正札から二割の値引きをする。軍閥は、曾て國民に對して誠實であつたことがない。そこで國民は、軍事當局者を信用したいのが山々でも國民には、彼等を信用する口實すらも與へられては居らぬ。

斯ように一方には、軍事上國防上の眞實の智識が一般國民から奪はれてたゞ軍閥と參謀本部で『極秘』といふ刻印を捺して保存され、、軍閥幽外の丸腰の陸軍大臣が出來て王國を覗いて見ることすら罷り成らぬといふほど厳重にしてある以上は、そして他方には、軍閥の國防上の必要のことには、常に掛け値があるといふ信仰を、事實によつて國民の頭に叩き込んでゐる以上は、軍備の縮少に對する色々の案に對しても、門外は軍事上國防上の見地から精確な批判を試みやうとすることは　無用であるばかりでなく　絶對に不可能なことである。國民は不可能なことに頭を消耗する必要はない。國費の一大緊縮が、國民の生活に取つて絶對の必要であり　そして軍事費の縮少が　國費の緊縮に取つて絶對に必要である以上は、國民は唯だ、より多く軍事費を削減する案が、最もよく國民の必要を充たすべき案であると見做せばない。即ち六師團減少案は、四師團減少案よりも、より多く國民的必要に應じた案であり、七師團減少案は、六師團減少案よりも、少なくと一個師團だけ、より多く國民的必要に適した案であり　師團半減論は、更により多く國民的必要を代表した案であると見做せばよいのである。そこで陸軍の謂ゆる四個師團減少案は、他の問題は暫らくおき、正直に四個師團を減少する案であると假定して見ても　他の三案に比して、國民的必要をより多く無視した案であると云つてよい。

□

ところが陸軍の謂ゆる四個師團減少なるものは、決して師團

の正直な減少ではないのである。巨頭會議できまつた成案なるものによると、四個師團の廢止 幼年學校二校の廢止、其の他に依つて年額一千八百萬圓を節約する。この點に於いては、慥かに、陸軍の縮少である。けれどもこの一千八百萬圓を以つて、航空隊三個大隊の増設、氣球隊の擴張、高射砲隊、タンク隊の新設、自働者學校の新設、その他新兵器の充實にあてるといふ。この點に於いては疑ひもなく陸軍の擴張である。そこでこの案は、陸軍の縮少ではなくて縮張であるが、つゞめと云ふと矢張り軍縮といふことになる。

そこで現在の二十一師團から、四個師團を廢止してよいか惡るいか、また新設隊と新兵器とは必要欠くべからざるものであるか、どうかと云ふことは、吾々には何より専門的の判斷を下す智識がない。たゞ何人にも明らかなことは、不用な師團を廢止するといふことゝ、必要な新設備をするといふことゝは、別個の問題だと云ふことである。

陸軍の成案によると、この二つの事柄は離すべからざるものであつて、四個師團の廢止その他によつて節約する一千八百萬圓は、決して他の用途に當てることを許るさない。そこで陸軍の成案によれば、四個師團の廢止は、新設隊と新兵器充實の經費を捻出するための廢止であるが、さうなくば、四個師團の廢止によつて浮いて來る一千八百萬圓を使ふがための新設備であるといふことになる。若し陸軍は陸軍のための陸軍であつて、國民の陸軍でないといふ立場からの主張としては、如何にも尤も千萬である。陸軍の經費は、陸軍王國といふ獨立國の財政問題であるとしたならば、その經費をどの方面で切り詰めて、どの方面で遣はうとも、自由勝手である。しかし一國の財政の一部としては、これは決して許るさるべきことでない。國防上の見地から、二十一個師團中の四個師團が不用であるといふことゝ、日本の軍備は新設備によつて充實する必要があるといふことゝは、別個の事柄であつて、充實の必要があるとないとに拘らず、不用なものは不用である。一千八百萬圓が新兵器の充實に當てられるか、それとも國債の整理に當てられるかは、不用な四個師團を廢止する條件とはならぬ。陸軍は今日まで、少くとも四個師團一千八百萬圓だけは、不用の經費を要求してゐたのであるから、先づ四個師團の廢止によつて、一千八百萬圓を吐き出すべきである。その上で國防上の見地から眞實に必要欠くべからざるものがあるならば、唯だに一千八百萬圓と云はず、三千六百萬圓でも、七千二百萬圓でも、新しい要求を提出すべきである。この要求が國民によつて認容せられるかせられぬかは、一千八百萬圓の不用の經費を節約する條件となるべきものでは

ない。減師によつて吐出した金を、右から左に兵器の充實に振り向けようといふ考へは、時計を倹約して指環を買はうとするのと同じであつて、陸軍の經費が國家の經費の一部であることを忘れて、陸軍の一私事——乃至は陸國王國の獨立した財政——と考へてゐる根本の間違ひである。

四個師團廢止によつて吐き出した一千八百萬圓を、新兵器の充實でそのまゝ懷中しようといふ陸軍の名案は、少くとも師團の減少といふ點では、軍備の縮張といふ形を備へてゐるから、如何にも國民の要望に從つたかの如く見えて、その實、國民には何物をも與へまいとするものである。軍閥は陸軍の縮張によつて、何物をも失はぬばかりでなく、一度吐き出した一千八百萬圓と共にもつと大きな或る物を呑み込まうとする。

□

四個師團廢止の結果は、二千名の將校が不用になる。そこで陸軍の縮少から生ずる國防上の欠陷を補ふために、中學以上の學校に於ける軍事教育を擴張し、各學校に教官として、これ等の廢物將校を現役のまゝで配置しようといふのである。いづれの政黨でも、減師若くは在營年限の短縮は、國民の軍事教育によつて補へと云つてゐる。軍閥はこの機會を見逃がすものではない。彼等は陸軍縮少の要求に對しては、風袋ばかりで中味のない『縮張』をつかませておき、軍國主義的精神を以つて國民を支配するこの機會だけは、確實に正味をつかまうとするのである。

國民の軍事教育とは、一般國民に、軍事と軍政とに對して獨立した批判の力を與へること——特に日本の陸軍と軍閥とが何をなしつゝあるかに就いて、獨立した批判の力を與へること——を意味するなら、吾々は最も熱心な軍事教育論者である。けれども軍閥が國民に與へて呉れやうといふ軍事教育とは、前にも云つたやうに、軍事上の智識ではなくて、國民がたゞ盲目に、彼等の軍國主義に支配せられる精神狀態を作り出そうとするものである。これは軍事智識ではなくて、國民を軍事的に無知識にすることを意味してゐる。斯ような意味で、學校の軍事教育がこの上擴張せられるのは、學校の兵營化に外ならぬ。況んやその教育は、文部省乃至は學校の雇傭する教官ではなくて、陸軍から俸給を貰つてゐる現役の將校である。その結果は、兵營を學校に延長することに外ならぬ。これ等の將校は、師團の廢止と共に當然馘首せらるべき人である。否な四個師團廢止といふことのうちには、當然、二千名の將校の馘首といふことが含まれてゐる。四萬の兵士と共に二千の將校を廢止することが、

即ち四個師團の廢止である。二千の將校を廢止せぬ四個師團を廢止は一種の僞瞞である。現に國費節減の主要な一泉源と認められてゐる俸給及び人件費のうちの、主要な部分を占めてゐるのは陸軍である。師團は減少して師團あつての將校には元通りの俸給を拂ふといふに至つては、あいた口が塞がらぬと評するの外はない。

況んやこの陸軍飼ひ殺しの將校を全國千三百の學校に配置するに至つては、學校を文字通りに兵營にするものである。若し全國の教育者が一齊に起つて之に反對せぬならば、日本には教育の尊いことを理解した一人の教育者も無いと云つてよい。

教育の效果の上から云つても、現に今日の學生は、學課の過重な負擔のために壓迫されて、甚しく自然の發展を妨げられてゐる。尙ほこの上に『兵式體操に新生面を開い』たり、兵營流の教練の重荷を負はせられるのは、教育を破壞し、青年を殺すものである。在學年限短縮の要求は、主として一國の生産力の無益な浪費を節約するためである。四個師團四萬の壯丁の生産力を解放する代りに、百五十萬の次代の相續者の教育を破壞することは、その代價と犧牲とが餘りに大である。

□

陸軍の成案と與黨三派の成案との間には、少くとも師團減少の點に於ても、二三個師團の相異がある。ブルジア政黨とその政府とが、如何にして軍閥を征服するか、さもなくば、如何にしして國民を欺瞞した軍閥に降伏するかは今後の見ものであそして加藤內閣が財政の整理緊縮に、どの程度の成功を收めるかも、要するにこの一事によつて定すると云つてよい。(九、五)

財政整理と軍制改革

武藤山治

英國勞働黨の首領で現英國內閣の首相たるマクドナルド氏は過去の政治は政治の政治であつた。今日の政治は經濟の政治と

なつた將來の政治は道德の政治とならねばならぬと言つて居る經濟と道德是れ離るべからざるものであつて個人の行ひも當國の政治も共に此方に進むことは誠に望ましきことである

顧みて吾國の現狀を見るに吾國の政治は未だ經濟の政治ともなつて居らぬ依然として政治の政治である英國の過去が吾國の現在である。吾國の政治が長い間政治の政治となつて經濟の政治とならなかつたのは吾國の政治が士同樣の精神に依りて支配され政治が專門政治屋の手に放任され吾國民に自治精神なく經濟觀念がないため眞の憲法政治が行はれず當國の政治が國民の經濟に重きを置かずして政治本位に料理され來つた爲である。

然るに此度の世界大戰爭は吾國の政治を政治本位より經濟本位、道德本位に改むることを余儀なくすることとなつた戰時戰後に涉る吾政府の放漫なる財政策之れに動かされて浪費を事とせる國民、整理すべきに整理を怠りたる吾財界は昨年の震災に依り・當切の立直しを急速に行ふべく自然の力に强要さるるに至つた然して最も整理を要するものは政府の財政である民間にては個人なれば夫々懷合の都合があり銀行會社なれば損益計算があつてソウ無法に不整理に流るることを許さぬが政府の財政は此點に於て議會さゑ同意すれば可なり極端な程度まで放漫なる財政策が採れるのである。現内閣は多年民間にありて財政の整理緊縮を唱え來りたる憲政會が主力であり又大藏當局者は憲政會の領袖濱口氏が當れることとて財政整理を徹底的に斷行すべきを聲明し今や各方面に亘り緊縮の實を擧ぐべく努力して居る其結果自然に吾財政の要部を占むる軍備の縮少が問題となつて居る吾國の財政を整理緊縮しようとすれば陸軍の費用を減ずることは止むを得ぬことであつて此點に於ては陸軍當局者も異存ないようである唯異なることは陸軍當局者は節約したる金額を以て軍備の立直しに使用せんとするに對し財政當局者は之を財政整理に充當せんとするにあるようである與黨三派は或者は師團半減或者は七個師團或者は六個師團減少を唱へ何にか商賣の掛引のような感じを與へて居る斯くの如きは私の見るところで從來吾陸海軍大臣を軍人に限りたる弊害の現われる例であると思ふ即ち陸海軍大臣が軍人に局限せられて居つた爲め軍人以外の者に軍政に關する實際上の智識經驗がないから外部より垣間見て種々の批評を加へることとなるからである故に第一に改むる必要は此經驗に徴しても陸海軍大臣は文官を以て爲し得る制度にすることである吾國防の爲めから言ふても軍政に直接經驗なき者から彼是れ干渉されるより文官を大臣として能く了解させて置くが利益である殊に私が以前より陸海軍大臣と雖文官大臣を以てすべしと主張するは大臣の仕事は寧ろ專門の軍人以外

の者が之れが經營に當る方が適任であるからであるからである陸海軍省の仕事は軍人專門の部分の仕事が多いには相違ないが軍人以外の俗務に通ずるものの手腕を要する仕事は更に多い軍需品に關することと其他專門以外の人に委かせる方が能率の良い仕事は可なりある此度の世界大戰爭に於て彼有名なるキチナー元帥すら陸軍大臣の職に當り其失敗を暴露するに至りたるは全く軍務と一概に言ふても軍務中に軍人以外の者が之れに當るべき仕事が多い例證である當時英國では直ちに軍需省を設けロイド・ジョージが大臣となつて軍容は一變したと報ぜられて居る

故に私は以前より陸海軍大臣文官制度を主張するものなるが今回陸軍師團減少問題より各政黨の主張余りに弱き根據の上に立てるを見一層此問題を政黨政治家に開放するの可なるを思ふ次第である俗陸軍に對する私の意見は實際上の智識經驗なき私として具體的の考案を述べがたきも私は實業家であるから政黨政治家中或者の陸軍に對する無造作なる議論には組することは出來ぬか局外者にして總括的に斯く推理する今日吾國は國費の上に大節約を要する故に軍備の費用も節約せねばならぬことは明らかであるが如何なる程度まで之を節約すべきかに就いては何如に軍備縮少反對論者も容認せねばならぬ一つの限度があると思ふ之れは此度の世界大戰爭の經驗を基礎にして實戰の場合我國が我國の國力を以つてして幾何の軍隊を外國に出動し得るか幾年間之を支え得るかである日清日露戰爭當時の費用は今日全く標準ともならぬ位尠いもので吾國がサイベリヤに、出兵した費用でも八億圓を要した故に如何に多くの兵數を常備するも吾國力は之を動かす力が乏しい國內の秩序を維持するに必要なる軍備としては極めて少數にて足りる是等の點に就て數字的に調査研究したらば吾軍備の豈定限度は明らかに示され得るもので吾國力相應の軍備に止める覺悟をすれば可なり斷乎たる縮少を行ひ得るものかと思ふ然しながら茲に私の一言したいのは吾國民が近年軍人に對する尊敬の念の從前の如くならぬことである是れは吾國民精神の上に最も國民の反省を望まねばならぬ軍人は一朝事有れば生命を賭して國家の爲め參するものなれば、過去に於ける軍閥に對する反感抔を移して軍人全體に對してはならぬ吾々國民は軍人に向つて常に滿腔の敬意を表すことを怠つてはならぬ吾國民は軍人を國家の財政の許す範圍に於て優遇することを怠つてはならぬ私は吾財政整理の爲め軍備縮少の必要を認むるものであるが其程度方法に就ては遺憾ながら具體的の意見を公けにする智識經驗がない唯私が實務家の立場から考ふれば現在の師團を當分其儘存置して其兵數を或師團は四分の三減或師團は半減、或師團は三分の一減と言ふ風に減少し現在

の將校丈は現在の儘の數を維持し置くが或師團を全廢したり一部の將校を休職にしたりするよりは軍備縮少の上に最も便利適切なる處置かと思ふに過ぎぬ今日我國は戰時戰後に亘る失政に加るに大震災を蒙り經濟國難に直面し居る此秋に當り吾國民は從來の行掛りや小なる感情に捕はるべき時でない官民相協力して、此經濟國難を救ひ吾國將來の繁榮を期すべきである。

財政整理と軍備縮少

神戸正雄

甲 久しく御無沙汰して相濟みません。今日は久し振りに何かお話を伺はせて戴きたいですが、御都合は如何でしやうか。

乙 や久し振りだな。久しく御無沙汰せられて仕合せ、度々尋ねられては迷惑至極、久しく御無沙汰せられたことを、寧ろ私の方から感謝します。今日何か話せといふが、何か望みの題でもおありですか。

甲 題ですか。今日問題となつて居る財政整理と軍備縮少とについてのお話が願へませんでしやうか。

乙 そりや易いやうで六づかしい問題だ。其れなら私に聞きに來るよりか、何處かの大政治家にでも往つて聞いた方が適當だなあ。

甲 でも、まあ政治家でない貴下の御意見の方が却つて公平で良からうと思ひまして、承りに參りました。

乙 併し私のやうな讀書人の意見は空論に過ぎませんよ。

甲 空論でも良いから、承りたう存じます。

乙 いや空論どころか、むしろ出鱈目ですが良いですか。

甲 それで結構ですから聞かして下さい。

乙 さういつて逃げやうと思つたが、逃げられないのかね。困りましたな。實は私も、我國で目下財政の大整理緊縮の必要なことを認めて、既に意見を發表して居りますから、財政整理のことは其方に譲りまして、今日は特に其と軍備縮少との關係だけお話して見たいとは思ひますが、さて其が六づかし

いので困りましたなあ

甲　では私の方から伺ひますが、今日の我邦の財政整理の根據又は出發點は何處にありませうか。

乙　其はつまり財政を國力相應にしなくてならぬといふ所にあるのさ

甲　然らば軍備の縮少も國力不相應の軍備を國力相應の處まで引下げやうといふのですか。

乙　軍備縮少には國力相應のものへといふこともあるが、其だけではない。現在の軍備は國防上の責任を完うするのにも過大なるものであるから、其を緊縮せよといふこともある。併し恰も其處に意見の相違が甚しいので解決難になつて居るのです。軍備は他の國務とは違つて、必要とあらば時として國力不相應のものをも持つことが許さるる。日本の軍備といふても特に其陸軍が此場合に當篏まるか何うかが問題であつて其について人の考が區々であります

甲　併し陸軍も近頃は其自身に目覺めて、四師團縮少を切り出したほどだから、思ひ切つて切詰めたら、政友會の六師團減憲政會の七師團減までは行けさうなものである。いや革新派の半減でも出來さうに思はれます。其を四師團減少に止めたのは、畢竟、航空機費等を產み出す程度にしたので、つまり陸軍に財政緊縮のお伴をするだけの誠意のない爲めである。陸軍は之によつて見ても陸軍の勢力を張ることだけを日常と爲し、國防の絶對必要限度如何などは眼中にないことが明かであります。日本の外界を見渡しても、海軍には强敵を控へて居りますが、陸軍には格別の假想敵たるべきものがありません。半減でも良さゝうだし、四分一にまでの減少でも良ささうに思はれます。

乙　成程、さう出來たら財政は助かります絢にさうしたいものです。私も希望としては其に一致します。尤も之で四分一にまで減少しつ放つといふことは危險ですから、航空機費其他時勢に伴ふ若干新費用の增加は已むを得まいし、國民教育に於ける特別の施設なども考慮して良いが、兎に角、師團の四分三減まで行けたら行きたいものですなあ。

甲　時に陸軍を全廢したら何んなものですか。

乙　其も一の理想さ。併し陸軍全廢の時は海軍全廢の時でなければならぬ。其はまだ全く一の理想で、とても近いうちには物になになりませんなあ。

甲　併し、理想を說かないで、現實とか實際とかに則することになると、師團四分三削減なども、とても近く物になりさうなものではなさそうです。だから改革の事業は高い理想から

出て、勇氣を持て行はなくては駄目であらうと思ひます。

乙　成程、さういはれて見れば其通りです。それにつけても陸軍當局者も現實に捉はれ、自家の勢力のみを思はず、むしろ自家の勢力を投げ出して、陸軍の陸軍でなくて、國民の陸軍たる局面を轉廻させるの明を持つことになり得るでしやうか。陸軍の今度の態度を見ると、さうなつて居ないのが遺憾であります。

甲　議論は何とでもいへるとして、實際は何うなりましやうか。

乙　其はきつと、陸軍の師團減少　落着くでしやう。憲政會、政友會、革新倶樂部其々　出して居る看板は何れも羊頭ですが、さて彼等が結局、國民に與ふるものは必ずしも其看板通りのものでなさそうですから、そして政友本黨とて御多分に漏れのやうですから、落着く先は大抵極まつて居ります。

甲　さうなると、財政緊縮も誇大廣告の類となりましやうか。

乙　御説の通りでしやう。いや、私の話と同樣、龍頭蛇尾になりませう。人がさう初めから思つたら、失望もしますまい。

軍備縮小と財政整理

田川大吉郎

一、

何と言つても、複雜な問題で、第一に自分の頭の整理が、一寸付き兼ます。

先づ現内閣は、陸軍四ケ師團の縮少に決定し、海軍は、何もしないことにして考へませう、それが、私の、話の發足點になる。

新聞に與黨三派が、いろ〳〵運動して居るやう傳へられますが、私は、その究極する所を、陸軍案に讓歩し、追從する者と見ます、西洋では、黨派政治は、節約に反對するものと云ふ、何故なら、自黨内閣の、缺點、短所をあばくことは、

黨全體に不利益だから、沈默し、盲從する、各派の自黨內閣に對する態度は、常に然だから、改革は行はれない、のみならず、整理に反對し、節約に反抗する者は概して自派の代議士であると、私は、今日の與黨三派の先進者を、この種の通弊の人とは思ひません。そこに挺身して立つ、正直の人、勇敢の人もあらるる、と思ひますが、全體として、今日の黨情は、陸軍案贊成に歸着するだらうど、豫察して居るのであります。

二、

陸軍四ヶ師團を縮小すれば、いくらの費用を殘せるかと言へば、一師團四百六十五萬圓づゝ、合計して一千八百六十萬圓になるといふこと、切り上げて、之を二千萬圓として、話しませう。これだけ削れば、財產整理ができますか、これが第一の問題になります。

或は、この額は、政府の整理し、節約せんとして居る、豫定額の何割に當り、何分になりますかと、これが問題になりませう。

尤も、この數字に就ては、更に注意を要します。

一、陸軍省は軍備充實の目的から、この案を立てたので、行政整理、財政整理の目的から、この案を立てたので無し。

二、故に、行政整理、財政整理の目的に應ずる節減は、別にする、それは、幾何でやり得るか、まだ分らない、分らないけれども、幾何かは必ず節約する。

三、前項の約二千萬圓は、前項の目的のため、陸軍の他の費途に轉用せねばならぬ。

以上の陸軍の言ひ分は、相當理由があります、故に、前項の二千萬圓を以て、直に、陸軍の整理、節約の費用と見ることはできません、私は、たゞ、世論に從つて、これを大凡の標準と見るのであります。

そこで、二千萬圓の節約を標準に見て、それで、現內閣の財政整理の目的が達せられますか、國民の現內閣に期待した、財政整理の希望が達せられますか、更に、濱口藏相の所謂、財政々策、立て換の目的、主張が達せられますか、と、問ひ、更に、陸海軍費の外に、幾何の削減せらるゝ見込がありますかとも、問ひ、私は、これを合せて考査して見て、見込は無い、そんな事では、財政整理の目的は、到底達せられまいと答へます。

故に陸軍の費用を、右の二千萬圓程度、或は三千萬圓程度に止まるとするなら、所謂財政整理は失敗でなる、それは到底評判倒れ、聲ばかり、口先ばかり、骨折損の草臥れ儲け、到頭、

何ものをも克ち得なかつたといふことになる。私は、かく龍頭蛇尾に、終りはしないかと、窃に心配して居る者もあります。

三、

無論、濱口藏相は、財政を立て直して居られる、その方針で誠實に努力せらるゝでせう、然しながら、陸軍が、四ケ師團以上の縮小に同意しない時には、遂にどうなりますか。

私は、この問答を　大凡かうならうと思ふてゐます。

一、陸軍は　今日の國體關係に照し、四ケ師團以上は減らせまい　これが最大の縮小である。これ以上に減らされては、日本國防上の安全に對する責任が負れない。

陸軍が、かく主張されるに對し、大藏省は

二、陸軍で、そんな餘計な金を費はれては困る。もつと減じて貰ひたい、でないと、日本の財政は保てない。

と、應酬せらるゝでせう、それ故、

三、財政の工面のつく限り、陸軍の希望にも應ずる、大藏省の方針であるが、然し乍ら過大であるとの主張に對し、陸軍は然らば、その財政負擔力は、幾何であるか、その確乎なる範圍、標準を承りたい、それに由つて、按排しよう、と、出るでせう。

これは、陸軍の必すさう言ふ所であらうと私は信じます、そこで、財政負擔力である、大藏省は、それを、いろ〱の材で示明さるゝであらうか、その結局は水掛け論、或は、それに終らないにしても、私は、大藏省には、左の弱點があると信じます。

四、十三年度實行豫算は、十三億八千五百萬圓に決定した、これは濱口藏省の査定せられた方針である、

五、日本の國力は、衰へたりといへど、日一日發展しつゝある、明年を以て、今年より劣ると想察するは當らない、今年十五億八千萬圓でいゝ、それだけは、もてると判斷した濱口藏相は、明年以後の歳計も、それでいゝ、それだけは徴收してもいゝと認めらるゝであらう、

六、然らば、その程度に於て、陸軍を維持し、又海軍を維持したい、それに何の不都合がある。

と、陸軍側に、かく主張せらる不利がありませう、私は、濱口藏相は、既に此の不利な陣地に陷つて居られると思ひます、それだけ、私は、軍備縮小もできず、財政整理もできず、この希望は、今日の所、今日までの掛け聲に終る虞れがあらうと眺めてゐます、

四、

以上の論旨さ、こゝで集約して、更に高調すれば、

一、陸軍を思ひ切つて縮小なさい、それでも、本當の財政整理は、まだできますまい、それにも足りない、虞れがある、

二、海軍にも、手を着けない、華盛頓會議の標準があるといふけれど、それは、最高の標準を示したもの、實際の按排は、各國の自由、それ以下でもいゝ、假に、必ずその最高の標準を維持するとしても、昨年決定した補助艦の三億六千萬圓の如きは、その以後の擴張である、且、そのに前の八々艦隊の計畫に屬する、行かゝりの分も殘つて居るそれらを整理されよ

三、陸海軍が、その程度に、その決心でかゝつたら、財政整理は、できよう、そこまで進まなければ、できない、

四、そこまで進まない整理は、先般來唱へられた財政整理の目的かその方針に一致しない

五、現内閣か果して陸軍四ケ師團の縮小に讓歩し　それに甘んじて、海軍には　手を着けない態度　方針なら　たとへ多少は手を着けても、大膽なる決意、計畫をとらない方針なら、財政整理は到底できない、

そこで、日本は　その思ひ切つた陸海軍の縮小、財政の整理をすることが、果して必要であるか、避くべからざる必要であるか、財政上、どうしても然しなければならないかといふこと、又してもそれが押し詰めた議論の焦點になります

與黨三派の先進者は、之に就て、どの程度までの觀察、考案を抱いて居られるかを知りません、私一人としては、その必要がある、然しなければならない、然しなければ、日本の財政は救はれない、と、思ふて居ります、

但、この事は、容易に行はれません、今日の與黨三派の決心、態度で行はれようかと問はるれば、私は、殘念ながら否と答へます、私は、その決心か、まだ／＼徹底してゐないと感じます、世に第二維新の叫びが聞へる、私は、これらの主張を貫徹するために、此の聲に應じ、此の叫びを聞きます、つまり、これは第二維新の事業である。第二維新に合し、第二維新に處する決心、覺悟でなければ、できないと思ひます、

第一維新は、砲聲、銃砲の間にできました、第二維新には、その必要は無い、第二維新は、議會の間にできる、議會か、その唯一の、轉換舞臺にならなければならないと存じます、

五、

然らば、その第二維新の錚塞には、陸海軍に、幾何の軍費を配分するかといふ問題になります、

私は、現實の行がかりを基礎として答へます、總豫算の約二割を與へたい、その程度に止め、その以上に超へしめないやうにしたいと、それが大凡の標準である。

私は、國際聯盟を無視しません、これは重要の國際機關であり、將來に發達の可能性があると認めて居ります、軍備縮小若くは戰鬪防止の方策が、そこで如何樣に論定せられ、實際協調せらるゝに至るか分りません、その場合は、その場合の事、私は、それを打算の外に置き、各國の現狀を基礎として、かく標準を假想します、

總豫算の二割を陸海軍に分配するとして、その總豫算を、幾何の高に定むるか、これも現在を略ぼ標準としてありますが、私は、十億程度に據へたいと思ひます、きつちり十億圓と申しません、國家の事、さう切り詰めては申されません、十億乃至十一億と申して置ませう、これだけの財政ならもてる、らくでは有るまいが、苦しむほどでも無い、この程度を標準としたいと思ひます、

さすれば、陸海軍費は、二億圓、乃至二億二三千萬圓である、現在は四億三千余萬圓、さつと、それを半減にする、それが、私の希望であります、

山本内閣の日、井上藏相は、日本の財政は、十億圓程度が至當であらうと謂はれたことがある、私の持論は、財政通なる同氏の意見に符合した譯で、從つて、多少なり、それに勵まされた次第です、

軍事費を、豫算總額の二割以下に制限する方針は、各國とも、之を今日に行つて居る、英にしても、略ぼ然なつて居ます、故に、これは、獨り日本の不利益となるのではありません、但、向ふのは總豫算が大いから同じ二割でも、その高が多くなり、日本のは少くなる、これは餘儀ない事だと思ひます、

實際の戰爭に備へる必要もあるが、その備へるよりも、その起るを防ぐ、積極的の方向に、力を入れるがいゝ、即ち國際聯盟に力を入れ、その思想、勢力の發達を圖るがいゝと思ひます、

軍事の競爭も世界的である、思想の競爭も世界的であらねばならない、對敵準備の資源のみ、支那を見て、露國を見米國を見て、思想開拓の資源には、一切世界を排除することは、偏見であり、固陋であり時代をくれたと思ひます、

六、

尚、以上の趣旨を明かに、して置ませう、その必要を感じます、

一、以上のやうに豫算總額を十億乃至十一億に減らせば、各省とも經費が減ります、時代一新のために、これは必要である、

二、さり乍ら、陸海軍を二割程度、に減ずれば、その結果、各省の分は殖へます、

三、故に、私の希望する所は、各省の分を増して、陸海軍の分を減らすといふことになる、現狀は陸海軍が、多く取込み過ぎて、各省が、必要の仕事も爲し得ないで居るからといふことになる、

四、各省とも一樣に減らせといふなら、陸海軍も承認されよう、陸海軍を減らして、他の各省を増すといふのには、陸海軍は、つむりを曲げられよう、

そこに問題がある、第二維新に出るにあらざれば、その革新ができないと思はるゝのであります、

ここで、此の主張から、振り返つて、今日の整理を見る、

い、陸軍は四ケ師團、二千萬圓を整理するけれど、その資金は全部、擴張計畫にあてるといふ、

その方針の、承認せらるべきで無いことは、勿論である、

ろ、右は整理のためで無い、整理のためには、別に二千萬圓前後を減らすとする、

その金高の不足なことも勿論である、陸軍には多くを減らして、他の各省には、少く減らし、以てその均衡を示準せんとする、その趣意に副はないこと甚しい

は、濱口藏相、若し以上の、陸軍の方針を承認さるるか、濱口藏相は、未だ第二維新の趣旨、目的を解して居られない

その所謂財政立て直しの方針は徹底しない、折角の整理、節約は、國民期待に反る

と、いふことになるのであります、そこで議論は、

甲、財政力を、十億十一億の程度に限ること、

は、果して正確か、その場合

乙、陸海軍事費をその二割程度に制限すること

は果して正確か、といふことになる、正確にして正當なら萬難を排しても行はねばならない、私はこの標準に對する、批判上の研究、論定を待つもの、これが今日の緊要なる先決問題と思ふものであります、

七、

尚、一言を添へます。今日の國際關係を案じて、兵數を決める、陸軍では、それを陸軍の事と思ふて居らるゝのであります

が、私は、それを政治家の事、政治家の責任にしたいと思ふのであります、今日の國際關係はどうなりつゝ、どり變うつゝ、外交上の形勢はどうならんとしつゝ、日本はそれにどう處すればいゝか、それを決定するのは、たしかに政治家の仕事であります、

陸海軍の先達は、この趣旨、この責任範圍の區分を、明瞭に認めねばなりません。支那に對してどうする、かうするなど、それを決するは、政治家の事、軍人の事でありません、軍人中、若し政治家あり、政治的にその經綸、計畫を立てんとせらるゝなら、軍籍を脫して盡力せらるゝが宜しい、それならば宜しいが、軍人としては分を超へて居る、心外にも、今日までの軍人には、其の人が無かつたとは謂へません。

故に私の主張は、前般に述べた、軍政偏重の政治をやめて、各省均等の政治を立てたい、その方針に、軍人の同意を求め、同時、軍人の思想、活動を、嚴に軍事的範圍に限り、その政治圏内に屬するものを、一切廢除し、制限することに、その諒解を求め、以て國務の統一を圖り、政治の眞正なる發達を見たいといふのであります。

この趣意の衝突に於て、軍人政治家西鄕は、政治家大久保に衝突しました。西鄕は大久保よりも、大い、立派な人物であつたか知れません。然しながら政治家大久保が、軍國主義者西鄕に勝つたことは、當時の日本のため、祝すべきことでありました。今日の日本には、その西鄕は居ない筈、西鄕流の思想、勢力は、衰へて居る筈であります、然しながら未だ衰へず、或點に於ては、西鄕の志を、西鄕以上に成して、大久保に匹敵する政治家なく、大久保の當時の主張は、反つて蹂躙せられて居る傾向があります、これを可けないと申すのである、即ち大久保以上の政治家を要する、今日は西鄕を要しないけれど、大久保を要する。その大久保のやうな、もつと進步した理解のある政治家を起し、以て軍事の一點に力を注いだ第一維新を、今度は政治、經濟、勸業の方面に向け換へる、それを第二維新と申すのであります。

今日の軍備縮小論、財政整理論は、口は兎もあれ、この思想この主張に、未だ充分觸接してゐないやうに思はれます。

軍備縮少に對する經濟觀

堀江歸一

日本には舊幕時代は兎に角、明治時代に爲つてから、日本人の獨創に依つて、行はれた改革があるかどうか、甚だ疑はしく、多くは外國の模倣をしたり、外國の强要に依つて、爲されたりしたものである。本來開國と云ふことが日本人の意思でなく、外國の要求に基いたものであるとすれば、其後の事々物々、盡く外國に押される形と爲つたのは、已むを得ない所であるかも知れないが、今日に及んでも、依然として此舊套を脫するを得ない。工場法の制定とか、勞働時間の短縮とか、勞働組合の公認とか云ふようなことは、日本人多數の意思でないと共に、爲政者の最も喜ばない所であるが、外國との關係殊に國際聯盟に加入し、國際勞働協約を遵奉することの關係から、日本としては心ならずも勞働法制に向つゝ、一歩づゝ進まなければならないことゝ爲つたし、軍備擴張とか、軍備充實とか云ふことに至つては、軍人や國權論者などの間に於ては、殆ど狂的信仰を持つて居る所であつて、政府亦從來斯る感情を利用して、軍備に途方もない擴張を企て、又此擴張を行はなければ、國家の存亡に關すると云ふが如き危言を唱へたこともあつたようであつた。然るに一旦米國の主唱に據つて、華聖頓會議が開かれ、海軍に關して、主力艦の制限、海軍休日の實行が議題と爲るや、昨日まで熱心に海軍擴張を必要とした日本は他國と共に、海軍制限の議に贊成し、現に最近國民の膏血を搾取して、建造した巨艦を自ら爆沈しつゝあるの狀である。今や陸軍縮小の問題が師團廢止の形を以つて、現はれ來つた。始め世間には師團半減の說すらあり、斯る程度の軍備縮小を實行してこそ、經濟上に、財政上に意義を生ずるものと考へられた。斯くて此說に對しては、加藤内閣を支持し、擁護する政黨の側に於ても、相當の贊成者を見たのであるが、陸軍當局者は四箇師團の廢止を以つて陸軍縮小の許される最小限度であるとし、此以上に陸軍が縮小されたならば、國防の安全を保ち難いと云ひ、又斯の如く一方に師團を廢止しても、其廢止に依つて、節約され

た經費は兵器の改良に投じ、以つて戰鬪力の維持を謀らなければならないと云ふことを固く主張するのである。

然るに此際吾人に取つて、最も興味ある問題を以て、目されるは、歐米諸國の間に軍備縮小を實行する運動が企てられ、往年の海軍縮小の行はれたと同一の精神を陸軍にも適用しようとする機運の動きつゝあることである。此會議は如何なる形に於て開催され、又如何なる決議を成立せしめるか、今日の處では、何とも豫想するを得ないが、假に往年の華盛頓會議と同じく、列國の現に有する陸軍々備に對し、或る比率を定めて、縮小を行ふことゝ爲つたならば、我國の陸軍は如何なる影響を蒙るであらうか。今回四師團程度の縮小の加へられたことが、右の比率の内に、計算されて、尚ほ其上に若干の縮小を加へられるものであるか、四師團の縮小の行はれた以後の陸軍力に對して、列國に加へられると同一の比率の縮少が行はれるものであるか。後者の場合に於ては勿論、前者の場合に於ても、我國の國防は陸軍當局者が危險を惹起すといふ程度に陷らざるを得ない。其陷ることを回避する爲めに、彼等は今日頻に四個師團以上の軍備縮小を峻拒しつゝあるのであつて、爲めに國民の輿論に反抗することを辭さないのである。然らば今後國際會議の決議に於て、我國の軍備に對して、今日陸軍當局者が認めて最小限度とするより以上の制限の加へられんとする場合には、當局者は其我國の國防を危うするの虞れあることを理由として、之を峻拒しなければならず、之を峻拒する以上は、國際上の關係に於て、我國獨り孤立の地位を守らざる可からざるに至る。此事は我國政府の甚だしく恐れる所であつて、從來幾多の國際會議に臨んで、其決議を遵奉するに就て、他に後れざるの態度に出でたのも、列國との協調を維持するの念に制された故であつた。今、軍備縮小に關する決議の成立した場合に、其我國に不可なるの理由を以つて、能く之を排斥するを得るかどうか一個の疑問であり、之を排斥しなかつたならば、四個師團以上の軍備縮小を以つて、國防を危うすると云ふ今日の主張は要するに國民を欺くの辭たるに過ぎないのである。

或は此場合に當局者が取つて以つて唯一の活路とする所は今日は軍備縮小に關する國際間の協定が成立しないから、四個師團以上の縮小は不可能であるが、右の協定の成立した曉には、關係諸國の軍備に對して、盡く或る比率を以つて、縮小の加へられる次第であるから、我國に於て特に他國に對する均衡を脅かされる虞れを持たない、旣に四個師團以上の縮小を不可能としたものが、後に之を可能とする所以であるとするの一事に外ならない。然しながら今回の軍備縮小會議に於て、問題の眼目

と爲るのは、歐洲諸國の軍備に制限を加へて、歐洲の平和を確保しようとするの一事である。歐洲諸國の軍備縮小は東洋の平和に多少の關係はあるとしても、固より間接のものに過ぎない。歐洲に於ける軍備の狀況が我國陸軍に加へられる縮小の程度を決定するに、若干の交渉を持つであらうか。我國としては支那に於ける利權の擁護、幷に平和の保障、露西亞の極東に於ける軍事的勢力を標準として、軍備の伸縮を律する標準とす可きである。而して今日の如く露西亞が陸軍國として、全然無力と爲り、過激派の下に、再起の望みなき場合に、露國を目標として、我國が何時までも形大なる陸軍力を擁することの當らないのは論を俟たない。唯國際間の關係たる、紛糾錯綜して、近き將來すら、遂に豫測するを得ない、國際聯盟の無力なる今日の狀態を以つてして、國際間に平和の維持を望むのは、望む者の無理であるとすれば、平時の際に、軍備を縮小するとしても、有事の際に、必要に應じて、膨張するを得る機能を持たしめることが必要と爲る。即ち兵役の期間を短縮するなり、國民に軍事的教練を施すなり、何れも其手段を以つて、目される。國民の知能の一般に發達した今日に於て、特に平時から職業的軍人を多數に收容しなければならないと云ふ道理はないのである。陸軍が四個師團の廢止に依つて、歲計上に生ずる餘裕を一般財政の用に供せず、直に兵器改良の經費に充當しようとするのは、陸軍と國家財政との關係を疎隔し、陸軍あつて、國家財政あるを知らざる僻見を暴露したものに外ならない。國防と雖も、國家職務の一種である以上は、他の國家職務に對して、特に超越した地位を占めるものでないと同時に、財政上の狀況に依つて、其經費の支辨される金額、其支辨される時期に輕重緩急の別あることを以つて、當然とする。四個師團の廢止に依つて、經費を節約することは、財政上の必要に出でたものであつて、陸軍に此程度の節約を實行せしめることに關聯して、他の諸官廳にも其れ〳〵相當の節約を實現せしめ、斯くて我國財政を近年の窮地から救ひ出して、年來不良と爲れる信用を上進せしめようとするのである。而して財政緊縮に伴つて、第一に必要とされる所は我國歲計に於て、最も多額の國費を費消しつゝある陸軍に向つて、斧鉞を加へるのが當然であつて、我國の假想敵國として、陸軍の力を用ゆ可き對手の消滅し、纔に支那大陸に於ける我國の利益を擁護する程度の武力を必要とする今日こそ、大に陸軍を縮小して、財政緊縮の實を擧げることを以つて、當然の處理としなければならない。

　斯の如く我國に於て、陸軍が一般財政に對しては勿論、一般政治に對して、獨立の地歩を占め、財政緊縮の必要視される今

◇國民觀念

『女性改造』十月號の偉觀（定價七十錢 送料貳錢）

忠義孝道の新らしき觀念

現代の青年、學生の思想が、舊式の忠義孝道の觀念にて滿足せず、其父兄、教員等近代思想界の歸趨に迷ふてなす所を知らざる狀態である。本誌は全國民に此新

大杉君の五人の子供……安成二郎

世界婦人欄

婦人內閣の末路……千葉龜雄

男裝化其他の趣異……大橋房子

英米の婦人界……市川房枝

野上彌生子論

」の解釋を見よ◇

始終ある女流作家……神近市子

（婦人生理學講座）男の體と女の體……永井潛

單純生活の根本問題……カアペンタア 宇佐美文藏譯

おばけと子供

妖怪談と子供……三宅やす子

子どもの頃とおばけ……岡田八千代

戀と詩の生……矢野峰人

創作

春遠からじ……木村毅譯

鼻……廣津和郎

女の客……小林信

避暑地……本多たけ

選後に……島崎藤村

わが生ひ立ち……佐藤春夫

懸賞論文募集

最近に最も興味を感じた話

最近にあなた方が社會的にでも、政治的にでも、たゞし私人としてでも感ぜられた感想の趣味ある小話を最も藝術的に認めて下さい。

期間 十月十五日締切ります。當選者には薄謝として十圓乃至十五圓呈上、四百字詰十枚以下のこと。十二月號の「女性改造」にて發表します

日に於て、必ずしも此事に專念せず、師團廢止に依つて節約した經費は之を兵器改良に充當しようとする考へを懷くのは、要するに陸軍全體を擧げて、軍閥支配下に居らしめるの結果である。軍令は軍事的敎養ある專門軍人をして之を掌らしめなければならないが、軍政は一般行政上に知識經驗を有する政治家行政官をして之に當らしめるのが當然であつて、斯の如くしてこそ、軍政は一般政治と同一の步調を保つし、又ビジネスの見地に於て、處理されるを得るのである。然るに我國に於ては、軍政と軍令とを擧げて、之を專門軍人殊に現役軍人の手に託する。斯くて一般政治の一部分に過ぎざる軍政其ものが軍閥の支配下に服するのであつて、大臣次官を始め軍政關係の吏僚盡く現役軍人であり、之に加ふるに其背後には軍事參議官又は元帥の如き有力なる團體が控へて居るのみならず、軍部の大臣は多く斯る團體の推薦に依つて任命され、時に內閣更迭の際にも、軍部大臣に限つて、政治上の責任を負はず、其儘次の內閣に留任する場合すら、頗る多しとされる。軍部大臣が國務大臣中、特殊の地位を占め、加ふるに軍閥全體に擁護され、其代表者として內閣に居り、自ら軍閥の利益を發揚す可き任務を有するやに見られるのも、亦必ずしも不思議とするに足らない。軍部大臣は軍閥を代表して、何事を爲さんとするか。彼等は軍閥に屬する一員として、軍備を擴張し、充實し、以つて軍閥其ものゝ繁昌を謀るに熱心であるが、熱心其度を過ぎて、却つて軍閥を繁昌せしめる爲めに、一般國力を疲弊せしめることなきを得るであらうか。獨逸が歐洲戰爭前强大なる陸軍を擁し、此陸軍の力を以つてしたならば、他に何等恐る可きものなきの概を示した。而して歐洲戰爭中に於ても、獨逸陸軍に對する信頼は、我國の軍人社會を通じて、依然として其盛なるを認めたのである。然も獨逸は陸軍を擴張し、充實するに當つて、一方に有事の際に、如何にして此陸軍を完全に運用するを得べきかの用意に就て、缺ける所なきを得なかつた。即ち戰時に於ける國民食糧の供給、工業原料品の供給の如き、極めて不安の狀態に居ることを免かれなかつたし、國民の所有する財產を流動して、軍事費に對する財源を調達する點に於ても、缺ける所多しとされた。外面から覗へば、軍事に、經濟に、將た又財政に盡く完備する所あるやに覗はれた獨逸に於て、軍備と經濟との間に並進を缺き、後者に於ける衰頽から、國を擧げて、戰鬪の實力なきに至らしめた。斯の如きは軍閥者流の軍事に專心して、他を顧さる僻見の然らしめたと云はなければならない。日本に於て、軍閥の跋扈する狀態は之に類するものなしとするを得るであらうか。假想敵國の陸軍力の旺盛であつた時代に、之を目標として擴張した軍事上の勢力を假想敵國の消滅した後に於ても、

尙ほ維持しようとする、之を維持するに就て、一國經濟上の盛衰國民生活の消長の如きは之を眼中に置かないと云ふのは、何たる間違であらうか。一國に於ける國民生活が豐富に行はれて居り、彼等の經營する事業に價値あり、彼等の所有する財產亦大なる數量に上つて玆に其れ等を保護するに軍備の必要を生ずる。山村枯れ水郭衰へ、鷄犬の聲稀れなる位に、悲慘なる狀態に國を陷らしめて、何の軍備の必用ありとす可きであるか、軍事以外に何ものをも知らざる軍閥者流に軍政を託するの危險は實に玆に在りとしなければならない。

或は說を爲す者の內には、日本が從來國際間に於て、雄を稱するを得たのは、一に軍事上の勢力に依る、軍事を除いて、日本に何の誇る可きものがあらうか、然るに今や日本自ら此誇りを棄てゝ、何の立國に安んずるを得るであらうか。米國に於て排斥され、支那に於て侮られ、國家の體面を保ち難きに至る、日本に取つて、尊ぶ可きものは軍備に若かないと云ふ。然しながら日本の軍備が斯く世界に誇るに足る發達を爲したのは、畢竟維新以來武を以て、國の基礎とし、軍國主義を徹底することを謀つた結果に外ならない。現に今日中央財政に於ける經費の約半額が陸海軍に投ぜられて居つたことを知つたならば、我國に於て何故に軍事が獨り發達して、學藝、產業其他、文事に關する諸種の事項を凌駕するに至つた所以を解すると共に、若しも軍事に關する經費を削減して、斯くて生じた餘裕を他の方面に供へたならば、我國に於ける文事上の發達亦軍事に劣らざるを得ることは、明白の事實であると考へられる。我國民を以つて、軍事以外に發揮す可き何等の長所を有せず、特性を備へざるものであるとすれば、論者の說、亦已むを得ざるが如くであるが、從來軍國主義の下に、我國の長所特性を壓迫して、其發達せざるを說き、軍備を縮小すれば、我國民をして誇る可き何ものをも有せざるに至らしめるとするが如き、我國民自ら蔑視するの甚だしきものと云はなければならない

或は軍隊が將校兵卒に訓練を與へ、規律を重んじ、上長の命令を奉ずる習慣を養うことを擧げ、斯る訓練幷に習慣の經濟的效果を以つて、軍備と經濟とを兩立せしめようとする試みもあるが、軍隊の規律や、訓練は盡く強制に出でるのであつて、人の自由意思に基かない、規律の嚴と爲り、訓練の密を加へるに隨つて、人の創造的能力を傷け、融通性を害するの甚だしきは勿論であつて、所謂軍人上りが融通の利かざる人物として、社會に珍重せられざる所以である。殊に人の青春時代に現役兵として二年間の兵役に就かしめる共上に、豫備後備の期間を通じて、幾多の義務に服せしめるが如き、自ら生產的勞働の供給を減じ、勞働移動の自由を妨げるものであつて、如何なる方面から之を觀察しても、經濟上から軍備を正當視するの理由を生じない、經濟的見地から判斷すれば、軍備は國防の安全の許す最小限度に限定されることを得策とする、國防の範圍を超へて、他國に領土的侵略を加へる意の下に、軍備を伴するが如き、國家存立の道德に於て、許されざる所である。

無産政黨組織上の諸問題

青野季吉

一、

組合運動の新形勢や、普選實施の接近などが主なる動機となつて、無産階級の政治運動の必要といふことが、この一二年來、解放運動の前衛分子の間に、次第に唱導されて來た。そしてそれの具體化したものが、勞働總同盟の宣言や、近くは「政治研究會」の設立等である。しかし勞働總同盟の宣言にしても、漠然としたものであり、その後別に具體的な方策の樹てられた模様もなく、「政治研究會」にしても、無産政黨組織の準備行動に役立たせやうとするのが、その設立の趣旨であつて、まだ組織の具體的階級に進んだと云ふわけのものでない。そんなことで、無産階級の政治運動の必要は唱導されてゐるが、現實政黨組織の具體的階段に進んだと云ふわけのものでない。そんなことで、無産階級の政治運動の組織には、まだよほど時日があり、その間に曲折があらうと云ふのが、今日の形勢である。

かう言ふやゝこしい經路をとり、一見衆議紛々と云つた外見を執るについては、いろんな理由があると思ふ。第一、政治運動必要が唱導されてゐるとは言つても、解放運動の前衛分子の間に、政治運動の意義について、當面の任務について、徹底した理論的一致があるかと云ふに、さうでない。また／＼整理されてよい部分、徹底されてより部分が、多分に殘されてゐる。第二、それから引いて、ブルジョア議會に對する考へ方にも、容易に相容れぬ見解が、兩立してゐる。例へば「議會利用」と云ふ言葉が表はすやうな、議會策を持つてゐる者もあれば、全然英國流の議會主義を把持してゐる者も、相當にあると言つた風である。然もそれらがよく徹底するまで討議されずに、いい加減なところで妥協的な、蹠を合せたと言ふ風になつてゐる。第三、解放運動の前衛分子の間にこそ、政治運動の必要が漸次認められて來てゐるが、たとへば一般の組合員にそれが行亘つてゐるかと言ふに、必らずしもさうでない。その結果、前衛分

子は組合大衆と離れて行動することは許されぬ關係から、一方には、政黨組織まで進んだ形勢があるかと思へば、一方には政治運動の必要を徹底させる當面の必要に迫られてゐると云ふ部分もある。そして、その方の關係から、前衛分子の意見の纏りもつかない。第四、政治運動、政黨組織となれば、尠くとも局部的であることは出來ないが、日本の解放運動の本陣たる組合運動に──思想團隊は日本では一つも發達してゐないから──從來の行がかりや何かで總括的結合の下地が出來てゐない。それかと云つて、例へば總同盟なら總同盟が、單獨に政黨を組織出來るかと言ふに、それだけの實力がないと言ふのが、實狀である。それであるから、政黨組織までには、何等かの手段で總括的結合の基礎をつくらねばならぬが、それが容易でない。ざつと數へても、そう云ふいろんな事情で、現實政黨組織の段取へは容易に進行しない。「政治研究會」は一つには、それらの事情から來る政黨組織の遲延にたいして、一つの刺戟を與へ、組織の形勢を「促進」させやうと計つたものであり、その意味では多少の功はあるには相違ないが、まだどれほど促進し得たかは疑問である。

しかも無產階級の政黨の樹立が、かゝるやゝこしい道行を執り 幾度も形勢が進んでは、再び退くやうなまどろこしさがあつても、それは決して憂ふるに足らない。無產階級の政黨は、有產階級の政黨のやうに、代議士が寄合つて政黨組織の宣言を揭げればそれで足りるといふ性質のものでないし、組合運動の一補助機關として一つの組織を有つと言つた簡單な性質のものではない。階級解放運動の結合的勢力として、新社會建設の政治的基礎となる使命を帶びたものであるのだから その土臺を据へるには相當の準備がいるのは當然である。或る人々には、政黨組織を過度にあせつてゐる氣持がないではないが、如上の理由から組織の時期を早めることは、あまり問題ではないと私は信じてゐる。

二、

無產階級政黨組織にあつての、當面の問題は、何と言つてもその構成要素の問題であらう。詰り、どういふ要素と結合して、政黨を組織するか、どういふ要素にまで索引力を有する政黨たらしめるかと云ふ問題である。これの決定次第によつて、政黨の內容か多少變つて來るし、それに準じて、綱領や組織に變化の來るのは勿論である。

今日、日本の無產階級運動の本陣は 何と云つても組合、即ち組織されたる勞動者であるから、その組織されたる勞働者だ

けを以つて政黨を組織し、その綱領と立場とによつて、他の要素を漸次に引附ければよいと云ふ考へ方も爲し得る。また實際、その考へでゐた人もあつたやうであるが、組織された勞働者の數における微少と云ふ點から、その考へは餘り尊重されなくなつてゐるやうに思はれる。實際、組織されたる勞働者が、都市においても農村に於ても、大多數を占めてゐるまでに組合が發達して居り、その組合が何等かのの形態に於いて、全國的な聯結を持つてゐる點まで進んで居れば、この考へも相當に有力な考へではある。しかし事態はそうでないのだから仕方がない。

無產階級政黨と云ふからには、飽までも無產階級の階級黨でなければならぬのは勿論である。ところで一口に無產階級と云つても、(一)組織されたる農村及び都市の組合勞働者、(二)未だ組織されざる農村及び都市の無產者の二つの群に分けられ、後者が非常に多數を占めてゐる。無產階級政黨が、この二つの群に根抵をおかなければならぬのは言ふまでもない。然し無產階級政黨が、有力に發展し得る上からも、解放運動の必要の上からも、(三)俸給生活者、下級官吏、技術者等の所謂新中間階級、及び(四)小商人　小自作農、諸種の自由勞働者等の舊中間階級の一定部分を黨の構成分子とするか、乃至はそれに牽引力ある政黨とするかの問題も、また問題となり得る。

日本の特殊事情として、この第三、第四の社會層が、かなりに濃密であることは、數字を示して證明するまでもないことである。そしてこの第三、第四の社會層が、解放運動の進展に重大な關係のあることは明白である。尤も第三と第四とでは自ら異る。第三は解放運動になくてはならぬ一要素であり、それが變質して新社會の組織基礎の一部をなすものであるが、したがつてその意味からでも、無產者政黨はこの要素を包容しなければならぬ積極的必要を持つてはゐるが、第四に於てはそうでない。この層のイデオロギーは全然、ブルジョアのそれであつて、何とも仕方のない層である。平生多分に反動的氣分を傳統してゐるのもこの層であれば、危機的な形勢に際して、ファシズムに結成するのもこの層である。しかしこの層が次第に貧化しつゝあることも事實であれば、その經濟的必要に於て、或部分が無產階級と結付くことは可能であり、無產階級としては、階級鬪爭の必要上、尠くともこの層をして、中立を保たしめることは絕對に必要である。その意味に於て、無產階級の政黨は、何等かの組織をもつてこの層の一部をとり込み全層に向つて牽引力を働かす必要がある。

しかしそれは多少抽象的に言つた話で、日本で無産政黨を組織する場合に、第一、第二を結合することを第一階段とし、第三、第四は漸次及ぼしても差支へないとも言へるし、最初からその準備を組織の中に蓄ふ可きだとも言へる。こゝで「議會利用」の政治行動の主張と、「議會主義」のそれとで、意見が別れると思ふ。後者で言へば數に於ける多數は差詰め問題でないが、前者で言へば階級鬪爭の勢力結成が眼目であるから、數に於ける多數が差詰め望ましい。

私一個の見解としては、日本に於ける無産階級政黨の使命の中には、政治上に或程度の自由主義的の基礎を與へるといふ過渡的必要も含まれて居ると信ずるし、その意味では小ブルジョアの一定部分と要求の合致する點があると思ふし、解放運動の意義の社會的侵潤の上からも、日本に於ける當面の無産階級政黨は、第四までへの索引力のあるものにすることが、望ましいと思つてゐる。

然しいづれにしても政黨の基礎たるものは、飽までも第一、第二及び第三の或部分であつて、その生長に應じて、政黨の內部に辯證的な變化の來るのは當然であり、そうあらなければならない。

三、

無産階級政黨の問題としては、組織の問題が次に重大である。ブルジョア政黨には特に組織と名付く可きものはない。選擧に際して、或は利を以て、或は緣を以ての、一時的の狩集めと、平生の個人勢力的地盤とが、その凡てゞある。然し無産階級政黨は、新社會の組織を引受く可き歷史的使命を持つ階級の政治的組織であるから、この政黨は何等かの組織を基礎としたものでなければならない。しかもその基礎的組織は、ブルジョア政治に代る無産階級政治の基礎的組織とならねばならぬ約束を持つてゐる。そこがブルジョア政黨と無産階級政黨との、根本的に面目を異にする所以の一つである。無産階級政黨の組織が重大な問題とされるのはそのためである。

現在唱導されてゐる意見に、團隊單位說と、個人單位說と、中庸說とがある。いづれもまだ明確な提說の形をとつて居らず、したがつて決定的にその得失を定め難い。その輪廓だけ云へば、團體として組織されたものを以つて、即ち、勞働組合、小作組合、思想團體を以つて、構成の單位として、單獨の個人の加盟は許さぬと云ふのが、團體單位說であり、個人々々を以つて構成の單位とし、既成の團體はこれを政黨の單位としない

と云ふのが個人單位説であり、團隊の加入をも認め、個人の加入をも許し、その間に調和の道を見出さうと云ふのが中庸説である。この三つの説にはそれ〴〵得失があり、政黨の適用と、その意義との上に、大きな影響を及ぼすものであるから、十分に考究されなければならぬ。

極く大體から見ても、團體單位説には政黨樹立の比較的容易、純潔性を保ち得る可能、組合運動との有機的策動の便等の利得があるが、前記第二、第三、第四へ手を差しのべる上の不便、一般より離れて小さく固まるを虞れ、組合運動と交錯して、組合に好ましからぬ結果の及ぶやうなことがないかと云ふ不安等の缺陷がある。個人單位説には、團體單位説の缺陷を滿たす點の利得は、多分にあるが、その代り黨樹立の比較的困難や、純潔性の保てぬ點や、組合運動と有機的策動を缺く虞れ等に於て、團體單位説の利得を失つてゐる。中庸説は、その得失を補つてよいやうではあるが、その調和の組織はよほど微妙なものでなければならぬし、實際黨の運用上、それが活潑に働くかは疑問で、結局、團體單位と同樣になりはせぬかと云ふ不安がある。

これを決定するものは、組合運動の現狀と、政治運動の當面の任務と、その將來に於ける使命との考察である。

私はこれに對してまだ決定的な意見を持つて居らぬ。しかし、日本に於ける組合運動及び思想團體運動がまだ發達しておらぬこと、既成組合の組合としての結合が必らずしも容易でないこと、當面の任務としては前記第四までの要素に手を差延べる必要のあること、經濟行動の機能のために組織されたる組合、乃至は思想的一致のために組織されたる團體は、そのまゝでは政治的機能を果すための基礎組織とはなり得ない等の理由から、團體單位説には首肯し得ない點が多い。中庸説に對しては、まだその調和の組織上の見當がつかないので、何とも批判は出來ないが、政治的基本組織の必要といふ點からは、中庸説に最初から可成り不滿がある。それで自然、個人單位説に傾いて來るわけであるが、いまこれを積極的に主張し得るほど、準備が熟してゐない。

いつたい組合の組織には、勿論地域的單位の要素も含まれてゐるが、それは主たる要素ではなく、次第にそれを失つて行く傾向がある。それは經濟行動の機能を果す上の必要であり、その他に經濟行動の組織としての、多くの特質がある。然るに政治行動の組織には、地域的單位の要素が當然多く含まれねばならず、その意味に於いて組合の組織と少なくとも繫がりが一致せず、且つ政治行動の組織としての獨特の特質がある。そこ

で、經濟行動の機能を果す組合組織とは別に、政治行動の機能を果し、無産階級政治の地域的中心にまで發展するところの、政黨の基礎的組織が必要である。これを具體的に言へば、政黨の構成要素が組織勞働者、非組織勞働者、新中間階級、舊下層中間階級であるならば、それらを結び合はした地域的組織が、政黨の基礎組織とならねばならぬ。かう云ふ必要からすれば、無産政黨の加盟單位は、絶對に個人として、これを政黨が地域的に編制するを以つて便とすると、私には考へられる。

しかもこの中にあつて、最も活動し、その組織の統制力となるものは、自然「最も階級的目醒めた」分子であるから、それの存在するところでは組織勞働者がその中軸となることは想像し得られる。然し無産階級の政治運動は、部門こそ異にして居れ、同じく解放運動の一陣營であるから、組合運動と有機的關係を持たねばならぬのは言ふまでもなく、しかも日本に於ては、或程度まで既に組合運動が進展してゐるのであるから、組合としての政治的要求が、強く政黨に反映されねばならぬのは勿論である。そこで政黨と組合との間に、組合員が個人として政黨に加盟してゐると云ふ聯絡以外に、他等かの機關を設けて聯絡を濃厚にするといふのも、確かに一法であらうと思ふ。

四、

更に無産階級政黨の問題で大切なのは、綱領の問題である。既成政黨は綱領によつて率いて行くと云ふよりも、直接の利と欺瞞とによつて民衆を率いて行くが、無産階級の政黨は飽までも綱領によつて、民衆を率いて行かねばならぬ。その意味に於て綱領に作があつてはならず、その內容は新社會への移渡を目的とするものであり、且つ當面の政治的、經濟的の必要に對して、積極的な光りを投げるものでなければならぬ。既成の政黨が平素綱領の普及徹底を求めないに反し、無産者政黨は、常にこの普及と徹底を期せねばならぬ。ここに無産階級の政治運動が、有産者のそれと異る根本的なものゝ一つがある。

そこで無産者政黨の綱領の性質は左様なものとして、當面に掲ぐ可き綱領は如何。これに樹立さるゝ政黨の內容にもよることであるが、空想的でなく實行可能なものであり、その實行が當面の要求を組織化したものでなければ人心に訴へない、さうでなければ政黨の綱領として無意味なものであるから、或程度までは、構成分子の問題と離れても、「無産階級の立場に立つた」綱領は考へ得らるゝと思ふ。

いま大摑みに私の考を述べて見ると、綱領の經濟部分に於

て、有機的一致を保たうとすれば、だいぶ乃至は全然、社會主義的なものとならねばなるまい。今日の日本の資本經濟は最早や、改更の餘地なきまでに行詰つてゐるから、それに對して新らたな經濟案を樹てるとすれば、社會主義的方法よりはないと云はれてゐるが、私もそれに同感の一人である。然しその政治的部分に於ては、よほど自由主義的な要素が入らうと思ふ。即ち今日日本の半封建的、官僚的政治に對して、民主的の政治を要求することが、その主たる部分とならねばならぬと思ふ。これを全解放運動から云へば、政治的に先づ或程度の自由主義の基礎を獲得するに努めつて、その運動の發育を待つことゝなるであらう。

無產階級の政黨の綱領は、強く人心を惹附けるやうな鮮明なものでなければならぬと云ふ點を強調する論者もあるが、強く人心を惹附けるのは、必らずしも綱領項目の鮮明ではなくして、その綱領を持することの正直さと、綱領によつて動く誠實さである。無產階級の政黨は、その組織において、その綱領の樹立に於て、その政治的行動に於て、有產階級のそれと全然その趣を異にせねばならぬが、強く人心を惹附けるのは、それが異つてゐると云ふ點ではなくて、それが誠實に運用され、把持され、詐瞞を殘さぬと云ふ執拗さになければならぬ。

政黨組織の當初は、綱領によつて率ゆることは出來ぬ事情があらう。しかし綱領によつて率ひ、教育する以外に、無產者政黨の發育する武器はない。その意味で深く討究を要する問題である。

五、

然らば無產階級政黨の組織の手續はどうするか。これは現在の組織勞働者の實狀、都市勞働者と、農村無產階級(小作組合)との關係などからして、容易に實際的な方法は樹て難い。又實際、事態はわれ〳〵の期待を裏切つて、勞働黨、農民黨社會黨といふが如く、小黨分立を以つて、或意味に政治的の基礎的組織を考へずして、發足しさうにも考へられる。然し結局、既成組合の聯合會議の如き、質の變つた「政治研究會」が組織されて、政黨樹立の準備階級をとるやうになるのではないかと思ふ。そして事態がそう進展することは望ましいことに相違ない。

「政治研究會」は今日、とにかく積極的に步を踏出してゐる團體であるが、政黨組織の準備階段として、既成組合の意見を反映させる人的要素を取容れ得なかつたのは、何と言つても失敗たるを免かれない。しかしこの失敗は取返しのつかぬ失敗ではよ

ない。同じ目的を持つて、組織勞働者の意見の反映される準備機關が出來、それと結合するやうなことにでもなれば、所期の目的は到達するわけである。

それは政黨組織の準備階段と云ふ上から見ての上であるが、「政治研究會」は、政黨組織の氣運を促進するといふ使命を持つて生れた團體で、その點から言へば、爲す可き任務は非常に多いと思ふ、本來から言へば、「政治研究會」は、この氣運を促進して、政黨組織の時期を早め、政黨の質を望ましいものにす可く努力すれば、その使命は果されるものであつて、それ以外に出づることは、あまり望ましいことではないと私は考へてゐる。

無産階級政黨の樹立に際して、工場勞働者と農村無産階級とが、別個の過程をとり、勞働黨と農民黨との單獨政黨の樹立を見ることが、階級的政治運動の出發の上から、遺憾なことであると同じに、「政治研究會」乃至は同類の團體が、單獨の社會黨の如き形態をとつて、政黨化するごときことがあれば、それは決して望ましい出發ではない。

しかし溯つて考ふると、無産階級運動に於ける、理論的要望と、實際上の進展とは、必らずしも一致するものではない。その意味に於て、私などのこの意見なり觀測なりが、どれほどの價値があらうとは思はれぬ。しかし實際上の運動が理論によつて導かれないと云ふことは、理論に缺陷あることを示すものでこそあれ、實際運動が理論的根據なしに進展するものだと云ふことを示すものではない。無産階級政黨の樹立が、實際いかなる過程をとつて進み、いかなる理論を基礎として展開するかは、私共の大いに興味と關心とを以つて、眺むるところである。（九・五）

支那の戰爭とその思想並に政治的背景

小村俊三郎

一

始りさうで始まらぬもの〻内に數へられて居た支那の直隷派反直隷派の對抗戰は　いよ〳〵始つた。逃げ込んだのか迎へ入れられたかは解らぬが、兎に角反直隷派に屬する臧致平　揚化昭兩軍の浙江入りは、途に江蘇の齊燮元と浙江の盧永祥とをして、先づ上海の攻守戰を手始めに、兩軍の火蓋を切らしむるに至つた。それと共に盧永祥は餘り堂々でもないが、兎に角直隷派の大總統曹錕に對する討伐の宣言を發し、先づ開戰の意義目的を明白ならしめた。それまで非戰主戰の兩端に分る〻自己の立場をコントロールすることをすら能くし得なかつた北京政府も、漸く之に應じて齊燮元を浙江討伐の總司令官に任命した。之と前後して廣東の孫文は、逸早く北伐の旗印を立て、同時に、行き詰つた廣東内部の轉回策にも資せんとしづ〻ある。奉天の張作霖も、成算と、自信の有無に拘らず、勢いその觀望的態度を打切り、最後の勝を固めねばならぬ破目に置かる〻に至つた。殘る所は只だ反直隷派の盟首でもあり、謀主でもある。天津の段祺瑞自身が、未だ公然と、舞臺面の人とならぬ丈の事である。兎に角かくして江蘇浙江の戰端開始をキツカケとして、直隷派反直隷派の對抗戰は　完全にその幕を明けられた。蓋し兩派の對抗戰は、過去一二年間に其の機運は漸熟し、その計畫は組織的のものであつた。江蘇浙江の戰は　たゞ事端をそこに發し、地點をそこに、擇んだま〻である。決して一時一局の偶發的出來事ではなく、その一絲は全身を牽動し一波は萬波を湧起せしむるに至るのは、當然の成行であらねばならぬ左れば今度の戰爭は、決してたゞ江蘇と浙江との決戰のみではなく　飽く迄も直隷派反直隷派の對抗的決勝戰である。而してその決勝戰は　勿論中央の政權爭奪も　南北の統一とを最後の目的とするものである。左れば假令支那の戰爭を遊戲視し、たゞ興味本位にその勝敗を傍觀せんとするものに取つても、苟く

も彼等の戰爭が政權の爭奪を目的とする政治的對抗戰である以上、肝腎なその政治的背景を無視する譯には行かぬ。抑も戰爭の勝敗は 多くの場合に於てチャンスであり、勝敗の豫斷も、要するにチャンスの多少を計算する位のものである。但しそのチャンスには、軍事以外政治上のそれを加算して見ねばならぬ。歐洲戰爭中に實際の戰局を兵棋に對すると同樣に、單に双方の持駒をのみ數へて居た我軍人達に、獨逸や、露西亞の革命に依り、全局面の轉回を見るに至つたやうな重大原因が、裏面に伏在しつゝあつたのを洞察し得たものが、果して幾人あつたらうか。故に思想的背景は政治的背景よりも 戰局の觀察に關しても之を重要視せねばならぬ。況んや我等は不幸なる隣國の戰禍に對し、單にその勝敗を傍觀するのみであつてはならぬ。隣國の民衆がその戰爭に對し、果して如何に考へつゝあるかを、我等も亦、深き同情を以て之を考へてやらねばならぬ。

いかに多くの戰爭が馬鹿氣たものであり、就中支那の戰爭が最も馬鹿氣たものであるにしても、全く何等の意義をも有たない譯ではない。凡そ戰爭の意義には交戰者の双方が勝手に付くる意義もあれば、交戰の犧牲となる民衆其物から見た意義もある。歐洲戰爭中聯合軍側から宣傳された意義は、デモクラシーとインペリアリズムとの對抗であつた。今から考ゆれば、それは勝手の宣傳であつたかも知れぬが、但し與國の民衆ばかりでなく、敵國の民衆まで、幾分その宣傳を信ぜしめられた。その民衆の思想的背景が、即ち全局の勝負を決する大なる要素であつた。支那の戰爭に就いても略ぼ同樣である。我等の注意を要するのも、即ちその支那民衆の思想感情如何である。元來支那の戰爭程その動機に無意義なものはないが、それにしてもその結果には自ら意義がある。譬へば我國の相撲に於ける五人抜や、劍術の土器割に於けると同樣、軍閥の首領株が一人づゝその勝負を決することが、局面の轉回と時局の推進上大なる利益である。而してその勝負の早ければ早い程、同時にその轉回と推進上のプロセッスを早める道理である。その何れが勝つか負くるかは、民衆に取つて大した問題ではない。たゞ疑問となるのは最後の一人だが、それも多くの關取が自己の力に負けると同樣、最後の一人もその力のバランスを失つて、竟には自己自らの運命を決することゝなるのである。過去の袁世凱、段祺瑞、張作霖も皆な然りであつた。今や當の曹錕、呉佩孚が即ちその順番である。たゞ困るのは、支那の戰爭は相撲同樣一たび負けたものが、再び土俵に上ること段祺瑞や、張作霖の如くであることである。但しそこにも自ら亦た自然の理法が支配する。何となれば、彼等の再び起つて政權を爭ふ時は、必ず多少なりと

も時代の要求を迎へ、民衆の輿論を取入れなければ、復活して舞臺の人となることは出來ぬ。若し強ゐて之に反する者があれば、それは即ち自己の力に倒れる人である。隨つて之と同時に時代の要求と民衆の輿論とは、その度毎にそれに依つて多少づつなりとも推進し得らるゝのである。その關係は恰も亦た我國の政黨が、民意に由つて動くメカニズムであると同樣である。然れば、張作霖は暫く之を問題外としても、現在の段祺瑞が、程度は別としても兎に角過去の段祺瑞であらぬこと、尚ほ我憲政會や政友會が過去のそれであらぬと同一である。況んや政黨であらぬ支那の軍閥は、軍閥自身をして此上のコースを取らしむる外に道はない。就中支那の軍閥は北洋の軍閥を最も有力の團體とする。之に抵抗し得る力は外にない。第二革命以來北洋軍閥の直接運動は、皆な失敗に終つた。隨つて之を打破する道は、彼等自身の中に分解作用を起さしめ、而して南北全體の化合作用を助けしむる間接的方法あるのみである。袁世凱失脚後の北洋軍閥は、安直戰爭、奉直戰爭を經、現在の反直隷戰爭に至るまで、正に注文通りの分解作用を起しつゝある。支那の民衆は假令それ程意識的ではないにしても、又た假令勿論進んで戰爭をば希望せぬとしても、その戰爭が民衆の力を以て之を阻止することの不可能である以上、寧ろその運命に直面し、時局の轉換と推進とを、責めてその結果として利得し得んことを希望しつゝあるやうな狀態が、即ち彼等の戰爭心理であらう。

二

勿論かゝるプロセッスは、非常の犧牲を拂はねばならぬ上に、更に非常に永き時間を要する。之が爲支那民族に固有なる運命觀的忍受主義と、パッシーヴ、レジスタンスの主義とを、拋ち、軍閥打破乃至軍閥利用の政治革命に代へて、思想革命、社會革命の運動も起つた。孫文の三民主義乃至共產主義的傾向は、即ち此派の代表である。左り乍らこの運動にのみ從ふ時は、是れ非常の努力と時間とを要する上に、目前に於ける軍閥の不可抗力の爲に、運動それ自身をも不可能ならしむる虞がある。現に直隷派の壓迫は將にその通りである。故に孫文の廣東派は、一面には新人や青年學生の思想革命、社會革命を代表すると共に、一面には彼等自身に却つて軍閥の所爲を學び、且つ最初には段祺瑞、次には張作霖と提携し、北洋軍閥との三角同盟を締結し、他の直隷派の北洋軍閥に當ることゝなつた所以であらう。かくいふ本文の記者も、上述のやうなプロセッスの外に、支那の救はれる道はあるまいと信じ、安直戰爭、奉直戰爭等の時代には、新聞記者として盛んに相撲の五人拔論抔を提唱

し、隨つて支那の時局に對する日本を始め列國の絕對不干涉論等を主張したものである。左り乍らその一方には、理窟はいかにそうであるとしても、目前にその戰禍の犧牲となる支那民衆の爲に考ゆれば、戰爭は避くる丈之を避くるのが當然であり、隨つて彼等は飽迄平和を希求するものとも考へられた。然るに本年の春七八年振りに支那本土に一遊し、北京に於ては曹錕と吳佩孚との二重政府の下に在る極惡政治、否な寧ろ無政府同樣の事實を見聞した。更に天津上海を經て、一般の情勢を觀察した。その結果、いかに平和を希望する支那民衆でも、眞の平和を欲求し、否なその平和に到達する手段階梯の一としても、先づ直隸軍閥の壓迫から脫離することが、當面の急務であり、それが爲軍閥を制するには軍閥を以てし、將來の平和を求むるには一時の武力を用ゆることも亦た已むを得ぬ。要は之に依つて行詰れる局面を轉換し、而して人工的に時局の推進を急ぐの外はないといふやうな觀念が、大部分に行亘つて居る事情をも看取した。而して數年親しく支那に遊ばなかつた間に、平和と戰爭とに對する支那民衆の思想感情に著しき變化の起りつゝあるに、驚かざるを得なかつた。それと共に、いかに曹錕吳佩孚を首惱とする直隸派の不人望が、その極點に達して居るかにも驚かざるを得なかつた。勿論かゝる理論は政客者流や、知識階級、而かも主として反直隸派の言う所であつて、大分割引をして聞かねばならぬが、兎に角かやうに直隸軍閥に對する反感が、假令民衆の全般に亘つたものでなく、たゞその幾部分に過ぎぬものであるとしても、是れたゞ反直隸派の三角同盟のみが有する思想的背景である。勿論かやうな同情的關係は弱者の强者に對する時分に、每時も起る民衆心理的現象であり、現に安直戰爭、奉直戰爭には、直隸派の吳佩孚が、即ちその被同情者であつた。今度若し再び吳佩孚が勝つたならば、彼に對する民衆の反感は更に增大し、若し又た之に反して段祺瑞や張作霖が勝つたならば彼等は轉て再び三たび民衆反感の的となるかも知れぬ。寧ろそうなる可能性が多いのではあるが、兎に角現在丈の局面に於ては、民衆同情の思想的背景は、幾分なりともたゞ反直隸派にのみ存するのである。

三

次には直隸派反直隸派の政治的背景であるが、先づ反直隸派に就いて言へば、その反直運動のブルウアークを爲すものは、勿論天津の段祺瑞を中心とする奉天の張作霖と、廣東の孫文との三角同盟である。元來段祺瑞張作霖と孫文とは、前者の武力統一時代迄、直角に相容れぬ正面の敵であつた。現に廣東派は

我寺內閣時代の援段援張政策を、極力非難して止まなかつたものである。それが安直戰爭以後直隷派の壓迫が、先づ彼等に加はるに至つてから、何時の間にか孫は先づ段に結び、次に段との關係から張に結ぶに至つた。孫派はその理由を日本には說明して居らぬが、假りに代つて之を說明すれば、表面の理由は前段に述べたやうな事であろうが、裏面には勿論彼等自身の利害關係と、一時の手段に基づく說明の外なる事情もあるであろう。それは元來主義思想に依つて立つべき孫派に取つて、殊に惜むべき弱點である。彼等が多年の苦節に反し、內外の信用と同情とを十分には博し得ぬ原因もそこにある。但しそれを獨り孫派に咎むるのは、今日の支那に於ては聊か苛酷に失しやう。段張の關係すら、安直戰爭には同じく當面の敵であつた。その段張と思想傾向を全然異にする孫との同盟關係は、思へば異な譯でもあるが、兎に角その三角關係は、反直運動の關する限り、甚だ緊密にして堅固なものである。孫と段との間には、直隷派を倒して段が北京に入つて政局を支配する以上、孫は之と政權を爭はぬとの約束まで出來て居る。然らば段はいかにして北京に乘込むべきか。失脚以後の段はその個人的人格を政治的勢力とする以外には、南方に於て盧永祥、何豐林、臧致平、楊化昭の兵力を有する丈で、北方に於ては自己の兵力をば全く有せぬ。張作霖の兵力は即ち段祺瑞の兵力である。換言すれば張は馬であつて段はその乘手である。張の馬さへ動き出せば、段も之に乘つて動き出すといふのである。但し奉直戰の一敗に懲り、十分の自信も成算もなき張の馬は容易に動かぬ。現に昨年の冬にも三角同盟は、南北相應じて事を擧ぐる筈であつたが、張は言を某國の忠言に托して、之に應じなかつた。張に自信と成算さへあつたなら、先年の奉直戰の時通り、、なか〱他國の忠言抔に耳を假す男ではない。但し自己に都合の悪い時には、他人の忠言を仲間に裏切つても、自己を全くする位の事も、やり兼ねぬ男と見へる。之が爲段派と孫派とは、張の馬を抑へたといふ某國を恨んでゐる。但し彼等は先づ張作霖を恨むのが本當であらう。若、又たその某國が之を抑へた事が事實なら、今後は斷然之を止めたが可い。反直派は固より支那の民衆も、之を希望して居らぬ。假令それが好意でも結果は却つて反對な事になるのである。兎に角かくして反直派が張作霖を動かして事を擧げんとした昨年の計畫は、失敗に歸した。之が爲廣東の孫派も、更に不利の境遇に陷つた。福建の臧楊二軍も同樣の憂目を見た。その臧楊二軍が直隷派の爲福建を逐はれて、浙江に入つたのが、一轉して即ち今回江蘇戰爭の端緒となつた。段派としては南北何れの方面から、事端が開くるとしても、兎

に角之に乘じて北京を襲い、曹錕を逐うて政權を獲得せんとする計畫には代りがない。況して浙江軍にして直隷派に覆へされて仕舞うものなら、盧、何、臧、楊四軍の段派唯一の兵力を一擧に喪うこととなる。段派に取つて是程重要な爭いはない、同時に張作霖と孫文とに取つても、共に死活の爭いである。それ故今度の戰爭は、反直隷派の全體に取つて死活的對抗戰である所以である。

四

段張孫三角同盟の周圍には、更に各黨各派の反直隷派がある。岑春煊の政學會派も、梁士詒派の交通系も、吳佩孚や孫洪伊に置去られた、議會派も、聯省自治派も、章炳麟の如き學者も新聞記者も、苟くも多少の主義政見を有し、直隷派の傘下に集まることを屑しとせぬ人々は、皆なその行動を共にして居る。天津の段祺瑞の許にはそれ等の往來が絕ゆる時なく、上海に於けるそれ等の集會には、昨日の敵は今日の味方で、吳越同舟の觀がある。不思議な事にはそれ等の人々が、皆な段祺瑞を推して陰然たる盟主とし、張作霖の馬に乘せて北京に乘込ましめ、直隷派の曹錕吳佩孚を倒した後には、之をして一時政權を掌握せしめても差支はないとすることに、略ぼ意見の一致を見つゝあることである。蓋し彼等は之に由つて局面の打破と時局の推進とを圖り、かくしてその平和統一の政治的運動に移らんとするのである。但し彼等が果して之を利用し得るか、將た利用さるゝに終るかは、尙將來に殘された大なる疑問ではあるが、段祺瑞も今日では、兎に角民意輿論と憲法議會を尊重し、南北統一は各省代表會議に依つて之を解決し、中央地方の關係は、聯省自治制に則るというやうなことを、盛んに彼等に慫しして居る。其他にも吳佩孚の、武力統一主義に依り、漸次にその根據を覆へされ、又は覆へされんとしつゝある西南數省の軍人政客は、皆な所謂三角同盟や、上海を中心とする反直隷派の政治運動に、直接間接の加盟をなしつゝあるのである。尤も上海は必ずしも反直隷派の人物計りの避難所でなく、例へばその新聞紙の如き、全然政治に關係なき民衆本位の中立機關もある。が、その何れもが直隷派の武力統一に反對し、同派の大總統をば皆な曹錕の本名か、乃至は渾名を以て呼棄てにして居る位であるに見ても、一般民衆の心理を知ることが出來るのである。尙ほ別に上海を中心とする江蘇浙江の紳士紳商は、昨年も平和協約の運動に依つて、一たびその戰禍を中止せしめた。本年も亦た極力奔走したが、勿論何等の效力もなかつた。但し本年の戰爭は昨年のと違い、主として江蘇の齊燮元が上海奪取の

野心を遂げん爲、名を減揚軍の入浙に借り、同港に於ける内外人民の生命財産も、その商業貿易とを脅威するものであるから、世界の耳目を聳動すると共に、内外の反感は勢い江蘇に集中し、反直隷派は寧ろ却つて彼等の同情を贏ち得る譯となるのである。

五

次には直隷派側の政治的背景であるが、直隷派の曹錕と吳佩孚との關係は、譬へば猶ほ我維新前の京都朝廷と江戸幕府とのやうなものである。安直、奉直の戰に勝つたのは、勿論主とし吳佩孚の力であつた。彼等は始めに徐世昌を逐い、次に黎元洪を迎へて再び之を逐うた。而して所謂賄選に依つて曹錕が大總統となつた。曹錕が大總統となつたといふよりも、寧ろ吳佩孚が大總統にしてやつたといふ方が本當である。之も矢張り馬に譬へたなら、痴漢か駿馬かは知らぬが、兎に角吳佩孚の馬が曹錕を載せて居る丈の事である。左れば北京と洛陽との間には、猶ほ我舊時の朝廷と幕府との如く、公武の爭が絶ゆることがない。それ故に又た洛陽派と、保定派と、天津派との間には、何か解らぬやうな不和の關係もあるやうである。但し吳佩孚としても、先輩の曹錕を戴けばこそ、四方に號令することも出來る。吳佩孚は曹錕に代つて大總統になる丈の資格もなければ、人物でもない。要するに曹錕あつての吳佩孚であれば、吳佩孚あつての曹錕である。各々一人立の出來ぬ間柄である。そこが反直隷派のネライ所のやうである。即ち政權的に曹錕を倒すか、軍事的に吳佩孚を倒すか、何れか一方丈で政權爭奪の目的は遂せられる、と無造作に考へて居るやうである。事實は果して何うか知らぬが、兎に角政治的に見た曹錕は既に問題ではない。北京に於ける話丈でも滑稽な事許りである。一々之を取次ぐまでもなく、曹錕を大總統に戴く北京政府は、左なきだに無政府同樣である。民國革命以來之に比すべき惡政府もないが、支那の歴代にも恐くそれと同樣であらう。之に代る政府が如何なる惡政府であつても、曹錕の政府以上に惡政府であり得やうはない。然らば之を支持し、之を存在せしむる唯一の勢力者たり、責任者たる吳佩孚は如何。彼自身が如何に考へ、又た彼れに就いて如何なる説があるにしても、要するに彼れは少しく文字を解する武人たる以上に、政治家でも何でもない。武人としては現今の支那には特出した武人であらう。但し彼れが武力討伐によつて、果して支那を統一して見た所で、その統一した支那に果して如何なる希望を與へ得やうか。彼れは曾てその政見政策や、抱負經綸を明かにした事がない。又たその政治的手腕識見を、知らるゝ機會もなかつた。彼れは餘りに、盲信的武斷的なデイクテーターである。彼れが此の如き盲信と武斷とを以

て、今日の支那をデイクテートーやうとしても、それは勿論無理な註文である。彼れ一己の理想たるその武力統一をやるが爲、一方には曹錕の惡政府を支持し、一方には四方に其武力を用ゐねばならぬ。之が爲に受くる國家國民の苦痛損失は料り知るべからざるものがある。是れ皆な彼れ吳佩孚の政治的責任である。差當り之が爲反直隸派の連盟を形成せしめ、その双方が軍備の爲に國帑を費やし、民財を奪し、乃至は外資を濫用し、其極現在の如く支那全國を大動亂に陷れ、民衆の生命をもその犠牲に供せねば已まぬこととなるのである。支那の民衆は曹錕を恨み、吳佩孚を恨み、直隸派恨をまない譯には行かぬ。

七

而してその吳佩孚は獨り民衆の恨みの的となつて居るのみならず、直隸派の內部の間にも恨みの的となつて居る。抑も吳佩孚が世間にその名を知らるゝ始めは、段祺瑞の南方に討伐時代に、第三師團長として湖南の岳陽に駐屯中、南軍に通じて段祺瑞に背いた時からである。當時馮玉祥、王承斌、蕭耀南、張福來等は、各之と行動を共にした腹心の諸將であつた。然るに吳佩孚は今日彼等の兵權を解きて、自己の部下を以て之に代へ、若くは其の他の方法を以て、彼等の恨みを買いつゝある。乃至現在先づ浙江派に挑戰し、吳佩孚と全然同一利害の地に立たしめられた、齊燮元ですらも、今日までその關係に兎角の風說のあつた事も、世間周知の事實である。而して吳佩孚は又その武力統の目的を發せん爲、四川、貴州、湖南、廣西、廣東、福建の西南諸省にまで、蜘蛛の手のやうに縱橫に、其戰線を擴げつゝある。それ等は多くの諸省の內訌を利用して之を征服することと、猶ほ印度征服の歷史と同樣ではあるが、但し之に利用せられた方でも、決して吳佩孚に心服するものでないのは勿論、況んやその反對派と省民とに於てをやである。直隸派といつた處で、事實は吳佩孚一人を指すやうなものであるが、その吳佩孚は上述の如く內外兩面に亘り、不利益なる政治的背景を負ふて、反直隸派の總攻擊に直面せねばならぬ。彼れは一面に於て齊燮元を援助して浙江の盧永祥軍を喰止め、一面に於て北方の諸軍を督して奉天の張作霖軍に當らねばならぬ。彼れが作戰上の位置は恰も歐洲戰爭の末期以前に於けるカイゼルと同樣である。彼れは南に浙江軍を壓迫し、北に奉天軍を崩壞せしむること、猶カイゼルが西に聯合軍を壓迫し置き東に露國軍を崩壞せしめんとした場合と略同樣である。且つ彼れがカイゼルと似且つ最も有利な點は、その作戰を可能ならしむる京漢、津浦京奉等の鐵道幹線も、之と同樣の作用を爲し得る揚子江の水路を支配し得る點である。更に彼に有利にして反直隸派に不利なる點は、彼れはかくして鐵道及水路に依り江蘇軍を後援し得る反對に、浙江軍はその省軍の二個師團が、進んで戰場に參加する以外、米國の參戰聯合軍の如き後援部隊のない事である。若し吳佩孚が之に依つて浙江軍を防止し、同時に直隸派內部の諸將に異變がなく、北方の全力を擧げて奉天軍に對するを得るなら

ば、張作霖は或は呉佩孚の敵でないかも知れぬ。呉佩孚の有する政治的背景の不利と、反直隷派の有する同樣の利益とを假りに度外に置き、ただ軍事上の大局に就いて見れば、以上の如くにも觀察せらるゝが、要するにその全部の關鍵は、今の處全く江浙交戰の部分的勝如敗何に繋つて居る。而してその部分的戰爭の如何は、勿論今日何人も之を豫測し得る限りでないが、假りに萬一浙江軍の有利に歸し、江蘇軍の大敗に終るやうな事があつたなら、反對に呉佩孚はカイゼルの末路と同樣な運命に逈ることとならぬことも限らぬ。蓋しかゝる場合には、呉佩孚の有する政治的背景の不利益が、反直隷派の爲に有利に轉回もし、發展もし、呉佩孚に恨みを抱く直隷派の諸將は、風を望んで反直隷派に欵を通ずるに至るかも知れぬからである。蓋しかやうなは、革命以後の支那歴史にも一向珍らしくない事實である。呉佩孚自身に先立つて、第一革命の際に於ける段祺瑞が誰よりも先づ先例を開いた當人ではないか。張作霖抔は思束ない戰爭に生命と共にその軍事費を使うよりは、運動費に使つた方が利益かも知れぬ。萬一かやうな事になるものなら、呉佩孚の武力統一政策に依つて築かれた直隷王國のネツトワークは、左なきだに收拾不可能で、其の上に坐はらせられて居る蜘蛛の王の如き曹錕は、最早問題とならず　それこそ呉佩孚と共に獨逸の革命後のカイゼルとなるかも知れぬ。而して之に代つて起つものは天津の段祺瑞である。此場合の段は張作霖の馬を待たず、政治的に北京に乘込み、その政局の支配者となるかも知れぬ。

七

兎に角直隷派と反直隷派とは、かくの運命を賭してその戰ひを開ひた。一が出るか六が出るかは、即ち、戰局の發展如何にあるのであるのが　戰爭が賭博と同じく、今尙ほ人間の興味を支配する最有力のものであることも、無理のないことである。但し戰爭にはその犧牲を受くるものがある。我等はその犧牲を無視して、隣國の戰爭を賭博と同じく遊戲し、興味本位に之を傍觀する譯には行かぬ。隣國民の忍ぶ戰爭の犧牲にも、勿論自ら多大の意義があり、その戰爭に對する思想的背景や、政治的背景もある。就中民衆の有する思想的背景は、他の政治的背景も各相反映して、兩交戰國體に對する同情非同情の關係を明かにしつゝあるのである。我等は如何なる民衆に同情すれば可い。隨つて又た隣國の戰爭に對しても、その民衆が考へるが如くに、考へて居さへすれば間違はあるまい。自分はかく考へて本論を草した。勿論民衆の思想は、必ずしも實際の政治や戰爭に直接の影響を有ち得るものではない。隨つて戰局の勝敗は民衆の思想に反對した方角に向つて決定せらるゝことがあるかも知れぬ。但し勝敗は一時的である。思想は、永久的である。一時的なる戰局の勝敗は、本論を草する自分の頭にはなかつた。自分はただ自分の愛する支那民衆の考へを誤り傳うもののなからんことを祈るのみです。

末弘嚴太郎論

彼のゲートル姿

賀川豊彦

「末弘嚴太郎」と云ふから、怖い人かと思つてゐたら、身體の小さい、やさしい、早や足で歩くピチ〳〵した元氣で滿ち溢れた青年教授であつた。

上と下と色と縞の違つた洋服を着てゐられる。ズボンの上にゲートル、髪は七分三に分け、立つてゐる髪の部分が多い。

之は私が最初『二十三日會』で會つたときの末弘氏の印象であつた。二十三日會と云ふのは震災直後の社會問題に就て改造社同人が在京の八釜敷屋を集めた會合で時によると大藏大臣も個人的に出席することも有つて、なか〳〵有力な會合であつた。

末弘さんと私の意見は初からよく話が合つた。それで私は末弘さんの意見に協力を求めて、帝大の情報局學生本部にトラックで飛ばした。私はその當時荷物用のトラックで市内を飛び廻つてゐた。末弘さんは、すぐ私に協力して下した。そしてすばしこくトラックに飛び乘られた。

「末弘さんはまだ若い！勿體振らないで、自動車に飛び乘りしてくれるよ！」

とその時、私は思ふた。末弘さんの好感を與へるのはその勿體振ないところにある。洋服は穢いし、ゲートルははいてゐるし、運動で鍊へた身體だけあつて、トラックからの飛び乘り、飛び降りはまるで水泳場に於ける氏を見るようである。

一體、帝大の教授など云ふものは、總體勿體振なければ有難

味は少ないものだが、末弘さんは、青年と同じやうに體を使ふことを厭はれない。あれは體育の賜であらうが、帝大で停年令を撤廢する必要がありとすれば帝大教授そのものにはトラックでも、フキルドでも何かのチャンピオンシップを持つものに限るときめるが善いと思ふ。體を使ふことを厭はれない帝大教授のも一人は吉野作造博士であらう。吉野氏も今は帝大を退かれたが、コツ〳〵本所の貧民窟へ、必ず週に二回位徒歩で通はれた。今も私はそれに就て感謝してゐる。

末弘博士と私の最初した仕事は、震災後の東京市內の社會事業の統一連絡であつた。それには吉野博士をも連れ出した。親切で足を運ぶことを厭はれない吉野博士はすぐ出て來て下した。そして各官廳及民間の有力な團體が纒まることになつた。

私はあの背の低い末弘博士が幅の廣い赤皮のカバンを右脇にかゝえて、社會局の二階に登つて行かれる姿が今も眼の前にちらつく。よく勉强する人だと感心したことであつた。私などは宗教的感激で動いてゐる方が多いので、宗教に關係の無い人がよく働かれるのを見てよく動かされるが、末弘氏に對しては、此感を深くした。エラスムスと云つた人はこんなタイプの人をもう少しルネサンス式に擴げた人であらうと、よく末弘さんを思ふ時に考へる。末弘さんはエラスムス型の人である。寛容で呑込が早くて、進歩的で、而も官僚臭く無い。

震災當時社會局の第二部長をしてゐた田子一民君は、「末弘君の社會事業に對する趣味は俺がシカゴで吹き込んでやつたのだ」と私に云てゐた。田子君に云はすと、シカゴまでは末弘氏もあまり社會問題に興味を持つてゐられなかつたのだとのことである。その邊は田子君の云ふのが、どれだけ當つてゐるか私は知らないが、なんでも、それまでは法律一遍の人であつたとは田子君の說である、

それは兎に角として、田子君の感化で、末弘氏が社會運動に大に興味を持ち出したとすれば震災に際しては氏が帝大教授の一番大役を務められ、他の多くの私立大學などが居睡をしてゐる中に、數十名の學生の中堅となつて、あの最も美しい情報事務を取られたと云ふことは、田子君一生の大出來であると考へて善い。

それにしても、末弘氏はシカゴ以來、法律に對する新しき眼を持つて進まれるやうになつたと、我等は考へて善いのだらうか、その點は私はまだ、末弘さんに聞いてゐない。學生に聞くと、末弘さんも昔は相當に古い考へを持つてゐられたとのことだから、今のやうに法律を社會學の一部として考へられ、社會道德の進歩、社會經濟の變遷と共に常に推移するものだと考へ

られるようになつたのは余程新しいことであると考へて差支へないのだらうか？

× × × ×

日本にエッセイストは實に少ない。厨川白村氏などはその點に於て、日本には珍しい人である。長谷川如是閑さんは厨川さんに較べては古いエッセイストである。エッセイと云ふものを自ら主張はせられなかつた。猶古いところでは蘇峯、雪嶺などあるが、何だか長谷川さんや、厨川さんのやうな自由な空氣が、そこに感ぜられないでゐた。然し厨川さんは、日本に於けるエッセイの地位を充分に据えてくれた恩人である。

エッセイストとして末弘さんは隨分善い筆を持つてゐられる。『嘘の効用』などでもカンニングな、心持ち諧謔の籠つた日本では珍しい肩の凝らない論文集として、誠に結構なものであると云ふて差支ない。

社會の基礎が茲に動いて、法律だけが空中に浮んでゐる時に、法と權力は凡て「嘘」でかためた射藥細工となる。國民新聞に最近發表してゐられた「法窓閑話」などでも輕く讀ませる點に於て有難いエッセイであつた。

法律もあの程度で民衆化してくれると誠に有難い末弘さんが大阪の電車罷工に對して批判せられた論文などでも、末弘さんらしい進歩的で溫健で、而も徹底的であるのをうれしく思ふた。即ち公共的事業の名にかくれて、然も私事業を營み、その營利事業の分配を勞働者には不公平に分配し、その罷工に際して、之を強力によつて暴壓することは間違つてゐると極論してゐられたが、善き良心を持つ人でなければこんな正論を吐くことは出來ない。

勿論末弘さんは、帝大教授である。堺氏や、山川氏の眞似をせよと云ふのは、云ふ方が無理である。批評家の中には末弘さんが民衆の實際運動を避けんとして居られることに就てあれこれ云ふ人もある。然し、それは注文する人の方が無理かも知れぬ。塔を建てるに、部署がある。或人は材にもなれば、或者は瓦にもなる。みんなに礎になれと云ふのは無理である。

何としても末弘さんはまだ若くて、希望に充ちてゐられる。帝大のある先輩のやうにひからびてゐない。末弘さんに對する、注文はこれからである。それにしても、末弘さんが震災當時、帝大の學生達と、市民の爲に盡して下さつた仕事は有難いことであつた。

末弘君素描

新居格

僕は末弘嚴太郎君には一度も逢つたことはない、從つて同君と親しく話してみた機會はない。しかし、大學時代から僕は「あれが末弘君だ」と云ふことは知つてゐた。小男ではあるが、こま堅い精悍なる元氣に滿ち〳〵てゐる彼を僕は知つてゐた。活動寫眞を見に行つて映畫の上で「あれがドウグラスだ」なと思ふやうな按配式に、「あれが末弘君だな」と知つてから隨分長がいものである。

田舍の高等學校を出て來た僕があれが末弘君だと同窓の友人から敎えられたほどに末弘君は學生時代から注目される人であつた。それには彼が非常な秀才で常に首席であつたことも點取競爭の時代には目立つた一理由かも知れぬ。が彼が當時の學生仲間で注目されたのはそれ計りではない。同君の小さな體軀ながら如何にも俊雋で精悍なる印象を與えた事も他の理由だらう。それに彼の性格的な覇氣も更に印象を助長させないでもなかつた。事件の内容は忘れたが彼が大學生時代に母校へ行つて新渡戸校長彈劾演說（？）をしたと云ふ事（何でもそのときの遣方に）に如何にも彼らしい所があつたと云ふ噂の記憶がぼんやりながら未だにある。

兎にも角にも學生時代から相當に有名な彼であつた。彼は學校を卒業すると直ちに大學に殘つた。大學は彼に民法の敎授たるべきコースを執らせたのである。

僕の見る所にして誤解がないとすれば、彼は彼の相貌が表識してゐるやうに覇心があり、負けじ魂であり、從つて敢行的であるのではないか。勿論頭腦も明晰であらうが、彼の心には常に壓倒施的な意思力を堅く把握すると云ふ緊張狀態があるのではないか。そうだとすれば末弘君は性格的に出世すべき人である。年少にして學位を得名聲籍々たる大學敎授であり言論界の雄でもある。僕の陋居を訪づれて來る學生達は口を極めて彼の明快極まると云ふ民法の講義をたゝえ彼を大學の淸新なる明星として仰いでゐるらしかつた。民法の專門から一歩を進めて勞

働法制と農村問題（勿論、法律家の見地に即する）との權威ある論議者となつた。更に、社會的に働きかけることとしてはセツツルメント其他に於いて表現された。時代は彼に感謝をさゝげなければならないであらう。

餘計な事を云ふやうだが、彼の如きは帝大が生んだ最も安全に發達し切つた一人である。それを同じ學校が生んだ最も唾棄すべきへまぐれもの、重ねて云へば塵屑の如き僕が批評するのはあまりに皮肉な編輯者の惡戯とも取れるし僕自身から云へば不遜な仕儀であり、彼其人から考へれば侮蔑されたやうに思ふかも知れない。と云ふのは英雄英雄を知り、秀才秀才を知り、秀拔なる學者はそれに相匹する學者を待つのが至當であらうから。しかし發育十分なるものを發育の最も不完全なものから見るのもこれ又一つの見方であらう。耀灼たる時代の人氣男を人生の裏街をあてどもなく且つ投げ遣りに放浪する僕の如きが論評するのもそも／＼又一興であらうか。そこで忌彈なく云ふ、彼の生活行進の道程は勇氣に充ちた敢鬪であつた。大學生時代には級中第一の俊秀として他を壓し又壓する事に意識的な快感と道徳とを彼がもつてゐたのではないかとも想像される。次いで專攻の學、民法を覇氣的に研究して明快をもつて鳴りそれからそれと心理的な征服をつゞけ、意慾の赴く所社會的な表現にまで進んで行つたと云へはしないか。末弘君は銀鞍風薫つて長安の大道を行くものと云へるであらう。が、僕等の粗末な倫理觀からすればそこに羨やむべき何物もない。

名聲、名聞、一世の瞻仰多數から投げられる存在にたいする崇敬的認識の聚集それらの觀念があまりに幼稚である事を感知するなげやりものの僕なぞには末弘君のやうであつたならば幸だと思ふ何ものがあらうか。

さりながら僕は僕の人生觀倫理觀を以つて末弘君に當てる權利はない。彼は彼でいゝのだし、愛敬すべきでもある。

が、末弘君の如く恐くば自己の力を信ずることが強さうな人は同時に確信から來る自意識の强烈さがするにちがいない。それが彼自身を發達と完成とに指導する。が又高く持して下らず彼等何するものぞと云ふ意氣軒昂を伴ふにちがいない。それが惡いとか何とか元より云ふのではない。たゞそのうちに心理的ナポレオニズムが若干でもありとすればそれは案外つまらないものである事を僕は僕の立場乃至肌合ひから感ずる計りである。同志村松正俊が提唱する「無價値の哲學」の如き又僕が拙劣ながら說く所の「無名讃仰」の立場から未知の末弘君を忖度して云爲するのは失當であり無禮かも知れぬが、僕の映影する末弘君の素描にたいしてはそんな事も云つてみたらと思ふ若干

の感觸があるのを否定しがたかつたのである。

若し夫れ、末弘君の法學殊に民法に關する學的業蹟に至つては無學の僕に何が云へやう。その他の論稿についても略ぼ同樣である。それに僕は同君の專攻以外のと云つても專攻と、連絡はあると思ふが名著である所の「噓の効用」の如き未だ拜見してゐない。からしてその方面こそはこれを例へば高柳賢三君と云つたやうな人に云爲して貰ふより外はない。

微力をもつてしてやぶれかぶれのデスペラな打突からやうを敢て現社會組織の上に試みやうとする僕等は箸にも棒にもかゝらぬ愚劣さであるかも知れないが、それは論外としてわが末弘教授が僕等に知らない多くを教えてくれ又多少とも僕等の立場に與して有力に物を云つてくれるのは有難い。しかし、末弘君の思想的立場なるものは何であるのか、僕等はそれは社會主義的であるものとして取り容れてゐる。少くともそう思ひたい好意をしつてゐてくれてる事に感謝をしてゐる。末弘君が社會主義者だと名乘つたことのありや否やを僕は知らぬ。又別に名乘つて頂かなくてもいゝ譯でもあらう。內容的傾向と態度とで澤山である。が、僕の失禮な申分を云はせて貰ふたらば彼にはより多く改良主義的氣觸を感じない譯には往かぬ。しかしあの位の社會的地位を保つ人にはそれもいゝ。

賀川豊彦君末弘嚴太郎君は方面こそちがえ有名で、有能で、人氣があつて、仕事がしやすく且つ出來もする。時の人たる點に於いて雁行的であらう。地震後彼等は手を取り合つた。世間は感謝したやうだつた。少くとも新聞は喜んだ。僕等は何も出來ないものだから、いゝ事をやつて呉れると蔭ながら敬意を表してゐた。平靜にして理知的な心の狀態では（そうした事は僕の常態であるが）特にそう思ふ。しかしどうかするとデスペレートな激情に理性が曇らされて混沌たる痛憤を今のこの社會と社會組織とに感ずるホンの折々がある。そのときは或は僕等の社會病的徵候かも知れない。そんな瞬間にはこんな社會を愛乃至或程度の救濟感で撫でさするやうな末弘、賀川君達の仕事がいやなものに見える事さえある。そうした場合無暗と狂激になつて來る兩君などから見ればあまりに無知な實行力のない小兒病とするかも知れない。しかし時々にしろそう感ぜさせるのはあながち僕の病症から計りでもない。全くもてあます、憂鬱にしてはあまりに激情的な嫌惡を社會から浴びせかけられるのだ。とてもじつとして居れない精神の擾亂が來る。その時である、何もかも毆きつけてやりたい狂熱に我々を導こうとするのは。その時計りである平生尊敬してゐる兩君なぞの仕事にさえ「よくあんな事がやつて居れるなあ」と思ふ。そう感ずる事が

時々あるからと云つてそれは兩君から割引を要求しやうとするのではない。何故ならば僕の平靜なる精神狀態ではそうでないのであるから。

　末弘君は今の所學者である事は以前と同樣であり以前とちがつたところはより社會的色彩をもつて來た事である。書齋や研究室で彫像の如く冷靜に民法の法理を計り研究する人ではなく街頭に眼を注ぎ時としては步を進めて社會的批判と行動とをもする。僕の考えでは彼をそうさせる事は彼の熱情からである。彼は意志的に强いばかりでなく熱情的にも强い所がある所爲だ約言すると彼は Strength of tehe Strong だ。然るにこの後に僕の許に遊びに來る學生には講堂に於ける大學第一の花形教授の聲望は講堂外に於けるこの教授の社會的聲望と反比例的に遞減するとか、教授が社會的關心に銳敏にして社會的表現の機會を把握するのに巧みだからとかと批評するものがないでもないに至つた。僕はそうであらうと相槌を打ちはしない。そうは思へないからである。一面から云へば彼が書齋より街頭へ、內包より外延へ進んだことを僕は歡迎する。全く頭街へ出てくれたらば更に贊成する。何處にあつても著顯にして內容的な仕事をするであらう。末弘君の犯しがたい强みはそこにある。彼の意思力と熱情とは蓋し性格的特色で若し彼が街頭の階級戰に立つとすればより知識的なラツサーレであるかも知れない。

好箇大學教授だ。大學生は感謝していゝ。しかし大學教授はいやな事には官吏である。學問は自由ではありそれに妥協するやうな末弘君では斷じてないが無形の若くは意識下の思想拘束は少しもないであらうか。少くともその主義を敢然として鮮明確立する上に於いて。で、もしもわが末弘君があの意思力と頭腦の明敏と熱情とを以つて大學教授でなくして街上の人間ならば彼の勞働法制にたいする意見でも特に農村問題に關して彼は現在あるがやうなものに止まらず明快は更に深刻となるであらう。それ丈の事は僕は彼に就いて痛感する。それは僕の誤解だらうか。

師外の師として

蠟山政道

人には師外の師といふものがある。一生の儀表とか人類の師とか、そんな大きな形容詞の附いた意味とは異ふが、自分の直接に教へを受けた先生ではなく、又その專門が同一でなくとも間接にいろ／＼多くを學ぶ所ある人を持つてゐるといふ程の意味である。私は末弘博士に直接教壇から學ぶ機會を有たなかつた。私が始めて朱門に學んだ大正六年の頃博士は病歿された川名博士の後を受けて當時の上級生に債權各論の講義をされてゐたと記憶する。非常に面白い講義だといふことを聞いたけれど、未だ法律の法の字も充分呑み込めない時のことであり、且つ法律學に餘り熱心でなかつた私は、特に博士の講義を聽きに行くことをしなかつた。その翌年の春には、もう博士は留學の旅に上られて、我々が卒業するまで歸朝されなかつたので、私は學生時代に教へを受ける機會を遂に有たなかつたのである。かやうな譯で、直接に教へを受ける機會を有たず、又法律學に智識のない私が、今回末弘博士を師外の師と思つてゐるのは、恐らく本誌の讀者としてなど、博士の歸朝後發表された諸論文を通して、學ぶ所多かつた爲めなのである。法律學者としての末弘博士を專門的の立場から論評する資格は私には無い。

それならば、博士の人物や性格や行動などに就いて、その印象を記すことが出來る筈であるけれど、合憎私にはさういふ表現能力がない。曾て室伏高信氏が、博士に就いて氏一流の筆で、その印象記をかゝれたことを記憶してゐるが、殘念なことには、私には同氏のやうな筆がない。それに印象記等は初對面の時に得た感じを書くことの方が寧ろ容易であつて、同じファカルテイに屬してゐる關係上、度々その謦咳に接するので、最初に得た印象も後から得た夫れで、漸次に中和されて行つて了つてゐる今日では、反つて書くことが難しいのである。

そこで、以下博士に就いて私の感ずるまゝを書くことは、公衆の一人として、博士の我國の思想界に於ける活動の意義に就いて思ふことどもに過ぎない。比較的近い所から博士を觀察し

得るといふことが、感想の客觀性を得せしむる所以となるや否やは、私自ら保障し得ない所だが、希くはさうありたいと願つてゐる。

末弘博士は、現代日本の社會思想界の第一人者である。餘りいゝ言葉ではないが、よく世間でいふ人氣のある學者である。その事實の價値判斷は暫く別として、その事實の出つて來る所が何であるかは、靜かに考へていゝことである。多くの人が長い期間に亘つて、或る文學者なり思想家なりの作物を愛する、といふことには、何か相當の理由が無くてはならない、とゲーテも、ユッケルマンに語つてゐる。人氣學者や流行作家などに對して、賛するも貶するも、何れも今少し靜思して見ねばならぬ所があるであらう。

さて、私は自分の問題に立歸つて、何故に末弘博士は我が社會思想會の第一人者であるか、何故に人氣があるかを考へて見ねばならぬ。私の考へ得た所は、多くの人の考へる所と異るかも知れない。且つ極めて平凡であるかも知れぬ。それは、博士が新しい、改造思想の宣傳者であるといふ點よりも、寧ろ博士自身がその改造さるべき古き思想の完成者であるといふ點である。換言すれば、古き思想の行詰りを自ら體驗したといふことが、寧ろ新しき思想の創造者たることよりも、世の人々の暗默若しくは無意識の信頼を來してゐるのであらうと思ふ。この意味に於いて、博士の大著『債權各論』こそ、我國に於ける註釋法學又は概念法學の好箇の記念像であると共に、恐らくは博士一生の業蹟を支配しやしないかと思ふ。同書に於いて博士が、あらゆる許されたる方法を應用して、法規の解釋を試み、妥當なる結果の捻出に苦心された事實を顧みる時に、始めて歸朝早々發表された『民法改造の根本問題』等(『嘘の効用』所載)の意議が出て來るのである。かくて、老いたるも若きも、古きも新らしきも、各自の立場より末弘博士一人に對して關心を有ち得る。

しかし、此に他の解釋がある。而して、それは實際に於いて新舊兩者の側から投げられたる批評であつた。即ち博士の思想には飛躍が行はれた。そこには渡る可からざるギヤップがありやしないか。復び逆轉して了ふ可能性がないかといふやうな種類のものである。しかし、事實は漸次にこれらの批評の必ずしも當らざることを證明しつゝある。なぜなら、博士の思想は、博士の個性と共に進む。その性格と離れて存在するものではない。博士の思想を急進的に見るにしろ、反動的と見るにしろ、苟もさやうな批評をする爲めには、今少しく沈着いて博士の人

格と共に觀察する必要がある。成程博士の言論には、往々にして急進反動の兩面を有してゐる點がある。これは事實でつあて、私自身も最初はその眞意の補足に苦んだことがあつた。例へへば自由法運動に對する博士の立場には、或時は右と言ひ、或時は左と云ふ場合がある。又國際平和運動に對しても、或時は反つて國家主義を強調される場合がある。若し、それらの箇々の場合の一斑を拉し來つて博士の全貌を推さんか、博士は或人よりは極端なる急進論者と見られ、或人よりは、反動論者と目されるのは決して有り得ないことでない。しかし、世界は矛盾に充ちてゐる。人格も亦單純ではない。博士の場合に於ける矛盾は如何に考ふべきか。これに就いて私は次の三點を考へたい。その一は、博士の性格が、從つてその表現が、非常に精神力に溢れてゐることである。我々は博士の文章を讀むとき、その論旨の如何に拘らずいつも力強い感動を受けないことはない。このことが、その時の調子如何によつて、讀者に一方的な印象を與へるのではないかと考へられる。その二は、博士の頭腦が非常に聰明であるといふことが、反つて事物の兩極を覺知せしめ、單純に且つ不斷に一方面にのみに着眼せしめない結果となり、博士の言論に二方向が生じて來る事である。法律の社會化といふやうな新傾向に伴ひ易い弊害などに對して、博士が口を極めて攻撃してゐるのを讀んで、博士を以て反自由法論者と爲すならば、博士の眞意に非ざることは言はずして明かであらう。その三は、博士の常に念とする所が現實の問題を離れてゐないといふことである。博士は決して感傷的理想論者ではない。稀れに見るプラクチカル、マインドの所有者である。この現實感からして、博士の發明工夫も生るれば、建設的活動も流れ出すのである。複雜にして變化多き現實に即して行動する時、そこに外面的に論理の一貫を保ち得ない場合があり得るのは當然である。

私は右の三箇の點から、博士の思想的發展に對して爲されたる批評の必ずしも當らざる所以を說いたつもりである。このことは、博士の思想のみに就いて言へることではなくして、博士の行動に對しても言へようと思ふ。博士の巴里講和會議に於ける活動や、震災當時から今日に至るまでの大學內外に於ける活動の源泉なども、恐らく事に當つて種々の形式をとつて發現する博士の內面的論理の所産だと思ふ。博士が福田博士と共鳴されたり、賀川豐彦氏と行動を共にせられたりしたといふ話も、畢竟この二氏が博士と同じ樣に、我國に於ける稀れに見る精神力の旺盛な、しかも聰明な、そして現實的な心意の所有者であるからではあるまいか。

私は、博士が舊き學問と陳き思想の忠實なる研究者より一躍して新らしき學問と進める思想の皷吹者となれる内面的連絡に就いて語つたが、未だ最も重大な問題を殘してゐる。それは新らしき學問と進める思想の單なる皷吹者としてではなくして、それの着實なる建設者として、如何に進みつゝあるかの點である。博士が如何に斯の方面に自己の天分を自覺しつゝあるかは、『噓の効用』の序文にも言つてゐるやうに、公衆に向つて話しかけるよりは、研究室に於いて專問的に研究する方に力を注ぎたい、といふ氣持を出されてゐるのがそれである。私は斯の方面に於ける博士の業蹟に就いて多くを語る資格のない者であることは既に斷つてをいた所であるが、我々門外漢から見ても、恰も各藝術家の作品が除ろに完成されて行くのを觀てゐるときのやうな感じがないでもない。博士は凡そ三箇の方面から新しい法律學の建設に從事されてゐるやうである。第一、法規の整備でする。最近學生と協力して、『民事法規集』なるものを出版されたが、從來兎角六法全書といふ狹い法規體系だけを取扱つて滿足してゐた傾向あるに對して、あらゆる關係法規を蒐集整頓することに努力されたのである。第二は、判例法（ケースロウ）の研究である。この研究は、末弘博士の發案でもなければ又その實行にかゝるものではない。寧ろ牧野博士などが、この點に於いて先驅者としての功勞が多いとのことである。しかし、我々が判例研究なるものが、動かすべからざる勢力を有つて來たと感ずるに至つたのは、博士の主唱によつて判例研究會が設けられて來てからのことである。判例研究と云ふことが法律研究に於いて如何なる地位を占むるべきものなりやに就いて、何等知る所なき我々も、そこに驚くべき多產的なる豐饒の沃野が發見せられたることを法律學の發達の爲めに祝すると同時に末弘博士の努力に思ひ及ばざるを得ぬ。

第三は、社會現象の法律化である。重大なる社會現象にして、從來法律體系より逸せられ、從つて判例にも上らざる幾多の事例がある。これに對しては、學問的にこれが法律化を試みる必要がある。博士の着眼が此に向つたのは當然である。例へば勞働組合を中心とある勞働問題、小作問題を中心とする農村問題、及び市街地に於ける借家借地を中心とする住宅問題等これである。これらの新らしき問題を法律的に構成するといふ言葉は、末弘博士出づるまで殆んど何人によつても充分抱括的に試みられてゐなかつたのである。法律社會學の名のみ聽くこと久しかつた我々も、實際上その何たるかを見るを得なかつた。秀れたる法律技術能力と敏しい現實的感觸を有する博士の出づる

までは、我々はその内容を知る由もなかつたのである。勿論この方面の建設は、その事業未だ半途にも達しないであらう。しかし、それは時代と共に進むべきものである。以上三箇の方面より着々として進みつゝある博士の業蹟が完成するの日は何時であるか、又如何に完成するかは、今に於いて豫斷の限りでないが、我々はその努力を續けられて行く博士の姿を見る丈けで、充分敎へられる所がある。

師外の師として學ぶ所多い博士に對する私の感想は、勢ひその長所のみを擧げる結果となつたやうであるが、それは博士の思想學説に缺陷短所のないことを意味するのでは決してない。しかし乍ら、現代日本の要求する、しかも得易からざる人材として、博士の有する長所の出つて來る所は、我々が思ひを潜めて考ふるに値する所であると思ふ。博士の土地國有問題に驚きて共産赤化を叫ぶ人も、又反對に博士のセツトルメント事業に對する熱心を見て改良主義と笑ふ人も、餘りにその論旨が單純であり過ぎる。出來る丈け多面的な人格個性の全豹を把握して、その眞相に徹すべく努むべきではあるまいか。この一片の感想、單なる褒貶詞に終らざらんこと、私の衷心より願ふ所である。（一三、九、一一）。

浮世繪概論

田中喜作

陽春の一夜であつた。長崎に客となつた私は隱れたる篤學の士古賀十次郎氏（知る人こそ知つてゐる氏を隱れたる學者とすることは決して應はしくないかもしれないが）を其の門に叩いて崎陽に關する文獻に就いて教を乞ふたことがある。坐談會、德川氏鎖港の令に及むだとき、氏は其の燃ゆるが如き鄕土愛から、此の悲しむべき政策が三百年の長崎を徒に萎靡せしめ、其の市人の心をも疲憊せしめたばかりでなく、それはまたやがて日本文明の歴亂たる開花に最も呪ふべき壓迫を加へたことを痛論されたことがある。無論こんな論旨そのものは古賀氏によつて始めて知ることではないが崎陽の客舍に異國的な情調を呼吸し、其の市人の温柔な內氣らしい情致に接した自分にとつては、このアンツウジアストの言葉は、また新なる聲のやうに自分の耳を聳てしめ、今も尙江戶三百年の文化を想ひ出づる毎にその物暗い火影の一夜を想起するのである。私は今更にこんな問題を抽き出して鎖港の得失を說かうとするものではないが、高遠な文化に對する愛惜から、無論私も亦過去の消極的政策を呪はさるを得ないものの一人であることは云ふまでもない。然し翻つて考へると、たとひ此の悲むべき消極主義が我々の祖先の文化を狭小な一國家の藩蔽裏に閉ぢ込めたとしても、他面にはどれだけ內の醱酵と爛熟とを寄與しただかを想ひ到るとき、また更に新なる喜びを感ぜさる得ないものである。

曾て日夏耿之介氏も明治の詩史を編むに當つて言及したことであつたが、外來の思潮の送迎に日も足らざる明治五十年の文化はたゞ其の蕪雜粗笨なる思潮の連續に掩はれて、我々は不幸にして藝術の方面に一人の偉才をも仰望することが出來ないにも拘らず、彼の三世紀の藝術史はこの五十年を一期として逆に如何なる時代を區劃するも其處には百代に傳ふべき天才者の多くを發見すると共に、其の無數の所產は我々をして讃仰せしめるに足るものがあることを感ぜしめる。私が今玆に說かうとする浮世繪版畫の如きもまた彼等の間に輩出したる多數の天才者の一群によつて今日に遺存され、彼等の時代の文化を紅紫とりどりに彩つてゐるものであるばかりでなく、また實にかの不可思議なる政策によつて釀成されたる不可思議なる民衆の間に、繚亂と咲き亂れた不可思議なる文化の花に外ならない。我々にとつてはかの鎖港の得失が如何にもあれ、それは我々の關知しないところで、たゞその結果がかくの如き內の爛熟を齎して、この神秘なる藝術を形成したことを喜べば足つてゐるのである。また彼等の美意識の上に健不健を說く人があるなら、それも亦論者の自由に任せよう。我々はたゞ彼等天才者が彼等の環境の上に凝視して止むことの出來ない藝術的衝動から、我々に遺した藝術美のユニックなる一面を喜べば足つてゐる。

然し不幸にして今日浮世繪及び浮世繪版畫に關する概念は其の多くの研究者の間にも正當に解釋されてゐないのを悲しまなければならない。たとへば本誌七月號所載黑田源次氏の『日本版畫に關して』の一篇（たとへばとして特に黑田源次氏を擧げることは、甚だしく不穩當ではあるが、最近の例であることと、私がこの一篇を書くべき動機の一半をなしたものが氏の論文であつたことから止むを得ないことであつた）に氏は『浮世繪は世間からやかましく言はれてゐるほど、一般に理解せられてゐると思へない』と云はれてゐながら、それを通讀した私には其處に尙多くの皮相の見解があり、概念の不明確があることを感ぜざるを得なかつた。私は今こゝに氏の所說を反駁するの意志は毫も有してゐないこと

ら、その一つ一つに論及することは避けるが止むを得ざる一二の問題に就いては氏の所說を引合に出さなければならない。

浮世繪とはそも／＼何の謂ひか。この疑問に關しては已に早く種彦の『柳亭記』に考證せるあり、其の他當時の諸家も亦、屢、此の言葉を取扱つてゐるが、これを繼承して近時の浮世繪研究家の間にも無數の記述がある。而も其の何れもが黒田氏と共に浮世繪とは『當世風俗繪のことを意味した』ものであるとしてゐるのである。私は曾て十數年前に京都に發行された同人雜誌の上で、此の言葉に對する考證の一半と私の見解とを發表して『狹斜趣味の繪畫、或は遊戲生活の繪畫』の意であると斷定したことがあるが、爾後諸家の所說の間に、是れに近い見解を發見したのはただ津田左右吉氏の『文學に現はれたる我が國民思想の研究』（平民文學の時代上卷）のみであつた。私はこの名稱の起源と其の內容の變遷とが浮世繪と云ふ概念の上に主要な關係を持つてゐると信ずるから、餘りに煩瑣な考證に墮するとしても先づ是れを概說すべき必要がある。

先づ浮世と云ふ言葉は云ふまでもなく、憂き世の義で盛唐の詩宗が『浮世如夢』と云つたやうに、上代に於ては何れも厭世的意義をとつてゐたが室町時代に入つては、今樣或は世間の意に使用された例を發見する。種彦も已に文明十二年の太田資持の『平安紀行』中に見る『みるたびに面白ければ富士の根の雪は浮世の姿なりけり』の一首をこの用語例の最も早きものの一つであるとしてゐるが、當時にあつてはこの意義をとつてゐるものは諸書に散見するところであつて

花さけば浮世の人になりはてゝ、　宗祇　（『連集良材』）

の如きがあるが、心敬僧都が『老のくりごと』に『浮世にいかばかり器用の人生れはべるとも』と云つた用例は德川期に入つて漸く其の意義を變化せんとする徑路を明にすることが出來る。また『美人くらべ』に『此の姫の外うき世に迎

へんと思ふ人なし』と云ひ『きんじやむこ』に『浮世人』と云へるも共に適確な年代を明にすることは出來ないが恐らく當時の一例であると信ずる。爾來徳川時代に入つては已に早く『恨之介』に『心の慰はうき世ばかりとうちしげる』『遊山ばかりと聞えける夢のうき世をぬめろやれ』と云へるあり『そゞろ物語』には『今様の一節かや夢の浮世にたゞ狂へ』『心ざま優にやさしき女房ども湯よ茶よといひて持ち來りたはぶれうき世語りをなす』と云ひ寛永二年『めざまし草』には『この比の浮世わたりの若法師受戒の沙汰はさもあらで薄紫の小袖きて』と云ひ、また是と時代を同じくするものと想像せられるものでは『御船唄留』に『浮世ぬめりの伊達染小袖』『あら面白の浮世かな』など云へる如く何れも已に遊蕩的意義を多分に含有するもので親重撰『はなび草』に『うき世狂ひなどは述懐にあらず戀の世にあるべし』極彦も是を擧げてゐるが本書を寛永十三年の刊行としてゐる。然し本書には寛永五年の刊本がある。）と云へる如きは明に是を斷定してゐるものである。そしてこの浮世狂ひの言葉は當時まではすべて女に戯るゝことを指したのであつたが、寛永以降遊廓の確立されてより以後は遂に一轉して慶安明暦の頃より遊里狂ひを意味するやうになつたことが想像せられるのである。

爾後浮世繪派確立の時代に亘つて尚多少の例證を擧げると

あき人のよき衣きて浮世狂ひの小歌ずき（慶安二年吾吟材集）

または浮世の人若し惡相惡事を知らずして買ふ人は笑止なりと思ひての所謂なるかや。（明暦二年まさり草）

狩場の鹿はあすをも知らぬ、たはぶれ遊べ夢の浮世に（寛文二年、吉原はやり小唄總まくり）

島原に住みなれて浮世人の風流（土佐節お國かぶき）

申し法善様、今宵はわしに此手若さまをかりの浮世になしたい（元祿十三年、御前義經記）

過しころまで都の西うき世町につとめし鹿戀女郎（貞享年間、二休咄）

野も山も人も獸物も女色でまろめし浮世、このたのしみあらばこそ（寶永二年、新色三ツ巴）

等の如く當代の好色本浮世草紙等を繙讀すれば無數に散見するので、まゝ夢のうき世と云ふ慣用句を踏襲はしてゐるが一つとして『いとゞ心の浮かるゝは憂きもつらきもわんざくれ』（御船唄留）と云へる放縱な遊蕩の痴情を表現してゐないものはない。無論初期時代より貞享元祿に下る間に浮世の二字を冠した新なる器財の名稱は津田左右吉氏の著述に擧げられてゐる樣に無數に存在し、其の一半は必ずしも情痴の世界にのみ關せずして單に今日所謂新案を意味し、また今樣風を指してゐるものも多いことから見れば、上下を通じて一面には當世風を意味する慣用例も並存したことは云ふまでもない。そしてこゝに浮世繪を云ふ用語は果して何時の頃から云ひ慣はされたことであるか、其の適確なる年代を明にすることは出來ないが、文獻に現はれた最初のものは『好色一代男』（天和二年）の『扇も十二本祐善が浮世繪』とある以上に今日まだ發見しない。然し寛文以前と思はれる繪畫に浮世正蔵の款あり、浮世又兵衞、浮世人物の繪卷等の語があつたことを思ふと、たとひ最後の二つの語例が當時の文獻に發見せられるものではないとしても、『浮世人物の繪』と云はん程の意味で浮世繪と云ふ新造語が、此間に發生したろうと想像することは決して不當ではなかろう。爾後『女用訓蒙圖彙』（貞享三年）に『浮世繪の逸物吉田氏』あり『江戶鹿子』（貞享四年）に『浮世畫師菱川吉兵衞』あり、また黑田氏が最古の用語例の一としたる元祿二年の『江戶圖鑑綱目』等があり、以下漸くこの新造語の多くの用例を見るのであるが、上記のうち祐善が浮世繪と云へるが如きは、單に今樣畫とのみ解釋すべきものの樣でもあるが、多少具眼の士が當時の社會の淫蕩なる背景を考慮すれば、『小氣味よき西川の浮世繪』と云つたのと等しく、是れも亦狹斜趣味の意を含有してゐることが明かになる筈である。

私は尚この浮世繪と稱されたる藝術が如何なる社會的背景の上に形づくられたかは後段に說かうと思ふが、要するにこゝには如上の多くの慣用例から『浮世』は一面に遊蕩を意味し、狹斜を意味してゐるものであることを明にせば足つてゐるのである。而も多くの研究者が今日までこゝに至らなかつたのは旨として寛文以降の華麗にして淫靡なる時世粧を考慮せずして漫然彼等畫人の作品を味解しようとすることから起る誤謬であり、延いては多くの研究者の間に說かれた如く『土佐派の畫卷も明治大正の風俗畫も何れも共に浮世繪と稱すべきである』とせる不徹底な解釋に陷らなければならなかつたのである。然し事實は決してそうではない。土佐の畫卷も明治大正の風俗畫も各、其の畫人の表現せんとしてゐる美的要素は其の質に於て雲泥の差が（價値の問題ではない）あるので、此の兩者の差異を明瞭にしない以上到底浮世繪の眞價を味讀することは出來ないのである。曾て『傍廂』の著者は『浮世繪師と云へるは如何なる故ならん。時世繪師とこそ云ふべけれ。何も憂き事もなくては浮世とは云ふべからず』と憂字の本義に拘泥して自己の無識を暴露したことがあるが、如上の論者の如きは要するに是れと五十步百步の相違に過ぎないのである。

私は以上に於て餘りに不急の詮議を敢てした樣ではあるが、こゝに興味のある事實は、かく浮世なる新意義が江戸の天下と共に發生して、漸く年序を追ふに隨ひ其の意義を狹縮し明和以降の洒落本全盛期、即ち版畫技術の高潮時代に、遂に『洒落世』（安永七年刊一事千金）の造語が生るゝに至つて益、情痴の世界に彼等の全部を投入したことと、かのあやしき江戸文明の一面との密接なる交涉であつて、こゝに此の新造語が生るべくして生れ、また彼等の特異なる藝術が生れざるを得ずして餘りに當然に生れたるを見ることである。然らば彼等の藝術は果して如何なる世相を背景として生れたか。私は已に八月號の女性改造に江戸文明の一側面と浮世繪との交涉の一端を書いたから多少重複の嫌はある

が、今、如上の新語の內容の變遷を說いた序次としてどうしても是を再びしなければならない。

實に江戶三百年の文化は其の不可思議なる熟爛によつて、あやしくも我々を悲しましめ、また我々を喜ばしめる。前代即ち戰國時代より豐臣氏が海內半を平定するに至るまで絕間なき兵戰は國を擧げて寧日なからしめたが、この間に於ける莫大なる資源がどうして充たされ、またどうして散ぜられたかは知ることは出來ない。然し多少の物資は當時の都市と見るべき京都、堺等に齎らされたとしても、彼等の頭目が各自守すべき必要から狹小な經濟單位が保持され、是れと共に一國一城の下に漸く地方的都市の萠芽が發生したことだけは想像することが出來る。（この兵馬倥偬の時代である。干戈の間に風流韻事を弄びたる武將や、僧坊淨地に世を避けたる隱者によつて、何處も世を憂きものと見て浮世が當代の意をとつたのは。）然るに慶長元和を經て天下が德川氏に依つて統一せらるゝに及んで、其の經濟單位は急激に膨大した。一面に地方的小都邑は漸く其の都市的色彩を鮮明にしながらも、中央集權の下に江戶は漸く大江戶の誇を形成し大阪は橫の地の利と竪の人和とを得て商業都市として異常なる發達を成し遂げた。之に加ふるに豐臣時代より激增したる金銀の產出は德川氏に至りて益々增大し、官庫は是によつて富み諸侯家臣また其の餘慶に浴し、特に大藩に至つては前代より蓄積したる莫大なる資財を擁してゐた。農工商の下層階級は云ふまでもなく、武人も亦已に兵馬に倦んだ時代どして、朝覲公事の失費が諸侯を苦しめたとしても『主盟控制の權のあるところ、是れを戰爭の難に比すれば九牛の一毛』（『價原』）であつた。四民は相共に泰平靜謐の世を謳歌した。是と共に奢侈逸遊の風先づ諸侯に發して四海に彌漫したことは云ふまでもなく、かの慶長九年を中心とする前後が殆んど金銀の產出と踊、歌舞妓の年であつたことは諸書に散見する所である。本佐錄の著者が武人は『公事の理非、決斷、又弓馬、軍法、兵法のさたなどを可致、

一藝をもおしへべからず、女雜談遊びばなし、あきなひ咄しなどする者あらば、横目を付て近所へはよすべからず』と戒しめたとしても、尙『萬人を撫育して民、君に思ひ付こと父母の如くならば、其後は美女を愛し食に八珍を調へ金殿玉樓を好ても、天に不背して子孫さかふる也』と云はなければならなかつた。諸侯は先づ是を事實に行ふた。その上幕府及諸侯の餞禮的社會的の諸施設は自ら増大して、工商の富を增殖する因をなし、四民の生活程度の急激なる膨脹を成し遂げた。此の事實は慶長時代の米價が諸書に散見するところより平價を求めると銀十五六匁に當り、初年には殆んど十匁の時代もあつたものが、爾後二十年、寛永の末期には已に三十五六匁に及んだことが如實に物語つてゐるのである。

また遊里の興隆は大江戸の都市的施設が漸く成るに及んで、慶長の末、葭原開基の許可と共に驚くべき發展を遂げ、一是れにつれて歌舞俗樂が自ら興起し、江戸は漸く歌舞と美女との巷とならんとしたことは成書が已に語るところである。已に『恨之介』に江戸俗文學の濫觴を見た時代は、前代兵馬の世に次いで、桃山の貴族的豪華を經、漸次泰平に歡化したる時代として、嘗ては單に世間を意味した浮世の言葉が當時の物の本に顯はれて、漸く其の内容を縮少し遊樂的色彩を加へたことは餘りに當然のことであり、また當時の貴族が莫大なる富を擁して、各、豪華を誇つてゐた時代に新なる華麗の世の樣を彼等に近い畫人等をして繪かしめたと云ふことも亦餘りに當然のことである。土佐、狩野の畫人等が當代に多くの時樣の風俗を遺したことは、即ちこの要求によつて生れたもので、岩佐又兵衛が家光の徵に應じて江戸に出でたと云ふことも亦、彼等貴族の間に此の種の畫趣が喜ばれたことを語るものである。從つて當時の浮世繪——今日より見て以て稱する——は旨として貴族が公私の興宴、座右の賞玩に供されたものであるだけ、其の畫材が新興の濃艶なる世相を寫してゐるとしても、また自ら其處には遊樂的氣分の多くを包むでゐるとしても、まだ寛文以降の淫蕩な

る下層階級の鑑賞に入つたものでないだけ、其の所作は何れも單に日常生活の諸方面を直寫してゐるに過ぎないもので、即ち師宣に出づる浮世繪と上代土佐の風俗畫卷とを連繫するものである。

然しこの派の始祖菱川師宣の出現を見るまでには、もう決して長い期間を要しなかつた。寛永以降二十年、寛文初に至る間は一面に衆道と旗本奴との時代であつたが、また山谷の遊里に白馬銀鞍の貴公子の多くを見た時代であつた。それのみではない。已に初世以來急激なる奢侈の增大と諸種の社會的施設の勃興と、また政治的策謀とは幕府及各藩の資財を傾けしめて漸次其の窮迫を暴露せんとした時代である。

彼等の莫大なる資財は爾來果して何人の手に歸したか。云ふまでもなくそれは町人階級特に商賈であつた。『商賈に素封の富を有すれば千里控掣の權半は已に其の手に歸す』と云へる『價原』の著者の時代を待つまでもなく、彼等の富は異常なる膨張を遂げ、彼等の奢侈は漸く增大した。彼等の自覺は彼等の富と共に漸く『天下の町人』に醒めんとした。『武士たるものならでは通はざりし』(墨水消夏錄) 吉原の時代は過ぎて、天下御免の歡樂境として山谷は彼等のためにも存在した。初世以來の文運興隆が生活の安定と富の增殖とに刺戟せられて、早く低級な (幕初の漢籍飜刻の盛行に比して) 出版の多くを見たが、こゝに至つて吉原關係の雜著の多數が版行されたことは此の半面を最も能辯に物語るものである。當時幕府は町人階級の奢侈逸樂の氣風に面を顰めて、屢、令を發し風俗を戒しめたが彼等の自然の慾望は到底遮ぎることは出來なかつた。其の上幕府の政策は四民の性的慾求に對しては頗る寬大であつたらしく、秘戲の畫冊の板行が漸く多きを見るのも此の時代である。

菱川師宣は實にかくの如き世相のうちに生ひ立ち、かくの如き風潮を目にして彼自身の美意識を陶冶したのである。彼の作品の間に今日遺存するもので最古のものと信ずることの出來るのは寛文元年の『高屛風くだ物語』であるが(八

月號アトリヱ所載、拙稿菱川師宣參照）是に次ぐものと信じられる『好色伽羅枕』は彼が公刊せる多數の秘畫の最古の一つである。而も此の一本に於て最も興味のある事實は前者に其の署名がないにも拘らず、本書には自ら立派に署名してゐることで、此の事實は當時の社會狀態の如何を語るに充分である。

そして寛文より延寶末に至る時代は天下の富が完全に商賈に歸した時代であり、是と共に一國經濟の基本としての米價が幕末に至る百五十年の平價即ち銀六十匁に達した時で、大江戶の文化其の極に達し、所謂俄分限の所在に生れ、四民の豪奢また是れにつれて、益々昂進した時代である。寛文十年に初版を出し延寶九年に再版した了意の『浮世物語』に『まして世の中のこと何ひとつも我が氣にかなふことなし、さればこそ浮世なれと云へば、いやその義理ではない。世に住めば何につけて、よし惡しを見きくこと、皆面白く一寸先は闇なり、何んの絲瓜の皮、思ひおきは腹の病、當座々々にやらして、月雪花にうちむかひ、歌をうたひ、酒をのみ、浮きに浮きてなぐさみ、手前のすりきりも苦にならず、しづみいらぬ心だての水に流るゝ瓢簞の如くなる、これを浮世と名づくるなりと云へるを、それ者は聞いて誠にそれ／＼と感じけり』と云へるに至つて彼等四民が如何に當代の思潮を形づくつたかを知ることが出來るではないか。若しそれ延寶末或は天和と思はれる師宣（師宣と信ぜられるが多少の疑はある）の秘畫册『花の木がくれ』を開いて、其の序文に『世の人の手本にもなれかし』と本書を板行する旨を讀んだ人は、恐らく今日よりしては到底想像も及ばない程淫蕩な時代相を有してゐたことに驚くであらう。畫者は果して何の目的を以てこの秘畫册を描いたのか。無論それは繪畫そのものの手本であるには相違ないが、かく憶面もなく序文に明記し、また『好色伽羅枕』の如く署名を附して畫者を明にしてゐることなどは、實に師宣によつて始めて行はれたことである。若し或る論者が『世の重寶として今開板之者也』と云ひ、『今の世までも鐵の箱に入とかや』（伽羅枕）と云ふ一句に戰國を去ること遠からぬ時代として一面必需

の品であつたと云ふものがあるなら、私は寧ろ其の蒙を啓はうと思ふ。必需のそれ自體が已にエロチズムの顯現であることは云ふまでもなく、それ以上に彼等は故らにそれに假托したのであることは、當時既に猥雜なる好色本の流布があり、また其の價値は兎も角、西鶴其の他の淫靡なる浮世草紙が將に生れんとしてゐることによつても知ることが出來る。

然しこんな浮蕩な一面が延寶の世相の裏面に醗酵してゐたとしても、この時代は或る意味に於て江戸三百年の全盛期であり、偉大なる元祿も尚この若々しい樹脂の結晶に過ぎないのである。

爾來百五十年、延寶末に已に一石六十匁に達した米價は、化政期即ちもう內憂外患が交々起つて德川氏の覇業が已に命旦夕にせまつた時代に至るまで殆んど昂騰を見なかつた。無論そこには金位の變動により、また年の豐凶によつて、天明七年の如き『米價過二千錢』(栗山文集)と稱され『江戸、兩に一斗五六升』(津田信弘、見聞續集)と云はれた時代もあつたとしても、要するに文政時代の平價は僅に六十三四匁に過ぎなかつたのである。まだそれのみではない。この六十匁と稱する延寶期の銀貨幣の品位は雜分二十を交へてゐたのに對して、文政期の文字銀、新文字銀の品位は純分四十六乃至三十六に過ぎなかつたので、即ち五十四乃至六十四の驚くべき雜分を混入してゐたのである。無論經濟狀態の低級なる當時にあつては貨幣品位の等差が、今日想像する程物價に端的に影響するものではなかつたらうとは思はれるが、然しこの事實を考察すると、米價は事實に於て少くとも三四十匁に下落してゐたものと見るべきが至當である。かく一世紀半の歲月を經て米價が半に近い下落をすると云ふ、こんな不可思議な一國經濟の狀態が古往今來何れの國に求めることが出來るか。無論そこには、かかる不可思議なる狀態の由つて來るところをも考察する必要はあるが、そこには肯定と否定との多數の條件があつて、其れ等が互に複雜なる第二次的構成を形づくる上に、其の文献にも乏し

く、是を適確に批判することは出來ないが、此の事實だけを以てして已に私の云ふ不可思議なる文化を説くに充分である。

此の米價の低位はそれを以て一國經濟の基本となしつゝあつた幕府にとつては當然の歸結として自繩自縛をなした。初期以來『百姓は財の餘らぬ樣に不足なき樣に治むる事道なり』（本佐錄）と稱する體のいゝ農民壓迫政策が尙嚴然として存在してゐるとしても遂にこの事實をどうすることも出來なかつた。已に寛文より官庫の空しきを感じた幕府及諸侯は、爾來其の資財を傾けて年と共に窮迫を暴露し、元祿以降數次の惡幣鑄造の彌縫策も遂に其の功を成就しなかつたのは當然である。彼等は密に素町人に膝を屈して其の資財を仰がなければならなかつた、こゝに素町人にとつては大名貸しなる新なる營業が生れた。無論其の結果が彼等にとつて禍福相半したことは、屢、浮世草紙の題材となつてゐるが、彼等一部の豪富をして、益、其の財を累積せしめ、町人の横勢をして暗に增大せしめたことは事實である。偶元祿以降『もふけにくい世』を實現したとしても其れはただ貧富の懸隔の漸く擴大したことを語る一面に過ぎないもので、決して商賈の全般に關することではない。而も他面には德川氏初世以來の文敎興隆も僅に一小部の智識階級に止まり、五代の好學も其の近侍の間を出づることは出來なかつた。たとひ西鶴近松の偉大なる藝術は彼等の耳目に親しいものであつたとしても、彼等の多くはたゞ其の内に彼等の淫蕩なる世界、情痴の場面を發見し、是れに共鳴したに過ぎなかつた。是れに加ふるに初世よりの階級制度の嚴存と三代以降の海外發展の禁壓とは、どれ位彼等の心を萎靡敗頽せしめたか。彼等は彼等の上に加へられた爲政者の有形無形の壓迫に依つて、たゞ一つ富の世界に於てのみ其の駿足を伸ぶる外なく、彼等は富への沈湎以外に永劫に浮む瀨なき運命觀を把持せしめた。

こゝに至つては彼等無智なる豪富の行衞は推して知るべきである。寛文期までは三都の高級なる妓女は多く貴族を

客とし、また延寛には尙、箕山の『色道大鑑』にとりすました寛濶の遊びを傳へてゐるが、元祿以降に入つては虛榮と性慾以外に、吉原には彼等妓女の樂曲が彼等の生活の哀愁を唱ふ聲以外には何ものもなかつた。

爾來貴族に代るものは商賈となつた。彼等は富によつて遊蕩し、遊蕩のために富へ沈醉した。彼等の生き甲斐はたゞ遊蕩によつて滿足することとであつた。『人は十三までは辨へなく、それより二十四五までは親の指圖をうけ、其の後は我と世にかせぎ四十五までに一生の家を固め遊樂することに極まれり』（永代藏）と彼等はきめてゐた。彼等はあるがまゝに蕩盡して制禁の容す範圍に思ひのまゝに振舞ふた。而も尙彼等は素町人といやしめられ士農商工と四民の最下層に甘んじなければならなかつた。武左、新五左、淺黃裏と罵つても彼等は一介の田舍武士の前にはお侍と崇め土下座するより外はなかつた。彼等の心の墮落は年と共に加重し、子々孫々に傳へて彼等の肝に銘じ骨に縷刻して、享保以降のせちがらき世の中にも、彼等は『今時の此の世界、夜ぬけと分散せぬものは男の內ぢやござりませぬ』（伊達娘戀緋鹿子）と廣言しながら、尙遊樂の巷に彼等の觀樂を追ひ求めた。而も此の風潮は彼等の一階級に止まらずして江戶後半に及びては武士にも農民にも瀰漫したことは當然の結果で『甚だしきは近來の飢饉に公命加はりて豪民施行せしに貧民其の施しの鳥目を受けて直に戲場に行き凶年に大に戲場の賑』（草茅危言）ふが如き奇觀をすら呈し、『世の中は一日暮のながれわたりに、謗つても遊び、そしられても遊ぶより外はなし』（百安楚飛）と現實の遊戲の生活に沈醉した。安永天明が佛神開帳流行の時代であつたが彼等には決して宗教的欣求の生活が片時でもあつたわけではない。それ等の開帳と云ふも『奉納の燈灯に傾城と役者の名がなければ淋しく、……何ぞ外に見ることのなぐさみが無ければ信仰が薄』かつたのである。當時の戲作者にとつては釋迦も孔子も老子も子路も、蕩兒と共に一夜の歡樂を惡所にあさる輩であつた。

寶曆以降年々刊行された洒落本は三百種に餘るであらうが、そこには淺薄なる懷疑の後の『皮肉の多少を見る以外に

は、悉く人生を茶にした遊里遊人の生活の直寫に過ぎず、また是れに次いで現れた無數の人情本は悉く感傷的な戀の場面に、無智なる婦女子の淚を强ひようとするものである。それ等は何れも風俗資料的價値以外に藝術的價値を觀取することの出來るものは十が一もむづかしい。若しそれ寬文以降二世紀に亘る年所の間に發行された秘戲の畫册は恐らく數千にも達するであらうが、其の內寬政以前を遡るに從つて其の藝術的價値の豐なるを見るとしても、化政以上の多數に至つては猥雜卑陋ただ露骨なる變態性慾以外には、當時の淫蕩なる世界を語る資料とする外に何等の價値もない。是れ等多種の背景は何れも江戶後半の人間の陰慘な悲しい生活の一面を最もよく語るもので、彼等にはこの墮落以外に、もう人生の光明も希望も何ものも存在しなかつたのである。

かくの如き世相の由つて來るところは、云ふまでもなく幕府の政策の極端なる消極主義と嚴乎たる階級制度に發して遂に彼等をしてこの呪ふべき宿命觀を把持せしめたのであるが、此の悲しむべき人生、此の淺間しい現世謳歌主義を彼等は果して何と觀じたか。無論社會の一部には健全なる自覺者はあつたが、彼等の大多數は物質と肉慾との狂瀾との間に、漸く運命に悟入して安きを偸み『わけの聖』と呼ばれ『通りもの』『大通』と稱されることに王侯にも等しい誇負を感じたのである。而も彼等の心の奧底の悲哀にはどうすることも出來なかつた。彼等の間に興隆した音曲が哀切の律を傳へて聽くものの心を搖かし、彼等の文藝が逸樂の假面に憂愁と皮肉とを湛えて我等を悲しましめるのは、實にこの世態の半面でなくて何であらう。

嘗てレスキュウルは云つたことがある『十八世紀の世相を說かんとする者、多くは表を飾る妓女に及んで、ともすれば深く匿るゝ恭順な女達を忘れんとする』と。私の如上の記述も多少そんな嫌があるかも知れない。無論そこにはブウシ

エエ、ツラゴナァルの畫布の上に永遠の微笑を湛えてゐる女もあるが、シャルダンの恭儉な女主人公もあるやうに、我が江戸三百年の世相の間にも、初期以來の朱子學に敎養せられた謹嚴な階級が存在したことも事實である。然し如何なる時處にも、一つの藝術は常に社會の凡ての思想と凡ての生活とを具現してゐるものではない如く、此の浮世繪の一畫派は實に斯くの如き不可思議なる世態を背景として、此の淫蕩なる時代相に沈湎して進化し完成したのである。此の淺間しい世態あるがために燦として咲き亂れたのである。

私はもう是れ以上に此の畫派の背景を成せる時代相を說く必要はない。已に幕初に於て一たび今樣風俗の寫實的表現の間に泰平靜謐の姿を湛えて遊樂的氣分を寓したる、この派の先達の藝術が、漸く時代を下つて、木版畫の發達にともなひ　其の鑑賞者を下層階級に移した時、尚其の寫實的表現の傳統を維持したとすれば、一代の世相と共に、漸く浮華淫蕩なる內容を導いて、所謂狹斜趣味に近づいたことは當然の結果であ、りまた江戸後半に入つて春信以下に見る、遺る瀬なき遊樂の生活を表現してゐるのも當然である。されば正しく浮世繪を鑑賞せんには、どうしても上述の如き不可思議なる世相を度外にしては決して味解することは出來ないので、かの豐信の如き春信の如き、また淸長、歌麿、寫樂、長喜、榮之の如き此の派の巨匠は一人として、此の雰圍氣外には脫逸してゐないのである。たゞ衆多なる彼等のうちには、年所の久しきに亘るに從つて、多少傾向を異にしてゐるもののあるのも當然のことで、殊に初祖師宣の如きは其の無數の作品のうちには單純なる風俗畫の多くを描いて、上述の又兵衞の直系をなしてゐると見るべきものも多いが、然しそれは此の派の初期に際してまだ私の云ふ浮世繪を完成してゐないことに過ぎない。然し一たび目を轉ずれば彼にしても已に既に私の云ふ淫蕩なる世相を明に物語つてゐるものであることは、彼の作品の間に戲場美女を題材としたもの及び秘戲の畫冊に最も優れたものの遺存してゐることが、是を最もよく說明してゐるのである。

私は是れ以上、かゝる悲しむべき淫蕩の江戸三百年の世相が彼等各畫人の上に如何に表現せられてゐるかを說く必要もあるが、餘りに畫史に入ることを恐れて、今は別論に讓らうと思ふ。たゞ彼等の作品に現れた共通した美的要素だけはどうしても語らなければならない。然しこの問題について私は偶然にも長與善郎氏の記述（不二八月號所載椽と雨の一節）を讀むだが、それが餘りに私の云はんとするところを云つたものであるから、今其の一部を拜借して加上の世相と對比しやう。それは次の一節である。

『浮世繪の作因となつたものは單なる肉體の美ではない。それは性慾に捉へられてゐる者の姿態の中にのみ現はれるやゝ特殊の美である。そこからあのなやましいエロテイズムを拔き去つて了へばそれは死骸の組合せにすぎない。男女の體には隅々まで肉的な色情と、色情の心持ちとが現はれてゐる。その意識の味が審美から見て、面白い一つの價値なのである。情慾に陶然として醉つてゐる時の女の顏。そこには普段には現はれぬ特殊の美がある。又そのために淫らな姿態をする處にも特殊な美がある。つまりだらしない、いかゞはしい風姿の中にのみ現はれる美である。この男女の「いかゞはしい」形態と瞬間にのみ現はれる特殊の美を、風教道德の上から、畫かずにおくと云ふことは藝術家としての人類が惜しがる。實際それはある慧眼の美術家が「美しいな」と眼を止めるのが尤もなものであり、「畫かずにおくのは惜しい」美である』

筆者はこの一節を書くに當つて如何なる作品を念頭においてゐたかは知ることは出來ないが、凡てのこの派の作品に表現せられてゐる美的要素は要するに是れである。エロチズムを內に包む男女の嬌姿媚態である。彼等はあらゆる生活の無限の諸相から情痴の世界に現はれた男女の瞬間の姿に慧眼な目を見張つて是を表現したのである。たゞここに今一つの題材がある。それは鳥居派に發して春章、寫樂、豐國と相承繼し來つた芝居繪、役者繪の流れであるが、これは多

少別種の觀察を要する。元來この兩者は春信以前にあつては、一面に鳥居派の如き芝居繪を專らとする畫人はあつても其の作品の形式が包む內容に至つては單に何れも當時の俗文學を背景として、其の取材を二面にしたのみで大いした區別はないのであるが、春章に至つて漸く嚴肅なレアリズムに入らうとする傾向を生じ、以下年を追ふて此の傾向を增大した。隨つて寬政の頃に至ると歌麿の如き浪漫派と寫樂の如き嚴肅なレアリズムとが並存するが如き狀態を招致したがこれは役者繪なるものの性質から、其の發達の意義から當然の歸結であつたので、私の云ふ遊戲的生活の具現である點に至つては決して違はないのである。そしてこの兩者が、また何れも彼の不可思議なる世體を背景として、其の間に生きてゐる人類の光明も希望もない、悲しい遣瀨ない人生を表現してゐる點に於ても決して違はないのである。寫樂の男性的な沈思と悲痛との具現、長喜の憂欝にして物思はしげなる女性、この二者の並存はこの問題を最も能辯に說明する。（尚別に浮繪に發して後半に北齋、廣重に入つた風景畫の一派があるが、これは私も已に嘗て說いたところであるが、また黑田氏の論文中にも說かれてゐる如く浮世畫の旁系として見るべきものであつて、歌麿の花鳥畫とたいした相違はないからこゝに私は說かない）

然し如何なる點から云つても、彼等この派の畫人は寬文を中心とする好色本から、西鶴其の他の浮世草紙を經て、八文字屋から洒落本、人情本に至る文藝の流れに應じて、情痴の世界に彼等の特殊なる美を發見し、それを筆と刀と色彩との表現に委ねたことだけは明確な概念として腦裏に刻する必要がある。その男女の嬌姿娟態、そこに浮世繪が他の畫派から一步を進めて（價値の問題ではない）獨自の境を開拓した意義があり、同時に他派から區別すべき要素がある。そして私が上述したやうに土佐の繪卷、明治大正の風俗畫等と全然其の質を異にすると云つたのも、要するに此の特殊の美あるがためであつて、こゝにも私は黑田氏及び其他多くの研究者の所說に同意を表し難い。若し或る論者がかくの如

き特殊なる美の上に健不健を說く人があるとしても、それは私の關知しないところである。無論そこには希臘彫刻の如き、ルネエサンスの繪畫の如き、また上代日本の佛畫の如き、その外多くの高貴なる美の表現はある。私はそれをも愛する。然し一の藝術作品の價値は決して其の取材の高さではなくして、常に其の作者の認識の深さである。

以上に於て私は浮世畫なる語義の變遷と、この一派の背景をなしてゐる世相と、こゝに生れたる特殊の美しさとを說いて、略其の意義をつくしたと思ふから、今はたゞ殘されたる二三の問題について一言しやう。

云ふまでもないが、浮世繪と概稱する一派中には、畫者自ら絹紙の上に揮毫する肉筆畫があり、また畫者の板下畫を彫師と摺師との工藝的な技法を俟つて表現せられる版畫との二種がある。そしてこの兩者は其の內容の美を等しうしてゐるが、其の作品の性質に於ては全然異つてゐるのである。私はこの一篇に於て漠然と浮世繪と云ふ言葉を使つて、この兩者を混同し、而も主として版畫を念頭に置いて書いたが、由來この兩者は云ふまでもなく一つの等しい美的內容の二種の媒介によつて表現せられた二面に過ぎないのであるから、私は先づ是を渾一體と見て取扱ふたもので、今一つの理由は浮世繪の肉筆なるものは、始祖師宣の作品に於てすら、寬文期の彼の版刻畫の勁剛無比なる線狀によつて、さながら切らば血の出るやうな人間を描いてゐる樸茂を極めたる畫品は到底肉筆畫に於て發見することは出來ないので、たゞこの缺を補ふものは、漸く彼が稀なるコロリストであつたことに過ぎないのである。そして時代を下るに從つてこの兩者の差異は益顯著となり、春章の如き版畫の方面に特異なる色彩を有つことの少い畫人や、長春の如き肉筆專門の畫家に於てこそ多少の佳作もあるが其の他に至つては殆んど優秀なる作品を發見することは出來ないのであるから、こんな理由から浮世畫即ち版畫と解しても決して不當ではないと信ずるからである。たゞこの問題は在來日本の研究者の間

には多くは此の兩者の批判を曖昧に葬つてゐるので明確な斷定を避けやうとしてゐる傾向があり、黑田氏の如きは此の兩者を比較し優劣を判定するのは愚であると云ふ愚を敢てしてゐるのである。或る藝術作品と他のそれとが全然異なれる内容を含んでゐる場合には比較は困難であるが浮世繪肉筆と版畫との如き同一内容を有してゐるものにあつては、其版畫の工藝的技法をしばらく念頭より除去して、是をも一個の繪畫と見て、この兩者を批判し優劣を論ずることは容易に出來るべき筈である。(或る論者はこゝに一切の藝術は何れも其の形式を除いて內容は存在しないといふ理由から版畫の工藝的技法を除去して考察することは不可能であるといふかも知れないが、こんな議論はこの場合要するに一種の詭辯に過ぎない)そしてかうして批判した場合に、この兩者の優劣は何人にも立所に斷定することが出來るのであるが、多くの研究者が是に及ばないのは版畫に對する概念の誤謬から不思議な一種のデイレンマに陷るからであらうと思ふ。

是を具體的に云ふと肉筆畫と云ふものは云ふまでもなく一つの作品全部が其の作者の創作であるに對して、版畫は其の作者の創作的價値が版下畫にとゞまり、其れ以上はたとひ創作者の意志情感が是を助けるとしても、要するに彫師と摺師との工藝的な技法によつて完成せられるものであると云ふ理由から、此の兩者を批判して肉筆畫即ち畫者の創作に價値を認めないとすることは、黑田氏が說いてゐる如く『春信や清長や歌麿や北齋や廣重やは極めて自我の燃燒に乏しい工人の群に數へ』なければならないと云ふ概念の混亂を招くがためではないか。論者は春信と云ひ歌麿と云ふ小偶像を立てゝ、こゝに不思議なデイレンマに陷るからではないか。

私はこの問題を細說する前に先づ版畫に現はれた繪畫的要素と肉筆畫との比較を明にしておかう。

上述の如く假に版畫から工藝的技法を除去し、かくの如き肉筆畫が有り得ると假定して、是を他の肉筆畫と並置して見る。そこに先づ兩者の色彩を比較して見ると、版畫は其の色彩の物質的素質と其の製作の種々なる約束より生ずる、

色彩の驚くべき澄明があるが、肉筆畫に於ては殆んど大部分は鈍重を極めてゐる。また其の線條を見ると、版畫は扭剛なる刀と木質とから生れ、其の上プロセデエによつて紙面に壓刷することから生ずる驚くべき端正と勁剛とがあるが、肉筆畫の多くのものにあつては弛懈と倦怠と煩重とがある。（たとへば昨年高島屋に展覽された榮之の『藝者撰』の女の背面の肩から裾に直下する明快透徹、さながら剃刀のやうに研ぎ澄まされた神經的な線條は殆んどビアズレエの作品に見るものであるが、かくの如き線條は到底肉筆畫の及ぶことの出來ないものである。）其の上、版畫の工藝的束縛が版下描き即ち畫人をして自ら畫趣を單純ならしめるといふ約束が自ら生ずるのであるから、已にかく藝術として單純にして强堅な要素を保有してゐる以上、其の藝術の價値の優れてゐることは自明の理であるべきである。無論若しそこに何等かの他の要素があつて此の缺點を補ふ場合は自ら別論を要するものであるが、大部分の肉筆にはそれ等のものを發見しないのである。たゞ版畫發達の過程の間に、まだ色刷版畫の產出を見ない時代の二者の如きは、やゝ比較が困難であつて所詮それは鑑賞者の趣味の判定を俟つより外はないものであるが、それにも尙私は緊密な線條の包む樸茂なる表現を好むもので、散文的な肉筆畫の多くを愛し得ざるものである。

かくして私は春信も歌麿も其他多くの浮世繪畫家は肉筆に於て其の版畫に見る如き優秀なる作品を遺すことが出來なかつたことを斷言するものであるが、然し私は彼等が何れも自我の燃燒に乏しい工人であつたとは信じない。何となれば彼等は何れも要するに版畫家であつて、其肉筆の如きは單に彼等の畫的生活の間に於けるスペエスウオクに過ぎなかつたのである。彼等は版畫を知つて肉筆畫を知らなかつたのである。彼等の肉筆の作品が低劣であることは何等の不思議もない當然のことで、決して彼等の名譽を傷けることではないのである。たとへばフエリシアン、ロプスを擧げるもいゝ。彼の油繪の作品が畫壇に重要な意義を有つてゐないとしても彼の名譽を些かも左右するものではないのである。

たゞこゝは版畫に於ける工藝的素質と、版下の創作者との間の相互關係には注意すべき重大なる問題がある。それは何かと云へば一枚の版畫を製作する過程に於て單純な版下畫以上に果して如何なる點まで創作者の意志と情感とが働いてゐるかと云ふ問題である。黑田氏はこの問題を現代の建築家の設計圖と工人との相互關係に比してゐるが、是れは今日より想像するものであつて果してそれ程嚴密な意味に於て浮世繪版畫が産出されたかどうかは多少疑はしい。この一例は冊繪本の如き丹繪の如き初期の作品を見れば解るが、それ等は決して畫人の情感の絕對權威の下に彩られたものでたく本屋或は繪草紙屋の凡庸な工人が、偶、試みたものに過ぎないので、畫人は決して今日想像する程そんな問題には神秘質ではなかつたのである。それにも拘らず我々は今日其の稚拙なる作品の上に無限の藝術的情調を味識することが出來るのである。無論、時代を下つて色摺版畫全盛期に至ると、かくの如き畫人の無自覺と單純とは見ることは出來ないことは云ふまでもないが、果して今日の建築に於ける如き嚴密な相互關係が保持されたかとは想像することは出來ない。(論者が云ふ建築そのものに於ても過去に於ては、已に工人そのものが藝術家であつたのである。)たとへば一の例證として雲母摺の發見と云ふ問題を見よう。此の雲母摺と云ふものは其發見の當初に於ては恐らく創作者そのものが創作したものではなく寧ろ工人によつて工夫考案されたものであらうと想像する。已に此の想像が可能であるとすれば、創作者はこの工人の考案を其の後に踏襲したものであつて決して畫人の創作を以て考へることは出來ない。已にこの一例に對する想像を可能であるとすれば是に類した細部の問題は必ずしも少しとはしないであらう。今一つは版畫に於て同じ圖柄の二枚を比較するとき甚だしく其の色彩を異にする場合は屢遭遇するのである。此の場合論者は一を初版とし、他を再版として自由な想像をするであらうが、其の一つが他に比して甚だしく低劣であるときには たとひ其の兩者が如何なる條件の下に産出されたとしても、觀者はそれを問はずして、その自由なる想像の下に觀過する。然し我々は其の二者

が何れ劣らぬ作品である場合をも經驗するのである。果してかくの如き場合も尙創作者の絕對權威の下に製作されたと我々は解すべきだろうか。是等の問題を考察すると今日の如く科學的に進步せる建築と、建築家と、工人との相互關係には決して比較すべきものではないので、彼等は互に自由なる領域に據つて製作過程の上に、自由なる至技を發揮したのでないか。それが幸福にも彼等の背景をなせる統一せる世相によつて、彼等は互に統一せる思想感情を抱いて、一つの藝術作品に協力し、こゝに一の渾一體をなしたのではないか。彼等は互にかの悲しき淫樂の世界に沈湎して、彼等の情感と彼等の技藝とを研き澄まし、互に創作の三昧境に入つたのではないか。換言すれば、一の版畫は畫人と彫師と摺師との三者の綜合藝術であると見るべきではないか。またかくの如く解釋することによつて始めて概念の混亂を避け得るのでないか。若しかくの如き結論から、論者が畫人の位置に迷ふとしても是れも亦私の關知しないところで、私としてはたゞ版畫の意義を明にすれば足つてゐるのである。畫人の自我の燃燒の强弱の如きは要するに末である。彼等畫人はこの偉大なる綜合藝術の代表者として滿足すれば、決して彼等の名譽を傷ける意味とはならないであろう。

こゝに浮世繪版畫のユニックなる神秘境がある。この意味に於て世界版畫史上に獨自の地步を占めることが出來るのである。この神秘なる藝術、此の畫人と彫師と摺師との三者が互に作畫の三昧に入つて完成せる藝術、それは實に江戶時代と云ふ不可思議なる時代を背景として、かの不可思議なる空氣を呼吸してのみ產出し得るもので、かくの如き統一せる情感の時代を外にしては、今後如何なる未來にも、如何なる境土にも再びかくの如き神秘なる藝術を產することはないであろう。私はこの意味に於て、かのあやしき江戶文明を悲しみ喜ぶと共に、此の偉大なる浮世繪の藝術に讚仰を禁じ得ないものである。

私は以上に於て略私の概論を了つたと信ずる。然し私の見解と黑田氏のそれとの間には尙多くの相違がある。それが何れも私の所說と相關聯するところが多いから、それ等について尙多くの私見を加ふべき必要があることを感じる。然し不幸にして黑田氏の所說は最初に於て『德川時代に勃興した繪畫史上の一流派としての浮世繪』と『木版畫としての

浮世繪』との二因素に峻別せんとする點に、已に其の兩者の內容を不問に附して第一段の考察を忘れ、直に第二段の形式の方面に入つて其處に立論してゐるがために、そこに多くの考察の空虚があり、概念の不備があり、延いては所說の細個條に亘ると多くの混亂があつて一々擧ぐるの煩に堪えないからたゞ其の主要な點について、また直接に我が版畫の藝術に關係するものについて一言する

黑田氏は『木版藝術は決して我國民の私すべきものではない』として、支那、西歐に於ける版畫を擧げ『しかも興味深い事實は其等の版畫が其の手法に於て作風に於て國民的差別を超越した類似を有してゐる』と說いてゐるが、私にとつてこの點は頗る不可解の一節である。支那の版畫は比較的我が版畫藝術に親近なものであろから今しばらく云はないこととするが、筆者は果して西歐のそれと如何なる類似點があり共通性があるとするのか。無論そこには版畫と云ふ單純な概念の上には兩者に共通性はあるが、それは倘繪畫と云ふ概念の上に普遍性があるから、又兵衛とフラゴナァルとを比較し優劣を判定せんとすると同一であつて理論として到底成立し得ないのである。而已ならず黑田氏は果して西歐の如何なる版畫を指してゐるのか。一概に西歐の版畫と云ふもそこにはデュウラァの如き木版畫があり、レンブラントに見るが如きオウフォルトがあり、近世に發達したるリトグラフがあり、倘是等、旨と自刻自摺を要件とする版畫以外に十四世紀末に現はれた繪入り本の版畫、十八世紀の石版畫、またエピナアルの錦繪（イマアヂュ）等必ずしも自刻自摺を條件としない版畫がある。そして是等の間に其の意義と其の手法と、或る程度までMulticolourであることの點からエピナァルの錦繪（イマアヂュ）は比較的我が版畫に接近したものであるが、黑田氏はこの點に就いて一言を費してゐないのであり、また私が上に引用した一節の前文に木版の文字があることから見れば恐らく氏はデュウラアの作品に見るが如き木版畫に對比せんとするものと想像される。然し若し此の想像にして誤なしとすれば自刻自摺にして、モノカラアである木版畫、全然內容をも手法をも異にせる木版畫と、どうして對比し優劣を判定せんとするのか。かくの如きは餘りに無謀なる企であつて決して我が錦繪の價値を說明する材料とはならないのである。私は我が版畫を愛する。然しかくの如き西歐木版畫と對比して其の優越を誇らんとする意志は毫も有しない。彼は永久に彼であり、我は永久に我である。果然この

無謀なる對比に氏をして笑ふべきヂイレンマに逢着せしめた

氏は日本版畫の多彩的價値を說いて『是に反して墨摺は肉筆の復製でないまでもそれに近いものである』と說いてゐるが、私はまだかくまで日本版畫を侮辱した言葉を聞いたことがない。此の言葉から想像すると氏は日本の單色版畫を多彩版畫に比して低劣なものとしてゐる樣であるが、かくの如きは餘りに我が文化の背景を考慮しない暴論であり、また到底其の意義を味讀し得ない偏見である。無論私も其の多彩的價値を知つてゐる。然し墨摺は決して肉筆の復製に近いものでなく、是れも亦畫人と彫師と摺師との尊き協力によつて產出されたる全然別種の藝術作品であり、また決して色版の多少或は有無によつて批判せらるべきでなく、其の藝術の諸因素が包む內容即ち其の作品が表現せる主觀性の深さに依つてのみ批判せらるべきものである。この點に於て私は決して蒼古稚拙と云ふが如き消極的な評語に滿足し難いものであり、またかくの如き評語から、私をして氏も亦一個の『歐米人の意見に追從する』鑑賞家であることを信ぜしめる。

今一つ問題がある。それは氏が『版畫創作に對する誤解』の項に說いたところであるが、氏は『此の版畫藝術は浮世繪とともに過去のものではない』として、今後尚この特異なる藝術の發展を希望し、方今版畫家の間に唱道せられてゐる自刻自摺を『己を捨てゝ彼の轍に習はうとする謬見』であるとしてゐるが、是れも亦文化の背景を考慮せざる皮相の見解である。何となれば過去の日本版畫は、かの江戶時代の如き統一されたる時代思潮の間に畫人と工人とが互に藝術的三昧境に沈潛し得たる時代に於てのみ產出せられるものであつて、今日の如く畫人の個人意識が熾烈となり、其の工人が文字通り工人と墮落せる時代に於ては、どうしてかくの如き藝術が產出されるか。幸にも若し是れを試むるものがあつたとしても、恐らく畫人は其の版下畫の絕對權威を强ひるであらう。若し已に絕對權威を强ひるとすれば、たとひ版畫として一の作品が產出されたとしても其れはたゞ肉筆の複製に過ぎないもので過去の版畫と全然其の意義を異にし、單に蒙昧なる工人が過去の末技を承繼して、我が刻版術と摺刷術との手ぎはを誇示するに過ぎないであらう。これやがて今日に於てかくの如き版畫藝術の發展を見ざる理由であり、自刻自摺の唱道さるゝ所以であり、また我が過去の版畫藝術の偉大なる價値の存在するところである。（九月二日）



東洋畫論觀

虛實論

中川一政

富める時、貧を考へ、喜ぶ時悲しみを考へる事、常人なさざる所なり。
故に貧に到り悲しみに到りて狼狽す。
凡そ世の事、一方をアテにすれば、他の一方を考におきてアテにすべし。
富は貧に對しての富なり。喜びは悲しみに對して喜びと云ふ。
常人富めば富にたゞ執着す。その富滅ぶればその身も又滅ぶ。
賢者が狼狽せざるはその理を知れば也。
これは世上の虛實なり。
虛は空虛の虛也。實は充實の實也。
又云へば虛は虛僞の虛也。實は眞實の實也。
畫學者、實に執着して虛を考へず。故にたま〳〵虛を知れば實を失ふ。

林泉高致に云ふ

『凡そ經營して筆を下すには必ず天地に合す。

何をか天地と謂ふ。一尺半幅の上、上に天の位を留め、下に地の位を留め、中間方に意を立て景を定むるが如きを云ふ。

世の初學を見るに遽に筆を把りて下し去り、卒爾として意を立て情にふれて塗抹する事、滿幅なれば、之を看て人目塡塞す。已に人意をして快からざらしむ。那ぞ賞を瀟灑に取り、情を高大に見すを得んや。』

此章初學の考無きを云へり。

畫禪室隨筆に又云ふ。

『李成は墨を惜む事金の如く、王洽は潑墨を發して畫を成す、夫れ畫を學ぶ者、毎日墨を惜み、墨を潑するの四字を思はゞ、六法三品に於て思、半に過ぎん。』李成の惜墨は虛を思ふの故也。

王洽の潑墨は實を考ふる故也。

畫は描きたる處を生かし、描かざる處を生かさんとするの二力なり。畫は描かうとするに於て實を爲し、描かうとしまいで虛を爲す。

東海夜話に云ふ。

『よろづの所作に上手と云ふは力を用ひざる也。道理を得て爲す事に力いらざるもの也。』

力を用ひるは實なり。

力を用ひざるは虛なり。

畫は力ばかりでは描けず。力を如何に使ふかの智慧くらべなり。

『畫は一物もなき所最も爲し難し』とは大雅の虛實に對する抱負也。

虛なる時實、腹にあり。實なる時虛、腹にあり。

この虛實、構圖を爲せば、空氣稀薄なる處に風生ずるが如く、物運動す。神宿るとは之也。

脚本は對話の虛實。

彫刻は凸凹の虛實。

詩は言葉の虛實也。

虛實相鬪ひて風韻を生ず、これを藝術といふ。

虛實をわきまふる、之表現の根本也。

古人『靜中之動』と云ふ。

虛中に實が動く也。

荻原守衛その著彫刻眞髓に云ふ。

『東洋の美術は靜中之動なり。西洋の美術は動中の靜なり』と。

靜中の動。此言葉實によし。

東洋美術の精髓をこの四文字に云ひ盡せり。

初學者先づ實を知るべし。

實に徹すれば虛を知る。

虛實は一體なり、表裏なり。

凡そ家を知る者は門口を見て勝手口なしと云はず。
人を知る者は言葉をきゝてその腹中を見るもの也。

その人の藏する實大いなれば、虛も亦大なり。即ち山大なれば谷深からざるを得ず。
大いなる實と大いなる虛と腹中に藏せば、その作る處亦大いなるべし。

既に腹中に虛實を藏す。
而して筆白紙の上に一點を劃すや、はじめて畫面上虛實を生ず。
一點を劃したる處實にして、白處虛を爲す。
此處に於て畫道は二派を生ず。
實を主として虛を客とすれば寫實の道なり。
虛を主として實を客と爲せば象徵の道なり。

寫實は潑墨
象徵は惜墨也。

附言
筆者は李成、王洽の畫を知らず。惜墨潑墨云云は言葉のままに解釋せり。
本文の主意は東西を問はず、畫報の根底とす。西洋畫に於ては虛實が複雜になるにこ、塗る所を虛とし、かく所を實とす。例へば空をぬりて樹木をかくに空を虛と心得べし。樹木は實と心得て描くべし。
老子云ふ。
『良賈深藏若レ虛。君子盛德容貌若レ不レ足』

良賈は無きが如くし、君子は無徳のごとくなり。之虛を先に立つる也。東洋の思想は奥床しさを心掛け、内容より形の目立つを避け出來るだけ靜かならんと努めたるなり。言者不知。知者不言。知る事益々深ければ言ふ事益々少し。
作りたる繪は作者作る事に氣をとられる故、見るものも亦上手下手を氣にす。
作意を見せぬ繪は上手下手を氣にせず、すぐに畫の恍惚たる所を見る。東洋の畫が象徴法をとりたるは右の考に於て也。

六法を論ず

南齊の謝赫古畫品録を編して畫の六法を稱す。

一、氣韻生動
二、骨法用筆
三、應レ物象形
四、隨レ類賦レ彩
五、經營位置
六、傳レ模移レ寫

而して云ふ『骨法以下の五端學びてよくすべきも氣韻は必ず生知にあり。』
謝赫の六法は『萬古移らず』と云ひ長く東洋畫家の遵奉しきたる處也。
今、西洋畫家としての余が敢て之を論ずるは故を温ね新しきを知らんとするの意なり。

秦の穆公、九方皐を使はして馬を求めしむ。
三月にして九方皐歸り來りて復命す。
穆公その馬の樣子を問へば
『牝にして黃色なり。人をして往きて之を取らしめば牡にして黑馬なり。』
九方皐は天下の伯樂なり。
馬を相するに形を以てせず。
『見二其所一見、不レ見二其所一不レ見。』
陳簡齋墨梅の詩に云ふ。
『意足不レ求二顏色似一。前身相馬九方皐。』
大雅堂の遊印は此詩より出づ。
穆公は形を以てする故に
『色物牝牡尙弗レ能レ知。又何馬之能知也』
と云ふ也。
東洋畫論氣韻生動を第一義とす。
九方皐は馬を相して、氣を見るなり。氣に依つて馬の良否を鑑別し、形態を以て馬の良否を鑑別せず。
倪雲林云ふ
『僕之所謂畫者、逸筆早々不過。形似不求、聊以自娛耳』
雲林の作畫の態度は九方皐が相馬の態度也。
九方皐は學問もなき賤夫なり。賤夫なれど偶々馬を相するに氣韻を第一とす。依つて天下の伯樂也。

氣韻生動

華山尺牘に氣韻生動の字義を解說したり。

『氣と申すは萬物生々の事にして衆義也。

韻は音の和諧致し候事にて、衆音を合して言ふ義なり。

氣と云ふは筆の氣、墨の氣、色の氣と一つ一つの生氣にて、韻と云ふは其筆、墨、色の衆生氣運動するを韻と申候。

氣韻生動を分けて申せば、氣韻は本旨、生動は註脚。

氣生じ韻動くの意なり。』

造物主は人間を造れり。

身體を作りて兼ねて精神を造れり。

人間は藝術を作れり。

筆墨は身體なり。筆墨生きて氣を生ぜしむ。

藝術を創造といふの意は造物主はじめて人間を作りたる如く、作品を一つ一つ獨立して活かすの意也。

六法に於て骨法以下の五端は學んでよくすべきも云々の意は人形を作りて魂を入れることのむづかしきを云ひたるもの也。

即ち人間が神樣の眞似をして造物主となる事のむづかしき事を云ひたる也。

夏文彥三品を定義して云ふ。

『氣韻の生動、天成に出で、人其功を窺ふ莫き者、之を神品と謂ふ。

筆墨超絕し、傳染宜しきを得て意趣餘りある者、之を妙品と云ふ。

其形似を得て、規矩を失はざる者、之を能品と謂ふ』
神品と云ふも要するに人間業と思へぬ作品を云ふ也。

宋代、郭若虛圖畫見聞記を著し、書中、氣韻は師よりするに非ざるを論ず。

『六法の精論は萬古移らず。然り而して骨法用筆以下の五法は、學びて能くすべきも、其氣韻の如きは、必ず生知に在りて、固より巧密を以て得べからず、復歲月を以て到るべからず。默契神會、然るを知らずして然るなり。試みに之を論ぜん。竊に觀るに古よりの奇蹟は、多く是、軒冕の才賢、巖穴の上士の、仁に依り藝に游び、賾を探り深を鈎り、高雅の情、一に畫に寄せたるなり。

人品既に已に高ければ、氣韻高からざるを得ず。氣韻既に已に高ければ、生動至らざるを得ず。所謂神の又神にして而して能く精し。

凡そ畫は必ず氣韻を周くして、はじめて世珍と號す。爾らざれば巧思を竭すと雖も、ただ衆工の事に同じきのみ。畫と曰ふと雖も而も畫に非ず。故に揚氏は其師より授けらるゝ能はず、輪扁も其の子に傳ふる能はず。天機より得、靈府より出ずるに繫ればなり。』

此章はじめ氣韻は誰でも得る事能はず。
人工以てうべからず。
練磨によつて得るべからずと云へり。
巧密、歲月を以て得る處は骨法以下の五端なり。
又、師より得んとして得べからずと云へり。
師より傳承する處は五端の領分なり。
故に弟子、骨法以下の五端を承けて、其儘なれば凡才なり、

遂に師凡才なれども往々出藍の譽れといふものあり。

氣韻生動は師も如何ともする能はず。又弟子も如何ともすべからず。

故に默契神會なりとす。

郭若虚の説は人品を作品の背景とす。作品を以つて人品のシムボルとす。(此事象徴論に說くべし)

元の湯垕又云ふ。

『畫を觀るの法、先づ氣韻を見、次に筆意、骨法、位置、傅染を觀、然して後に形似。此れ六法なり。山水、墨竹、梅蘭、枯木、奇石、墨花、墨禽等の遊戯翰墨を見るごときは、高人勝士の興を寄せて意を寫するものなれば、謹みて形似を以て之を求むべからず。』

『形似を以て之を求むべからず。』『巧思を竭すると雖もたゞ衆工の事に同じきのみ』と爲すは、生かす處を虛に求めた言葉也。

老子云ふ。

『知者不レ言。言者不レ知』と同意なり。

處に於て初學の惑ひなり。

氣韻生動は徒らに美名也。得んとして得べからず。

清朝、鄒一桂出で、形似を早々にして氣韻生動の得べからざるを論ず。

小山畫譜に六法の前後を云ふ。

『愚、謂へらく、もし六法以て云ふ時は、當に經營を以て第一と爲すべし。用筆之に次ぎ傅彩又之に次ぎ、傅模はまさに畫内に在らざるべし。而して氣韻は則ち描き成して後に之を得るにて、一擧筆にして即ち氣韻を謀らば何れよりか手を著けん氣韻を以て第一と爲す者は、乃ち鑑賞家の言にして、作家の法に非ざる也。』

此識見、時機を得たりと爲すべし。

佛人 ジヨルジユ・サンド著
田沼利男譯

鬼火の踊り

定價壹圓八拾錢　四六版寫眞三葉入
送料十七錢　三百卅三頁

最新刊

「獸的文學」にウンザリして何をか仰望止まざる、現下の日本の文壇に農村小說「鬼火の踊り」の一書を贈る。藝術と自然、詩と現實が本書の場合に於て一致し、そして世にも奇しき雙生兒の生ひ立ちを注意深く觀察し、教育者の眼も及ばざる同性の生ひ立ちを、そして彼等が歌ふた田園の牧歌を、同性愛の持つ纖細な感情を、そして敬虔な南佛農夫の純眞さを經緯として織り出された上品にして情熱に富める小說です。著者は寫實派のバルザックに對して理想派の代表作家ジヨルジユ・サンドである。本書は滔々淫猥に走る我國讀書界に對して一大衝動を與へるクラシカルな作物であるし、旁々、農村問題の喧囂さる丶とき第一に讀まれなくてはならぬ有益な、そして趣味ある田園文學の隨一である。

東京市芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

吉田絃二郎作

（吉田氏の尤も自信ある作物のみを集めた傑作集）

定價壹圓八拾錢　送料十七錢

小說 ダビデと子たち

第十版

時代の要求する宗教的名著を見よ

文壇の人格者と稱せらるる吉田氏の傑作として自らも認め、他よりもしかく推稱せられつつある本書は、氏が宗教的感激より得たる獨特のもので、王者として自巳の精神的空虚を感じたダビデが、三角戀愛より端なくも自己の皇子と或女を競爭したため、老臣からは愛憎をつかされ、又自身も惡疾と愛慾に苦惱する場面を氏一流の感激を以つて書れたものだ。

世の青年者に一感激を投げた逸作

東京芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二番

作法としての六法

小山畫譜は氣韻の美名に迷ひたる初學者に氣韻を眞に獲るの法を授けたる書なるべし。

實を離れて虚なし。

實を忘れて虚を覓むるは、徒に氣韻の美名に迷ふ也。

畫は造形也。人工也。骨法以下の五端によらざれば氣韻を得べからず。

小山畫譜又云ふ。

『今萬物を以て師と爲し、生機を以て運と爲し、一花、一萼を見、諦視して之を熟察し、以て其然る所以を得れば則ち韻致手來、自然に生動し、而して造物は我に在り。譬へば人を描くが如し。耳目口鼻鬚眉一々倶に似たらば、則ち神氣おのづから出でん。未だ形缺けて、神全きものあらざるなり』

小山畫譜は東洋畫論に忘れられたる寫實を力說し、木に登りて魚を獲るの迷妄を指摘し、初學に水を敎へたる也。

畫家は誰でも第一流になりたきものなり。畫家の自尊心と此誘惑は往々畫家をして死なしむ。

我猫に生れたらば猫の暮しをせねばならず。猫が虎の暮らしを立てんとするは無理にして造物主喜ばざる所なり。

虎が人を食らひたりと雖も猫悲觀する必要はなきなり。

猫人を食はんとすれば人に撲たれて死ぬ也。

虎が虎らしく生き、猫が猫らしく可愛ゆく生くるは正直にして又造物者の意志なり。

又自分が猫の子か虎の子かはわからぬもの也。第一流か第二流かは棺を覆ふてわかるものと思ふべし。自分が猫と思ひてゐて案外虎の事もあるなり。子のうちは何も考へず勉强せよと小山畫譜が敎へたる也。

氣韻生動は旣に造物者にまかせたる無意識の領分也。かまへて之を得べからず。

『骨法以下の五端は學んでうべきもの』の意は、學ばねばならぬ處とすべし。意識して出來る領分なり。

藝術上、無意識は不ㇾ思出るものなり。

例へれば馬なり。意識は手綱なり。

馬、思はず進めば手綱を引しめて行かんとする處へ行かしむ。

骨法以下の五端は手綱の引き方を習ふ也。

第一柱は前述小山畫譜に於て六法を變じて左の順序にしたり。

一、經營
二、用筆　} 氣韻生動
三、傳彩

傳模は應に畫內に在さるべし。

第一柱は六法を作家の法として、手近の物より並べたるなり。而して應物象形を除き、傳模移寫を放逐したれば此處に於て、謝赫の六法は三法になれり。

即ち構圖。(Composition) 素描。(Dessin) 色彩。(Colour) の三也。

應物象形を除きたるは用筆の裡にその意あればなり。(骨法用筆の條に說くべし)

傳模移寫は即ち臨摹の意にして、畫の樣式なり。畫を組立つる要素とはならざるべし。

さて畫を描かんとするになくてならぬ者は、紙、筆、顏料なり。

紙ありて經營位置を定め。

筆ありて骨法用筆あり。
顔料ありて隨類賦彩を生ずる也。
此三法は畫の要素、道具立にして、畫家はこれを率ゐて作畫に對ふ也。
重ねて論議すれば『氣韻は描き爲して得るにて』此三法を描きて、一擧に得べからざる也。

鑑賞法として六法

余は論旨を遡りて、謝赫の六法を鑑賞家の法として考察して本編を終らんとす。
第一。氣韻生動は既に作家の意圖の外にあり。意識の外にあり。
されば觀者、骨法以下の五端を審さに意識して觀ずとも、見る時直ちに見るものなり。
鑑賞者それを第一と爲すは論を俟たず。
經營位置を見るは、其作者の意圖を觀る也。作者が畫面の虚實を如何にして工夫して考へを現はしたるかを見る也。
紙、限りあり、限りあるものに限り無きものを籠らせるは作者の智慧なり。
經營位置に於ては作者の措置、潑墨の抱負を窺ふなり。その虚實の秘術は經營位置に最も表はるゝものなり。
應物象形は形をとるの意なり。物に應じて形をとる事は、美を知らぬ者にても爲す所なり。例へば地圖を描く如し。
骨法用筆に到りてはじめて美と交渉す。
形をとるの意は門前の子僧習はぬ經を讀むの意なり。
骨法用筆は經の經たるを知りて讀む事なり。骨法用筆に到りて動勢を生ず。
小なるは胡椒點、介字點より、樹木を描き山皴を生じ、麟石、人物、昆蟲、花卉、樓閣を描いて畫面の骨子を爲す。
賦彩は用筆の扶助なり。觀者の眼を喜ばしめ畫の肉付けをなさしむ。

傳南田畫四十論畫に云ふ。

『有レ筆有レ墨。謂二之畫一、有レ韻有レ趣、謂二之筆墨一、風流瀟灑、謂二之韻一、盡レ變窮レ奇、謂二之趣一。』

傳模移寫は觀賞者の言としての六法には一席を占めても然るべし。

藝術品は自然より單獨に生れ出づるものに非ず。前代の藝術の傳統より出づ。

藝術品は溫故知新なり。前代の經驗を承けて、前人未到の境地を志す也。

藝術品は活物（イキモノ）を探す。

傳統より出でて而も活きて居らざるべからず。父母の手を離れて子の獨立して生けるが如し。

鑑賞者として、作品に表れたる傳模移寫が、前人の踏襲なりや。又一歩を進めて前人未到の境にありやを鑑定するは又一個の識見なるべし。

此處に於て鑑賞者の言としての六法は左の如き順位なるべし。

氣韻生動
- 經營位置
- 骨法用筆
- 隨類賦彩
- 傳模移寫

碓氷山上之月

室 生 犀 星

ぽつたりと百合ふくれゐる椽の先

その百合の花が一本に四つの花をもつてゐる。四つといふ數はきらひである。それゆゑその一つを剪つてしまふ。ところが最う一本の百合にも四つの蕾がふくれてゐる。やはり剪ることにした。

澄江堂はとなりの襖を隔てた部屋で、予は入口の方に室を撰んだ。窓の前に小さい池があつて噴水がのぼつてゐる。筧に穴をうがつてあるところから一間くらゐの水が輪のやうに池の面を敲いてゐる。まるで誰か小便をしてゐるやうで、見てゐるのが呼吸苦しくなる………。

澄江堂と襖一重ではあとになつてお互ひ窮屈にならぬかと思ふ。澄江堂は君さへよければ關はぬといふ。しかし君はどうかといふ。なるべく隣室でない方がよいけれど室がないからお互ひにがまんすることに仕やうといふことになつた（八月三日七十九度）

×

朝六時に起きる。散歩してかへつて來ても澄江堂はまだ床にゐる。が、とくに眼をさましてゐるらしく起きて出てく

る………。

「あゝよく寢た……。」

と云ふ。よく寢たらしい顏附である。

澄江堂はパンとミルクの朝飯だが、予はあたり前の朝のおぜんである。この宿に五十幾人かの避暑客はゐるがみんなパンとミルクの朝飯である。日本食は予ひとりくらゐださうである。パンとミルクで朝飯をたべると茶がうまく飲めない、も一つはパンとミルクで朝飯をすますと朝飯のかんじがしない。あれは朝寢坊のたべものだらうと考へた。

「この宿にゐる間だけパンとミルクにして家へかへると日本食ぢやないかな。」

さういふと澄江堂はたいがいさうだらうと言つた。

「けふたつちやんこが來るが別の宿をたのんで置いた。」

「たつちやんが來たらホテルへ行つて飯を食ほう。」

たつちやんこを聞きちがへてたつこちやんと澄江堂はいふ。たつこちやんは少しおかしい――その辰ちやんこは此間から予の郷里の家で泊つてゐたのだが、予が輕井澤へ行くのと一日おくれて歸京するので、こゝへ途中下車をして一泊することになつてゐるのである。

「風蘭や暑さいざよふ石の肌はどうぢや。」

澄江堂はいつの間にか予の田舍訛を覺えてしまつた。が、また「どうも上の句がしつくりしないな。」さう言つて、「石菖や暑さいざよふ……これもいかん。」と言つた。

「藤棚や暑さいざよふ……これもいかん。」

澄江堂は七へんばかり上の句をなほし、たばこをすぱ〳〵喫つてゐる。「日盛りや暑さいざよふ……これもいかん。」と言つた。かれはいかん〳〵を續けなりに言つた。

午後、堀辰雄君來る。そして家の方で、昨日朝子が乳を吐いて一日泣き通してゐたと言つた。又かと思ふ。心すぐ暗くなる。

「消化不良だね、よく注意しないといけない、藥書でも出しときたまへ、そばにゐるやうに力になるものだよ。」

澄江堂は濕布その他の手當の話などをした。

晩、輕井澤ホテルへ三人で行く。すぐ脇隣りに岩谷天狗のやうな西洋人がゐて、四合入の牛乳の瓶を控へビイルのやうにどく〳〵飲んでゐた。

「あれをみんな飲むつもりか？――。」

予は尠なからず恐怖した。

「君、ちやんと聞いてゐるよ、あつち向いてゐてもね。」

澄江堂はしつ〳〵といふやうな顔をする……なるほど、田舍へ行つてから聲が大きくなつた矢先きだし、あはてゝ予は緘默した。

西洋人は予らが食卓を離れるまでに完全に牛乳の四合入りを一滴あまさずに飲んでしまつた。予はいまさらに世界地圖に一覧を與へたやうな悠大な氣がした。

喫煙室に座つてゐるうち去年見た西洋人が泊つてゐないことに氣がついた。三人の子供に順繰りに本をよんで聞かせてゐた美しい異人の母親は來てゐなかつた。外へ出てから予は辰ちやん子に囁いた。

「去年とはさびしいやうだね。」
「そんな氣がしますね。」（八月四日、七十六度）

×

マンペイホテルへ茶をのみに行つた。暗い木の茂みが橋の上をつつんでゐるところで、予は突然右の人差指がこの冬ぢゆう痺れてゐて、溫かくなつて癒つてゐたのが二三日中に急にそのしびれが冷氣のために來てゐるのに氣づいた。
「これが君、またしびれ出して……」
さう言つて人差指をさし出すと、澄江堂はわつと言つて吃驚りした。
「あゝびつくりした、こりや、ほら、その不意に、――。」
葉のこまかい枝が夜ぞらに恩地君の版畫のやうに浮き出してゐる。「怕かつた、――」と言つて吃驚したのぢやないと言つた。
散步からかへつてから松村みね子さんが室の前を通つて、お寄りになる。去年おあひをしてから話をするやうになつてゐる。それもいつも輕井澤だけである。
あとでお菓子を松村さんに持たせてやる。
辰ちやん子歸京。（五日、七十五度）

×

朝、あんまをとる。

澄江堂は仕事をしてゐる。あるだけの戸を閉めきつてゐる。予は開けてゐるが反對である。それから予は晩は九時には床にはいるが、澄江堂はたいがい一時ごろ寢るらしく、起きてゐるのか寢てゐるのか分らないほど靜かである。松村さんから大きな栗まんぢう六つ、紙につつんで女中にもたせて來る。手のひらくらゐある大きさである。澄江堂はその大きなのを一つ晝飯後にたべる。一たい食後にすぐ菓子をたべるのは胃によくないと言つたが、いつのまにか食べるやうになつた。予が國から持つて來た金玉糖を一つづゝ食べるやうになつたのは、甘好きの澄江堂の風習がうつつて了つたのらしい。

楓と鬼齒朶のかげから朝日グラフの記者がひよつこり顏を出して、パちつと二人の寫眞を撮つた。――それから向ふの坐敷にゐる兄妹と母親との一族の、その兄らしい少年が散歩からかへつてくると、澄江堂をぱちつと撮つてゐたそのおれいに罐詰の水密桃が澄江堂へと持つて來た。予を閑却するも甚だしい。が水密桃だけは一つ食べた。

その少年の妹さんはべつぴんである。かの女はいたづらに椽側へ靴下の足を投げ出してゐるのが、予の机の方から見えた。れいの「暑さいざよふ」敷石のまはりの芝をけふは手がけをかけた男女が刈つてゐる。その遠景にまつつぐに一とすぢの噴水が今日から上がつた。その芝と噴水との景色はよかつた。予はしきりにほめたが澄江堂は默つてゐた。しばらくしてから

「なるほど、いいな。」と言つた。

そして又た暫らくしてから「僕はちよつと睡るからね。」と言つて睡いかほをした。昨夜二時に起きて小川を逹しに行

つたら、かれの部屋のひらきが椽側の方へ二尺ばかり開いて、濛々たる煙草のけむりの中に端然と座つて仕事をしてゐた。予は默つて小用を達して睡つたのである。それゆゑ睡いのであらう、――

二時間ほどすると洗面したやうにさつぱりした眼つきをして、

「あゝよく寢た。」と言つた。

晝寢のできない予はこのあゝよくねたには羨しかつた。睡たいときにはほろりと睡れるらしいからである。

「ほんとによくねたよ。」

夜、マンペイホテルへ飯をたべに行く、樹の間透く電燈が美しい。食卓のもう一つ向ふの食卓にひとりの美人が家族に交つて座つてゐた。笑ふと白い歯が揃つてそれが苦托なささうに清潔な感じをさせた

一年間西洋人を見なかつた田舍ぐらしの予の眼に、西洋人が珍らしかつた。一たい輕井澤は妙に上品振つてきらいである。しかし涼しいのは好きである。ことしは西洋人が見られるのが一つよけいな樂しみになつた

「谷崎君が好きかも知れない。」

澄江堂はかう言つたが、予は春まはどうだらうと言つた。そして予はまた、春まは苦情なしにはここに居るまいと思つた

「藤澤君もよく春まといふが、まといふのどういふこちや。」

「つまり何々さんのさんのかはりに、何々まといふのぢや。」

予はこくめいに予が郷里の訛つた方言を說明した。予は春まと一年も會はない。そんなことは少なくないが、あひた

いと思つた。（六日、七十六度）

×

朝起、冷たい雨を見た。椽さきの山百合が雨垂を含んでうなだれてゐる。家からの手紙に朝子乳吐くことゝ、東京から遊びにきてゐるひろちやんの耳の中へおできができた、多分、水泳のためであらう、なるべく早くかへれとあつた。

予は又た心鬱した。

澄江堂起きてくる、――

「夏に子供をあづかるのは考へものだ。」

さう言つた。なるほど考へものであると思つた。

二人で食事をするのは毎度のことである。しかし予はまだ澄江堂が洗面をせずにゐることに注意を拂つた。が、かれは平然と箸の先きで木つつき鳥のやうに半熟の卵のからをこくめいに叩いて、その破れたところから剝ぎはじめた。洗面をせずに飯をくふつもりらしい。飯が終つた。

「据風呂に犀星のゐる夜さむかなはどうぢや。」

「ひととほりはいいな。」

かれの脊中は形よい小ぢんまりした肉をもつてゐる。ちよつと鮎の感じがあるなと思つた。かれは湯をあびながら、

「けさ顔を洗ふのを忘れてしまつたよ。」

さう言つて洗面した。「僕はちやんと知つてゐたんだが默つてゐたんだ。」さう予は言つた。

午後、部屋にこもつて苦吟してゐるらしかつた。それが二三日前から烈しくなつたやうな氣がした。

夕方、裏門きわの女中部屋の戸板に向ひ、立つたまゝで女中のお雪が泣いてゐた。——色も白く浴衣も白い名もお雪といふ此の女中は、どこかの小間使ひをしてゐたので能く料理番なぞに叱られると聞いてゐたが、可愛さうな氣がした。

「さつき百合が泣いてゐた……。」

「可哀さうにいぢめられるんだね、——。」

澄江堂と予とはこの女を百合と言つてゐたのである。百合は一日くらゐ客の間の世話を燒くと、つぎからつぎへと新手の客に代えられた。　（七日、七十八度）

×

雨になつて雷鳴がした、次第に烈しくなる……いままで靜まり返つてゐた澄江子は何か叫びながら、玄關さきの應接間へ飛んで行つた。予は折柄、あんまをとつてゐたが、療治はもう終りかかつてゐたけれど、澄江堂が馳け出してから少し怕くなつた。それにまだ肩先きにあんまが薄暗く取りついてゐる——。

「大丈夫か、あんまさん。」

「ぴりぴりと來る奴はあぶなうございますが、まだごろごろくらゐでは大したことはありません。」

「だんだん烈しくなる……。」

「しまひにぴしつと來ます、そいつは恐いが……。」
雷鳴が次第に近くなつた。雨は庭ぢゆうに溜つた。池の水があふれた。
「もう止すよ、君!」
予はあんまを止めてもらつた。そして、「君はこの部屋にゐても大丈夫かね。」と左う尋ねた。
「なあに雷くらゐは、——。」
予は應接間へ行くために庭の雨の中を走つた。應接間には松村さん、そのお孃さんが、もう避難してゐた。澄江堂も神妙に椅子によりながら、酷いかみなりだなあと言つて、氣がついたやうに、
「君、あんまはどうした。」
「置いて來た。」
予は椽側に泰然と座つてゐた先刻のあんまさんの姿を、勇々しく思ひ返した。
「置いて來たは酷いた……。」
松村さんもびつくりしたやうな顏をした。
「かあいさうに、——」さう言つて、女中にあんまさんをつれて來ておあげなさいと言ひつけられた。
「あんまは大丈夫だと言つてゐましたよ。」
「でもね、こんなに降つてゐるんですもの。」
お孃さんもさういふ。が、かみなりはやまなかつた。稻光りがするごとに松村さんのお孃さんが
「おかあさま、大丈夫?——。」

怕さうにさう言つた。

晩、松村さん、お孃さん、大學へ行つてる坊ちやん、澄江堂の四人で散歩をした。大學へ行つてゐて坊ちやんはおかしいと予は松村さんに言つた。松村さんと予との間に風月論が出た。澄江堂は松村さんに議論を吹きかけた。松村さんは穩やかな人である。（八日、八十度）

×

はじめ澄江堂と襖合せではおたがひに仕事の都合がわるくないかと思つたが、一しよにゐると澄江堂といふひとはよくできた人物だと思つた。却つて襖どなりでお茶にしやうかとこちらで言ふと、又、向ふから少し歩かうかと言ひ、すこしも氣が置けなかつた。晩、予は予の規則をまもるために九時半には床へ這入つたが、澄江堂は應接室へ行つてかへつてくるのにも、靜かに雨戸をあけて歸つた。

「また客か?――。」

さう寢床から聲をかけると、

「眼がさめたのか、――。」

と言つた。

「いやまだ起きてゐたのだ、よくお客があるな。」

澄江堂は間もなく仕事を初める……予はねむるのである。こんな風に暮しか反對であつたが、そのもたれが無かつ

た。

夜中であつた。

予か厠へ椽側づたひにゆくと、澄江堂か椽側にあるお湯を取りに出るのと一しよであつた。兩方でびつくりした。

「わあ、――」

「あ、びつくりした。」（九日、七十八度）

×

秋ぜみの明るみ向いて啞かな

松村みね子さんか昨夜二階の段梯子をふみはずして、足のゆびを傷められたと女中か言つた。そこで一句、

草かげでいなごがひとり微笑ふた

澄江子も和歌一首をしたため、お見舞ひのかわりに持たせる。――晩、二人で松村さんの部屋へはじめて遊びにゆく、（十日、八十度）

×

朝、散歩してゐると美しい西洋人の姉妹が別莊道から下りて來た。二人とも樂譜を持つてゐる。ひとりは藍色で妹は純白な服を着てゐる。姉の肩つきは富士山によく似てゐた。えりくびは乳のやうに白かつた

この旅館の應接間は客がみんな食前とか食後には、よく出て來て椅子に坐つた。三年つづけて挨拶をしてゐたが、その五十がらみの人の好い顔の客が醫學博士であることや、白足袋でゴードを喫むのが齒科の先生であることや、毛糸のジヤケツを着てゐるのが千葉の地主であることや、三人のお孃さきをつれてきてゐるのが川端の地主であること、また毎年のやうに演説會の事務を取りにくるのがレヴエヂヤトフに似てゐることや、朝から賑やかに若い妻君と出歩いてゐるのが神奈川の金持ちであることや、その他の人々がみんな應接間へ座つては休んでゐた。予は誰れにも馴染みになれなかつた。

齒科の先生は輕井澤の金棒引きで、土地と別莊をもつてゐた。そして談たまたま輕井澤のことに及ぶと、昂然として言つた。

「輕井澤にはもう土地なんてありませんよ。」

夕方、澄江堂と散歩しに出て射的をした。かれは二つバツトを落した。予も同樣二つ落した。予は生れて鐵砲を手にもつたことが初めてであつた。

「このつぎは五ツの内四ツまで落す自信はあるがなあ、――。」

この前左う言つた澄江子は、たつた二つしか落せなかつた。（十一日、八十度）

朝子の帽子を二つ、マントのやうな毛糸編みのちやんちやんを二枚、レースを一丈、それだけを買つてかへりかけると、れいの裏門の女中部屋でまたお雪が晞いてゐた。予はすぐ神經質ですぐ對手に應へる顏の番頭を思ひ出した。毎年の老番頭のかはりに新しく來た番頭であつた。老番頭の仕事はいくらか浮いて氣の毒であつた。時代はこの三千尺の山の上の旅館の上にまで、その餘勢をもつて訪づれてゐた。

室へはいると澄江子はすぐ起きて出て、

「あゝよく寢た。」と又た言つた。そして

「今夜は徹夜ぢや、すこし痩せたかな。」

と、その頰へ手を持つて行つた。予が來てからも少し痩せたやうに思はれた。

「ときに話がある……」予は左う言つて

「お雪はまた泣いてゐたよ。」

澄江堂は不愉快な顏をした。その不愉快さは次第に憐愍の表情に變化つた。戸板の方を向いてしくしくと泣いてゐるのが、予に關係のないことだけに哀れを催した。

「ああいふぼんやりした顏といふものは、憎み出したらきりもなく憎くなる顏立ちだが……。」

「さうだよ、だから可哀さうだよ。」

澄江子はさう言つた。二人とも庭へ出た。澄江子はそこにある高い楓の木の枝移りにするすると木登りをはじめた。

何か腹が立つたやうにである。

晩、マンペイホテルへ茶を飲みに行つた。

食堂の電燈がいつもよりも數多く點れてゐて、音樂が夜色を縫ふた植込みの中から起つてゐた、

「何かあるんだな今晩は?——。」

「さうらしいね。」

サロンに集つてくるひと達ちは、西洋人もさうだが、日本人もつくりが派手らしく見えた。肌を露いた西洋人が食堂の方へでかけるときに、サロンにゐる日本人の娘や夫人にあいさつをして行く……あれらはみな知り合ひと見えるな、しばらくして今夜はダンスがあるので宮さまもおいでだといふことであつた。二人はぼつ然として坐つてゐたが、不調和な空氣を感じた。

「出やう、——。」

二人は同時にさう言つて玄關わきの、美しい西洋人の間をすりぬけた。

「輕井澤では星が少し大きく見えるよ。」

さう言へば星が大きく見えた。これまで氣がつかなかつた。——宿の應接間に松村さんが居られた。どちらへ?——。マンペイへ行つて來ましたと予はこたへた。　（十二日、八十度）

×

二三日上らなかつた正面の噴水がけふから又た上つた。刈つた芝が美しい、百合はみんな凋れて了つた。ばらばらと通り雨があつたあとに、全く秋の半ばのやうな凉風が吹いた。

夕方から碓氷峠の上へ月を見に行かうといふことになり、松村さんとお孃さん、旅館の主人、澄江堂と予とが自動車に乘つた。峠へは登り道ばかりで、松村さんは少し蒼い顏をして、

「恐うございますね。」と言つた。

お孃さんは十七であるのに、お母さんにしつかり抱きついてゐた。自動車はげつくりとはづみを食ひながら、樹の間から見える月の山峽を登つて行つた。屛風に描き分けた峽の道を指呼の間に上るやうな氣がした。

碓氷村は峠の頂に黑ずんだ屋根をならべ、その低い庇に四隅に紙房のある古風な切子燈籠を軒ごとに吊してあつた。けふは月遲れのうら盆の日である。

「あの燈籠はいいなあ――。」

自動車から下り立つた澄江堂は、仄暗い明りにやつと見分けられる家の中を覗き込みながら言つた。十二三の女の子がらむぷの下で何かの本を讀んでゐるのが、うす暗いので同じ家内でもずつと遠くのやうに見えた。

「賴んだら呉れないかね。」

燈籠の骨と紙とが四邊の荒い風色と關係があるやうにも思はれた。暗さになれるとその燈籠を吊した庇の下に、何かの葉の硬い石菖のやうな草が磊々たる石の間に逆々と茂つてゐた。

熊野權現へ參詣した。

松村さんもお孃さんも權現さまの石段の下で羽織を着た。見晴臺へ行くと、妙義山一帶の山脈が煤まみれのむら雲の中に、月の片曇りをあびながらどんよりと重疊してゐた。茫々たる歲月を封じ込んでゐるやうで、むしろ騷々しい挑んだ荒凉たる景色であつた。

二三人の西洋人が七輪に炭火を起して、お茶をあたためながら、ベンチに同勢らしい二三の若い娘さんだちと何か話してゐた。こんな景色は繪よりも文章よりも音樂に近いかなあと澄江子が言つた。

「そんなにおさむくはございませんね。」

松村さんは羽織着のほつそりした姿で、旅館のあるじと左う話してゐる。――予はうちの朝子が乳を吐いたことや、ひろちやんの耳のおできや、けふ來た手紙でうちのものの乳にこりのできたことなどを思ひ浮べた。雲は北方へ吹きよせられ東方の山道が見えて來た。雲がないので刷いだ山狹は靜かであつた。

「あれが暴れ出したら大變だな。」

淺間山はこんもりと象のやうに蹲んで、どこか遠方で鎖がつないであるやうな氣がした。煙は上州へながれてゐるので見えなかつた。輕井澤の町もすぐ眼の下に見えた。

見晴臺から茶店へ行つた。黑い痩せた猫が圍爐裏にゐたが、松村のお孃さんが呼んだので、すぐその膝の上にあがつた。が、また思ひ返して圍爐裏のへりへ行つた。「あひにく力餅がみんなになりましてな。」無器用な口つきで、卒氣なく茶店の老人が言つた。すこしくらゐなら今から拵へるとも言つた。べつに食べたくもなかつたが待つことにした。――吹きぬけの山風が裏の山脈から通りすぎた。

「お雪といふのはどんな女中でございますの。縹緻のいい子ですか？――。」

「いや、あれとはちがひます。」

れいの、お雪の話が出たのである。――旅館のあるじは、あのお雪はおしやべりで困る、それに沓掛のカフエにもゐたことがあると言つた。そのために予の哀れは變らなかつた。お雪は白いゆかたを着け、すこしおしろいのある顔でそ

して納戸に向いて泣いて居ればいい………さう思つて笑つた。

餅をたべ茶をのんで、峠を下りはじめた。明るい脚光に浮き出された山中に多い白い蛾が、紙きれのやうに片々として舞ふてゐた。

「かへりは少しもこはくはありませんかね。」

松村さんが左う言つた。坦々として辷つて行つたからである。「乗せてくれんか？」闇の中で、旅館のあるじの知り合ひらしいのが、これも月見のかへりらしく道端から聲をかけたが、自動車は默つてしづかに辷つて行つた。

（十三日、八十度）

×

昨日けふ發つことにしてをいたが、夕景近くなると名殘り惜しい氣がした。しかし子供のことが氣になつて仕方がなかつた。

晩食後に盤の上に何か落ちてゐたので、觸つて見ると何かの骨であつた。

「鯛のほねたたみにひろふ夜さむかなはどうぢや。」

予はさう言つて澄江堂に示した。

「なるほど、それはうまい！」

十一時五十幾分だから夜はゆつくりひまがあつた。松村さん一族がお別れに散歩いたしませう、來年までおあひできませんからと言つた。澄江子を加へ五人づれであつた。町の中をひと廻りした。

「ことしは何かさびしいやうですね。」

と、松村さんが言ふ。全く去年とくらべるとそんな氣がした。踏切りから裏通りの別莊の前通りへ出た。風月を樂しなどいふ話が出た。テニスコートの通りへ出ると教會堂からさんびかが起つてゐた。風は秋の十月くらゐの涼しさであつた。

「お國に入らつしやるとお年を召すやうな氣がいたしませんか？——。」

松村さんがさう言つた。

「ええ、それは、そんな氣もしますが………。」

散歩から歸へると、遲いから見送りをおことはりした。澄江堂と例の應接間に居殘つた。十一時十分過ぎに車が來てみんなに別れた。



新秋

木下利玄

手を洗ふ水つめたきに今朝の秋や身を省みて虔しくあり

おのづから夕風かよへかそよぎゐる秋萩の花白芙蓉の花

百合

裏山の青萱ぬけいで咲く百合の涼風のむた大きくゆらげり

梅雨晴れの風よろこびて打ちむかふ裏山百合の星形の大花

うら山の青葉低枝と背高百合ゆれちかづきをり風すがやかに

富士見野

中村憲吉

久びさに信濃をとほり思ひふかし富士見野へ下りてひとり遊ぶも。

この國におもひ出おほし年經りて我れは變れどこころの痛き

八ケ嶺ゆいづ湧く秋の白くもの豐にひろがる國原にわれは

みんなみの野にはさへぎる山のなし空とほく垂れし富士見廣原

富士見野にひとりの旅を下りてあそび秋風の吹くをいたくおぼゆる

み空より雲居くだりて秋ぐさの花野をわたる風くまなさ

秋かぜの富士見の原やむかしなる師も友も來て此處にあそびし

秋かぜの廣野になびく八千草に皆鳴く虫のこゑの靜けさ

此處にしてひとり寂しも道にゆるる大虎杖(おほいたどり)を手に折らずかも

この村に知りて遇ふべき人はあれど秋ぐさの野にひとりを寂しむ

むらさきの松虫草の花のゆれに心ひかれ居て我れは驚く

たまたまに後ろの徑(みち)をとほる駄馬(だば)は原のとほくの村に行くらむ

畫僧鐵翁

横川毅一郎

鐵翁禪師、名は祖門、俗姓日高氏、長崎春德寺第十四代の住持なり寛政三年肥前長崎に生れ、少小の頃來船の清客江稼圃に就きて畫道を學び、悉く其傳を得、山水花卉を善くし尤も蘭竹に長ず。三浦梧門、木下逸雲と共に幕末長崎に於ける三大家と稱せらる、爲人狷介にして志操あり、道意に安んじ、塵俗に超脫す、近世文人畫壇の一偉材たり。晩年雲龍寺に移り門を杜ぢ客を謝して畫禪の三昧に悠々自適す。維新後再び春德寺内に住し明治四年十二月十五日示寂、時に歲八十一乃ち春德寺の後山に葬る。

寒寺門頭の氣樂な揭示

徳川慶喜大政奉還といふ世のうつりかはりに日本全土を擧げて騷然とした慶應三年丁卯の冬、西極長崎の一寒寺雲龍寺の門頭には、騷がしい世の變轉を忘れたかの如くいかにも氣樂な一文が揭げられた。

『山主敢て誠を以て諸君に白す。老僧生來愚痴短才、不學文盲、只頭を剃る迄の入道坊主にて、手習さへ勤めたること少ければ、詩文章は言ふに及ばず、和歌俳諧、其余の技藝、一として知る所なく、諸君子に相對して談話するの道を知らねば、謁見することを愧づるの外術なし。其上近來老病交々責めて步行すら思ふに任せず、身體頗る疲勞を覺ゆ。是諸君子の問尋を辭し、敢て相見を拒む所以なり。諸君子幸に其の無禮を咎むることなく、老僧をして天性の愚を守り、天然を了せしめ給はんことを希ふ。中に就き、畫は幼年より性の好む所、今に至りて看經の代りとなす。然れども、其の畫も今は多く忘れ果て、隨意に筆を走らせ、敢て巧拙に拘はらず唯聞き及びし古人の語を思ひて自己の心を樂ましむるものなれば、人の爲に慰となすには非ず。中にも甚しきは、先づ潤筆の金銀、物品を齎らし之を與ふるに依り認めよと言はぬ許にて畫を乞ふ人あり。老僧素より畫工に非ざれば是等の俗氣胸に痞へて殆んど嘔吐を發す。一切之を謝絕す。若し巧拙に拘はらずして隨意にても好しとならば、

何なりとも一枚は笑納の爲認め、後若し乞ふ人の心に叶ふことあらば其時に至りて眞情の賄物は多少に拘はらず、甘んじて是を受くべし。長絹大幅は老筆の能はざる所、故に皆之を謝絕す。

慶應第三年丁卯冬十一月　　鐵　　翁

風流を戒めて入門を許さず

この風流な一文が雲龍寺の門頭に掲げられた前年、慶應二年丙寅の冬、年若い一人の士が雲龍寺に鐵翁禪師の門を敲いた。

『賴まう』森閑として物音一つしない閑寂な寺内に、士の澄みきつた聲が長い廊下の奧にこだまする と、微かに答へる人の聲を聞いて士は一寸身なりを繕つた。軈て訪客の前へ出て來たのは鐵翁の門人淵泉（後支那に遊び號を見山と改む、越中富山に仕して一家を爲した）であつた。

『拙者は久留米の藩士で御座るが、實は親しく禪師に就いて六法の御教導を願ひ度く遙々推參いたした者、宜敷この者禪師に御取做しを願ひたい。』

士は慇懃に挨拶をして其の來意を告げた。

『どうか暫らくお待ち下され』

鐵翁は數日來の不快で、物憂さうな顏をして漫然と書見をしてゐたが、淵泉の告げるのを聞き終ると「又か」と言はぬ許りの面倒臭さうな表情をして淵泉の顏を見返した。

『其の人は畫事を以て藩公に仕へてゐる人かどうかを聞いて來なさい』

ブツキラ棒に恁ふ云つた儘復た書見に眼を移した。

『御來意を告げました所、貴殿畫事を以て藩公に仕へられる方かどうかを伺ひ度いと申されます』

淵泉は訪客の顏を覗き込むやうにして禪師の意を傳へた。

『イヤ、拙者の家固より畫工では御座いません、藩公が久しき以前から禪師の高風を慕はれ、六法の御教授を受けよと拙者に命ぜられた迄で御座る。左樣禪師に御傳へ下さるよう』

淵泉は鐵翁に訪客の述べた儘を傳へた。

「そんなことであらう」と予期したもののやうに鐵翁は書見から眼も離さず淵泉にアツサリ言ひ付けた。

『老衲は此頃病氣の上に、老耄れて參つたから遺憾乍ら御希望に添ふことは出來ぬと斷りなさい』

淵泉は復た長い廊下を傳つて訪客に禪師の云ふ儘を述べた。

『御病氣とあれば止むを得ませぬ。然らば重ねての御願で御座るが、禪師御揮毫の畫蘭一葉を頂いて、この由藩公に復命致したいと存ずる、御迷惑では御座るが是非御取做を願ひ度い』

客は愈々慇懃に其の希望を囑した。軈て淵泉の口から傳へら

れた鐵翁の言葉は痛く訪客を失望せしめた。

『病中のこと故、筆を執るのがいやだと申されます』

客は失望と憤懣とを努めて押さへ、更に乞ふた。

『返す〴〵も遺憾なことで御座る故、然らばせめて病床について一調を賜はり度い』

鐵翁は遂に最後のこの乞ひも許さなかつた。訪客の表情には失望と不滿との色があり〳〵と讀まれた。

『重ね〴〵御面倒であつた』士は不機嫌な挨拶を殘して快々として雲龍寺の門を出でた。寺の門を振り返つた士はいかにも忌々しげに道端にペッと唾を吐いて、自然に出て來る、うす笑ひを嚙み殺しながら歩いて行つた。

然しこの士は此儘では却々斷念しなかつた。其後も根氣よく幾たびも〳〵雲龍寺の門を叩いたがいつも決つたやうに面會を謝絶されたが、或日彼は鐵翁が寺内の中庭を散策するのを秘かに見て、急いで案内を乞ふた。取次に出たのは相變らず淵泉であつた。

『ヤア、度々御迷惑に存ずるが實は只今禪師の御散策をお見受け申したにより、定めし本日は御機嫌もよろしい事と拜察いたす。本日は是非共御面晤下さるやう御取繼ぎ願ひ度い』

訪客の面上には如何にも熱烈な願望の氣が動いた。根氣のよい士の態度に淵泉は煩さいとも思はず、却つて士の熱心に同情せずには居られなくなつた。彼は充分の好意を寄せて、鐵翁の承諾を得やうと努めたが『氣分が勝れないから、如何なる人にも逢ひたうない』と頑として士の乞ひを容れなかつた。訪客は仕方なく懐中から近作一篇を記した詩箋を出して禪師の私を乞ふた。

『只今禪師に御伺ひ致しました處、禪師の申さるるには、生來不文無學、詩歌俳諧のやうなものは何一つ解する事が出來ない故惡しからず思召し下さるやうとの事で御座ります』

と云つて淵泉は詩箋を訪客の前に差出した。これを聞き終つた士の表情は其の瞬間ガラリと變つた。淵泉が差し出した詩箋をピリピリッと引き裂くと、滿面朱を注いだ彼の顔は、極度の昂奮に双頰の筋肉が硬直したかの如く、口角は徒らに沫を吐いて、彼は思ふ言葉を發することが出來ない。心に決する處あつたもの丶如く、刀を按んじて起つた彼は眼を瞋らして暫らくは淵泉を睥睨した。

異狀に昂奮した訪客の樣子を目の當りに見た年若い淵泉は狼狽せずには居られなかつた。眼瞼の吊り上る許りに見据えられた士の險惡なまなざしを避けて淵泉は辛ふじて云つた。

『どうぞ御立腹の無いやうに』

『默れ、拙者禪師の高德を慕つて遙々長崎に來り、精舍を訪ふと既に數回に及んでゐる、然るに一度として拙者の望を容れない許りではない。今日秘かに窺へば禪師の起床動作は常人と異ならぬではないか、それにもかゝはらず言を左右して謁見を拒むのは高僧にあるまじき振舞であらう。拙者にも決心が御座る、何が故に拙者をかく迄に侮辱せらるるか、確と聞いて參られえ』

打つて變つて粗暴な言葉を吐きかけられた年若い淵泉はドキマギしながら奥へ引返したが、たゞならぬ士の氣色に事の成り行きを案じた彼は居合せた兄弟の倉野煌園に委細を說明して其の處置を相談した。

首は得べし。蘭は得べからず

方丈の椽に折柄茫然と庭前を眺めてゐた鐵翁は、煌園の說明を聞くと胸を掩ふ髯々とした白鬚を撫でながら口邊に皮肉な笑を浮かべて煌園を顧みた。

『さても〳〵物の判らぬ人ぢや、どうれ、それ程判らぬなら老衲が言ふて聞さう』

『容は大分激昂の樣子に見えまする故直接の御面會はお差控になつたがよろしいと存じます、先づ私から委細を申傳へることに致しませう』

いや構ふな〳〵』椽から起ちかけた鐵翁を煌園は强いて思ひ止まらせた。

『では老衲の言ふ事を汝からよう云つてやれ、老衲は畫工では、無いが、畫道は聊か解して居る。折角の望みではあるが是を敢て謝絕するのは外ではない、今天下は騷然として公儀の德は薄く、政道は衰へ、浪士は處々に嘯集して將に何事か起らうとしてをる。この時諸藩はどうぢや、皆汲々として武を講じ、兵を錬るに遑ないのは既に何人も承知の通りぢや。學問技藝に携はる者さへも、今は劍を學び武を講ずる時ではないか、苟くも身士人たる者は、宜しく節義を重んじて主人に奉公せねばならん。然るに何事ぢや、この重大な天下の形勢を外に、今更畫門に入らるなどとは士人の本分を忘れた、もつての外の振舞ぢや。老衲はそんな人に逢ひたくは無い。よいか、逢はない譯は兹ぢや、よし一歩を讓つて、畫を學ぶもよいとしても、其順序を誤まつてゐる。何故ならば、若し藩公が眞實、老衲の繪を欽賞され、藩士を老衲の門に入れやうとされるならば、何故に香華所である梅林寺に紹介させぬのか、梅林寺は老衲の宗派の門頭で老衲と住職との間柄は藩公閣より熟知の筈ぢや、其の順序にもよらず、突然藩公の命ぢやと云ふて參つたとて、何んで輕卒に許すことが出來やう、この條理も辨へず、唯藩公に復命する

言葉が無い爲めに老衲を脅かさうなどゝはもつての外ぢや。老衲は決して一命は惜まん、それ程老衲の首が欲しければ勝手に持つて行くがよい。然しぢや、老衲の首は取つても老衲の蘭は得られまいと申せ』、

鐵翁は恁ふ云つて終ふと、唇の邊りに皮肉な笑を落して不機嫌にツト居間に這入つた。唐墨の香がすが〳〵しく漂よう書室の中に座つた鐵翁は、もう何事にもかゝはりの無い様な氣安さで畫筆を嚙んだ。

煌園は落着き拂つて昂奮した士と相對した。平素鐵翁から道力の修業を受けてゐた彼に執つては士の威脅などは殆んど念頭にはかけなかつた。彼は鐵翁の心に成り切つて如何にも鐵翁自身のやうに、一言一言に力を籠めて今言ひ聞かされた言葉を、一語を漏らさずに注意深く士の前に述べた。彼の言葉はよく鐵翁の心を心として、熱と力とを失なはず、其眞實な、條理立つた一言一句は士の心を打たずには措かなかつた。

チツト聞いて居た士の表情は自然に其異狀な緊張が崩れ、威猛高な顏も次第〳〵に下向きに成つて、煌園が最後の一句にイヤに力を入れて傳へ終つた時、士は如何にも面目なげにうつ向いた儘暫らくは無言でヂツと自分の足許を見つめて居たが、軈て

『拙者の不覺何の面目も御座りませぬ。只今禪師の御訓戒を拜承いたして迷夢一朝に相醒めました。まことに禪師の申さるる如く、今は天下有事の際、進んで武士の面目を立てるで御座りませう。重ね重ねの粗暴の言、御詫の仕樣も御座りませぬ。無禮の段は平に御容赦下さるやう貴殿より宜しく御取做下されたい、今日の御教訓、拙者生涯忘却仕りませぬと、どうか禪師に御傳へ下されたい』

謝して寺門を出た士の顏は晴々しかつた。愚かしい自分の心を、自ら嘲けりながら彼は幾度も幾度も古ぼけた寶龍寺の門を見返りながら去つた。

白刄の下に泰然自若

鐵翁は武士が極端に嫌いであつた。何か心に適はないことがあると、いつも刀に手を掛けては脅かさうとする其我儘な態度が、どんなに鐵翁の純眞な心を傷けたか知れない、未だ春德寺に居つた頃鐵翁は、はしたない武士の粗暴な振舞を目の當り見て士といふものが何よりも嫌いな人間に成つてしまつた。ある知る邊の紹介で肥前島原の藩士某から畫蘭一葉の揮毫を依囑された。それまで士人といふものに何の拘はりも持たなかつた鐵翁は何氣なく引き受けてしまつたが、心に充たなければいつ迄

經つても描かない彼の習性は、度々の催促にハッと思ひ返しても、又感興のない儘に打ち捨てゝ居た。

たまり兼ねたと見えた其の藩士は自身春徳寺を訪れて鐵翁に面晤を求めた。心よく藩士を書室に招き入れた鐵翁は、簡單に未だ描けない旨を斷つたが、其の挨拶には何一つの世辭もなければ綾もなく、又描かないことが左程惡い事でもないやうに、余りに素氣ない言葉であつた。自身が出かけたならば即座にも描いて呉れるだらうと予期して來た彼の期待は裏切られた。斷りの挨拶一つで、もうこの訪客には用の無いものゝ如く、鐵翁は他の客を顧みて談笑し、藩士の爲めに筆を執らうとする氣配すらないのを見た藩士は、理屈を並べて鐵翁の不信を詰つた。

傲頑で不遜な、而して權柄づくな藩士の言葉が鐵翁の狷癖に觸れた。彼の狷介の性はこの禮讓を失なつた言葉を其儘には見逃せなかつた。嫌忌の情がムラ〳〵と鐵翁の胸に持ち上ると、鬖々として胸を掩つた皚白の長髯が微かに動くと見ると、鐵翁の口からは、威壓する樣な、圓味のある太い聲が叩きつけるやうに吐き出された。

『老衲は畫工では無い！』

只一言の中に鐵翁の說明は盡きてゐる。然し是丈では濟ませなかつた。この言葉が吐き出されると同時に、鐵翁は間近の書架の上から一卷の絹素を取ると、無言の儘それを藩士の前に投げつけた。鐵翁はそれ以上何も云はなかつた。是丈の行爲で藩士の執るべき道を敎へたのである。

『武士に對して無禮であらう』

絹素を擲たれた藩士の面上は蒼白の色を呈した。跳ね返されたやうに中腰に立つた士は勃然として刀を按じて鐵翁の顏をまともに睨み返した。

『ウム、斬ると云ふのか、それも面白からう。サア、斬れるものなら斬つて參れ』

座布團の上に端座した鐵翁は如何にも自若として、皚白の長髯は微動だもしなかつた。炯々とした二の瞳は何物にも動じない力と色とをたたへて、昂奮した士の胸の當りを射拔くやうに据つた。

權柄を憎んで奉行の請を斥く

この事があつてから鐵翁は權柄づくな武士の振舞を極度に忌み嫌ふやうに成つた　其後時の長崎奉行、高嶋四郎太夫（秋帆が鐵翁の高名を聞いて、屬吏を使に幣を厚くして畫蘭の揮毫を請ふたことがあつたが是を少しも悍ばなかつた鐵翁は屬吏に向

つてアッサリと斷つた

『お奉行のお求めではあるが老衲は御免を蒙る。眞實老衲の腕が欲しいと御思召すなら、何故御自身御出にならぬ。老衲は畫工では御座らぬから、左樣御承知なさるやうお傳へ下され』

狷介な鐵翁の挨拶は飽まで皮肉であつた。屬吏は手を空しくして引き下つたが果してこの儘を奉行に復命したかどうか。

かうして幾度も武士から心を傷けられた鐵翁は南筑久留米の藩士某には遂に面晤を許さなかつた。場所が場所丈に其後も度々恁ふ云ふ類の訪客に惱まされた鐵翁は一々應接しては不快を感ずることが煩はしくなつて來た。寶龍寺に移つて全くの畫禪三昧に入つてからは堅く門を杜ぢて悠々として自適する境涯を樂しまうとしたので、遂に門頭に一文を揭げて、其の意中を訪客に傳へたのである。

元は貧しい大工の子

鐵翁の父は日高勘左衛門と云つて長崎の大工であつた。寛政三年の二月其の一子として生れた彼は既に八才の頃から父に從つて大工の業を習ひ覺えさせられたが、彼に執つては鋸を持つことに少しの興味もなく、毎日〳〵父の辨當を提げて仕事場に隨いて行くことがどんなに嫌なことであつたか知れない。彼は父の教へる鋸のひき方には更に耳を傾けやうともせず、獨り鉋のひき屑の中に埋れて父が材木に墨うつ、墨壺の墨を秘かに棒先きに附けては板切に心ゆくばかり物の象を描いて樂しんで居た。いくら叱られても、彼は板切に繪を描く事は廢められなかつた。

其頃、吳周藏といふ者があつた。通稱を與四郎と云ひ、鳳山又は與酬などと號して多少畫の道を善くしてゐたが、或時何かの序に勘左衛門の仕事場へ遣つて來た時、鐵翁が熱心に描いてゐる繪を眺めて其技術の天才的なのに尠なからず驚いた。九歲の少年と話し相手になつた楓山は、鐵翁が大工に成る事をどんなに嫌つて居るかを知つて、勘左衛門を諭して畫工にする事を切に勸めた。

『この子を大工にすることは惜しい、必つと大家になるから畫を習はせなさい』と云つて到頭勘左衛門を說き伏せた。そして彼は鐵翁を、其頃長崎の畫場で有名であつた石崎融思（字は士齊、鳳嶺又は放齡と號し、荒木元融の子である、父に就いて畫を學び、人物花卉鳥獸山水を善くし、後石崎氏を嗣ぎ弘化三年七十九歲を以て歿した）の門人にする事迄何くれとなく世話をして吳れた。

鋸を捨てゝ彩筆に代へた鐵翁の喜こびは一通りではなかつ

た。離思の門に入つた彼は貪るやうに山水と云はず花鳥と云はず心ゆくまゝに描いて、明るい希望に充ちた其日〳〵を送ることゝなつた。

然し間もなく鐵翁の生涯には一つの大きい轉機が來た。父勘左衞門は享和元年正月廿二日、當時十一歳の鐵翁を遺して歿した。貧しい大工の一家は稼ぎ手の勘左衞門を失つて其日からの生計に困らねばならなかつた。この氣の毒な一家の窮狀を聞いた。春德寺第十三代の住持玄翁和尚は、平素から鐵翁の才氣を愛して居たので、自ら進んで鐵翁を引き取ることゝした。かくて春德寺の人となつた彼は玄翁和尚に就いて禪學を學びながら、其の好む處の畫道の修業を捨てず、一層是れに精進する事が出來た。

華嶽山春德寺は長崎片淵郷の唐渡山の麓に在つて、飯盛山、峨嵋山に相對し、往昔長崎氏がこの天險に依つて城郭を築いた處だけに南西遙かに雲煙茫茫とした港口を俯瞰し、十山の眺望は頗る絕佳であつた。貧しい一大工の陋屋から、この淨界春德寺の人となつた鐵翁には慈父を失つた悲傷さえも忘れ勝ちな日が來た。心ゆく儘に畫を描き、貪る如く漢籍に親しむ事の出來る樣になつた其日〳〵が、好學の少年に執つてどれ程輝かしい生活であつたか知れない。玄翁和尚も亦この聰明英智な幼い弟子を得て、一種の心安さを覺えずには居られなかつた。

淸の杭州臨安の畫家、江稼圃（名は泰交、字は大來、連山又は稼圃と號す）が長崎に來航したのは文化六年、鐵翁が十九歳の時であつた。この畫名の高い新來の淸客を迎へた長崎の畫場は寄ると觸ると江稼圃の噂で持ち切つた。繪畫に對して異狀な興味を持つて來た鐵翁が此間の消息を聞いて、いかに江稼圃の名に憧れの心を抱いたか。遒勁の筆力を以て樸實沈着な山水を描き、氣概ある禀生の所有者であつた江稼圃は長崎畫人の間に尠からぬ刺戟を與へた。長崎人は云ふ迄もなく、遠く其高い畫名を聞いて、親しく門を叩く者は決して尠なくはなかつた。こう云ふ噂をそれからそれと傳へ聞いた鐵翁は其度毎に若い、心を燃やさずには居られなかつたのである。遂に彼は玄翁和尚に迫つて江大來の門に入る事を許して貰つたのは文化六年の冬であつた。彼は參禪修學の余暇を稼圃の寓居に通つて貪るやうに學んだ。彼が如何に深く江大來の藝風に心醉したかは後世鐵翁の藝術を論ずる者が、いづれも「畫を其門江稼圃に學び悉く其傳を獲」と傳へてゐるのを見ても想像するに難くない。

鐵翁が江稼圃から得たものは單に其の畫技許りではなかつた。一種の氣概ある禀性と其の精神的な生活の基調とは鐵翁の人格に尠からぬ感化を與へ、天性狷介な上に更に一段の精神的

な深擁性を育くんだ。鐵翁が死に至るまで、畫を以て看經に代へるまでに心醉したにも拘はらず、聊かも職業化する處がなく、よく文化人の面目を名實共に完うしたのは江大來の感化に負ふ處が極めて多かつたやうである。田能村竹田は其著「山中人饒舌」の中に江稼圃の人物を評して、

伊海が山水、李用安が墨竹は清商中最も表々たる者なり。已巳歲、江（大來）稼圃といふもの至り、山水に工みに排界自ら喜べども、但淸潤の致に乏しきを覺ゆるのみ。府尹固より名を聞き、命を傳へて畫を徵し潤筆頗る夥し。稼圃傲然として顧みず、視る事猶土芥の如し。西歸の後、其遺筐を檢するに絹素の封完き事故の如し。或は俗人囑する處あれば、點染して齊ます。嘗て天臺山圖一卷を作り、東肥の俗豪湖に贈りて曰く、三たび石橋を攀ぢたりと。

鐵翁が其の晩年、高島奉行の厚幣を土芥の如く顧みなかつたことゝ頗る相似て居る。而して彼が會心の人に逢へば心よく筆を執つて、咄嗟に揮灑した風懷な亦師江稼圃の氣慨に相通ずる處があつたのは、矢張り稼圃から直接に受けた其の感化が人格化した爲であつたらう。

夢に了悟した寫蘭の正法

江稼圃は先づ鐵翁に、「南宗の畫殊に正派に屬す、故に其の畫韻致、其の筆高尙にして匠自然に備はる。蓋し士大夫 道人、或は佛理を了悟する者の能くする處、子も亦宜しく南畫を學ぶべし』と說いた。佛理を了悟する者の能くする處であると云はれた事が鐵翁自身の還憶に顧みて、どんなに彼の精神に或種の衝動を與へたことであらうか。而かも江稼圃の傳へた畫法も亦南宗の正法であつたから、鐵翁の南宗至上の思想は、この少年時代に彼の精神に根强く其力を張つたのである。彼は南宗の眞面目である山水畫に心を寄せたことも勿論であつたが、鐵翁の心を晩年に到る迄で一貫して捉へてゐたものは、墨蘭の妙趣であつた。畫蘭の精神と、彼の還境の所産であつた禪機とが、何らかの機緣をもつて居たのかも知れない。從つて墨蘭は鐵翁の面目ともなり、又鐵翁とは一如の關係を迎て心ある人の欣慕の標的となつて行つたのである。それ故に鐵翁の蘭に對する信仰は頗る厚いものがあつて、畫想寄夢、日として購求せないことは無かつたと云はれてゐるが、寫蘭に對する硏究の熱は常人の到底及び得ないものがあつた。

ある家に珍藏された蘭が異常な形と美とを持つてゐるのを伶知つた鐵翁は主人に寫蘭研究の希望を懇請して、わざ〳〵春德寺から通ひ、殆んど寢食を忘れるまでに寫生の研究に熱した

彼は遂に健康を害ふに至つた程であつた。

　或夜、夢の中に一異人が來つて珍らしい一葉の蘭を鐵翁に與へた。一異人はその蘭を鐵翁に示しながら、寫蘭の妙諦を說いて消えた。夢から目醒めた鐵翁は、鮮やかに殘つた腦裡の幻想を辿つて寫蘭の向背正側法を了悟した。この事がありてから後二十年、日本に始めて有山堂畫譜が長崎の港に舶載された時、鐵翁は眞先きにこの畫譜を手に入れたが、卷を開いて鐵翁は異樣な驚きに暫らくは自身の眼を疑ぐる許りであつた。彼の驚きは曾て二十年の前、夢裡に了悟した寫蘭の向背正側の法が寸分違はずに有山堂畫譜に載つて居たからであつた。それから間もなく「惲道生圖畫」復た舶載されたのを手にした鐵翁は期せずして再び驚かずには居られなかつた。「惲道生圖畫」の中にも亦鐵翁が一了得した寫蘭の法が明らかに掲げられてあつた。古人と暗合した此奇しきいはれも鐵翁の蘭を愛する異常な信仰の一つの賜なのであつたのであらう。

　鐵翁が蘭を愛した心の過程には、自ら彼の信仰と思想の哲學とがあつた。晚年其の門弟達に墨蘭の妙趣を說いて、

『古人は先入主となる、と云つた。畫を學ぶ者も亦其の初めに當り、必らず善良なる正師の筆跡を學ばなければならない。汝等は素より畫を以て業とするものでないから、專ら蘭の一種を學び、其の眞意を了覺するがよい。蓋し蘭は、賢人君子の性情に適するものであるから、蘭を寫すを以て樂しみとする時は、則ち賢人君子を尙友するに異ならぬ。且つ其眞意を了知すれば、胸襟自ら灑洒に、能く法味を諦め、心思安靜に至る事が出來る。何んとなれば蘭は固より知を人に求めず、常に幽谷に在つて、香氣馥郁として、人は其の清潔なるを以て之を愛玩して措かない。故に古來、心趣高逸なるものは概ね幽蘭の寫意を以て樂しみとして居る。然るに我朝の人は多く未だ全く寫蘭の安心を盡さず、又曾て運筆の妙理を辨へず、只其の一斑を學ぶのみであつて眞實に寫蘭の道理を了得した者は無い。』と云つて、其起手運筆の法を授けた

　彦根の儒者、谷鐵臣が青年の頃長崎に赴いて、其序に鐵翁を春德寺に訪ふた。席上鐵翁の畫を作るを見て、其の運腕遣筆、みな書法に本づいてゐるに感じ、この事を鐵翁に訪ふた。我意を得たやうに鐵翁は、

『心正の說書畫は一致である。衲の畫に於ても一筆一葉と雖も聊かも筆理を失なへば悉く是を破つて捨て、筆を投じて靜止澄心する。又蘭を描くには必らず書法三折の筆意ならん事を要する。苟くも三折の筆意なきものは幽蘭天然の容姿を備ふることが能きぬ。然しながら其葉を描に當つて、こと更に三節を成

すやうな用筆を要するとか誤認してはならぬ、要するに其の眞意は、能く節義を執る士人の精神容儀と同一であつて、其の筆は一點の覇氣なく、剛柔相和し、精神充實し、觀る者を感動せしめる態あるを云ふのである。然し筆未だ熟せざるに、漫に三折を成さんとすれば、必らず板、刻、結の三病に陷り、筆勢の敏捷なるものは覇氣を生ずるに至るであらう。』鐵臣は禪師の徹底した議論に感歎して春德寺を辭去したといふが、この意見は鐵臣に與つたばかりではなく、晩年常に畫の敎へを乞ふ者には絕へず鐵翁の口から吐かれた言葉であつた。

竹田と唐渡山龍に交驩

文政二年己卯八月十二日鐵翁に取つては慈父にも等しかつた住持の玄翁和尙が示寂した。鐵翁は其年一時看坊となつたが、翌文政三年三十歲にして其の席を繼いで春德寺第十四代の住持となつた。彼が住持となつて後一度宗務を帶びて京師に出たが、この尾張の中林竹洞は鐵翁の作畫を一見して「吾に此腕なし殆んど是に及ぶべからず」と賞揚した爲めに畫僧鐵翁の名は一時に都鄙に嘖々として聞えるに至つた。この頃鐵翁の畫と、氣節のある其の爲人を遥かに欽慕した者は豐後の竹田であつたが、又同時に當時文人畫壇の一偉才であつた田能村竹田の藝風と人格とに秘かに欣快の心を寄せて居た者は鐵翁であつた。鐵翁と竹田とには何處かに相似た思想と性情とがあつた。其相似た性情が双互に親しさを抱いて遂に相寄る機會を作らずには措かなかつた。

田能村竹田が遥々長崎に鐵翁を訪ふたのは禪師が未だ春德寺に在つた四十歲の頃であつたらう。竹田來訪の取次を聞いて鐵翁は手を拍つて喜こんだ。一室に延かれた竹田は先づ初對面の挨拶を交はさうとして居ずまいを直した時、

『やあ、久闊恙なく萬福〳〵』

欣然とした鐵翁の太い調子外れの聲が、竹田の頭から覆さる樣に響いた。一面識の無い間柄であるのに、こんな挨拶をされた竹田は如何にも不審の事の樣に、云ひ出すべき言葉も無く、怪訝な表情で鐵翁の顏を見詰めた。

『お忘れになつたか、前生相知の間ではないか』

相好を崩した鐵翁は微笑の中に近寄つてハタと竹田の肩を推つた。叩いた鐵翁と、叩かれた竹田とは同時に期せずしてカラ〳〵と哄笑した。

この禪問答のやうな兩文人の交歡は有名な一挿話となつてゐるが、竹田の畫は華北苑に類し、鐵翁の畫は巨然に似て　而して北苑は處士であり、巨然は僧であつた。共に南宗の依鉢を被

得して、模範を後世に垂れた作家であつたが、處士竹田と僧鐵翁、彼此頗る同じきものがあつたが爲めに、「前生相知」と禪味ある挨拶をした鐵翁の心事を竹田は肩を打たれた瞬間宋元の歷史を悩裡に閃かしたのであつた。竹田は其著、「竹田莊師友畫錄」の中に鐵翁について、

鐵翁禪師は崎鎭春德寺に住す、性畫を喜こぶ。他に嗜好無く、几榻を拂拭して蕭然として靜座し筆硯と眞に伴をなす。其山水を畫くや、江稼圃に傚ひ、重巒疊嶂、沈欝蒼莽、嵐氣人を襲ふ。梅竹蘭卉に至つては殊に秀韻あり。予禪師と相聞已に久し、一日相遇ふや前生相知となす。一週する毎に訪ひ、留宿連日、畫理を論じ、殆んど歸るを忘れたり。

と如何にも親し味のある記錄を遺した。竹田をして留宿連日殆んど歸るを忘れしめた春德寺の交歡、共に狷介にして高邁なる二人の文人畫家が、淨榻を差し挾んで唐寂山の麓一寒寺の夕に飯盛山に相對し、水煙渺茫とした港口を俯瞰しながら、唐宋文化に憧れの灯を燃やして、北苑を論じ巨然を評し、王叔明を禮讃し、談論風生の境に淘醉した風懐は、今目の當り見るがやうである。

毫なれば金はいり申さず候

春德寺の住持を遁退した鐵翁が、雲龍寺に移つて眞に畫禪三味の自適生活に這入つたのは安政元年、六十四歲の時であつた。これからの生活は全く門を杜ぢ、客を謝して作畫に沒頭した時代であるが、常に鐵翁は「畫は自己の心を樂しましむるのみなれば、人の爲めに慰みとなすにはあらず」と云つて居た如く決して畫を以て衣食の道を得やうとはしなかつた。而かも人の畫を索むるものがあつても輕々しくは應ぜず、苟くも其人でない場合は、如何に權柄を以て迫つても、厚幣を以て誘つても傲然として顧みなかつた。

禪機を得、道力に安んじた人だけに物欲に極めて恬淡であつたことは生涯を通じて鐵翁の大きい面目であつたらう。高弟倉野煌園が、慶應二年六月、鄕國北筑にあつて、墨蘭一葉を描いて正を鐵翁に乞ふた。鐵翁は自筆でこれに一奇石を添補し、其上余白に寫意の安心と、鐵翁が襟懷を吐露した尺牘文を附記して、是を煌園に還附した。其の尺牘文は一讀して鐵翁の純眞な胸懷に觸れるの感が深い。

先日お使へ金千疋御事傳、落手は仕候へども、前以て貰ふはいやにて御座候故、一先此儘御返上仕候間、御受取可被下候。御賴の畫共出來候はゞ、かんにんしてもらうべきにて御座候。七十六になる𦒿なれば、今夜も計られず。故に金は入り

不申候。後世のもうけは日夜に心がけるまでに御座候。御笑々々。蘭は幽谷にありても、いさぎよく香氣をはなつ故に清く、いさぎよきにあやかる。古人も蘭は清を以て花の上品となすと申す事故、それをば畫にも畫きたのしみて、あながち形似にかゝはらず。其の清く、いさぎよきによるべし。其心をだにあきらむれば、あながち、なりも、ふりも、かたちもよきも、わろきも、つとめも、さとりも、皆付くことなるべし。一大事を胸にかけねば、畫へ日本一の名人となるも、何かせん。名利におち入るものは後世覺束なし、何事も心のつくると佛も仰せられ候。迷をやむれば、即ち迷の地獄道を出でゝ、けつかうの淨土を得るなり。惡道と思ふみちをはなるれば、惡道を出でのがるるなり。諸事に付、心を善道に本づく心得第一なり。御送りの畫蘭、讀書皆おもひの外によく出來申候。さつと石をそへ、返上申候。（中略）金地山水大延引、恐入候何分この大暑にはきけ申候。冷風に相成迄御待被下度。又拙筆上方人の評承はるに及ばず、自心をやしない候までに御座候。たとへ千金をつみ候共、俗物の奴となる事欲せず、只懇意知音のために筆をとり、本より巧拙にかゝはらず、拙を養ひて、天然を待つまでに御座候。尚又殘暑甚敷事と存申候間隨分自愛專一、且御老母御家內へも宜敷南無阿彌陀佛より外、珍重のものはなし。今の念佛が前か、後の念佛が後かと、迷ふべからず迷ふべからず。

煌園は後この尺牘を吉嗣拜山に示した、拜山は左の一文を題してこれを煌園に還した。

余曾て聞く、鐵翁、佛理を以て畫理を悟ると。煌園老人は其の門下なり。性頗る畫を嗜み、且つ深く佛を信ず。故に翁平素一畫成る毎に佛の妙理を說き示す。是以て老人の技益、々進み、而して佛を尊ぶ念愈深し。今此の一小帳、以て其概意を觀るに足れり。噫今より後、逍遙して世塵を脫し其の玄理を六法中に得ば、即ち破顏微笑期すべきなり。是に於て吾將に曰はんとす、老人畫理を以て佛理を悟ると。左手拜山

かくしてこの一小帖は禪師の赤裸々なる姿を傳ふべき好個の記念物となつた。この一文を題した吉嗣拜山は、筑前大宰府の人詩畫を能くし、畫を中西耕石の門に學んだ。大政維新に際し、職を太政官に奉じたが、昇官の途次、暴風倒屋の災に逢つて右腕を折き、これが爲めに職を辭して郷國に歸り、左手を以て書畫を作つた。其後右腕の骨を以て骨筆を製り、これを攜へて支那に遊び、文人逸士と交遊して其畫も大いに世人に稱贊する處となつた。

釋尊出山圖を畫く、

鐵翁の作畫態度は恐らく嚴肅そのものの感があつた。假令一小作を成すにも、恰も一つの大きい事業にでも面したような謹嚴な態度を持し、全精力を傾倒して一線一點を决してゆるがせにはしなかつた。さうして少しでも意に副はない時は幾度も〳〵絹素を更へて、「意充ちて後始めて止む」の慨があつた。

有名な「釋尊出山圖」を畫いた時、筆を執る前に門弟一同を呼び集めて、

『久しく釋尊出山圖を畫いて是を是非後世に傳へたいと考へてゐたが、今日迄遂に其機を得なかつた。會々北宗古人の畫を見て一悟する處があつた故今から是を畫かうかと思ふ。然し乍ら老腕、筆は意の如くならぬ上に、殊にかゝる圖は主として見聖成道の精神を寫し出さねばならぬものであるから、尤も接心寂靜を要する。故にこの釋尊出山圖の出來上るまでは假令門生であつても畫室に入ることを許さない』

と戒め、堅く畫室の戸を閉ざした鐵翁は、平素秘藏の程君房の古墨を取り、明の高士倪元璐翁遺愛の大硯を磨して、硯海に浮んだ純汁に其の全精神を籠めた。或は冥想し、或は落筆し、神氣の到來を待つては一筆を落し、かくして十有餘日の後完成された、「釋尊出山圖」は鐵翁名畫の一つとなつて傳へられるに至つた。

鐵翁の長ずる處は墨蘭にあつて、人も許し又自らも是に任じたが、晩年に至るまで鐵翁の心を苦しめたものは、意の如く、「山水」の畫けないと云ふことであつた。かゝる不滿の爲めには時折鐵翁は不快な日を送らねばならなかつた。一日友人三浦梧門を訪ふて「寫蘭の妙は得たが、山水は自由を得ない」と云つてつくづく嘆息したが、其夜、歸途鐵翁胸裡には一種の神氣が到來した。彼は胸中に描いた雲烟呑吐する大山水を表現する爲めに雲龍寺の草庵に歸るや否や無言の儘畫室に籠つて、一切人を近づけず徹宵して山水一巻を作つた。翌朝、其の長[illegible]に[illegible]の消息を附して三浦梧門の許に屆けさせた。

昨夜歸途櫻の馬場に到りて俄然山水長卷と雖も天然に成るの理を發見せり。歸庵後直ちに此の卷を試み以つて子に贈る。子之を評せよ。

この山水長卷は、「鐵翁禪師一夕作」と題され、鐵翁が山水の代表作として名作の一つに加へられた。

病篤く、胸中の蘊奧を授く、

鐵翁は慶應二年、七十六歳の秋八月病を得九月に入つて危篤

を傳へられた。恢復の望みない事を自覺した鐵翁は、胸中の蘊奥を授けたいから急いで煌園を呼べ」・門弟に命じた其の高弟倉野煌園を家郷から呼び寄せた。禪師危篤の報に驚いて取る物も取り敢へず寶龍寺に馳けつけた時は、病勢は一層重つて言葉を交はす事も出來なかつた。其後病勢幾分か輕快となつた時鐵翁は、煌園を始め門弟一同を枕頭に集め、胸中の蘊奥を授けると云つて、『老衲不幸にして本年は畫事精神の候を病間に過したが病中畫竹の妙理を一悟した。思ふに東坡翁の竹を愛したのは、蘭谿禪師が青々たる翠竹是眞如と云はれた語と其道味を同じくし、寫竹に妙を得たのは能く竹の眞意を了悟したによるものである。故に汝等も亦蘭を寫す場合にあつても必らずこの了悟がなければならぬ。鄭板橋は曾て書を爲す時にあつては往々意に適することもあつたが、寫蘭に至つては遂に神意を得なかつたと歎息したと云ふ老衲は先師稼圃から承つた。古の名家であつては倘然りである。況んや古人の及び得ない事は云ふまでもない、寫蘭は必ず書法を兼せなくてはならぬ。そして其の筆意は、尤も太古の書、即ち大小篆八分等を倘び、次に楷行草に及ばねばならぬ。それ故起手に當つては必らず鋒鋩三折の書法が必要である。又偃頭、莊頭の三折があり、或は挿葉の三折がある、花々葉々、都て其の筆法を用ゐ、殊に蘭葉には多く草書の法を用ゐ、又垂露等の筆法もある。然し乍ら板橋翁も曾てこゝに至る事の出來ぬのを嘆息された。老衲が蘭の起手は全く板橋翁の言に依つて之を開示するから、往々他家の畫譜と異つた處がある。かの天山有山堂の畫譜に起手に凹凸凹を示したのは板橋翁の口訣であつて、つまり書法の三折である。要するに起手には必らず鋒鋩の三折を用ゐなければ筆尾に充分なる精神を籠める事が出來ぬからである。老衲は曾て橘逸勢の書を見たが、正しく鋒鋩三節を爲し、其精神を充たしてあつた。又他の蘭譜に釘頭と名附ける短葉があるがこれは八分の書法から出たもので、又懸針の筆法を用ゐる事もある。鼠尾の稜筆、象眼鳳眼、破鳳眼等も皆書法から出てたものである事を知らねばならぬ、然しながら、鳳眼、鳳眼を畫き、釘頭、釘頭を畫くものと誤認してはならぬ。又石法に所謂遊龍の夭矯たると云ふのも强いて其形を爲すを謂ふのではない。唯其の原を書法に採る事を了するにある。是れが即ち南畫寫意の訣であつて其用學の他流他派と異なる所以である。汝等は此點に就いてよく注意しなければならぬ』

と其他畫事百般について胸中に藏する蘊奥を盡く門下に授け、一切を吐露して、も早云ふ事はない、心が安らかになつたと云つて、自ら示寂を傳へた。然し門弟等は禪師の一言一語に

如何にも生々した力を惑じ、禪師はまだ示寂されぬと云ふ事を豫覺した。交る交る枕頭に侍して、心の限りの看病につとめた甲斐あつて十月凉風と共に鐵翁の病氣は日と共に輕快となり、此年の冬には殆んど、全快する迄になつた。南筑久留米の藩士に國事に盡せと熱烈に戒めたのは此大患の後の事だつたのである。

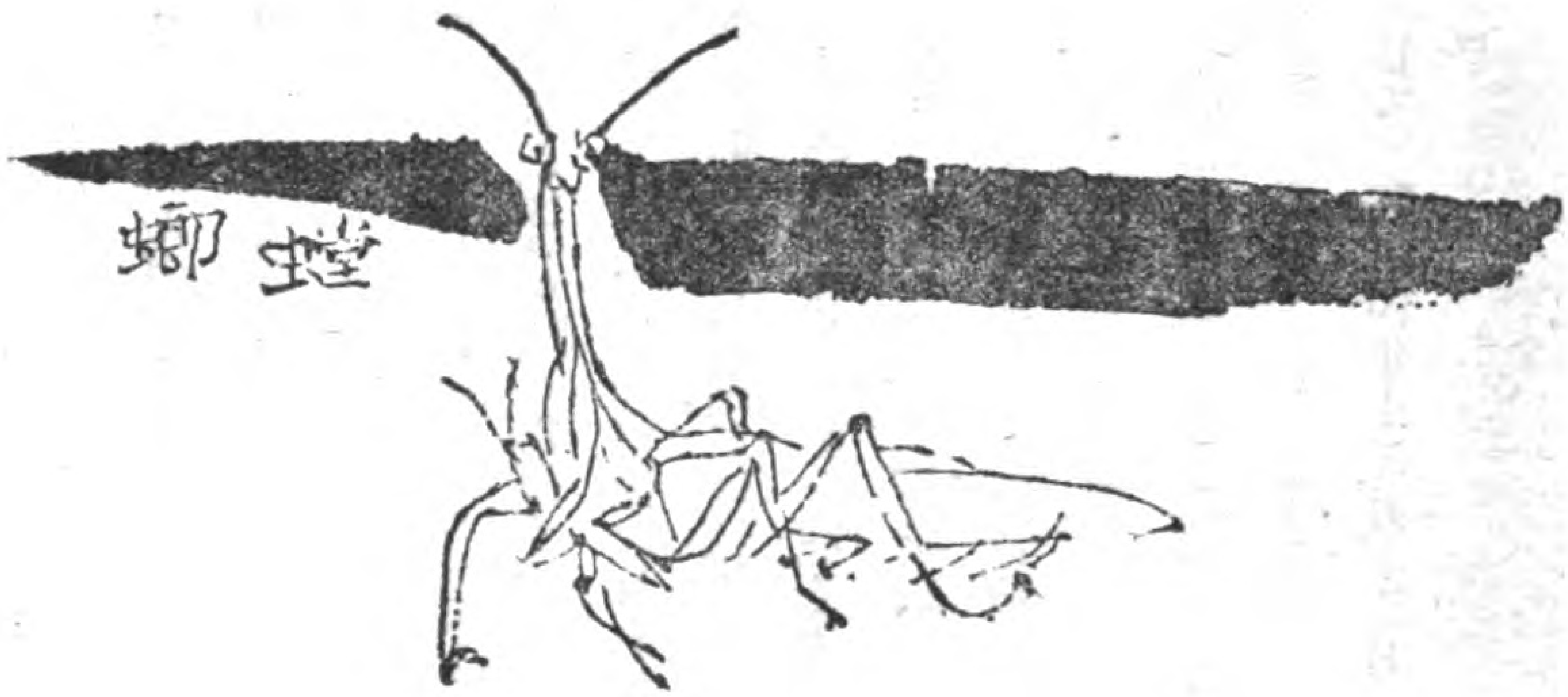
一たび大患を切り拔けた鐵翁の健康は其後思はしくなかつた。人に接する事が愈々物憂く、慶應三年の冬門頭に一文を掲げて堅く門を杜じ、悠々自適の日を送つたが、明治四年故あつて寶龍寺を他に讓り、再び春德寺内に移つた。鐵翁の健康は此頃から一層衰へ、新秋の聲を聞くと共に再び病を得た。自ら起つべからざることを知つた鐵翁は、平素最も愛した高弟倉野煌園に逢ひたいと切望したが今は故山にある彼と、到底見ゆる機會のないのを自覺し、平素愛玩した小硯、春德寺開山傳來の古墨（袋に禪師の自題あり）鐵翁自ら臨寫した書畫縮圖帖、祕文堂自製銀頭の要筆、淨純宿羊毫の四品を煌園に與へよといふ言葉を遺して、明治四年十二月十五日遂に寂定に入つた。時に歲八十一。

菘翁貫名海屋を初めとし、日根對山、木下逸雲、三浦梧門などいづれも鐵翁禪師の畫室に出入して其の畫訣を聞き得る處があつたといふが、親しく其の門に入つて畫道の敎へを乞ふたものは高弟倉野煌園を初め、高橋草坪、安田老山、村田香谷、瀧和亭、木下瓊江（逸雲の孫）中村梅香、横瀨唫松、守山湘帆、山口靜岡、池邊蓮谿、僧金鳳等であつて、いづれも師鐵翁の純一な南宗精神を繼承して明治初期の畫壇に重きをなした。

明治廿一年六月鐵翁記念碑を春德寺本堂の西方中延土居駿河守墓碑の前面に建立した。碑は三溪、菊地純翁の撰文で左の銘が一代の畫僧、祖門鐵翁の眞面目を永久に物語つてゐる。

藝之精者　弗能兩能　一枝丹青
千絹千綾　畫閣妙手　氣格稜峭
苟非厥人　畯拒弗應　已獲共壽
不騫不崩　表斯道德　傳彼法燈

（大正十三年初夏攝津野中の寓に記す）



女工哀史（2）

細井和喜藏

二重束縛としての諸制度

寄宿舍に於ける女工の桎梏

勞働そのものと勞働者の肉體とは全然切り離して考へることが出來ない。併し乍ら、資本家と勞働契約を締結して金錢の代りに自己の勞働を提供する場合、一定の時間内だけ自由を束縛されて、約束の時間が過ぎれば當然解放されねばならぬことと考へられる。つまり十二時間勞働なれば十二時間だけ相手の工場へ我が體を賣つたのであるが、それ以上の時間は自分の自由だ。勞力の買手は此の時間をまで冒瀆することは出來ない筈だ。深く考察すれば、その十二時間は翌日の準備の爲めの十二時間であるから結局は全然自由ではないが、先づ世間並に觀れば工場勞働者も我が家へ歸れば傭主の束縛から離れるのが當然である。

他の同業男女工、又は鐵工でも化學工業勞働者でも、家外自由勞働者でも、凡ての

勞働者が右のやうであるのに、寄宿女工に限つて左樣ではない。彼女はその給料の爲め貴方を約した一定の時間外に、寄宿舍へ歸つて又もやさま〴〵な規約の許に桎梏されねばならぬ。かくの如く二重の束縛を受けて居る彼等の苦惱は外觀より想像するさへ痛ましい極みだ。

また、他の方面から觀ても女工は二重の悲しむべき奴隸的制度を脊負つてゐる。

公娼制度撤廢論者は、彼女が二重の束縛を受けてゐると唱へるが、二重の拘束に身動きならぬ者は獨り公娼ばかりでなく、女工も等しく二重の奴隸的制度に縛られてゐる。日給の爲めの「賃金奴隸」と前借の爲めの「滿期づとめ」――勞働時間終了後に於ける寄宿舍の桎梏、これ正に公娼以上幾重もの奴隸制度でなくて何であらう。

公娼は自由が無いと言ふけれど、それは外面的な觀察であつて今すこし內面的に考へて見るがいゝ。彼女達は女としての生活慾望中最も大きな意味のある「美」の享樂は自由であつて、物質生活に事缺くやうな憂ひはない。女郎の生活に於いて大抵な生活慾は滿たされるけれど、勞働婦人には殆ど此の自由がない。併し彼女達が如何にこの物質的「美」の享樂に憧がれてゐるかは、女工出身の醜業婦が他の職業出身者より一ばん永續するてふ事でも證明される。序で乍ら淺草千束町と龜戶に於ける某銘酒店各一軒の私娼十人に對する勤め高を擧げれば左の通りだ。

仲居	一ケ月
女優	二ケ月半
町娘	六ケ月
夫有ち	一ケ年
田舍出	七ケ月（最高四年）
女工	二ケ年半（最高五年）

公娼に於いては私娼の如く廢業か容易でないと思ふが、此點は探聞する機會がなかつたから詳しい事實は判らないが、併し大阪松島高砂町の某小樓で、抱妓七人のうち五人までが近藤、天滿、和歌山、西の宮、泉尾等、何れも紡績女工出身者であつた偶然には唯々おどろくのほかなかつた。

外出の制限

何と言つてもこの一項に就て動かすことの出來ない寄宿舍に於ける女工虐待の事實であつて、如何なる工場寄宿舍へ行つても、此の外出に制限を加へぬ處とて無い。

而してこれは全體的に「制限」個人的には「禁止」さへやるのであつて一般「門止め」と言つてゐる。工場に於ける女工虐

待の第一期頃には、實に極端な禁止をやつたもので、大阪、東京の如き大都會の工場でも、始めて入社したつきりねんあけまで唯だの一度も出して貰はなかつたと云ふ嘘のやうな事實も珍しくない。そして横暴飽くなき舍監はこれを至上の懲戒手段に用ひ、二言めには「門止めにするぞ！」と威嚇するのだつた。ああ何たる驚くべき事實であらう。そして門止めにも、個人が門止めになる場合と、一部屋が門止めになる場合と、寄宿全體が止められる場合との三つがあつた。

それは成績の良好な者に限り一ヶ月に一遍位ゐは許され、部屋長、世話婦、舍監と三人もの檢印を貰つて門衛所へ行き、其處で木札の門監と傳票を交換して漸く門を出るのだが、時間は制限されて居つて晝夜とも十時までが關の山、若し五分でも遲れて歸らうものなら忽ち刑罰として次ぎの一ヶ月間は閉門されるのだ。これが個人の門止め法である。

ところが行つた先で退つ引きならぬ用事が出來、止むを得ず一夜泊つて來たとする。さあそうなると事はいよ〳〵大變で、その娘の部屋全體が一ヶ月間外出止めにされるのである。はたの者こそは飛んだ災難といはねばならぬ。

第三の寄宿全體の門止めであるが、これは工場の横手へ夜店の出る時とか、祭り、又は舍内でちよつとした催しなどをやるとき、全員その足を封じられるのである。

暑さ百度以上も昂る工場で立ちどうしに十二時間も働いて、夜かへつから氷水一ぱい飲みに出る自由もないとしたら、余りにそれは誇張的とさへ聞えるが、併し、私等の言ふことは一つも誇張ではない。些の疑問もあらば、龜戸工場を見るべしだ。死の幕のやうな氣味惡いナマコ板をめぐらせた工場の塀外へ、バンドルに結へた風呂敷にお錢包んでおろす女工を見せやう。彼女はさうして或る店から買物をするのであるが、時々巡視に發見されて小ひどいこと叱られ、おまけに買つた品物は沒收されて了ふ。併し、これにも飽き足らないのか、會社は遂に一間の塀へ持つて行つて、どうしても昇れぬやうグリスつけた鐵條網を張りまはすのである。工場監督とは何といふ冷血兒の寄り合だらう。

女工はうたふ。

「籠の鳥より監獄よりも
寄宿ずまひは尚ほ辛い……。」

「寄宿流れて工場が燒けて
門番コレラで死ねばよい……。」

寄宿が流れて工場が燒けて、門番がコレラで死なねば自由が得られないと思ふ、彼女達の心根の哀しくもいぢらしさよ。だ

が、何といふ力强い歌だ。カーペンターやトローベルやホキットマンの民衆詩よりそれが幾層倍の感動を私に與へるか知れない。

茲まで書いた處へ恰度東京モスリン龜戸工場の整反部職工高山青治君がやつて來た。そして同君は三時間餘り話して歸つた。それは君の親戚に當たる千葉縣何とか村の淺野ユキ(十八)が本年二月千葉縣市原郡平三村末原二二一七番地東京モスリン龜戸工場募集人野口熊太郎の甘言に乘じ、金七十圓の前借をして同社の織部見習女工に入社した。ユキ女の父は若し東京の會社へご厄介になるのだつたら親戚の者が行つてゐるからそれの手引に依りたい旨を力說したのであつたが、募集人は今自分の紹介ならでは斷じて入社できないと言ひ、必要もないのに無利子の金ゆへ前借してはどうかと無理にすゝめて金七十圓を貸し付けたのである。そして入社したユキ女は去る盆まで何事もなく打ち過ぎたのであつたが、十五日に高山方へ彼女の母が來り、外出面會を請ふまゝ同君は人事係へ交渉した處、前借償還の濟むまでは絕對に外出を許さぬといふ。さうこうするうちユキ女の母は高山方で病氣になつて床に就いた。そこで勸誘の際の募集人野口が言つた如く彼に願書を作らせて事務所へ提出したが、たとへ如何やうな事情があらうとも前借を返却せぬうちは斷じて外出を許さぬとはねつけ、てんで交渉の任にある同君に取り合はなかつた。而も同君は龜戸工場に二ヶ年も勤續した精勤職工であり、君が保證するといつても承知しないのであつた。

「餘り人を踏みつけたやり方ですから癪に觸つて仕樣がないのです。人事係の野郎の曰く、"そりや君の頼みだから出してやりたいが、此方も規則でやつてゐること故、一人出したら皆な出さねばならぬからそれは絕對にまかりならぬ。"とぬかすのです。何とかぐつと言はせてやる方法はないものでせうか?」

こう言つて同君は私に相談をかけた。

高山君にしてみれば、而もそれが身内の娘である以上放任しておけない重大事だ。前借のあるうちは斷じて出られぬといへば、迚も今年や來春の間には會はないのだから——。併し、私のやうに餘りに多くこんな例を知り過ぎては、何だか月並な問題のやうにさへ思へて、憤慨の準備する勇氣も出ない。

大阪の某工場では左の如き門券を拵へ、一々これを國許の父兄へ報告するのであるが、義務時間も、義務外の時間もまるで會社の奴隷か、犬猫みたいと思つている。これじや迚もたまつたものではない。

門　券

5分合 16室	堀としを	二十二歳

12 月 分

日	印	出門時間	歸舎時間
2日		前后 9時40分	前后 10, 20
27日		前后 8時0分	前后 9, 40
日		前后 時 分	前后
日		前后 時 分	前后
日		前后 時 分	前后
日		前后 時 分	前后
日		前后 時 分	前后
日		前后 時 分	前后
日		前后 時 分	前后
日		前后 時 分	前后
日		前后 時 分	前后
日		前后 時 分	前后

●お國からも貴女のみもちを監督せらるゝ様、毎月此門券を此儘送ります
●夜は間違が起り易いから用事の外はなるべく出ぬ様にしなさい
●冗費をしなさるな●長遊びをしなさるな●悪い處へ行きなさるな
●親達はあなたの身を氣遣ふて居られるから心配をかけぬ様にしなさい

食物、讀物等の干渉

假令十二の小娘にもしろ、彼女は自分で働いて自分で食べてそして自分で着てゐる。謂はゞ立派に獨立した自活婦人である。だから凡てのことは彼女の自由意思に委せなければならない。やれこんなものを食べてはいけないとか、あんな本を讀んでは爲めにならぬとか、さうした干渉は、親が自分の親愛なる子供に對してさへ僭越だのに、ましてや自活してゐる彼女達に向つて他人が兎や角おせつかいするのは沙汰の限りな僭越である。しかるに工場では實にこれが五月蠅いのである。

食物などを市から買つて來ると、外來の物は危險だとぬかして、一々これを門衛であけて見せる。そしてやれ夏は西瓜がいけないのマクワが悪いのといつて、季節々々のものは何でも食べさせない。

衛生を主んじると稱して外氣九十度も昇るやうな照りつけるむし暑い日、正午の食事が炊きたてのあつめしに煮だての豚汁、さうして沸かしたそのお湯が供給される始末だ。而して外のものは悪いと言つておき乍ら、食堂では三日に一度ぐらひゴツのある飯と、半ば腐敗したおかずが豚小舍以上不潔な處で當てがはれるのである。

夏季、女工の國許から食物の小包郵便が屆けば、これを本人に手渡さずして沒收する事はどこの工場でも珍しくはない。最も凝つた處でもこれを二足三文で買ひあげてゐる。果實の本場などから來てゐる女工の許へ、ものも見事な親のこゝろざしが屆けば、これを例の如く買ひあげて社員等が失敬するのでだらう。

それから雜誌といふ雜誌、新聞といふ新聞、單行本といふ單行本、凡てが彼等を辯護し、彼等の爲めに書かれてゐるやうなブルジョア・カルトの世の中だのに、それでも尙ほ工場では女工や男工が一般的な本をよむことを毛嫌ひする。そして女工には「勞力新聞」、「つとめ」、「工手の母」、曰く何々、曰く何々といつた紡績女工專門の、要約すれば「氣張つて不平言はずに、お國の爲め働いてさへ居れば幸福になれる」といふ有難いもの許りを選擇して與へるのだ。

東京モスリン龜戸工場の敎育係松永某は、或る女工が「女性改造」や「婦人公論」などを讀んでゐたら生意氣だとて購讀中止を命じた事實がある。また名古屋の某工場では文藝物などの本數冊を女工から沒收したとさへ聞く。

序で乍ら前記東京モスリン會社龜戸工場長大野成一なる者が女工に頒布したリーフレットを擧げやう。

余が親愛する女工員諸孃に告ぐ

願くば我等が工場を熱愛せらるゝの諸孃心眼を開いて一讀三讀眼光紙背に透るまでお讀み下さい

工場長

ある時ある所で、獸仲間の大懇親會が開かれました、何千と云ふ多くの獸が集つて、獅子が獅子舞をすれば犬と猫とは角力を取り、虎は大聲で歌を歌ふと云ふ有様で、皆隠し藝の有つた丈をさらけ出して、ワイ〳〵騷ぎ立てました。

中にも殊に滑稽な猿は、枝から枝へ飛び渡り、尻尾を小枝に卷き付けるなぞ、あらん限りの秘術を盡して、他の獸共に舌を卷かせました、あまり藝當が優れて居りましたので、首尾よく獸の王様に推薦せられたのでありました。

すると玆に一匹の狐が居て、かねて王様になりたいと思つて居たのを、猿に横取りせられたので、非常に惜しがりましたが、元より狡猾な狐のことですから、默つてそのまゝ引き下る様なことはなく、

『生意氣な猿め、覺えて居ろ、今に己がえらい日に合はしてやるから……』

と腹の中で思つて彼方此方山の中を歩いてゐると、獵師のかけて置いた係蹄がありましたので、見るなり狐は〆たと思ひ、或日猿王の所へ行つて、

『時に王様、私は今日よい物を御領內に於て見付けました。實は一人で頂戴しやうかとも思ひましたが、夫れよりも先づ王様に差し上げたいと存じまして、わざ〳〵御知らせに參りました。』

と、さも忠義らしく申し立てますと、意地穢い猿王は、もう夫れが欲しくて堪らないので、

『オヽ左様か、お前は感心な奴ぢや、では御苦勞ぢやが直に案內して貰はう』

と狐に案內させて行つて見ますと、如何にも上等の肉がありますので、思はず、夫れにとびつきますと、之は元より係蹄ですか

ら、如何な猿王ももう動きがとれなくなりました、たゞでさへ赤顔の猿王は、益々顔を赤くして、

『已怪しからん野狐め、もう容赦はせぬぞ』

と怒鳴り立てましたが、狐はカラ〳〵笑ひながら、

『オイ〳〵、猿さん、已に瞞され係蹄にかゝる様ぢや、氣の毒ながら王様の役は迚も勤まりませんよ』

と、嘲りながらに逃げて行きました。

と、云ふお噺を、私の子供の時に聞いていまだに憶えて居ります。

近頃皆様のお仲間の心の弱い方たちが、心のよくない人たちに誘ひ出されて他所の小さな會社に行く人があります、行つて見て初めてだまされたのだと氣がついて又此會社に歸つて來られたお方もあります。

私が不肖にしてまだ〳〵行き屆かない所も澤山にあることゝ思ひますが、私は心にも身にも出來る限りの力を盡して皆様のためなるにやうにと、夜も碌々寢ない程に、身と心とをなやまして居ります。それに皆様の中には永年勤めた此會社をすてゝ、私をすてゝ他所の、然も近頃創まつたばかりの、資本の少ない少さな會社に行く人のあるのは、あまりに人情がなさすぎませんか、あまり水臭くはないかと思ひます。

然し他所に行かれることが行く人のお身のためであるなら、人情のなんのと言つて居られませんし、又私としても一言も申し上げることはありませんけれども、だまされたと氣付いて歸つて來られた方のお話をきいて見ますに、お氣の毒に思ふことばかりなので、一般の女工員諸君に一言御注意を申し上げないのは私として不親切であると思ひましたときに、前にかきました昔噺を思ひ出したのであります。

此の會社を捨てゝ他所の工場に行かれる方は大抵はお金が澤山とれるといふのでせうが、此の會社は決して他所の會社より低い賃金で働いて貰ふとは思ひません、他所の工場だつて他よりも高い賃金を拂ふ道理もないので、賃金は何處でも似よつたもので一日に五錢十錢も違ふものでないことは少しお考になつて得心出來ることゝ思ひます。

それにさも〳〵澤山にまうかる樣に云つて連れて行く人は果して親切な方と云ふことが出來ませうか、連れて行く人は連れ出される人に澤山お金をまうけさせ樣とか成功させやうとかの親切心からではなくて連れて行く人自身がお金まうけをしたいためではありますまいか。

皆様うつかりして居てはいけません、世には狡猾なことと狐の樣な人間が居ります、自分の金まうけにさえなれば如何に多くの人が迷惑しても千年でも辛抱する樣な人間があります。親切さうに金をかしてやるの、芝居を見せてやるのと引つぱりまはつて甚しいのになると命よりも大切な處女の貞操をもてあそぶやうな人間もあります。金をかせるのが何が親切でありますか、借りたお金はかへさねばなりません、芝居を見せて置いて自分の見料まで他人の借り金の中に入れるやうな者がどこが親切でありますか、甘い口に乘つてはいけません、上等な肉だと思つてとびついた猿は恐しい係蹄にかゝつて、今の今まで忠義者だとほめた野狐のために失敗して動きがとれなくなりました。皆様も甘い言葉にだまされゝ身も心も破られてはそれこそ一生とりかへしのつかないことになりますからよくお考へ下さい。

御承知の通り此の會社は近日工場委員制度も出來上つて日一日

と皆樣の幸福を希望されるのでありますから、どうぞ落ちついて御辛抱を願ひます、若し此の會社に惡い所があれば皆で改めて一番よい會社にしやうではありませんか、惡いからと云つて直ぐにすてるのは決して親切ではありません、今でも他所と比べて惡いことはないのに今日よりももつと／＼よくなるのですものたのしみではありませんか。重ねて御辛抱を願ひます。

信書の干渉及び沒收

むかしは隨分ひどいことをやつたもので、世話係の前でなければ一切手紙を書かせなかつた。そして少しでも會社の內情を惡く訴へた文言でも書かうものなら、直ちに更めさせるのであつた。そして書いた手紙は一切本人の手で投函することが出來ないから、全く文字通り通信の自由を奪はれたのである。受信も此の通りであつて封書は殘らず事務所で開封し、萬一歸れとでも認ためてあれば斷じてそれを手渡さず、送り返すなり燒却するなりして了ふのだつた。これは製絲工場でも隨分行なはれたものだとは齋藤澄雄君が言つて居る。

すると、今日でもそんなことがあるだらうかと人は問ふだらう。私は無論あると答へることが出來る。唯だ往時に較べて量がずつと減つただけで、依然こんな人權蹂躙は絕へ間がない。

本年八月の第二日曜日だつた。私が富士紡押上工場へ行つて暫らく事務員の所作を見てゐると、受信を一々撰り分けてゐた一事務員が、

「生意氣なことを言つて來る。………來なかつたと言へばお了ひだ。」といふやうなことを言ひ、一通の信書をぴりぴりつと破つて屑籠へ突つ込んだのを見屆けた。それから左記の如き手紙の寫しを二通私は所有してゐる。

拜けい一寸申し上げます私は每日丈夫で働いて居りますから御安心下さい家内一同樣には何の御變りもございませんか
家へ行きたいのは山々だが手へは貯金をおろしてくれない家へ五十圓おくつたから受取つたら三十圓はすぐに送りかへして下さい家から三十圓おくつてくれゝばすぐに私は家へ行きますりよさんの手紙を見ればいくら出しても歸つて行くさうですから歸れといふことは書かずに下さい
お父さんがないので一人で大そう苦勞してゐるさうです私は心配してゐますサヨウナラ

木村カツ

白川米吉樣

右の手紙は大正十二年八月三日附けで青森縣北津輕郡相田村字太田の伯父らしい人へ宛てたものであるが、今日でもこんな事實があるのだから往時の狀態は以て知るべしであらう。

小包郵便を沒收したことは前項で述べたから、玆に再び言及しない。

强制的送金及び貯金制度

「强制的貯金」及び「送金」が行なはれてゐることは既に募集の章で述べたから、茲では其の方法と參考資料を舉げるだけにする。

男工と女工、通勤者と寄宿女工は各々その率が違ふ。併し乍ら凡ての職工を通じて此の制度の課せられてゐないものはない。通勤者と雖、最小限度で日給一日分くらひ、否應なしに天引きしられるのだ。左に二三工場の名稱と其の率例を示さう。

東京モスリン龜戸工場

信認金　日收一日分
積立金　大メの三割
部屋貯金　手取の一割以上

一人の女工は「共濟會費」、「送金」前借のある者は「前借金償還」の外に、右の三項を差引かれるのである。而して此の貯金は退社の際でなければ拂ひ戻さないものである。だから五十圓大メのある者はうち三十圓くらい天引きされて了ふ。そして此の金は會社の金融に使はれるのである。

大日本紡深川工場

此の工場では大メ高が幾らあつても五圓しか本人の手へ渡さず、あとは貯金と送金とに當てゝ了ふ。

大日本紡橋場工場

人事係主任津田謙一君の談によれば、送金と貯金は半々にし、貯金の方は原則として本人の自由に委せてあると。但しその自由たるや監督づきの自由であることは間違ひないから、仲々容易な手續では拂戻されないだらう。

前記のモスリン工場で某女工が强制貯金竝に送金制度撤廢の演説をしたら、寄宿係主任甲谷某は直ちにその女工を門止めの懲罰に附した。

女工は毎月何日働いて幾何の給料を取り、それからどうしてどうしたといふことをビンからキリまで親許へ報告されねばならぬから、一厘も自由な小遣ひが使へない。

大正拾壹年十二月分（自先月廿一日 至本月二十日）給料勘定明細書

第一七五四番	勤務日數二十六日分	堀トシヲ殿

支給高內譯	
給料	金四十圓二十錢
勤續割増賞	金○圓○錢
夜勤手當	金○圓八十四錢
	金　圓　錢
信認金	金一圓八十錢

東京府
東京モ
龜
電話龜

取立高内譯

積立金	金十二圓七錢
立換金月賦償却	金八圓〇錢
共濟會費	金〇圓二十二錢
賄料	金四圓八十錢
送金	金五圓〇錢
	金　圓　錢

南葛飾郡吾嬬町龜戸
スリン紡織株式會社
戸工場
日一〇三七・一〇三八)

差引金九圓十五錢本人に渡し濟

追つて悪い病氣を豫防する爲め果物其の他腐敗れ易き飲食物は一切御送り無き様御注意被下度候
住所御轉居又は宛名變更の際は直に御通知被下度候

右の手取高九圓十五錢から別に「部屋貯金」といふのを引き、これだけを郵便貯金に入れるのである。

養育の義務も果さずして我が子を身賣りするやうな親に、こんなことまで報告する義務は斷じてない筈だ。

次ぎに二三工場の月報より、送金に關する統計を引用して本節を結ぶ。

東洋紡績四貫島工場に於ける大正十年二月中、主だつた送金高の府縣別表は左の通り。

愛媛縣	一〇四八、三〇錢
廣島縣	一三三一、三一
兵庫縣	一二五九、六〇
熊本縣	三一九、九〇
富山縣	七二四、九〇
島根縣	七四二、三八
鹿兒島縣	三二四、四〇
石川縣	六五一、四九
新潟縣	一〇八二、二〇
長崎縣	三五一、三一
福岡縣	二七五、三四
大阪府	五二八、二〇

大日本紡津守工場に於ける大正九年度二ケ月の女工送金高は左の通り。

九月度	一二四〇五、一七錢
八月度	一九三二〇、七八

同じく大日本紡橋場工場に於ける大正十一年五月分親許送金府縣別一人當り平均額表は左の通りである。

府縣別	送金額	人員	一人當平均
栃木	四、八一五、四〇	一五八	三〇、四七七
新潟	三、六六五、〇三	一三六	二六、九七八
秋田	一、四一四、四八	六三	二三、四五二
福島	一、四一〇、四八	五四	二六、一一六
山梨	七八九、一〇	三九	二二、五四九
宮城	四〇三、八四	一三	三一、〇六四
東京	二二七、九二	一二	一八、九九三
茨城	一三六、四〇	五	二七、二八〇

長野	一五九、九八	五	三一、九九六
千葉	七九、五〇	三	二六、五〇〇
埼玉	一二一、九九五	三	四〇、六五〇
島根	一六〇、〇〇〇	三	五三、三三三
愛知	一一〇、〇〇〇	二	五五、〇〇〇
山形	一三五、〇〇〇	二	六七、五〇〇
富山	四〇、〇〇〇	二	二〇、〇〇〇
巖手	三〇、〇〇〇	一	三〇、〇〇〇
神奈川	七、四五	一	七、〇五〇
兵庫	二〇、〇〇〇	一	二〇、〇〇〇
樺太	二〇、〇〇〇	一	二〇、〇〇〇
計	一三、七五〇、三二二	五〇〇	二五、〇〇〇

同じく六月分は左の通りだ。

府縣別	金額	人員	一人當平均
栃木	二、四二三、五〇	一一七	二〇、七一三
新潟	二、五一二、二五	九七	二五、八九九
秋田	一、三一二、二三	五四	二四、三〇〇
山梨	九七五、二八	四一	二三、七八七
福島	七八六、七三	二九	二七、一二八
東京	四〇三、四一	一九	二一、二二一
富山	三五六、五四	一〇	三五、六五四
茨城	一九五、〇〇	一〇	一九、五〇〇
群馬	九八、三四	七	一四、〇四八
宮城	一一四、〇〇	六	一九、〇〇〇
山形	一九〇、一五	五	三八、〇三〇
千葉	七八、〇〇	四	一九、五〇〇
埼玉	八五、五〇	四	二一、三七五
島根	一〇〇、〇〇	三	三三、三三三
青森	五四六、三〇	二	二七、三一五
巖手	一〇〇、〇〇	二	五〇、〇〇〇
神奈川	一五、〇〇	一	一五、〇〇〇
岐阜	五、〇〇	一	五、〇〇〇
京都	四五、〇〇	一	四五、〇〇〇
靜岡	五、四五	一	五、四五〇
計	九、八五六、〇一	四一四	二三、八〇六

室長、世話婦、其他係員の横暴

寄宿舍に於ける階級組織の狀態は既に工場の章で併說したが、部屋長（又は室長）とは一般女工のうちから成る可く古參な、且つ工場に於ける役付を任命して歸つたとき丈け一部屋の監督を爲さしめるものであつて、世帶なれば先づ戶主の格を有つ。而してその上に尙世話役（又は世話婦）といふのが雇員待遇を受けて工場へは出です、數室を以て成る一棟の監督を司つてゐる。それからその上が數段の社員となつて居るのだが、此の部屋長、世話婦を始め、社員等が女工を虐待するつたらない

先づ部屋長が部屋の娘をどんな風にするかを見やう。新規に入社した娘があると彼女は自分の洗濯をやらせ、そのほか舍內

て濟む色々な用を言ひつけるのである。そして若し、厭やな顔でも見せる娘には何彼と性惡くあたり散らす。それから手紙が來ると必ず部屋長の嫂さんに見せねば機嫌が惡いのである。それから借金が返せて外出止めの解けた娘でも、嫂さんの承諾がなければ出られない。ところが彼女は仲々文句百曼陀羅を並べて些とやそつとの用事では出さないのである。

併しそんなことならまだいゝが、彼女は物品の強制的賣り附をやるのだ。工場附近の奸商は何れも部屋長に通帳を渡し相當な謝禮して部屋の娘達が買物するやうにすゝめて貰ふのである。そして若し嫂さんの顔を犯して他から衣類なんか拵へる者があれば、彼女は甚く機嫌が惡い。そんな娘が外出でも願ふものなら忽ち勝手にせよと出られる。だからどうしても部屋長の顔を借りて、高い奸商の月賦品を買はねばならぬのだ。

去年こんな例があつた。十四才の少女であるが年があいたところへ母親が病氣だといつて來たものだから國へ歸らうと思ひ、退社の手續を部屋長に頼んだが仲々彼女はやつてくれない。そこで少女は自分で人事課へ行つて判を貰つた處、彼女は自分の顔を蔑らにしたと言つて大層おこり、貯金下附の承印を捺さない。そしてごてくさごてくさゝせて一週間ほど引き延して了つたら遂に母親は死んで了つた。それから其父親が來て監獄より酷いと激憤し乍ら連れ歸つた事情にして驚くべき事實もあつた。

世話婦は自分の受持區域から缺勤者の出ることを嫌ひ、朝夕部屋を見廻るのである。そして若し顔の具合など惡いため寢てゐる娘でもあれば、無理矢理に起して叩き出さねば承知しない。

左は、某工場に於ける縱斷的勞働組合の會報に掲載されたものであるが、まざまざと世話婦の横暴を躍如せしめるものがある。

「姿今日はとても起きられませんのです、すみませんが休ませて下さい。」

とお芳は昨夜あたりから熱も高いし、咳も激く出るので、布團の中から拜む樣に頼んだ。起しに來た部屋係は、もう四十に近いだらうと思はれるが、赤ツ毛な大きな束髪にゆつて、白粉を濃く塗つた若づくりの大年増である、口きく度にズラリと入れた、金歯が[illegible]々しく光る。

「又休むの……ほんとに怠者ダネ、何んだへそれん斗りの咳にサ。」

と幽付く樣に云ひながら、矢庭にお芳の布團を引つぱいた。

「アッ」

あわてゝ寢卷の前を掻き合せながら、起あがらうとしたが、力なく突つ伏してしまつた。

「おやお前さん起きないんだね」

「………………」

『ヲイ』
頭に差して居た鉛筆を取つて、背のあたりをチョイと突いた。
『でも今日は大へん苦しいのですもの』
あげた顏は見る影もなくやつれてをち込んだ兩の眼は、怨恨に燃へては居るが、涙は留途なく頰へつたはつて來る。
『どうぞ休ませて下さい』
と、やつと云ひきると再び布團の上に、ベタ／＼と崩れる樣に倒れてしまつた、白い頸筋には悄く、櫛を入れない髮の毛が、亂れかゝつて居る。
『どうしても起きられないのかねほんとに强情な人だね……』
と云つたかと思ふと、お芳は飛上つた、そして部屋係の腕にすがりついた、それでなくとも寒さに冷へきつて居る、お芳の襟頸には無慘にも冷水が流れて居る、いつの間にか世話係の片手には、非常用の赤バケツが持たれて居た。
『ソラ水をかけゝと起られるぢやないか全くウソツキだね』と罵つた。
お芳はもう默つて何も言はなかつた、そして只心の中で
『どうせ肺病で死んで行く身體だ此の恨みは晴らして見せる』
と覺悟を定めたのであつた
それから約一週間ばかりは呼起されなくとも獨りで工場へ行つて働いた。お芳は其の間に工場で使ふ鋭利な刄物を持ち出した。
其の日は北風が吹いて、明方から降り出した雪は翌朝も晴れないで工場の屋根も寄宿舍の庭も一面に眞白くなつた、何處からともなく寒い風が雪を運び込んで來る、床の中で眠りもやらずお芳は、來し方を考へ、思はずすゝり泣きした。彼女は十二の年に母親に死に別れ慈愛な父親の手一ツで十八の五月迄、育まれたが父親が世間の好景氣熱に浮されて相場に手を出したが、思ふ樣に行かず、一文なしの詫びしい生活をする樣になつたのを見るに見かねて僅かの金を借りて、此の會社に傭はれ、一年半も働いて居たのであつたが元來壯健でないお芳は發育不良と過勞の爲にとう／＼病に罹つたのである』
と考へて居ると
『おい……亦僞せ病氣だね』
と障子の外で世話係の聲がしたけれどもお芳は默つて蒲團を被つて居た
『起きないの……何と云ふ怠けものだらうね』と云ひながら世話係が蒲團を取つてお芳の顏を覗き込むと同時に『きやツ』と叫び聲を上げた、世話係の左の眼からは鮮血が迸つて居た、ト同時にお芳は心臟痲痺で息絕へた。

それからまた男子の係員が女工を豚のやうに輕蔑し、腕力にうつたへることは珍しくない。現に近い例で言へば今年の春東京モスリン龜戶工場の甲谷は一月元旦早々から部屋係一三人と協力して、一女工が彼の訓話を野次つたとかの嫌疑で廊下へ引きづり出して散々毆りつけた事實もある。

個性並に婦人美を無視した女工の服裝制定

と言つたからとて働くのに縮緬の振り袖を着る馬鹿者も無いが、往時は工場の衣服など別段に干涉しなかつた。ところが現今になつて鐘紡が女工の服裝を制定してから大抵な工場ではこれを眞似て左のやうな制服にした。

帽子

上着（冬は黒、夏は經綿縞）

正袴

水下（ズロン）

靴又は、足袋麻裏

而して以上の他に持ち物として運轉袋、手拭を必ず携帶せしめる規定になつて居り、若し一點でもそれに違反すれば入場を許さぬ處さへある。尙は日本髷を禁止して居る處がある。

併しまあそれ位なのはやさしい方に屬し野蠻な工場ではお化粧して來ることや簪櫛などの持參をさへ嚴禁し、萬一内證で持ち來つて休憩中ひそかに髮でもいぢくつて居やうものなら、忽ちそれを取り上げて破壞して了ふ。何と云ふ箆棒な話しだらう。

斯ふ言へば諸君は昔ならいざ知らず、今時そんな婦女子に化粧や身つくろひを禁止するやうな野蠻な人間が都會の工場に居るだらうかと疑を持つ人もあるだらう。併し、實際に於てゐるのだからおつ魂氣ざるを得ない。

先日、私が東京モスリンへ、組長と意見の合はぬ節で長く休んでゐた或る女工の件につき調停に行つたところ、その組長の言ふのには「これから悉皆心を入れかへて髮もそんな七三を崩しオバコにでも結つて白粉もつけずに來るがいゝ。さうすれば今直ぐとはゆかぬ迄も追々元の台數を與へやうから」と。

髮の結び方から着物の着方、化粧まで干渉されねばならぬとはまるで女郎みたいだが、まあどう世賣つた時間の事故、工場内では仕方ないと諦めもする。併しそれだけの桎梏ではきかなかつた。彼の女は寄宿舍へ歸つてからまで着物のことを兎や角いはれねばならなかつた。

綿服主義の×××工場（寄宿舍係）

女工様方が工場にお出になりますのは何の爲めでありませう。申すまでもない、金儲けに遠く國許を去つて入社せられたのではありませんか。所が、工場に馴れた女工様方の收入が多くなるにつれ何時しか御國許を出る時の金儲けと云ふ心は何處へやらお忘れになりまして儲けた金は、ハイカラ支度に熱中せられて親しき御國許の御兩親も、可愛きお妹さんも終に御忘れになられ末は面白くない結果を見ることになられるのであります。それですから私共は皆様の御大切な娘子をお預りしました責任者として常に此の點に留意し、木綿服主義を主張し儲けた金は送金或は貯金になさるゝ樣晴れの衣裳は嫁入支度の時に求められ女工生活の間は出來得る限り質素にせられ晴れの場合に美しくなさる樣御注意申してゐます。皆様よく御督成下さい。

大阪の某工場ではこんなことを言ひ出して間もなく極度に女工の衣裳について干渉し絹物をつくることを禁止した。毎日人

類に貢獻する何の仕事も爲さず、唯だ一部遊閑階級蕩淫男子の享樂品として、それは女子の天分である母性のいとなみさへも忘れて明け暮れ徒らな性交にのみ打ち續けて行く貴婦人や淫賣婦が絹を纏ひ、神よりも偉大な愛を以つて日々の人類を育くんで行く彼女が纏つてはいけないと、きめねばならぬ何物があるか――

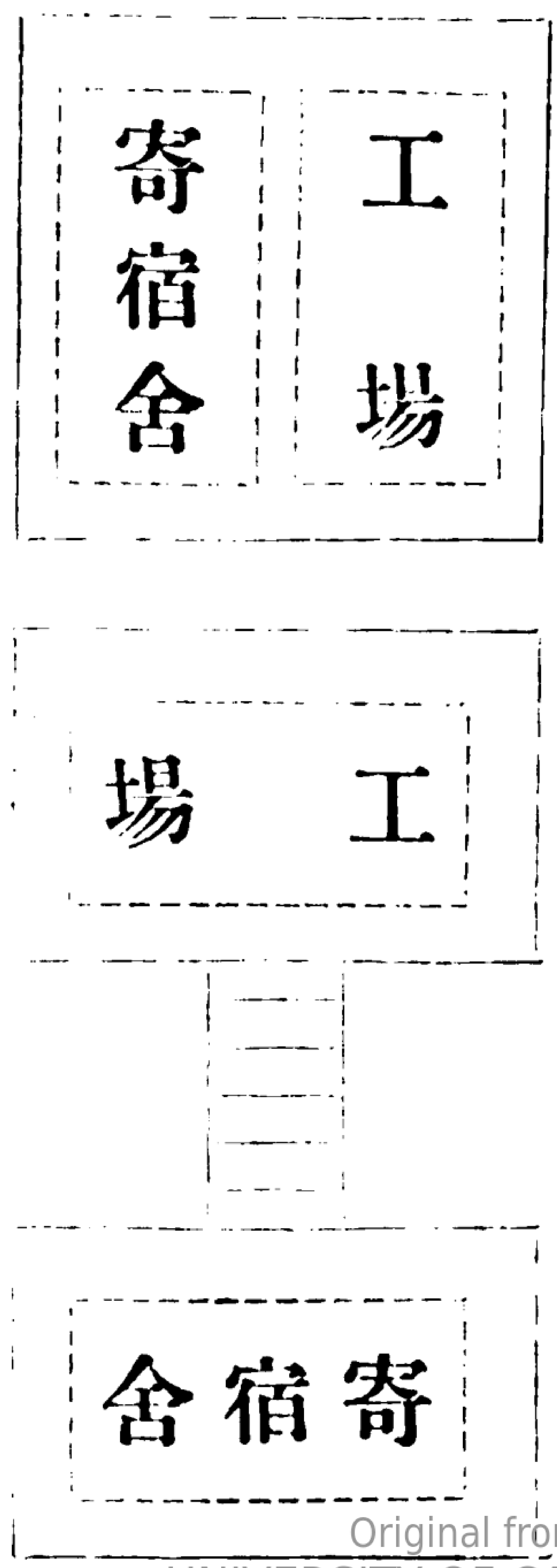
あゝ！京の織り子は、つゞれ破れた木綿を着て、誰が着るのか判りもしない綾絹をせつせと織つてゐるよ。

勞働者の住居及び食物

女工寄宿舍の構造

女工寄宿舍――それは一言にして「豚小舍」で盡きる尤も時勢の進歩と斯業の好況とは相俟つて寄宿舍の面目を一新した觀があり、なかでも東洋紡、鐘紡等の寄宿舍及び社宅は、外觀上は中産階級の住宅を凌駕するものがある。併し乍らこれは美服を纏つてゐるから紳士、淑女だと言ふやうなもので、所謂る內容を知らぬ無體驗者の調査報告に過ぎない。どんなに外形上が御殿のやうにあらうと、其のなかに「愛」と「自由」とが無かつたなら、當然そこは豚小舍だ。新磯節じやないが蔦でからんだ靑竹柱、月のさし込む破れ疊に三人かさなり合つて寢てもいゝ、愛と自由と光りがあつたら其處は美しい樂園じやないか。

さて寄宿舍の構造は大體どんな風に出來て居るかと言へば、先づ何れの工場へ行つても逃亡を防ぐ爲めに全然一つの城廓を爲して居る。而して左の略圖のやうに工場と寄宿舍とを一つの塀内に取り入りてゐる處と、工場から橋を架けて渡らせる處とあるが、何れにしても八尺以上の煉瓦壁または其他の塀があり尙ほその上に竹槍、硝子の破片、、鐵條網等で忍び返しを取り付け、冒して出る者は負傷するやう仕掛けてある。



併しこんなのはまだ優しいうちで、全國約半數の工場は人工的にお城の濠のやうな塀をつくり、又は寄宿の裏が河、海、沼等に當たる場所へ持つて行つて建設されて居る。その好例として東洋紡績西成工場を擧げることが出來る。同工場の寄宿舍は全然島の中に孤立して居るのである。また廣島縣能美島には大

阪合同紡績の能美支店工場があつて三千人の職工がゐる。「奴隷の島」とでも名づけるか。

次ぎに建て方はどうであるかと云ふに、大抵上下、又は上下左右に數十室を有する合宿式であつて、初期の建築にかゝるものは天井無しで屋根裏と床板が露出して居る。そして其處に緣なしの琉球疊が敷かれ一疊につき一人くらい住んで居るのだ。しかもそれが晝夜使用される處に至つては朝歸つた者が其の儘夜業者の寢間へもぐり込み、夜歸つた者は又それへ寢むると云つた具合で、床のあげられることが無い。だから延べ一疊につき二人當りとなる。蒲團は工場のマークを入れた煎餅蒲團で枕は樫の木の箱枕であつた。

だが、今や先進工場ではそんな方面に大部意を注ぐやうになり大いに改良されて甲乙兩番を棟別又は部屋別等に分ち、一人に一疊乃至二疊くらひをあてがつて蒲團も一人三枚を專用せしめるやうになつたし、また枕なども坊主枕や、腰高を使ふ工場も相當見へ出した。殊に新しい工場では紋付きの夜具は侮辱なりとしてこれを縞に取り換へたところもある。

ベットを使用する處も一二例あるが、何もベットを使つたからとて有難がりはせぬ。

併し東京モスリン龜戸工場などに於ては、今でも女工に樫の枕の枕當にも何もつかぬやつをさせて居る。そしてちよつと垣間見た丈けでも陰慘な氣持ちになるこれは地獄のやうな部屋がある。

また、大阪の大資本家喜多又藏の經營にかゝる兵庫縣猪名川染織所などに至つては、表面だけ二十六疊部屋に定員二十二人として置き、その實三十三人まで入れてゐる。こうなるともう入れるのでなくして無理矢理に押し込むのだ。全く足の踏み入れ處が無い。而して、其の上此處はまた一床二人寢なのである。

部屋の配置については棟々を「松の寮」「竹の寮」「梅の寮」・とか「何分舍」とか稱へ、部屋は「何十何號」と呼ぶ。

浴場、結髮所、洗面所、防火設備等は言はんでもきまつたこと故こゝに敍々しない。唯だ面白いことには殆ど何處の工場へ行つても「結髮所」又は「かみ結ひ場」と言ひ、決して「化粧室」と言はないことである。勿論それには違ひ無いが、何も手數がかゝる譯ではないから世間並みに美しく「化粧室」と呼べばよさそうなものだのに――。

職工社宅

賃金をこぎる結果として、どうしても社宅が必要となつて來

る。そこで紡織工場には隨分以前から「職工社宅」の設けがあつた。而して今やこれの無い工場は殆ど例外とまでなつて居る。

その昔は甚しく亂暴なものがあつて神戸新川の貧民窟に見るやうな家もあつたが、今や大部分改築されて多くは平家若くば二階の長屋建である。中には二階だてのものを上下別々に使ふやうになり、下駄の儘で梯子段を登れるアパートメント式なやつもあつて頗る至便に出來て居る。

家の廣さは最狹四疊半一室から二乃至四室十五疊くらひまでを普通とするが、家賃はたゞほど廉い。どんなに高い會社と雖、市價の半分以下であつて時には市價七分の一といふ法外な例さへある。但し家賃は勘定から天引される故、一文も拂ひ違ひはないのである。

鐘紡のそれ杯は實に至れり盡せりであつて、大なり小なり庭園のつかぬ家はない。

併し乍ら給料を廉く使つてゐることは少しも口にせずして、徒らに此の如き福利增進施設を廣告として社會を瞞着してゐる彼に、私は爪の垢ほども有難味を感じない。職工は貧乏人だから家賃をまけて保護してやらねばならぬとぬかす。そんなに家賃をまけずとも何でも市販のものを用ひて生活する丈の賃金を支拂つた方がいいではないか。株主等が七割の十割のといふ大袈裟な盜人の分けまへみたいな分配をさへ此と適應し、從業員の累進余りに甚だしき差別待遇を改めさへすれば、充分職工の人格を認めて一公民としての生活費を支拂つても事業は立派に立ち行くのである。

女工の食糧問題

人體とカロリー

專門家はわれわれが一時間毎に失つて行くカロリーの量は、其の仕事や動作の如何によつて甚だしい增減を見るものだといふ。

而して日本人の消費する基礎カロリーは、安靜にして居るとき體表面積一平方メートル一時間につき、二十歳乃至三十歳までの男が三七、八三カロリー、同上女は三四、三四カロリー、三十歳乃至四十歳の男は三七、三三カロリー、同上女は三三、八四カロリー、四十歳から五十歳までの男は三六、八三カロリー、同上女は三三、三四カロリーである。（榮養研究所發表）

體重七十キログラムを有する米人の男子に就いて、其の活動力とカロリーの關係を檢查したものに左の如き表がある。

眠つてゐる時	六〇―七〇
眼を覺して仰向けに寢てゐる時	七〇―八五
椅子に靜坐せる時	一〇〇
靜かに立つてゐる時	一一五
裁縫してゐる時	一三五
製本をしてゐる時	一四〇
タイプライターを打つ時	一七〇
自動車に乗つて靜かに走る時	一七〇
靴を造る時	一八〇
靜かに歩く時	二〇〇
大工の仕事をする時	二四〇
鍛冶屋の仕事中	二四〇
ペンキ塗り中	二四〇
自轉車で活潑に走る時	二九〇
早足で歩いてゐる時	三〇〇
石工の仕事中	四〇〇
自轉車に乗つて烈しく走る時	四五〇
塊の仕事中	四八〇
走つてゐる時	五〇〇
非常な烈しい運動中	六〇〇

右の表で見ると紡績工の如く常に塵埃を吸つて勞働してゐる者は、實に夥しいカロリーを要することになる。で、二十歳乃至三十歳の女の標準カロリー三四、三四の約十倍といふ怖ろしい割合になる。そして此のカロリーは榮養によつてつくらるゝものであるから、先づこういふ酷い仕事をする者には充分な食量を當てがはねばならない。科學的見地から言へば彼等に立派な榮養を與へなければエネルギーが出ない譯だ。

製絲女工の唄に、

「三度々々に菜つ葉を食べて

何で絲目が出るものか。」といふのがあるが、彼女達はそんな科學的頭があつたのではなく實際食べ物がまずいために働けぬといふ、實感から滲み出たのだと知る時、私は敢て世の中の事に科學の證明を俟たなくとも人間の感情で結構だと思はせられるだけである。

工場の賄に就て

工場の食物は不味いといふ以上にまずい。さうしてまた不潔なのである。

主食は勿論米ではあるが、しかし殆ど外米か又は内地米にしても最下等米を用ひる處が多く、脚氣患者の爲めといつて麥や小豆を混ぜる處もある。併しそれが本當に患者に親切を盡くす爲めでなく、經濟上から割り出されてゐることは論を俟たぬ。何故かなれば工場では病人にどうして休養を與へぬか！患者を

工場へ引きづり出して使つておき乍ら、麥飯や小豆飯を供給したからとて何が親切だ。

それからまた胃腸病者にお粥を出す工場がある。併しそれも算盤玉をはじいた上のことで、そんな工場では米から直ぐの新たな粥に炊いたものではない。殘飯が出來て仕樣がないものだから、これを粥にして右の美名を附したものにほかならない。

大體に於て右の始末であるが原則として假令劣等米ながらも「白飯を供給するのは一つの女工募集政策となつて居るのだ。

昨年七月二日の大阪毎日新聞に「泥炭を食ふ日本農民」といふ面白い研究が出たが、それで見ると米飯常用の農家といふものは殆ど無いさうである。こんな生活程度の低い田舍から女工を伴れて來ること故、三度とも白飯の炊きたてを食はせるといふのが一種の吸引劑となるのださうだ。それは募集の章で引用したビラに出てゐる通りだ。

食物、食器等の不潔は程度を過ぎた大量生産によるものであつて、某工場の一例を採れば三千五百人の賄ひに炊事夫十二人しか使つてゐない。これでは如何に科學的な方法を用ふるとしても、手がまはり切れないのは當然だ。

食器は實に人を侮辱したもので先づ普通婦人用の茶碗くらひしか量の入らぬお茶碗が、堅牢をこれ旨とする爲めウドン屋の丼くらひ厚く、何處へ行つても殆ど例外なしに工場のマーク入りである。而して種類は最もいゝ處で飯碗、汁碗、皿、小皿の四種類（但し四種一どきに使ふ獻立ではない）で茶呑茶碗のついた處は皆無といつていゝ位だ。皿に至つては近頃琺瑯鐵器を用ひ、琺瑯のはげちよろけた迚もたとへやうの無い不潔なもので食べさす處がある。東京モスリンなどに至つては、其の汚い琺瑯鐵器の皿と、丸毛と書いた茶碗の外、絶對に食器はなく、汁も、飯も、茶も凡てそれへ注ぐのである。そして漬物も煮たものもごつちやくたにして一つの皿へ盛るのだ。しかも午のおかずといへば九時前からちやんとよそつて置かねば間に合はぬから、一皿中腐敗した漬物の臭が移つて嘔吐を催すほど不味い。

お副食は凡て盛り切りだが、極めてその量がすくなく、普通家庭の三分の一しかない。で、彼女達は今日好きなお菜があつたからもう一ぱい食べたいと思つても錢金に拘らずその慾望は滿たされない。

同じ豆腐汁と言つても材料と調理法の上下でその味は雲泥の相違があるやうに、食物のことは、獻立表で言ひ表はせない。それかといつてカロリーや、蛋白質の含有量でも不完全だ。榮養素から行くなれば紡績工の食物だつて結構に彼等を養ふのに不足はない。だがそれは餘りに唯物的な見方で、尠くとも人間

に心理的活動の有る以上、どうしても女工の食物は勞働者としての彼女を養つて行くだけのものでない。

今、大阪紡績時代の舊いノートから、一交代間に於ける獻立表を寫さう。

日次	朝	晝と夜中	夕
1	茶汁、香々	煮豆、香々	燒豆腐、香々
2	千切汁、香々	水菜煮物、香々	蒟蒻澄シ汁、香々
3	紅生薑、香々	昆布卷	菜の煮たの、香々
4	菜汁、香々	金時豆、香々	鹽鮭、香々
5	麩汁、香々	馬鈴薯、香々	揚豆腐、香々
6	馬鈴薯汁、香々	ヒヂキ、香々	菜の煮たの、香々
7	梅干、香々	五目飯、香々	千切汁、香々

以上に少しく説明を加へねばならぬ。先づ味噌汁であるが此の味噌は大阪市販の赤味噌や白味噌ではなく、特に製造納入せしめた糟味噌なのである。それから其の汁の實であるが菜つ葉の時には思ひ切つて入れてある。併し少し材料の高い薯や澄し汁の場合は全く茶椀の中へ汁の實がは入らぬことさへ珍しくないのである。それから香々だがこれは大根の丸いなりを一分くらひな厚みに輪切りにし、こいつをさも欲しげに一切れだけ撒んで呉れるのだ。それから鹽鮭の料理は全然これを燒かず、鍋で煠でたやつを十匁くらひに切つて香々二切れと一緒につけてある。ジャガ薯は全然皮をむかない。

これから交代日の晝はよく五目飯をやるが、惡米のところへ持つて來て初手から五目を入れて炊く故、とても變な飯で不味いと來てはお話にならぬ。五目飯と言つたがぐを五品そろへたのではない。千切飯とかコンニャク飯とか多くて三色だつた。

右の獻立で見ると夏だか冬だか秋だか、それとも春だか判らない。一つも季節々々のものがない。因にこれは六月なのである。茄子、きうり、南瓜、サヤ豆それは未だ早くて高いから仲々食はせない。

次ぎに降つて大正十一年二月東京某工場のそれを擧げて見やう。

日次	朝	晝と夜中	夕
月	大根汁、香々	油味噌、香々	ヒヂキ、香々
火	蕪菜汁、香々	金時豆、香々	豆腐豚汁、香々
水	梅干、生薑	數の子、香々	大根、香々
木	大根汁、香々	大根、香々	鹽鮭、香々
金	菜汁、香々	里芋、香々	福神漬
土	梅干、香々	豆腐汁、香々	大根、香々
日	豆腐汁、香々	干物、生薑	千切、香々

前者と殆ど似たり寄つたりであらう。前の一ぱいきりに對して此の工場では汁だけ注ぎ食ひといふのであるが、その代りまたお終ひに行つたものは汁ばかりの酷い殘り物を食べねばならぬ。

鮮魚の刺身が女工の食膳にのぼつたことは、東西古今を通じて唯の一度もない。牛肉は月に二回ほど食べさせる處もあるが、例の皮むかぬ馬鈴薯と共に煮つけたやつ一人前五匁くらひが關の山で、全くだしにも足りない有樣である。

而して此のお粗末なブルジョアに飼はるゝ犬より劣つた賄ひが、一體どれ位で上つてゐるかと云ふに、東洋紡績十七ケ工場に於ける大正八年七分度の平均入費を掲げやう。

工場符號	白米	麥	薪炭	肉類	野菜	漬物	味噌醬油	油類	糠粉糊
H	4.771	——	.433	.260	.525	.129	.213	——	——
A	4.403	5.37	.387	.418	.114	.178	.137	.013	——
T	4.895	——	.421	.432	.411	.231	.205	.004	.013
O	4.600	——	.531	.417	.467	.194	.161	——	——
N	4.864	——	.429	.158	.306	.114	.254	——	——
C	4.197	——	.439	.290	.129	.253	.141	——	——
D	5.681	0.40	.515	.55	.610	.252	.207	——	——
E	3.914	——	.469	.212	.408	.231	.261	.011	——
Y	5.129	——	.415	.225	.731	.207	.217	——	——
G	5.399	——	.451	.510	.740	.111	.476	——	——
R	5.185	——	.413	.187	.907	——	.583	——	——
I	5.069	0.58	.439	.281	.293	.184	.169	——	——
U	5.334	0.17	.423	.302	.381	.360	.178	——	——
F	5.278		.431	.484	.864	.144	.166	.041	.017
K	5.354	3,00	.421	.247	.315	.181	.257	——	——
M	3.138	——	.421	.142	.513	.109	.239	——	——
平均	4.934	0.48	.443	.319	,500	,236	,251	.003	.002

工場符號	曹達	下男下女	砂糖	茶	餅	饂飩	豆類	豆腐	玄米	給水	乾物類	手搗米	合計
H	.007	.516	.134	.015	——	——	.097	.151	.055	——	——	.656	7.836
A	——	.306	.060	.018	——	.149	.103	.067	——	——	——	——	7.463
T	.079	.347	.081	.013	——	.043	.153	.115	.002	——	——	,175	7.625
O	——	.349	.052	.017	——	——	——	.088	——	.087	——	.810	7.710
N	——	.553	.032	.013	.055	.026	.157	.036	——	——	——	.320	7.229
C	.014	.274	.031	.004	——	.126	.051	——	.553	——	——	——	7.392
D	——	.373	.109	.032	——	——	——	——	——	——	——	——	8.418
E	.022	.833	.073	.006	——	——	.162	——	1.647	——	——	——	8.349
Y	.068	.725	.086	.013	——	.142	.083	.126	——	——	.117	——	8.208
G	——	.613	.069	——	——	——	——	.214	——	——	——	——	6.622
R	——	.296	.049	——	123	.048	.260	.064	——	——	——	.373	8.619
I	.004	.164	.057	.004	——	.057	.064	.084	——	——	.081	——	7.307
U	——	.318	.020	.005	——	——	.042	.084	——	.013	.218	——	7.785
F	.005	.713	——	——	——	——	.074	.062	——	——	——	——	8.251
K	——	.343	.015	——	——	.040	.051	.112	——	——	——	——	7.915
M	.032	.062	.042	.006	——	.050	.044	.007	——	——	——	2.294	7.069
平均	,005	.490	,063	.019	.002	.055	.073	.032	.182	.004	.039	.203	7.866

同じく大正八年上半期中に於ける平均合計は左の通りだ。

工場符號	平均價格
H	七.七六八

A	七、一一二
T	七、八七九
O	七、六五〇
N	七、三八二
C	七、四七一
D	八、三九一
E	八、四四七
Y	八、一一五
G	八、四二七
R	八、四八〇
I	八、〇〇六
U	七、八九三
F	八、九六七
K	八、五九一
M	七、九五九
平均	七、九四一

大正七年に米騷動が起つて、米價を始め諸物價は凡て倍額に騰貴してゐるとき、七錢九厘四毛でどうしてまんぞくなものが得られやう。如何に大量生産主義を採用して材料購入の廉價を計ると雖も――――。

ところが此の裏面には紡績工場といふ處、昔から極度な收賄的習慣があり、御用商人はこれでもつて市價より劣惡な品を高く賣りつける場合が尠くない。私の知つた一例でも未だ程近い頃、東京の某工場で乾物類を市販の屑ばかり集めこれを普通品で納入して居つたことがある。それからそれは食物でないから變だが序に言へば「花王石鹼」である。（本稿を執筆してゐる監獄部屋のやうなアパートメントから恰度花王石鹼製造所の煙突が見へるので思ひ出した）これは最も廉いといふ鐘紡の賣店で買つても一個十五錢とるのに市では十三錢で結構販賣してゐるではないか。凡てが萬事こんな始末で有り乍ら物品廉賣の、食費補給のと、大きな口がよく利けたものだ。

さて聊か脱線しかけたが再び食事のことに戻つて、一人につき食費を幾何徴收してゐるかと言ふに、物價の高くなるまでは寄宿女工一日につき金九錢といふのが殆ど例外なしの全國的規則であつた。だが、物價騰貴以來給料と共に多少訂正されて今は區々である。併し先づ一日十三錢といふ處が多く、法外高い處でも十五六錢を出でないだらう。寄宿女工は無論この食費以外には一厘の出費も要らないのである。

通勤者の食料はどうかと言ふに、これは大々通勤者に喫食せしめないのが通例であつたところを、明治三十七八年にもなつ

てから優遇の一端として解放したもの故、ちよつと寄宿工に比し高いのが例だつた寄宿女工が九錢の頃通勤者並に男工は先づ十五錢見當の工場が多かつた。而して今はどうであるかと言ふに東京某工場の一例を示せば寄宿女工、通勤女工通勤男工と段々高くなつて行く。そして寄宿女工は寄宿の食堂で食券なしに食べ、通勤者は食券によつて通勤者の食堂で食べる

	朝	晝と夜中	夕	合計一日
寄宿女工	……	……	……	十六錢
通勤女工	五錢	八錢	五錢	十八錢
通勤男工	六錢	八錢	六錢	二十錢

會社は此の職工の食費について多額の補給をしてゐると言ふ。併し乍ら前記の參考資料で見ると左樣多額の補助もして居らぬやうだし、それ丈け給料を廉く使つておいて食料の補給をするつて隨分蟲のいゝ話しではないか。そんな面倒なことは計算だけでも難しい。食費の實費を遠慮なしに取つて、給料は當り前はらつたらどう云ふものだ？尤もこういふ七面倒な雜務を多く作らぬと、「緣引關係」で無闇と多く集まつて來るはなたれ事務員の仕事が無いか――――。かりそめにも何々事務殿の奥さんの從兄のそのまた從弟の又從弟でもあつて見れば勿體無くも職工はさせられない。

前に引例した東洋紡中、U工場の當時に於ける徴收食費が判つたから書き加へる。

	朝	晝と夜中	夕	合計
寄宿女工	……	……	……	十五錢
通勤女工	六錢	七錢	七錢	二十錢
通勤男工	七錢	七錢	九錢	二十三錢

右の表で見ると皆目食費の補給などはして居らぬ。然るに途方もないことを言つて世間を瞞着するとは實に憎むべき奴だ。社員も又工場で飯を食べるが、職工と同じものを食べる處は由來稀れだ。別米、別鍋別菜の處がある。現に前記モスリン抔に於ては職工と僅か二錢違ひで、社員には倍額以上のご馳走を出した。餘りに待遇差別が甚し過ぎるのである。

東洋四貫島ではこれを「並菜」「特菜」と稱へ、即ち社員は此の特菜の方を食べて職工は並菜に甘んじねばならんのだ。而して兩者の質量と、價格の公平ならざることは言を俟たない次第である。

飯を喰ふのが生命がけだと言つたら、誰がそんな馬鹿らしい言葉を眞に受けやう。併し乍ら諸君が麴町區上六番町に素晴らしき洋館の大庭宅を構へ、豪奢な生活にふけつてゐる青木五兵衛を社長に戴く龜戸の、東京モスリンへ行つて見給へ、それは

あたから誇張でないことを證明して見せやう

　食事時間になつて運轉が停まると、女工達は髪を撫ふ時間も手を洗ふ間もなく一散に食堂へ駈けて行く。その態は棉塊だけ別に、寄席がはねて大勢の客が下足場へ一時に殺到した有様を想像せられる。送電の都合などで時たま規定時間より早く運轉の停まることがあつて、女工達は遊んでゐても仕方がないゆへ食堂へ押しかけるのである。すると意地の悪い炊事夫は、

「豚め！まだ早いぞ。」と呶鳴りつけて食堂へ入れない。

「えゝ！豚でも馬でもいゝよ。大きにお世話だ。」

　こゝで二三の罵詈が交はされる。するとそのすきに他の女工は素早く中へは入り、ならべたおかずの皿を取つて行くのだ。と、一人がやればあとの者は眞似てうわつと一遍に押しかけては入る。さうなると炊事夫はもう止めることが出來ないゆへ詮方なく入れて了ふのだが、今度はおはち持つて來た女工に飯ばちから飯を入れてやる處で殺到する。群集心理でもつてどうとも追ひ退ける手段がないのである。

　その折り炊事夫は實に汚い床木を、女工の頭の上で振りまはして追ひ拂ふのであつた。すると床木の脚が彼女の頭へあたつて、御飯ついだおはち持つたまゝ石欅の流し許へぶつ倒れたことがある。

（續く）

內外財政經濟時評

英國に於ける金本位回復論議

英國に於ける金本位に歸るべきや否やといふ論議は此頃段々やかましくなつて來た。それは金本位に歸り得る可能性が出て來たからであるといふよりは寧ろ、通貨膨脹論者の金本位回復不必要論から起つて居ると思ふ。本年七月末に於て英蘭銀行の發行總額は一億四千六百二十三萬餘磅であつて、之に對する金準備は一億二千六百四十八萬餘磅である。此の發行高と金準備との割合は、戰時中と雖大なる變化はなかつたのである。それは英蘭銀行が戰時中所謂 suspension of the Bank Act をやらないで、別にカレンシイ・ノートを政府自ら發行した、此のカレンシイ・ノートは不換紙幣であつて、英人の所謂 Fiduciary issue 卽金を準備としない發行であつた。故に此點に於て英國は不換紙幣の國となつたのであつた、蓋政府紙幣の發行高は英蘭銀行券發行高の約三倍に達したからであつた。本年七月末に於ける此の政府紙幣の流通高は二億九千四百十八萬餘磅であつて之が準備たる金及英蘭銀行券は四千九百四十五萬磅である、故に金を準備としない發行高は二億四千四百七十三萬餘磅である。（英蘭銀行券は九割の金準備を持つて居るから之を準備とする政府紙幣の發行高は金を準備とする發行高と看做す）。

思ひ出せば最早五年の昔となつた。大正七年、一九一八年の秋、過去五年の間歐羅巴の大陸を鎖した暗雲の將に晴れやうとする頃、襲に英國政府の任命した所謂カンリフ委員會は其の interim report を發表した、此の委員會は戰時中英蘭銀行總裁の任に在つたロード、カンリフを委員長とし、戰後の貨幣及爲替の問題を調査研究することを命ぜられたものであつた。而して此のカンリフ、レポートの要點は英國は出來得る限り速に戰前の金本位に歸らなければならぬ、倫敦は出來得る限り速に戰前の自由市場に歸らねばならぬといふのであつた。而して其の方法としては政府紙幣の發行高を段々縮少して行かねばならぬ。之が爲には金を準備としない政府紙幣の發行高を如何なる年に於ても其の前年の最高發行高よりも多くしてはいけないと提議した。而して政府紙幣が全部金又は英蘭銀行券を準備とする時代が來たならば政府紙幣の發行をやめて、之に代るべき英蘭銀行券を發行すべしと說いた。

此のカンリフ委員會の報告は大體に於て英國政府の容れる所となり、殊に金を準備としない政府紙幣發行高の限度は法律上の制限となり、例へば本年の最高限度は二億四千八百十九萬餘磅であるから、前述七月末の金を準備としない發行高二億四千四百七十三萬餘磅に比べると僅に三百四十五萬餘磅の餘裕を殘すのみである。

玆に英國資本家、企業家の煩悶がある。英蘭銀行券の保證準備發行制限は一千九百七十五萬磅であつて、英蘭銀行は日本銀行のやうに制限外發行を許されない。而して七月末の發行高は保證準備の最高限に達して居る。それは七月末のみならず殆んど常にさうである。故に金準備が增加しなければ英蘭銀行券の發行高を增加することが出來ない。政府紙

際の金を準備としない發行高は前述のやうな嚴重な制限がある。玆に於て英國の通貨は金を増加しない限は増加し得ない、從つて英國の通貨は漸次縮少して來た。これがロード・カンリフの、想とした所で、金本位に歸る爲には必要缺くべからざる道程である。しかし、通貨の縮少する時代は物價の低落して行く時代で、經濟界は不景氣の時代である。玆に英國資本家、企業家の煩悶がある。

將來通貨が縮少するであらうといふことは、將來物價が低落するであらうといふ豫想を生む　將來物價が低落するであらうといふ時に如何なる資本家、如何なる企業家が其の事業を擴張しやう、其の生産を増加しやう。操業は短縮せられ、工場は縮少せられ、勞働者は解雇せられ、資本家、企業家の利益は減少し、失業者の數は増加する。英國に於ける現時の不景氣は其の根本原因を通貨の縮少、金本位回復の方針に置いて居るといふても敢て過言ではない。

玆に於て資本家、企業家の方面から金本位回復不必要論を唱へるものを生ずるに至るは必然の勢である。（日本にも阪神地方の企業家の間に猛烈な通過膨脹論者が居るではないか）。　殊に保守黨の總理スタンレイ、ボールドウィン氏が內閣を組織した當時藏相に擬せられた前藏相マッケンナ氏の如きは即ち通過膨脹論者の錚々たるものである。而して英國に於ける今日の通貨膨脹論はどうしても金本位回復不必要論に歸着しなければならぬ。何となれば英國に於ける金本位回復の方法は前述の通り通貨縮少より外にないからである、カンリフ・スクールとマッケンナ・スクールとの爭が玆に於て起つて來る。

故ロード・カンリフとマッケンナ氏は共に學者ではない、然るに玆に學究の間に金本位回復不必要論を生じた。殊に現代貨幣學者の權威たる瑞典の碩學グスタフ・カッセルがそれを説くに及んで天下翕然として之に從ふの概があつた。然し乍らカッセルが金本位の不必要を唱へるのは純然たる學者の見地からであつて、必しもカッセルの獨創の議論ではない。獨逸共和國が戰爭の爲に金本位を失ふに至るや、獨逸の多數の學者が金本位の不必要を唱へたではないか、それは金本位制度に於ても貨幣の價値は決して金の價値に依つて定まるのではないといふノミナリストの説から出立すれば當然の結論でなければならぬ。加之、それは決して近代の新しい學者の説を俟つ迄もなく、半世紀の昔普佛戰爭の際に佛蘭西銀行は其の發行する銀行券の兌換を停止したにも係らはず、其の發行高を嚴重に制限して金の價値と銀行券の價値との間に多少の開きを生ずると見れば、直に其の發行高を縮少して銀行券の價値を維持したのは歷史上周知の事實である。金本位の不必要は既に半世紀の昔に於て立派に事實上證明せられて居る。

然し乍ら普佛戰爭當時立派に佛蘭西銀行券發行高を制限し得た佛蘭西國民も今度の戰爭では出來なかつた。佛蘭西國の民みならず、歐洲戰爭に參加した總ての國民、總ての民族は其の金を準備としない紙幣の發行高を制限し得なかつた。從つて紙幣の價値は大に低落した。金本位の必要不要は金の準備としない貨幣の發行高を制限し得るや否やの一點に存する。若し之を人類が制限し得るならば金本位は不必要である。然し乍ら現代の人類は金を準備としない貨幣の發行を制限し得るや否や、私は遺憾乍ら否と答へざるを得ない。

獨逸のライヒスマルクは如何であつたか、墺太利のクローネは如何であつたか、露西亞のルーブルは如何であつたか、一九二〇年の秋九月國際聯盟の主催で開かれたブルッセルの國際經濟會議は世界の諸國は出來る限り速に金本位に歸るべしと決議した、其の決議文

及理由書を起草したのは和蘭銀行總裁フイセリンクであつた、氏は實際家であると同時に又學者である、ロイド、ジョウジ氏の發起した一九二二年四月のゼノア會議も亦同じく金本位に歸るべきことを決議した。其の手段として國際金爲替本位制の採用を提唱した。純然たる學者の間には金本位回復不必要論の盛であるに係らず、實際家の會合は常に金本位回復を決議する、最近獨逸賠償問題の解決策として倫敦會議が採用を決議したドース案なるものも亦獨逸に金兌換銀行券を發行する新中央銀行の設立を要綱の一として居る。

若し人類が金を準備としない貨幣の發行を嚴重に制限し得るならば、金本位制度の存在は不必要である、唯現代の實際家は何れも皆人類に其の力なしと斷じて居る。是れロードカンリフが英國政府紙幣の發行高を漸次縮少せしめて、やがて金本位に歸らしめやうと提議した所以である。然るに何ぞや、通貨膨脹論者が金本位回復の不必要を說き、而かも其の論據としてグスタフ・カッセルの學說を援用するに至つては、誠に言語同斷と言はねばならぬ。

吾々は英國に於ける金本位回復不必要論を以て何等深遠なる學理に立脚したものではなく、單に深遠なる學理を利用し若くは濫用し、英國經濟界の景氣恢復を速ならしめんとする議論に過ぎないと思ふ、企業家、資本家の利益を大ならしめやうとする主張を考へる、企業家、資本家の利益の增大は工場の擴張となり、生產の增加となり、失業者の減少となるであらう、然し物價の騰貴となり生活費の增加となり、中產階級、知識階級、若くはサラリアの生活難となる、而して通貨膨脹が極端に達するときに勞働者も亦何等の利益を受けなくなる、それは獨逸の勞働者が貨幣價値の安定を叫んで止まなかつたことが明に之を證明する。

英國はロード・カンリフの提議に從つて通貨縮少策を實行して茲に五年に及んだ、而して英米爲替相場は平價の四弗八十七仙に對して四弗五十仙內外迄回復した、それは皆通貨縮少、金準備割合の增加に基因する。（若し五年間此の政策を實行しなかつたならば、英國の對外爲替相場は今日の如く恢復はしなかつたに違ひない。）其の平價に復するのも蓋し遠き將來ではないと思ふ。然るに今日に及んではアングロサクソン民族の爲に深く之を惜む、成程五ケ年間の戰爭から引續きアンチ、ウエーストカンペインとなり、經濟界の不景氣に惱むと更に又五年、辛酸十年、苦悶は察するに餘りがある。然し百折屈せず千挫撓まずといふのがアングロサクソンの特色である、吾々は必ずや英國に於ける金本位回復論が最後の勝利を占めて、ロード・カンリフの提唱したやうに、政府紙幣の發行は遂に消滅し、金の輸出は解禁せられ、倫敦は再び金の自由市場となる日の來ることを確信する。若しさうでなくして金本位回復不要論が勝つとしたならば、それは資本家、企業家が自己の利益を增大せんとする計畫が效を奏するのであつて、名を失業者の減少に藉つて、中產階級、智識階級は勿論、勞働階級の最後の利益をも奪はうとするものである。斯く觀じ來れば英國に於ける金本位回復論議の蔭にも亦、なま〱しい階級鬪爭の血潮の滴りを見るのである。

大正十三年度實行豫算の節約

濱口大藏大臣、大正四年八月大藏省參政官を辭してから、足掛十年苦節を守つた濱口雄幸氏が政權の印綬を帶びてから、先づ天下に闡明した政綱は財政行政の根本的整理を行ふ

ことであつた。しかし[illegible]が大命を拝した六月十一日には第四十八議會は既に終了した結果として大正十三年度の實行豫算は既に前勝田藏相の手に依つて確定せられた後であつた。故に濱口藏相は第四十九議會に二億六千六百餘圓の追加豫算を提出するに當つて、明年度を期して財政行政の根本的整理を行ふことを言明した。然るに政友本黨の諸氏はそれでは納らなかつた、曰く大正十三年度の實行豫算は前内閣時代に決定したものが約十三億五千萬圓であるから、之に濱口藏相が提出した二億六千六百餘萬圓の追加豫算を加へれば、十六億餘萬圓の尨大たる大豫算となる、然るに之に何等の削減を加へないで、單に大正十四年度豫算に付て根本的整理緊縮を圖るといつても、それは矛盾撞着であると非難攻撃した。而して藏相は大正十三年度實行豫算を踏襲したのであるかどうかといふやうな、奇抜な問答が衆議院の議場で政友本黨の諸氏と濱口藏相との間に行はれ、藏相は之を踏襲した覺はないといふやうな答辯をしたが、院内の空氣は次第に大正十三年度實行豫算の節約を必要とする色彩が濃厚となり、遂には政府與黨の間にも其の議論が盛になり、追加豫算案が衆議院の本會議で可決せられた際、憲政會を代表して賛成演說を述べた町田忠治氏も亦其の必要を力說するに至つた。

是よりさき既に濱口藏相は大正十三年度實行豫算の節約をやる決心を固めて、豫算委員會等に於ても其の意を言明したのであつた、從て議會閉會後現内閣は一面に於て大正十四年度豫算に付根本的の整理緊縮を計畫すると同時に、他面に於て大正十三年度實行豫算の整理節約を圖つた。在野十年、夙に英氣を養つた濱口藏相、一部の人士から日本第一の藏相適任者と評せられて居る濱口藏相が幾何の整理節約を行ふかは財政に興味ある人々の括目して待つて居た所であつた。

濱口藏相就任以來、氏の政策として既に實行せられたものは、新規公債の一般市場募集打切、贅澤品輸入關稅の引上及復興貯蓄債券の發行がある。新規公債の一般市場募集打切は郵便局賣出公債と外債募集金充當と預金部引受との三方法に依つて行はれたのである。しかし郵便局賣出公債の方法は固より濱口藏相の新案ではない、外債は勝田藏相の募集した外債である。預金部に於て一億五千餘萬圓の公債を引受け得るの　嘗て高橋藏相が四分半利附英貨公債の償還資金として預金部に蓄積して置いた三億五千萬圓の在外正貨が、[illegible]藏相の外債募集、四分半英貨公債借替を含むによつて不要となつたから、それを使つた金を引受けるのであらうと思はれるから、之も必ずしも濱口藏相のみの功績とは申されない、唯異なる所は勝田藏相の計劃して居る經濟復興公債二億餘萬圓の發行を打切つた點に在る。而して此點に就いては世上に賛否兩樣の議論がある。

贅澤品輸入關稅の引上に就いては世上の可否の議論が喧しかつた、道德論として風致論として濱口藏相が輕佻浮薄、奢侈遊惰に流れて居る現代の日本人に對して警鐘を打たうとする精神に至つては世間何人も異論のない所である。況んや藏相が率先勤儉力行、清貧に甘んじ、已れを持すること極めて謹嚴であるのを知つて居る者は、藏相の精神は充分に之を諒とした、唯其の精神を實現せんとする方法に關稅の引上、其の奢侈品目に就いて種々なる非難があつた。それを物ともせずに、法案を通過せしめた所に藏相の實行力の極めて偉大なことを證據立てるものがあるけれども、政策の是非に至つては多くの議論を免れなかつた。

復興貯蓄債券の發行に就いても亦多くの論議があつた、殊に藏相とは同鄕の先輩である

東京帝國大學名譽教授土方寧博士の貴族院に於ける反對演説は幾多の物語を引用して極めて眞面目な議論であつた。

以上の三政策何れも多少の批難を免れなかつたが、大正十三年度實行豫算の節約に至つては何人も異論のない所である。問題は濱口藏相が幾何の節約を爲し得るかであつた。然るに最近大藏省の公表した所に依ると其の節約額は三千万圓である。それは固より一般會計のみに於てゞあるが、十六億中の三千萬圓は百分の二弱である。其の内容を見ると經常部に於て五百九十五萬余圓、臨時部に於て二千四百四萬余圓である。之を各省別にして見ると陸軍の六百九十二萬余圓が第一位を占め、文部の四百九十七萬余圓、遞信の四百九十五萬余圓之に次ぎ、海軍の四百三十一萬余圓、農商務の四百十六萬余圓が其の次に位し、大藏の二百十五萬余圓、内務の百四十萬余圓、司法の七十七萬余圓、外務の三十三萬余圓といふ順序である。しかしこれは唯絶對金額の比較であるから、各省の實行豫算額に對する整理額の割合を比較すれば異なつた順序になるのは勿論である。

各省整理額の内容に至つては公表せられぬから、之を知るに由ないのであるが、例へば内務省の實行豫算歳出臨時部總額二億四千二百五十萬余圓に對して僅に百三十三萬余圓の整理に止るのは、恐らく帝都復興費に何等の整理を加へなかつた爲であらう。帝都復興費に何等の整理を加へないといふことは、大正十四年度豫算に就ても政府は同一の方針を取るものの如く、新聞紙上に傳へられるが、若し果してさうであるとすれば、其の他の繼續費に大削減を加へて帝都復興費に一指をも染めないといふことは近き將來に於て日本の中央と地方の爭鬪の原因を作るものではないかと危まれる。

陸軍省が歳出臨時部二千三百四十萬余圓の中から四百三十三萬余圓を節約したのは行政財政整理に對ずる宇垣陸相の誠意と決心とを充分に認めることが出來ると思ふ。文部省の二千八百余萬圓中の四百九十五萬圓は大に稱替に値する。

二大政黨對立の歴史を持つて居る英米の政界――英國は勞働黨内閣の成立に因つて其の歴史を破られんとして居るが――之に比べると日本の二大政黨對立は何等主義政策の相違ではなくして唯感情の衝突であるといふのは、從來我邦の政黨を攻擊する人の常套語であつたが、吾々は日本の二大政黨にも主義政策上の相違のあることを認め度いと思ふ。否事實朧ろげながら之を認め得ると思ふ。それは主として分裂前の政友會と憲政會との比較であるが、政友會は積極政策、憲政會は消極政策といふのは一般に認められたことであつた。財政經濟上に於ても政友會は膨脹主義、憲政會は緊縮主義であつた。政友會は農民黨、地主黨と云はれ、農村振興、地方鐵道の建設、港灣の修築等黨勢擴張の爲に利用せられたとは云へ、又以て經濟政策上の一主張と見ることが出來る。之に對して憲政會は寧ろ商工黨を以て目せられ、不急な地方鐵道の建設等には反對して來たのである。それ故吾々は米國の民主黨と共和黨との間に見るやうに、中央集權と地方分權との主義の相違を憲政會と政友會との間に見ることが出來ると思ふ。

尤も其の政友會は分裂して積極政策の本尊であつた高橋是清氏は今度憲政會と聯立内閣を作つて居り、從來寧ろ消極政策を主張した山本達雄男が政友本黨に去つたけれども政友本黨は憲政會と對抗する關係上將來は矢張り積極政策を主張することと確信する。

此の時に當て濱口藏相の行政整理、財政緊縮は帝都復興費に一指をも染めないで、地方の道路河川港灣の改修には一大斧鉞を加へん

として居る。帝都は一國を人體に譬ふれば頭腦であるといふ說は何人も否定しない。しかし頭腦ばかり發達して、四肢胸腹の貧弱な人間は決して健全ではない。昨年の震災は我國の頭腦に非常な打擊を與へた、之を恢復する爲めに四肢胸腹の瘦せ衰へるのを犧牲にしようといふのは大に考慮を要する問題である。何となれば我邦の地方人士と中央市民との間に若し感情の衝突を招くことがあつたならば、それは國家民族の爲めに大に憂ふべきことであるからである。昨年震災當時の閣諸公が帝都の復興にのみ沒頭して地方産業の發展を粗略にしたといふことは地方人士の間に大に非難のあつたことである。濱口藏相が財政行政の根本的整理をやる序に、國庫支辨事業たる河川の改修、鐵道の建設、港灣の修築を繰延又は打切り、或は地方團體の負擔に屬する此種事業に對する國庫補助を打切るといふ報道が地方に傳はるや、頃日地方長官、代議士、縣會議員、市町村長等の反對陳情の爲上京するものが櫛の齒を引くやうな狀況である。若し彼等が帝都復興費は大正十三年度實行豫算の節約に於ても亦、大正十四年度の財政整理に於ても一厘の削減をも受けないで、自分の地方の河川港灣鐵道等の事業費が半額に削減せらるゝと聞いたならば、必ずや彼等は中央政府の帝都にのみ厚くして餘りに地方に薄いことを怨むであらう。此の怨恨の情はやがて中央政府に對する反感となり、帝都民衆に對する敵意となるのではあるまいか。之は所謂階級鬪爭ではない、しかし地方の人と帝都民衆との反感、農民と商工業者との軋轢、それは同じく國家社會の爲に憂ふべき現象ではなからうか。大正十三年度實行豫算の節約三千萬圓は決して多いと云はれない。しかしその多くないことよりも、尙憂ふべきことは帝都復興費の無削減である、大正十三年度實行豫算の節約はそれでよいかもしれぬ、しかし大正十四年度豫算の編製に當つても亦同一の方針を採つて、しかも地方開發費に大削減を加ふるならば、或は日本の社會に恐るべき禍根を作るかもしれぬ、此の機會に於て特に賢明たる濱口藏相の熟慮を促す次第である。（××生）

厨川白村集

阪倉篤太郎　山本修二
矢野峯人　監輯

内容見本贈呈（ハガキにてお申込の事）

豫約募集

第一巻	文學論上
第二巻	文學論下
第三巻	文藝評論
第四巻	エッセイと文明批評
第五巻	戀愛觀と宗教觀
第六巻	印象記飜譯及雜纂

豫約申込　十月三十一日限

豫約規定

◇頒布方法　全六巻。豫約者のみに頒つ

◇刊行期日　大正十三年十一月より毎月一冊宛刊行

◇體裁　菊判布装釘天金函入毎巻コロタイプ版挿入

◇申込　十月末日迄に豫約金四圓半錢（最終會費に充當）を添へて申込の事

◇會費　毎月拂四圓五十錢（計二十七圓）一時拂二十五圓 會費の外左の送料を要す

◇送本料　市内十二錢　内地廿七錢　臺、鮮、樺支　五十五錢

發行所
東京・銀座・新橋福永書店内
厨川白村集刊行會

申込所
東京愛宕下町芝　改造社
振替東京八四〇二

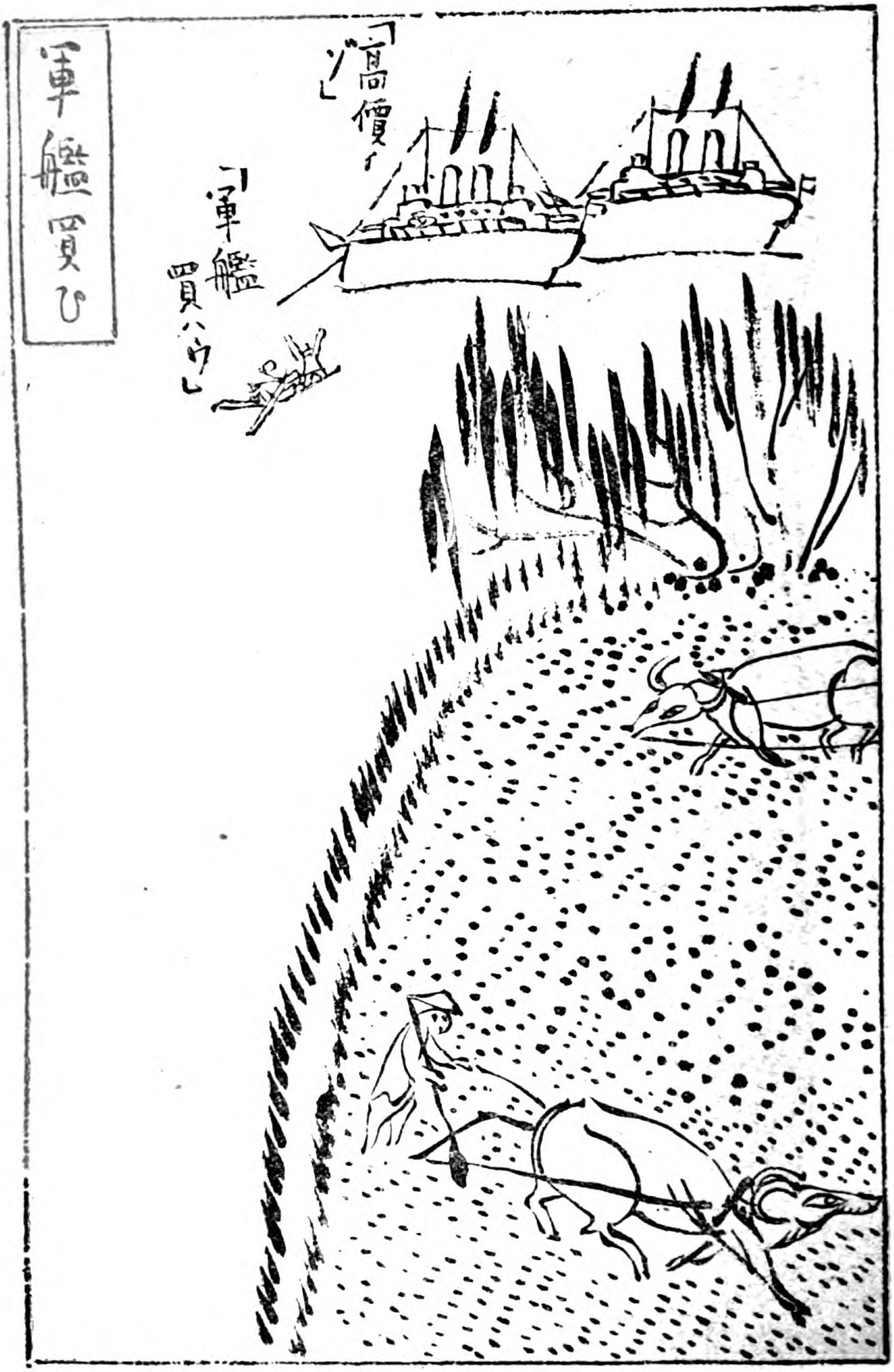
東京銀座新橋　福永書店
振替　東京四〇四六六　大阪一六七五七

◇取次　各地著名の書店◇

支那ノいくさ

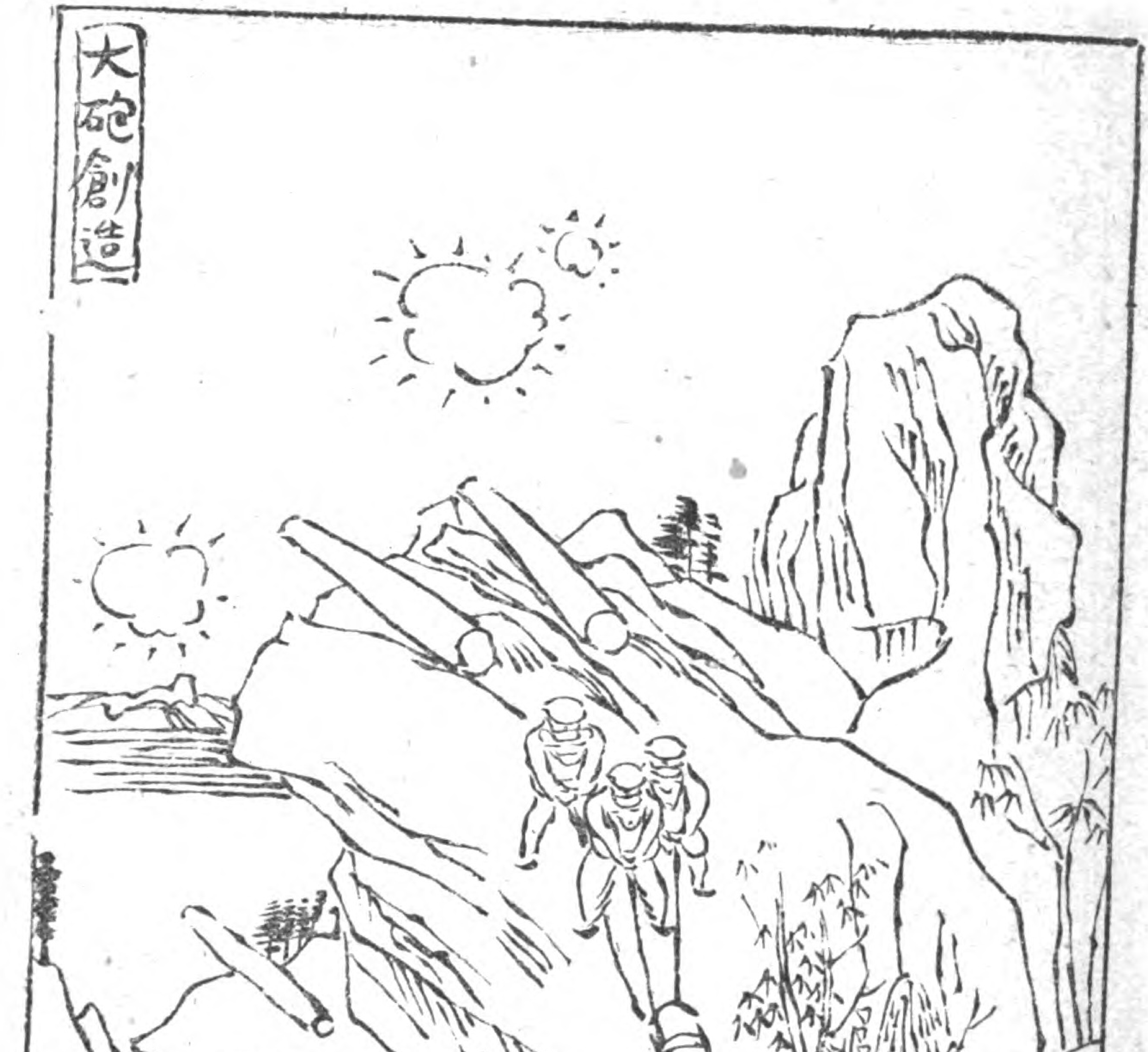
一平画


家庭附行軍
「大將サンニセガンデ早ウ夜營ニシテ貰イナサレ」
「嚊、寢酒ノ用意ハヨイカ」

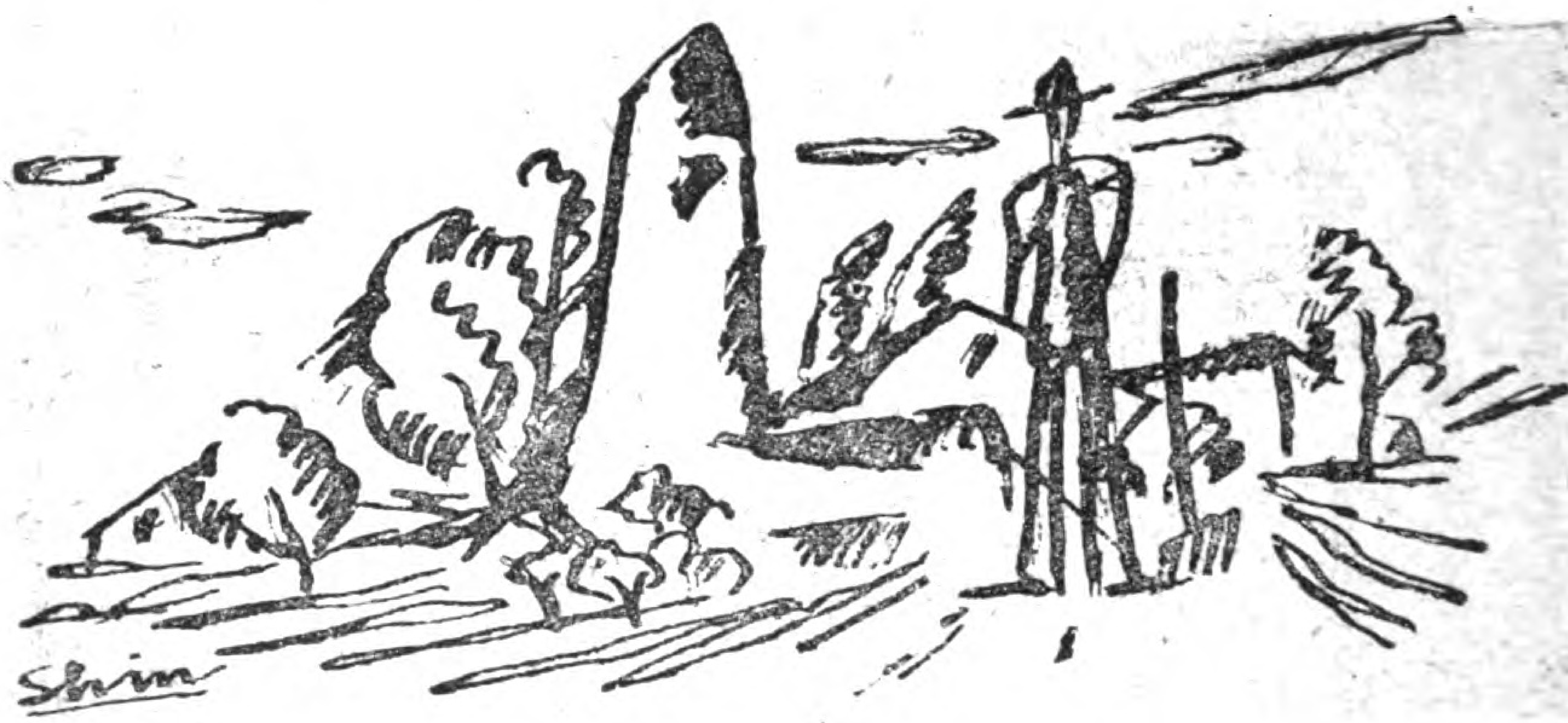

軍艦買ひ
「高價イゾ」
「軍艦買ハウ」


敵方から二万両の賞金を賭けられた大將の首を見て
唾を流してる
大將
「また兵隊の給金が缺乏した 二万両なら自分の首を賣り度い位だ」


「ドレフン雨ラシイ滞陣ヂヤ」
「大將サン出發シマスカ」


大砲創造


「戰をせぬと射つぞ」
「やあー」
「これで戰をしてる積りぢやわいなあ」
「戰をせぬと射つぞ」
「やあ」



北見

藤森成吉

一　青ちゃん

青ちゃんは、本名を青沼長年と云つた。でみんな一口に、青ちゃん青ちゃんと呼んだ。が、一つはそれは顔色からも來てゐたのだつた。

青ちゃんは、ひどく身體が弱くて　夕顔のやうな靑しよんびれた顔をしてゐたもう來年徴兵檢査、と云ふ二十の歳になつても、背恰好は十三四の子供そつくりだつた。どこもかも小さく、智慧もそれに準じて　誰が見ても低能兒だつた。

青ちゃんは、感化院附屬の北海道の農場へやつて來る前、東京の本院に二三年ゐた、その前は父親の手もとにゐたが、貧乏ぐらしの中でひどく繼母から虐待されて　小さい時から温い心を知らずに育つた、十六の齢(とし)農場へよこされると、彼は早速太田と云ふ先生の預つてゐる寮へ入れられた、寮のなかには、先生の家族のほかに、十二三人の子供が一緒にくらしてゐた、それらは、みんな世間で持てあまされ

た所謂不良少年だつた。

初め彼は、どうしても太田先生に親しめなかつた、虐げられて大きくなつた彼は、一たいすべての大人に對して一種の怖れを持つてゐたが、先生は見るから背の高い、毎日の農場の勞働でピカピカとどこもかも、赭色に光つた、眉や髭の濃い、眼の鋭い人だつた。脚は毛だらけで、跣足で平氣で熊のやうに熊笹の中を歩いた。力もすばらしく、重い物を輕々と片手でさげたり、太い木を何の雜作もなくへし折つたりした。時たまうんと兩腕を曲げると、ピシピシと、まるで小さな竹でも爆けるやうな音がした。それに聲が大きかつた。普通子供に何か云ふ時でも校全體へひびきわたる位に、——そう云ふ健康と精力そのもののやうな姿が、靑ちやんを壓倒した。

が 丁度彼が來て二十日ばかりした時、その嚴丈な先生が病氣にかかつた、どんな寒中でも、聖書をよむ前氷を割つて毎朝早く生徒達と冷水浴をやる習慣だつたが、あまりの無理が祟つたのか、高熱を出して寢ついた、先生はひどく咽喉がかはいて 何遍となく「水、水！」と怒鳴つた。

靑ちやんはいつもコップへ一杯水を汲んで、その聲をきくと先生の枕もとへ持つて行つた、或る時は奥さんに云ひつけられて。或る時は、生徒達の誰よりも氣を利かせて。

が、一たい身體の不自由だつた彼は、とりわけ手足の末端神經が鈍かつた ——足は全くの扁平足で、手足は小さな藤豆のやうに萎びてゐた、或る時はいつものやうに冷水をコップへ滿たして行くと、丁度先生の顏の上へ持つて來た途端、調子が狂つていきなりコップをひつくり返した、水は、全部顏の眞上へ墮ちた、一合あまりの水をかぶつて 先生は一時息も出來なくなつた。

やつと水だらけの眼を先生があくと、靑ちやんの如何にもおどろいたやうな 大きな兩方の眼をして覗いてゐる顏が

映つた、むせ返りながら、先生は思はず吹き出した、熱も冷たさも一時忘れて、――と、青ちやんも笑ひ出した、どんなにか怒鳴られるだらうと思つた怖さを忘れたやうに。
その時から、すつかり先生に馴染んだ、そうして、まるでほんとの父親にでも賴るやうに心を寄せた。思ひのほか長引いた先生の病氣ぢう、彼は自分で出來るだけの看病をした、そのあとも、先生夫婦の手傳ひを熱心にやつた。そうして、あたかも子供のやうな無邪氣さで、いつも先生達を興がらせたり笑はせたりした。
或る時、病後の養生に先生が肝油を飲んでゐるのを見て、いきなりきいた。
「先生、それは何んてもんです?」。
「これは、鱈の油でこしらへた肝油つてもんだ」。
「へえ、かんゆ?………」。
青ちやんはしばらく考へるやうな眼つきをしてゐたが、急にわかつたやうに呼び出した
「ああ、それですか、聖書の中に書いてあるのは?」。
「聖書に?」。
「肝油つて、先生、ちやんと聖書に書いてありますね」。
「いいや、聖書の中には、鱈のことなんか書いてない筈だがなあ」。
「だつて先生、マタイ傳の五章に、なんじかんゆふする勿れつて書いてあるぢやアありませんか」。
それは、そこにゐた人達全部を思はず哄笑に爆發させた、得意さうに、青ちやんも一緒に笑つた。
それ以來、すつかり農場全體の愛嬌者になつた、いろんな間ちがひをしたり、普通の人間の考へもつかないやうな奇

跨なことを云つたりして、彼は誰からも玩具にされ、又可愛がられた、北海道の果の、一番近い小さな市街地へ出て行くのにさへ一時間のうへかかるやうな淋しい山の中の單調な農場生活は、思ひがけない一人の少年によつて賑はつた。

「流汗鍛錬」と云ふ農場の方針で、彼も外の子供と同じやうに勞働しなければならなかつた。が、青ちやんは、仲間の少年達と同じことをやるには、身體と精神が許さなかつた、太田先生は、で、彼に恰好な三つの仕事を選んで割り當てた、風呂焚きと、自分の子供の御守りと、豚小舍の豚に餌をやる事と。

云ひつけられたとほり、青ちやんはその三つを熱心に眞面目にやつた、それらは、農場の中では一番力のいらない仕事だとされてゐたが、然し決して生やさしい働きではなかつた、殊に忠實にやる場合には。

日曜には、一般の勞働の休みの爲め風呂を焚く世話もなかつたが、その外の日は、一日でも釜の下を焚きつけないわけには行かなかつた、朝のうち、キイキイ釣瓶繩をきしらせて青ちやんは必ず三十杯づつの冷たい井戸水を汲みあげて釜へ滿たした、それから山へ行つて、倒れた木や伐られた枝や丸太などを、かかへたり引ずつたりして來て、鋸で引いたり斧で叩き割つたりした、それが濟むと、家ぢうの室と便所の掃除を一通りやつて、釜の下へ焚きつけて、おそくも五時迄には風呂を沸かしておかなければいけなかつた、寒中氷を割つての水汲み、夏の午すぎの狹苦しい室の中の火焚き、よく燃えない生木のブスブス黄ろくいぶる煙、……それは全く容易な仕事でなかつた。が、身體の運動が鈍く、從つて人の倍も手間が取れるにもかかはらず、彼はほかの少年に增して熱心にやつた、外の者は、その日に焚くだけの薪きり決して作らなかつたが、青ちやんは、前の日のうちに一日分の用意をちやんとするばかりか、時々は餘分な焚きつけさへ作つて、臺所の方へ分けてやつたりした。

時々、風呂竈の前へうづくまつて、彼は、しくしく泣き出した、それは、薪がよく枯れてゐなかつたり、烟突がいた

んでうまく煙がのぼらなかつたり、釜が割れて水が漏つたりして、いくら焚いてもいい工合に風呂が湧かない時だつた。そんな時、彼はしんから切なく思つた。自分に當てられた仕事の滿足に成就されない悲しみと一緒に、一日そとで働いて眞黑になつて歸つて來る先生や友だちに、「靑ちやん、いい氣もちだなア」と云はせて喜ばせるやうな立派な風呂が立てられないのが、堪らなく切なかつたのだつた。

當時一疋きりゐなかつた豚の小舍は、寮舍から半丁ばかり離れたところに作つてあつたが、その動物へ餌を運んでやる時も、彼は同じやうに親切な氣もちを持つた。醬油の空き樽へ、大根の尻ツぽだの、芋の皮だの、牛蒡の葉ツぱだの、生徒達の食べ殘した汁だの飯だの、ありとあらゆる台所の屑を一杯詰め込んで、眞ツ暗な晩なぞ半丁も山道を擔いで行くのは、決していい役目ではなかつた。それまで受け持つてゐた生徒達は、よく途中で樽の中の物を藪や雪のなかへみんな棄てて、何食はぬ顏つきで歸つて來た。が、靑ちやんの番になつてからは、一度もそんなことはしなかつた。どんな雨の晩でも、雪の朝でも彼はちやんと小舍まで食物を送り屆けた。

或る寒い冬の朝のことだつた。一間もつもつた雪を押しわけて、彼は相變らず豚小舍へ出かけて行つた。ところが、あまりの寒さの爲めか、又は空き切つた腹の加減か、その朝豚はひどく機嫌を惡くしてゐた。彼が顏を見せるや否や、いきなりウーッと豚は凄じい唸り聲を擧げて靑ちやんへ飛びついた。

彼は、お蔭でもう少しでひどい怪我をするところだつた。その太ツちよの不禮な仕打ちは、彼をおそろしく怒らせた。

「なんぼ何でも、あんまりひとを馬鹿にするな、この畜野郎、……この吹雪ん中を、切角わざわざ朝飯を持つて來てやつた苦勞を、てめえはわからねえか、まるで豚殺し見たやうに、此のおれへ飛びつくたあ何事だ、いくら畜生でも

あんまりだぞ、眼が見えねえか、馬鹿野郎、耳が聞えねえか、畜生！。

彼は夢中になつて啖呵を切つた。

「ウーツ……」。

愚鈍な豚は、か、相變らず猛々しく唸つた。

「こん畜生、まだわからねえか、よく見ろ、おれを、恐くて氣でもちがやアがつたか？」。

彼は、強い吹雪のなかで一生懸命豚と喧嘩をはじめた。

か、とうとう負けて泣き出して、空き樽をかかへながら彼は寮へ歸つて來た、そうして先生の細君をつかまへて、心に、如何に今朝の豚が不埒で恥知らずだツたかを廻らない口で訴へた。

「まあ何ていけない豚だらう、そんなことをしたら、あんた、少しぶツたたいてやればよかつたに」。

細君は、ムキになつた彼をなぐさめた。

「よツぽとひツぱたいてくれやうかと思つたが、可哀想だからやめた」。

彼はやつと氣が落ちついたやうに云つた

そう云ふ正直な調子は、先生の子供達に對しても變らなかつた、頑是ない二人の子供の守りを云ひつかりながら、彼はすぐと、まるで自分の方が守りをされる子供のやうに振舞つた、泣いたり騷いだりする子供を、一向すかしたり寢かしつけたりしやうとは考へずに、一緒になつて泣いたり笑つたりした、子供がラツパを吹けば吹ぎ、歌をうたへば同じやうに自分もうたツて、先生の居間でもどこでもドタンバタン一杯埃をあげて跳ね廻つて、反つて辟易させた。

子供達の方でも、まつたく自分の友だちとして扱つた、そうして、時々何としても彼の云ふことをきかなかツた、そ

んな時、彼は堪らなく悲しく思つた。

「出來るだけ自分は御守りをしてやつてゐるのに、爺ちやんはどうしても自分を好いてくれない」。

或る時、寮の廻覧雜誌のなかへ彼は覺束ない字で書いた。

そんなふうにいろんな仕事をしながら、ひまさへあれば縫ひ物をした。奇妙に、彼は女のやうに針仕事を好いてゐた、人並み自由の利かない手足を持ちながら、不思議と、又針にかけては器用な生れつきを持つてゐた、どんな綻びでも、外の少年達のやうに先生の細君に縫つてくれなぞとは決して頼まなかつた。自分の着物が古びて破れれば、端から柔道着のやうにかかツて行つた、仲間の連中の着古した物はみんな貰つて、丹念に、一々補布を當てては着た。

「そんなに繼ぎツこはぎツこちや見ツともないから、もうお棄てなさい」。

細君に云はれても、彼は一枚殘らず大事に保存した、その爲め、彼はすぐと寮第一の衣裳持ちになツた、まるで家鴨の歩くやうなヨタヨタした足どりや、どこかダラツとした身體の恰好と一緒に、補ぎだらけの着物が彼の一つの評判になつた。

自分の着物や、友だちの綻びを縫ふばかりでなく、時々先生の細君に並びつて、彼は一心に雜巾をさしたり、彼女のほどき物の手傳ひをしたりした――――。

とう云ふのは、彼のいい方の一面だつたが、又手古摺らせることにかけては、靑ちやんは人一倍先生や細君を手古摺らせた。

第一困つたことは、もう適齢に近い年をしながら、どうしても寢小便と寢糞の習慣のやまないことだつた、月に何回となく、彼は自分に貸して貰つた夜具をよごした、その都度、自分でちやんと洗つたり乾したりはしたが。

時々、又積極的にそう云ふ態をひり散らした、――自分でも、身體が弱く又非力なことを靑ちやんはよく心得てゐた。それだけ、何か仲者の者からからかはれたり怒鳴られたりした時、到底腕力や睨みではやり返せないと考へて、一種獨特の報復の手段を取つた、隙をねらつて、彼は敵のシヤツや猿股や着物をみんな庭や椽側や草原へ持ち出して、積み重ねた上へコテコテと大糞を垂れた、時には、相手の下駄の上へやツつけた。

生徒達に對してばかりではなかつた、先生に叱られた時でも、何か自分の腑に落ちない場合には彼はその唯一の仕返しの方法を取つた、先生の机や下駄の上へ臭い糞をすえるばかりでなく、時々台所の漬物桶の中なぞへ深刻な塊りを据ゑつけた。

一たい身體にも似合はず、彼の排泄物はひどく大量だつた。人間の物と云ふより、それはむしろ牛のそれを思はせた。その筈、又一般の低能者に共通なやうに、彼はほとんど底知らずの大飯食ひだつた、或る時なぞ、寮で搗き立ての大牡丹餅を二十四平らげてから、少し離れた事務所へ出かけて云つて五六杯飯を食べ、再び寮へ戻つて三四杯も茶漬けを搔つ込んで、さしもの荒つぽい仲間達をすつかりおどろかせたことがあつた、もつとも、そう云ふ餐食のあとは、きまつて二三日何も食はずに寢込むのだつた、………要するに、自分で食物の加減がわからなかつた。

どんな復讐にも增して、この靑ちやん一流の仕返しは先生夫妻にこたへた、何も知らずに漬物桶の蓋を取つて、おそるべき匂ひと塊りを發見した時の驚愕、………それは、もう大桶の底まで浸みとほつてゐた、仕方なく、細君は切角の寮ぢうの人間の大事な食物の漬物をみんな空けて棄ててしまつた、寮の經濟上にも、それはかなりな打擊を與へた。

そうやつて、靑ちやんは前後三四樽の漬物を無駄にした、初めのあいだは、勿論ことさらにしたのだつたが、後の一二回は、別に何の怨みも理由もなかつた。ただ前にやつたことのある場所、………そう云ふ潜在的な觀念に無意識に動

かされて、まるで夢遊病者のやうに彼は樽の縁をよぢあがつたのだつた、自分の受け持ちの、從つて後掃除も何も自分で又しなくてはいけない風呂釜の縁や蓋の上へも、同じやうにして彼は何度か偉大な復讎物を供へた。淋しい山の中の寮舎では、そんな奇拔な藝當も彼を人氣者にした、ほとんど何をしても、云つても、それはみんなの評判になつた、まるで詩人のやうに、彼はいくつもの新しい熟語を流行らせた、何か片言見たいなことを彼が口にすると、不思議と忽ち全寮の流行言葉になつて行くのだつた、「風呂場も三年」だの、「子供に菓子」だの、「讚美歌うたひ」だの、「聖書坊主」だのと云ふ諺めいた句が、いろんな場合に應用された——

そう云ふ思ひ切つたことをしながらも、が、青ちやんは、決して先生や細君を悪く思つてはゐなかつた、いや、寮ぢうの誰にも増して、二人を敬ひ信じてゐた、殊に細君に對しては、最初から母親に對するやうになついでゐた、うるさい子供の守りに泣かされながら、愚痴一つ云はうとしなかつたのも一つはその爲めだつた、時たま、先生が細君へ向つて叱言を云つてゐるのを聞くと、彼は躍氣となつて彼女の味方をした。

「先生、——あんまり親不幸をしなさんな！」

ほとんど怒鳴りつけるやうに、彼はいつも云つた。

先生の云つけも、キチンと守つた、或る時先生や外の生徒達と一緒に、寮舎から二丁ばかりも離れた野外禮拜所の掃除をやつたことがあつた、それは、小高い岡のナラの原始林の中の藪や下萠えの草を刈つて、同じナラの丸太で生徒達の手で質素な說敎台や腰掛けを作りつけた、綠につつまれた靜かな場所だつた、

抛つておけば忽ちもとの藪に返る草木を刈り込んだり、運んだりしたあと、先生は一本のレーキを青ちやんに渡して、これを納屋へ持つてつて入れておけ、と云ひつけた。

言葉どほり、彼はそのレヱキをかついで岡の道をひとり降つて行つたと、丁度その時、東京から來てゐた院長が、ボウと云ふ眞つ黑な肝强い裸馬に跨りながら下からあがつて來た、——その邊では馬の仔はみんなボウと呼んでゐた、英語のポニイから訛つて、——でつぷり肥つた頭の前の方の半分赤く禿げた院長は、彼を見つけるといきなり聲をかけた。

「おい、ちよつとそのレヱキを貸してくれないか」。

「………」。

靑ちやんは立ちどまつて無言で見あげた。

「レヱキを貸してくれ」。

院長は柔かく繰り返した。

「いゝや、貸されませんこいつは今太田先生が僕に納屋へ入れて來いつて云つたレヱキですから………」。

彼はきつぱりことはつた。

「先生の方へは、僕があとでことはつておくから、早く貸したまへ」。

云なり、院長はヒラリと馬から飛びおりて彼の方へ寄つて來た。

その態度が靑ちやんを怒らせてしまつた、眼をいからせると、彼はレヱキをかついだなりすばやく横の熊笹の中へ逃げ込んで行つた、さうして滅茶苦茶に藪を突つ切つて向ふの道へ出て、納屋の方へ行つてレヱキを藏つた、それから彼は再び岡の上へもどつて來て、丁度馬から降りて先生と立話をしてゐる院長の傍で、不遠慮に先生に訴へた。

「先生！　院長さんて、隨分もののわからない人ですね、僕がさつき、先生から云ひつけられてレヱキを納屋へしまひ

にゆく途中、いきなりそいつを貸せつて僕に云ふから、これは先生から云はれたんだからいけないつて、いくら云つても聞かずに、馬から降りて取りに來るでせう、仕方ないから藪の中へ飛び込んでやつと置いて來たけど、お陰でそこいらを草で削つて痛くしちまつた、院長さんなら、もう少し無理を云はないのが本當でせう。」

　青ちやんは、院長を尻目にかけながらムキになつて云つた。

「いや、君にはすつかりまゐつた」。

　院長は笑ひながら、ちよつと頭をさげた。

「さすがの院長も一本やられましたね」。

　太田先生は、院長と顔を見合せて笑ひ出した、二人の大人の笑つてゐるのが合點が行かないやうに、青ちやんは狹い日に焦けた富士額の下から眼を見張つた――。

　生れながらの責任觀念と一緒に、それほど先生を信じた。そうして外の連中とちがつて、農場の生活にもほとんど滿足してゐた、貧乏な、虐げられとほした暗い幼年の日をすごして來た彼に取つては、外の少年達にはかなり苦痛と考へられる生活でも、まるで小さな天國のやうに思はれたのだつた、この北見の生活は、彼の生涯での一番幸福な時期に外ならなかつた。

　例の一途な氣質から、時たま強情を張つて先生や細君の云ふことを耳に入れないやうな時でも、「そんなら本院へ返してやるぞ！」と一言云はれると、青ちやんはすぐとへたばつた、彼に取つて、それは何より痛い言葉だつた。

「もう君も來年は檢査だから、もし當つて兵隊にでも行つて歸つたら、一つ早速嫁さんを貰つて家を持つんだな」。

　先生に時々からかはれたりすると、彼はひどく機嫌を惡くした。

「いやですよ、先生、……僕あ、一生先生のとこで風呂焚きをやつてくらすんだ。

そのままムツつりした。

そんな遠い邊鄙な場處でも、時折りいろんな客が農場を訪れて來た、或る時は技師、或る時は百姓、或る時は同じ感化院の仕事をしてゐる連中、或る時は北海道めぐりの實業家、そのほか學生、教育家、軍人、得體の知れない人間達……。

そんな時、先生はまづ靑ちやんを引き合はせた、それが、いつか先生の習慣になつて了つてゐた、客達は大抵ひどく彼に興味を持つて、いろんなことを訊いたりした。

靑ちやんは、さう云ふ風に紹介されることを決していやがつてはゐなかつた、別に客を好きもしなかつたが、時々それらの旅人の中に、風變りな珍しい人間を見つけられるのを、一方にはかなりたのしみにしてゐた。ただ一つ、何より彼に取つて、苦痛なことは、そんな場合判で捺したやうに、どの客も自分の年をきくことだつた、客の來るたんびで、彼はまづ先生を蔭の方へ呼び出してたのんだ。

「どんなことを話してもいいけれど、僕の年だけは、先生、後生だから默つてて下さい、いくら訊かれてもね、年を云はれると、僕恥しくつて仕方ないから――」。

「よしよし、云やあしないから安心したまへ」。

そして先生の言質を取りながら、が、その次には又繰り返した。

自分でも、靑ちやんは年相應に成長してゐないことをよく知つてゐたのだつた。が、變な事には、一方には、彼は自分が實際幾らの年になつてゐるのかハッキリわかつてゐなかつた、彼は數を、やつと十まできり數へられなかつた、十一か

ら先きの世界は、いくら覺えやうとしてもわからない混沌として大無常海だつた、まるで霧の海のなかの山の頂きのやうに、その中にぽつぽつと、ただ三十だの四十だのと云ふ名前だけ覺えてゐた、よく先生から、

「靑ちやん、幾つ位に僕は見える？」。

と訊かれると、ぢつと先生の顔を眺めながら、彼は念入りに右手の指を折つた。

「そうですね、まあ七十位ですかね」。

「奥さんは？」。

やつと三十幾歳の壯年期へかかつた先生は、傍の若い細君を指した。

「そうですかね、さつと八十位でせうかね」。

靑ちやんは、眞面目くさつて答へた。

時々――多分彼の氣分の工合で――七十が九十になつたり、八十が六十に變つたりした………

そうやつて、靑ちやんは農場の名物として小さな世界を賑はせ、又自分でもたのしい日を送つた。が、その幸福な日も、あまり長くはめぐまれなかつた。

丁度來てから四年目の四月、おそろしい流行性感冒が此邊の土地一帶を襲つた、農場でも、一人の少年が病みついたのをキッカケに、まるで火の子が飛ぶやうにバタバタと殘らずの少年へ傳染して行つた、太田先生も、細君も、二人の小さな子供も、その看病のあいだに病氣になつた、殊に細君と子供は、ほとんど生死の境をさまやふほどに重つて行つた

それは目もあてられない悲慘な時だつた、今まで少年らしい元氣に滿ちてゐた寮舍は、一變してどこもかもたゞ衰へた病人だらけの病院になつた、朝となく夜となく、聞えるものは呻き聲と譫語だけだつた、そとはまだ眞つ白い雪が堆

高く、身を切るやうな鋭い風が枯木の梢を鳴らしたり、窓硝子を痙攣的にガタガタ顫はせて、我がもの顔に灰色の空間を馳け廻つてゐた。市街地――そつちも同じやうに流感が猖獗を極めてゐた、――の方からやつと頼んで來た一人の看護婦の、壘々とした寢床のあいだを廻り歩く白い姿が、何かの豫感のやうに暗く纖く見えた。

いつも弱い青ちやんは、勿論最初の患者の一人だつた、心臓の丈夫でなかつた彼は、高い熱の爲めに人一倍苦しんで、もがいたり唸つたりした、そのあひだにも、然し一番先生の家族に近い場所に寢てゐた彼は、譫語の中でも時々助けを呼ぶやうに、「先生！」「奥さん！」と云つた。苦しさを堪えながら、先生は時々起きあがつて、看護婦に手傳つて注射器を取つては、少年達の身體へ注射して廻つた、自分のところへ來ると、どんな夢うつつの中にゐても青ちやんは眼をあいて、きつと「先生！」と云ひながら笑つて見せた、時々氣分が明瞭になつて來ると、青ちやんは蝸のやうに寢床から首をのばして、

「先生大丈夫ですか。」

「奥さん、しつかりして下さい！。」

と言葉をかけた。

か、當人の彼は、日が經つに從つていよいよ惡くなる一方だつた、丁度倒れてから十日近い或日、とうとう彼は長く人事不省に陷ちた、太田先生が床から這ひ出して、やつと彼の寢床まで辿りついて注射しても、いつもとちがつて意識を恢復しなかつた、が、先生が再び自分の蒲團へもどつて寢倒れた時、思ひがけなく、彼の床の中から讃美歌の聲が聞えて來た、それは、いつも彼の好いてうたつてゐた二百三十三番だつた。

「――主よ御手もて、ひかせ給へ、ただわが主の、みちをあゆまん、いかにくらく、けはしくとも、みむねならば、わ

れいとはじ……。』

それは如何にもハッキリした、大きな聲だつた、今まであれほど昏々と不覺になつてゐた人間の口から、どうしてそんなしつかりした言葉が洩れ出ることが出來るかと思はれるやうな、平生の靑ちやんにもふさわしくない力强い調子だつた、先生夫婦ばかりでなく、全寮の少年達が、その時その聲にしばらく意識を取り戻したほどだつた。

が、二節目の中頃へ近づくと、ずつと聲が弱つて、やがて糸でも斷ち切るやうにぷつり……と斷れた、それつきり、何の聲も靑ちやんの寢床から傳つて來なかつた、永遠に。

靑ちやんの短い二十年の生涯は、かうして終つた――。

それ程の患者を出しながら、ほかの者はみんな全快した、醫者の檢診では、たとへその時流感で倒れなくても、身體の狀態から云つて、靑ちやんはもうあと三四年きり持てない壽命だつた、と云ふことだつた。

×　×　×　×　×

靑ちやんの墓は、今農場と市街地との眞中ごろの、小高い共有墓地の岡の上にある。

それは、その邊の誰でもの屍を埋める場所で、どこからどこ迄とめいめいの家の持ち場がきまつてゐるわけでも何でもない。或は小さく、或は大きく、或は土饅頭のまま、或は質素な木柵を結つて、或は佛敎風に或はキリスト敎式に、ナラや栢の林の一方を切り開いた草藪の中に點々として、木の角柱や石塔が突ッ立つてゐるだけだ、靑ちやんの墓は、その岡の端近く、一番見晴らしの利くいい場所にある。

墓と云つても、燒いた骨の半分だけを埋めた――半分は、東京で或る華族の邸の小使をつとめてゐる、呑んだくれの、子と同じやうに低能の父親のもとへ農場から送つてやつたので――半坪ばかりの土を長方形に積みあげた、その眞中へ

細い木の角柱を突き立てただけの物だ、その墓標の正面へは、階書で、青沼長年君之墓と記され、右の側面には

「神の國に居るものは斯の如き者なり、　馬可傳第十章十四節。」

左の側面には、

「我わが設くる日に、彼をもてわが寶となすべし、　馬拉基書第三章十七節。」

と丁寧に墨で書かれ、背面には出生と永眠の年月日が銘してある。

墓標の前は、岡の斜面を越してかなり廣い谷がひらけてゐる、兩側の低く起伏した山々の懐に、幾百となく平たい耕地がひろがつて、その一方を湧別川の蛇のやうな流れが白くうねり、その先き六里、針のやうにチカチカと水面の日に輝いてゐる果は、晴れた日でも煙つたやうに、青灰色のオホーツク海の水が湛えてゐる、その雄大な景色を、青ちやんの身體そのもののやうな小柄な黒ずんだ墓標は、爪立ちして絶えず飽かず眺めてゐるやうに見える。

彼が死んで何年か經ち、當年の少年達の顔ぶれも大抵變つた今でも、農場の中ではなほ彼の名が傳へられ、時折り花だの草だの稻黍團子だのがその前に供へられる、毎年盆時分には、又誰かの手で墓の掃除が奇麗にされる、が、その外の時は、夏は人の背丈けよりも高くのびる蓬だの、シシウドだの、九階草だの、七ツ葉だのの、北海道特有の花や葉に圍まれて、冬は一間もの吹雪の溜りに默々と埋もれてゐる。

子の背の半分を受け取つた筈の父親は、そのあと一月も經つてから「長年儀、無事で御厄介になつており候や………」と、金釘流の醉ツぱらつたやうな字で農場へ手紙をよこした。

（右一篇、我羊品川夫妻に贈る。）

二　種つけ

「お、――又やつてやアがる、今放してやつたばツかりだのに」。

牧場の方を眺めて、眞ッ黒に日に焦けた石井が呟いた。

「この頃、どいつもこいつもよくフケ（發情の意）やがるな」。

ガツシリした身體の安江が相槌を打つた、半分重なりかけた二疋の牝牛は、夕近い靜かな空氣のなかでゆるく鳴きながらじきに分れた。

「ちやアすぐやつてあげますよ」。

云ふなり、小柄な久保は素速く牛舍のなかへ飛び込んで行つた。

「先生はおいでかな」。

牛舍の前の小廣い空地に、一里あまり引ッ張つて來た自分の牝牛を立たせて、股引姿の百姓は懸念さうに青年達にたづねた。

「なアに、先生でなくつたつて大丈夫ですよ」。

にやりと顔をゆがめて、少し耳の遠い原が答へた。

待つ間もなく、牛舍の一番向ふの端から、久保は見あげるやうな牡牛をガタガタ床板を鳴らせながら引き出して來た。その物音に、向ふむきに柵へ結ひつけられてゐた牝牛は、濕つぽい眼をして一寸うしろの方を振り返つた、牡牛は、すぐ何の爲めに自分が連れ出されたかをさとつて、荒い唸り聲を發した、見る見る、美しい桃色の齒のやうな物

が、その下腹部から前の方へ突き出した、そうして鮮かな露の玉が、三四滴ばらばらと白く乾いた土の上へ振り蒔かれた。
「それツ！」。
久保は、押へてゐた牡牛を急に牝牛の方へ引ツ張つた。
と、白と黑の美事な山のやうな牡牛は、半分にも足らなそうな同じ斑の小山の上へ猛然と乘りかかつた。すばらしく細く長い拔き身の鎗が、ほとんど水平に、眞つ直に小山の尻の眞ん中へ突き刺さつた、牝牛の身體は、その恐ろしい重みに堪えかねたやうに、今にも挫げて潰れるかと思ふやうに搖いだ、鎗は、瞬間のうちに又そとへ露れて、二度目の突撃に移らうとした。
「よしツ！」。
久保は叫びながら、全身の力をこめて牝牛の綱を引き寄せた、壯大な塊りは、ハヅミを食つてどたりと小山の上から滑り落ちた、そうして、さも物足らなさうに鼻を鳴らせながら、再び薄暗い牛舍の中へ引き込まれて行つた。
「うまい、うまい、――この頃、久保君上手になつたなア」。
安江が一種興奮した調子で唸つた。
「すてきに行つたな」。
原も、さも感心したやうに呟いた。
「大丈夫ですかな」。
百姓は牝牛の身體をさすつて、相變らず心配さうに聞いた。

「大丈夫ですとも、——あの位に行きやあ」。

安江は確證するやうに應じた。

「いつ見ても、だがあんまりチョンの間であつけないなあ」。

「どうして一遍きりやらせないんだ？」。

この感化院の畜牛部での、まだ一等新米の石井が原にたづねた。

「二度やらせると、あざが仔牛に出來るんだ」。

先輩らしく安江が教へた。

「おや、少うし怪我をしたな」。

その時、牡牛をつないで出て來た久保が叫んだ。

まだ感覺が殘つてゐるやうな身體を少し震はせてゐる牝牛の尻のところから、なるほどタラタラと、赤い血が毛糸の屑のやうに傳つてゐた。久保は早速事務所の方へ飛んで行つて、先生を引ッ張つて來た。

「どうもありがとうさまで…………」。

百姓は、黒い眼鏡をかけた中年の先生へ丁寧に頭をさげた。

「どれどれ」。

眼を病んでゐる先生は、まるで牛の尻の匂ひでも嗅ぐやうに顏を眞近く押しつけて檢べると、早速生徒達に云ひつけて、硝子製の洗滌器だのガーゼだの藥だのを持つて來させた、そうして黒い穴を兩手で押しひろげながら、乳色の消毒液をチユウチユウごむ管から牛の尻の中へ注ぎ込んで洗つた、そのあとガーゼを詰めたり、拭いたりした、牛は痛そう

に、そのたんび身體を動かしたり、脚を方ひちがひに踏みかはしたりした。
「先生、これで附きましたらうかな。」
そのまま戻つて行かうとする先生に、追ひすがるやうに百姓はたづねた。
「大抵大丈夫だらうね、……入ることはうまく入つたのかね」。
先生は生徒達にきいた。
「とてもうまく行きました」。
二三人が一時に答へた。
「ぢやあいいだらう」。
眼の病氣にすつかり氣を取られてゐる先生は、さも煩はしさから身を避けるやうにそれなり去つて行つた。
「一週間もして、もし又眼が血走つたり、そはそはしたり、粘液を出したりしたら、連れておいでなさい、さうでなかつたらもう大丈夫だ」。
久保が親切に百姓に云つた。
「さうですか、……いや、この牛は身體が弱いのか、今迄二度ここで種つけして貰ふて二度共流産してしまふてな、さあ乳は出なくなる、身體はやせる、散々難儀して、やつとこの頃又どうやらもとの身體になつて來たんで、どうも心配でがしてな」。
百姓は辨解するやうに、痩せて骨ばつた自分の牛の背中を撫でながらしやべつた。
「畜生ッ、牡牛の奴この頃毎日位だな、こちとら、ただ見せつけられてばかりゐたんぢやアやり切れねえや、いつそ人

間を廢業して、牡牛になつちまうか」。

安江が、こつちの方で大きな聲で嘆息した。

「全くさ、おれ達よりやあ、牛の方がよつぽど食ひ物だつて上等さ、ケーキ（大豆と醤油粕の混合物のこと）を食つたり、デンドコン（とうもろこし）に有りついたり、――おれ達あ、三度々々茶ツ葉と麥飯と味噌汁ツきりぢやアねえか、あアあ、せめて牛位えうめえ物が食ひてえな」。

原が應じた。

「それもこれも、あんまり今まで食つたりやつたりした罰さ」。

「こつちだつて始終フケてらあ、誰か雇つてくれ手はねえもんかなあ」。

石井が心からのやうに呟いた。

「おいおい石井、後生だから、今夜×××はれた夢でも見て、又せんだつてのやうに×××××てくれるなよ」。

「いくら××したつて、たかが知れてら、もう少しうめえ物でも食つてゐるなら格別、これぢや種牛にだつてなれねえや」。

原は、耳の遠い者に特有のゆつたりした調子で又唸つた。

「戯談云ふなつてさ、おれ達のやうな不良少年が種牛になつたら、それこそ先生の云ひ草ぢやあねえが、『ただ徒らに社會に害毒を流す』に過ぎねえんだらう、だからこそ、こうやつて北海道の果の牢屋ん中へ隔離されてるんぢあねえか、ちつたアおのれの分際を知れよ！」。

安江が怒鳴つた。

「何だ、誰が初め人間を廢業して了つて云つたんだ」。

原は負けずに怒鳴り返した。

「ウシ！　ウシ！」。

百姓と話してゐた久保が、その時得意の洒落交りに向ふからけしかけた

「おお神樣、が——諸君、勞働は何物にも增して神聖だ、諸君は、よろしく牛の糞の中に神を發見する修業を積まなくてはいけない、か」。

石井が、突然先生の說教の口調を眞似出した。

「牛の精液の中に天國を發見したつて、そんなら何も不思議はねえだらう」。

安江はニヤニヤ笑ひながら原を詰つた。

「誰ぞ、黄金の牛を信ずる者は？………」。

石井は、毎朝食事前に先生と一緒に輪讀する聖書のうろおぼえの一節を、思ひ出したやうに再び呟いた。

×　×　×　×　×

「どうもいろいろ御世話樣でした」。

百姓は久保達に禮を云つてやがてとぼとぼと、石ころの多い柵のそとの道へ牛を連れ出した

「さようなら」。

青年達はその背後から怒鳴つて、牛舍の後始末をしたり手を洗つたりする爲めに散らかつた。

「チョツチョウ、チョツチョツ………」。

ゆるやかに舌をならしながら、瘤々と木の根つこのやうな節くれ立つた手で、百姓は交接後の疲れた牛を引ッ張つた。

「うまく附いても、又途中で流れちまつた日にやあ、今度も十三圓只損だあ、種つけ賃ばつかりならまだしも、そのうへ牛に弱られちやあ、貧乏ぐらしにやア全く泣きつ面に蜂よ、眞實、世の中の事あ何をしてもらくアねえ、——ほら初、しつかり！」。

大きな石ころに弱々しく躓つまづいた牝牛を、百姓はいそいではげました。

「流れるなら、いつそ嬶の腹の方の奴が流れてくれりやアどんなにいいか、……チョッ！。」

彼の連想は、思はず、八人目の近く出て來る子供の上へ飛んだのだつた。

三　雨乞ひ

晴れによつて　夕方から續々百姓達は山へ登つて行つた——。

それは農場のほとんど眞ん中へ突き出た、ナラの古木の茂つた、どつちから登つてもかなり險しい象鼻形の山ッ鼻だつた、その頂上の、形ばかりの馬頭觀世音の祠は、今のクリスチヤンの大地主が此のあたり一帶を買ひ取つた時異端として取り毀たうとしたのを、小作人達の總代が何人も出かけて、やつともとどほり保存することが出來たものだつた。

折り箱のやうな白木のちつぽけな扉のまわりへ、皮つきのナラの丸太を四本柱のやうに組み立てて屋根を作つた社の前に、これもナラの丸太をぶつちがひに組んで臺にして　早速大太鼓が据ゑつけられた、屋根の下へは、釘をとんがらした板の上に四本の小蠟燭がともされた、そうして一人の百姓がドンドコドンドコ太鼓を鳴らすと、一人の痩せた老

人が、神妙に祠の前の席へ端坐して祈禱をはじめた、そこから二段ばかりさがつた空地には、重い大割りの薪材が山と積まれて火をつけられた。

眞ん中の段では、もう大樽の鏡が抜かれて、ブリキの漏斗でビールの空瓶へ注いだ酒を、みんな素燒茶碗でガブガブ引ツかけた。

「さあ、一つ威勢よくやるべい！。」

早朝からの勞働に疲れた腹へ廻つた酒の勢ひで、やがて誰かが云ひ出したのをキツカケに、四十人ばかりの百姓は一齊に立ちあがつた、そうして手に手に、或はまき雜棒でブリキ鑵をがんがん鳴らしながら、或は板を木の枝でぶッたたきながら、太皷と祉をかこんでぐるぐる左から右へ廻りはじめた。

その鑵や板や太皷や、又彼等の足拍子に合はせて、百姓達は口々に大聲でわめいた。

「あアめエ、たんとウ降つて來いイ——、
東のそウらに、雲が出たア、
にイしのくウもウ、さアがつたア
あア——さツさツと降つて來たア……。」

それは一種の、實に奇怪なおどりだつた、或る者はシャツ一枚で、或る者は肌脱ぎで、或る者はがツしりした野良着のままで、或る者は卷きゲートルで、或ひは乘馬ズボンのやうないでたちで、或ひは向ふ鉢卷きに股引き姿で、手を振つたり、腰を曲げたり、脚を互ひちがひに高く擧げたりした。高い背丈け、大きな胴體かと思ふとまだ十五六の子供かと思ふやうな小柄、——銅鑼のやうな濁聲、ラッパのやうな高い聲、笛のやうな金屬性の透る、喉神樂師のやうな節

り恰好、盆踊りのやうな手ぶり、何かに掴みかかるやうなものすごい跳びかた、醉ツぱらひのよろけるやうな腰つき、憑かれたか、又は氣ちがひかと思はれるやうな踏みツぷり、かと思ふと、軍隊の行進のやうな重々しい歩調……。

それはとても此の世の中の物とは思はれない行列だつた、どこか幻影の國の生きた廻り燈籠か、又は、今彼等のそれへ向つて祈つてゐる空から墮ちて來た雷獸共の一團か、とでも疑はれるやうな。

そのうちの若い一人は、一杯水の入つたバケツをぶらさげてゐた、そうして踊りながら、わめきながら、長い蓬を箒のやうに束ねた奴を浸して、滅茶苦茶に振り廻した、まるで夕立のやうに、人々の頭と云はず手足と云はず四方八方へ水玉が飛び散つた。

然し彼等の脚の下の土は、夜目にも白く石灰のやうに乾いて、奇怪な神々か野獸のやうな行進につれて、濛々として灰煙のやうに厚い土埃が捲きあがつた――。

それは、實際おそるべき旱だつた、もう何十日間、ただ一滴の雨さへ空からは墮ちて來なかつた、明けるに早い北海道の夏の朝の、午前五時前から晩い夕暮れまで、毎日々々眼のくらむやうな獨特の强い日光がカツと照りつけた、その激しい暑さ、强情な無雨の調子は、三十年來の年寄りの移住者さへ初めてだとみんな云つた、大きな白樺やナラの立木すら、日中はぐたりと葉を垂れた、蓬々としげつたよもぎや蕗や萱もすつかり萎れた、まして畠の作物は見るもあはれだつた、大豆でも燕麥でも野菜でも、端から黄ろくなつて行つた、その邊で殊に大事な收獲の一つの薄荷は、どこの畠も毎年の半分ほどの背丈けでもなく、おまけに瘦せて匂ひが掛つた、此の三年來やつと苦心して開きはじめた水田は、まるで地震のあとのやうな深い龜裂が入つて、稻は立つたままカラカラと藁になりかけた。

もう不作どころの騷ぎではなかつた、もしもう一寸このままつづいたら、その地一帶目もあてられない飢饉は必然の運

命だつた、長い間の植ゑつけや手入れの苦勞が、一度にみんな空に歸して了はうとする瀬戸際、……が、無力な百姓達に取つては何の手段もなかつた、見す見す枯れてゆく畠の物に苛立つて、とうとう彼等は死物狂ひの祭りを企てた。

空は今夜も拭つたやうに晴れひろがつて、丁度十五夜に近い中天の大輪の月が、茂つたナラの葉越しに無數の螢のやうな青い光を土の上へバラ蒔いた、山の上から一目に見渡せる農場一圓の天地は、まるで水のやうに蒼茫とした光の中に寂と斷つてゐた、あまりの明るさに欺されたか、又は山の上の騷ぎにおびえさせられたのか、その靜けさのなかで遠く三四度鷄の鳴き聲がきこえて、あとは又もとの眠りに戻つた。

月光に蹴おとされてか、星はあまり澤山光つてゐなかつた。が、すぐ頭のうへ近く連つてゐる北斗星と、南に寄つた金星とは、今夜もはつきりと瞬いてゐた、東の方にはもう火星がのぼつて、久しぶりで最も地球に接近して來たその星特有の、まるで眞赤な火花でも打ちあげたやうな爛々とした熱光を放つてゐた、西の方の大きな波頭のやうに起伏した山の一部分に、やつぱり雨乞ひでもやつてゐるのか、かなり大きな赤い火が、丁度その異しい星に應じるやうに燃えてゐた。

太皷と鉦と柝と、焚火のパチパチ烈しく爆ける音と、自分の足音とにのぼせあがつて、酒や汗や煙の匂ひや、周圍の草木の蒸すやうないきれに醉つぱらつて、眞つ白い土煙にむせ返つて百姓達は次第に心の平均を失つて來た。

「あアめェたンもれ、龍王さん…………、
あアめェ降らにやあ、歸らんぞオ…………」

さう云ふ怒鳴り聲も調子をはづれて、或る者は前の人間へぶツつかり、或る者はうしろへよろけて輪のそとへころがり出た。

「さあ休んでのんで、又やッつけべえ！。」

やがて輪はそう云ふわめきに崩れて或はきはりの叢のなかで、或は眞つ白い粉桶のやうな土の上で、百姓達は再び酒を飲みはじめた。

「何てエいい月夜だい、畜生！。」

「全くだ、業腹に、どこもかもまるで眞つ晝間のやうに見えるぢあアねえか。」

「この分ぢやあ、と一もちよつくらたア降りそうもねえな。」

「よせツ、誰だあ、そんな緣起でもねえことを吐かす奴あ！……——ここへ出て來い！。」

おそろしく氣に障つたやうな聲が向ふから怒鳴つた。

「誰も、降らせたくねえたア云はねえや。」

前の聲が應じた。

「何をツ！おれ達あ、今夜酒喰らいに山へあがつて來たんぢやアねえぞ。」

「そうだ、そうだ、ふる迄ア、今夜よツぴてでも飲みあかすぞ。」

笑ひ聲と怒鳴り聲が、そのあとに混交した。

「一てえ地主あ何をしてやがるんだ？。」

やがて又別な聲が叫んだ。

「珍しく、ちつとんべえ酒を買つたわさ。」

「酒ツくれえで、おれ達をこのまんま乾干しにする了見か。」

「いくら地主でも、天道様に代つて雨をふらすわけにやあ行くめえわ。」

「天道様は無料だぞ、地主は、もと無料でお上から貰つた地面を、高え小作料でおれ達へ貸しつけてるぢやアねえか、おれ達あ、云はば天道様や雨の小作を拂つてるやうなもんぢやアねえか。」

「愚痴をひろげたつて、初まらねえや。」

誰かがなだめるやうに、又茶化すやうに口を挾んだ。

「雨！雨！雨せえ降つてくれりやあ云ふ事アねえ。」

外の聲が泣くやうに叫んだ。

「何が愚痴だ、こんな年にやあ、無論小作料は一せえ棒引きにして貰はにやアなんねえぞ」

「ヒヤヒヤ！」

棒引きして貰つたつてまだ足りねえや。

「雨だ！　たアだザアツと來せえすりやあ文句アねえ。」

「さあ又廻れ、がんがん力一ぺえぶツたたけえ！。」

百姓達の黒い群は再び立ちあがり初めた、太鼓は又威勢よく鳴り出した、ガンガン、ガチヤガチヤ…………騒々しい響きを伴つて、奇怪な行列は新しい廻轉を開始した。

「やい、何でわざとおれへぶツかりやがるんだ？。」

が、そのうち、一人の男がいきなり怒鳴ると、蓬箒でバケツの水を振り散らしてゐる男の方へ飛びかかつて行つた。

「何い！。」

よろける拍子にバケツをひツくり返したまゝ、醉つた男は相手の腕をつかんだ。

「よせよせ、わざと掛けたわけぢやアあんめえ、誰だつてみんな掛けられてるわ。

一人の男が仲裁に入つた。

「いゝや、何度も何度もおればツか覘つてぶツかけやがるんだ、さア何でぶツかけた？　かう見えてもな、まだ手前見てえな青二才に馬鹿にされるほど、おれア老碌してゐねえぞ。」

「何を老ぼれ奴！　寢取られたが口惜しかつたら、嬶の方へ云へ！。」

若い男は、自分を相手から自由にしやうとして全身をよじツた。

「喧嘩はよせ、よせ。」

「いいや、勘辨なんねえ、若えと思つて默つてりやあ、いくらでもいい氣になつてつけあがつてけつかる、今夜ツちう今夜こそア、うんと懲らしてくれにやあ承知出來ねえ。」

「畜生！。」

若い男は、相手を突き飛ばさうとして見當が狂つて、力一杯仲裁の百姓の胸を打つた。

「此の野郎、何故おれをぶちやアがつた？。」

頑丈な中年の百姓は、急に威猛高になじツた。

「糞ツ！。」

もう前後の見界ひもなくなつたやうに、若い男はもう一遍拳を前の方へ突き出した。

「よウし、手前今度アおれを相手にするつもりか。」

百姓はほんきに怒り立つて、ぐいと若者の胸倉を取つた。

と、でこぼこの坂の端によろけて、若い男は眞ん中の台地から、いきなり仰向けに下の方へひつくり返つた、はづみを食つて、しがみついた百姓も一緒にごろごろと、眞ツ白い土煙を立てながら坂を焚火の方へころがつて行つた、その惰力で、若者は又二つ三つころげて、眞紅の炎をあげてゐる焚火の端へ頭を突ツ込んだ。

「熱ツ！。」

ジリジリと焦げる髮に氣がつくと、死物狂ひに若い男は上の相手を跳ね飛ばした、そうしてほとんど夢中に、片手で燃えさかつてゐる一本のマキを握つて立ちあがつた。

「あぶねえ、――――これ、來てねえか。」

いゝゝゝ、どかどかと二人のあとを追ひ降つて來た百姓達は、口々に叫びながら、ふりあげた眞ツ赤な薪を若い男の手からもぎ取つた。

「さあ殺せ、殺すなら殺せ！。」

大勢に取りかこまれながら、若い男は氣がちがつたやうにわめき立てた、

「よウし殺してくれる、待て。」

前の仲裁の百姓は、更に猪のやうに突進して行かうとした。が、百姓達は、寄つてたかつて又その男を押へた

「雨乞ひだか喧嘩に來たんだか、さつぱりわかんねえ。

一人の老いた百姓が嘆息するやうに唸つた。

「なまじうすい雨の代りに、濃い奴をふらすか。」

外の一人の百姓が調子はづれに笑ひ出した、

ドンドコ、ドンドコ、ドン…………一番上の台の祠の前では、旱と酒に苛々した、何にでも怒りつぽくなつた百姓達の一團をよそに、先刻の老人が兩眼をつぶつて、大太鼓の横で一心に雨乞ひの祈禱をこらしてゐた。

× × × × × ×

翌朝、空は又昨日どほり——その前の、又前の日どほり、瑠璃色に晴れ渡つた。

白熱した太陽は、相變らず軋むやうにその中にジリジリと廻つた。昨夜騷ぎのあつた觀音山の上では、水をかけた焚火の殘りがまだ微かに煙を出してゐた、その周圍の、踏みにじられた白い沼のやうな厚い土埃の中には、ところどころ火傷した蛾が音もなくもがき、祠の前には、針板の上へ白い蠟涙が花瓣のやうにかたまつて、焦げたナラの葉洩れの日に靜かに光つた。

一九二四、八　北海道にて



流星

富ノ澤麟太郎

一

四月の夜の匂ひは、果物店から縱横無盡に星空へ向つて放散してゐた。

「シネマ東京」が午後十時頃に閉館すると、その界隈はひとしきり賑はつた。さうしてそのあわたゞしい雜閙のなかに、そこを出た幾人かの人人は、消え失せたスクリーンの上の青白い幻影をもう一度再燃するかのやうに、表の綺看板を見上げてゐた。しかしその人人とても、シネマホールの顔ともいふべきその前面を飾つてゐる花電燈が消えるとともに、薄暗い紫色の夜の光のなかへ水泡のやうに消え込んでしまつた。

「青い花の家」の裏口から瘦せた若々しい婦人が、庭傳へにその家の外郭である要冬青垣（かなめがき）の外へ野犬のやうに忍び出た。彼女の鼻先には未だにシルバーリーフ・ドクリムスンシクラメンの香氣が漾ふてゐた。花床を掠めてくる微風は、彼女の肌を着物の上から輕くまるやかに撫でてゐた。

彼女は十時の聲を聞くまでは、店先きの花の香に醉ふてゐた。——彼女は外見では落着いてゐたが、内心では少なからず窮困してゐた。彼女はけふ一日その苦い煩悶を避けるために、殆んど店のなかでのみ暮した。さうしてその約束された時刻の來るまで、彼女はシクラメンのなかへ顏を埋めて泣いてゐた。

今彼女は夜の戶外へ出たものの再び考へ直して內へ戾らうかとも思つた——が、彼女の心は秤にかけられたまま水平にはならずに絕えず動搖してゐた。

ものの影とも間違へるほどすばやく「シネマ東京」の樂屋口を飛び出た者があつた。その人物はフアツショナブルシヤアプのすばらしい洋服につつまれ、小脇には箱に入れたヴアイオリンを抱へ、軒に沿ふてひしやげた十字街へ出ると、その一つの角である果物店の明りを避けるやうに、その前で拋物線を描いて北の方へ進んで行つた。總て五間ほどの長さの木橋へさしかかると、彼の步みは平靜な足どりになつた。彼は口笛を吹いた。さうしてちよつと橋の下を覗いて見た。川といふよりも溝といふべきその水は、流れてゐるとも見えないが、微風に刻まれる泥水の上へ星を鏤めてゐた。彼は顏を少し傾けるやうにして微笑んだ。彼の彈み上る樣子は、輕快な馬の足どりに似てゐた。高台から這うてくる微風は、ほつそりした彼の軀を抱くやうにしてじやれついて附纏うてゐた。

「ウヰリアム、テル」のマーチが突然止んだ。若葉の匂ひが、微風に溶けこんで漾ふてゐた。彼女は立木のやうに顫へて、要冬青垣に沿ふて少し後退りしながら前方を注意して見た。夜氣は薄暗い紫色に浮いてゐた。土を踏む靴音が、聲の這ひ寄るやうに響いて來た。

ヴァイオリンを抱へた人物は、空いた右手を元氣に打ちふりながら彼女の方へ突進して來た。彼女は彼の胸に抱きしめられることを豫想して、顏をそむけたまま垣根について二三歩引きさがつた。女のそんな素振を見た男は、ちよつと立ち止つて女の顏が向けられてゐる方を性急に覗き込んだ。が、彼は直ぐしまつたと思つたので、急に落着いた態度を見せた。

「よく待つてゝくれた、ありがたい、糸子！」

彼は半ば前方に腰を折りながらせきこんで言つた。

彼女は彼とすれすれになるのを防ぐやうに左肩を斜に突き出した。

「何故こんなことをするのです。」

彼女の聲は鋭い刃物のやうに彼の顏面へ切りかかつて閃いた。彼は彼女の言葉を豫想してゐたもののやうに、ちよつと眉をせわしく微動させた。彼は彼女を抱かうとした。彼女は聲を殺しながら彼の右手を強く拂ひ退けた。彼は鼻先きを突きたてて笑つた。彼女は急にむつと怒つた態度に變つたが、それの無益であることを感じて、以前よりはもつと極だつた一種の威風を示しながら優しく氣を取り直した

「待つてたわ、三浦さん。だつて私あなたにお願ひがあるの。呼び出し狀など書くのは、一たいどんな考へからです。私困るわ――小汀だつて、これが解つたら惡い氣持を隱せないでせう。」

「小汀のことは人から聞いて知つてる――小汀はお前を苦しめてるだらう。それは嘘か？」

「いいえ、怒りぽいわ、でもいいひとです。病氣なんですもの――」

「何だ――病氣は？」

「何でもいいぢやありませんか。」

「理窟づめに怒りぽいな。」

「いいえ、いいひとです――でも、あなたは今夜のやうなことをして、私をどう苦しめなさるのです。一たいどんなことです?」

「糸子、お前の暮しがどんなふうか見たくもあるさ――不機嫌で氣むづかしい人のところで――」

「あなたはだしぬけに何處から來たのです?」

彼女は男の横頰を思ひ切つて打ちのめしてやりたかつた。花床から輕く舞ひ登る豐麗な香氣は、彼等の頭上でゆるやかな渦を卷いてゐた。

「怒つてるのか――淺草から逃げたよ、あの地震の時にね、そして神戸へ行つてた。今は直ぐそこのシネマ東京の樂手さ――」

「死んだのでなくて――」

彼女は半ばまで言つて、ちよつと物を考へるやうに口を噤んでしまつた。

「惡かつたかね。ふむ。お前はおれを待つてたのだから、おれはおれが考へてたやうに思つてみたいが、不親切だよ。」

突然彼は女の手を握つた。

「放してよ。」

彼女は肩をしぼめながら握られた手を振り切つた。

「あなたはいつまで私をあなたにくつつけて考へてるのです?――例ひ一度はお互に愛し合つたとしても、今はそ

の時とは全く違ひます。」

彼女の聲は少し顫へてゐたが、その態度は平靜で、頭髮の一すじさへも亂してはゐなかつた。

彼は半ば悲しげに首を振つた。さうしてすでに彼の鼻高な顏からは、快活と微笑とが消え失せてゐた。が、皮肉な微笑で唇を歪めたまま直ぐ陰鬱な顏に變へて言つた。

「おれはここから一丁とは離れてないところに住んでゐる——また會へるのだね、きつと——彼奴のやうな氣むづかしさが感染してない時に——!」

「誰が——あたりまへの方法でだつて會へるぢやありませんか。卑怯な——あからさまに店から這入つてらつしやいよ。」

「お互に氣を惡くするやうな言葉を見つけ合つてたつてはじまらない。そんな智慧があるなら——明日でも會はふ。」

彼は呼ぶやうに言つて、彼女の手を握らうとした。それを感じた彼女は佇んでゐるままで手をひつこめた。彼はそんな行爲を彼自身がしなかつたやうに、しかも極めて慇懃な態度で半ば天空を見上げた。

「いやです。何だつてそんなに困らせるのです。私のことなどはすつかり忘れて下さい。ほんとうに後生ですわ。」

「お前は待つてたのではないのか。」

彼は再び彼女の顏を盜んで言つた。

「別れの誓ひをたてたかつたから——」

「嘘つけ。ウヰリアムはどうしてる?」

「あなたに係りはありません　あの子は。」

「ふむ。一度は親になつた。」

彼は荒々しく言つて　泣き出してゐる彼女の腰を無理に抱へてその頬へ接吻した。彼女は軀を刻みこむやうに顫はしながら、恥と苦痛と後悔と失望とのなかに苦い涙を灑いだ。彼女は直ぐ氣を取り直した。次の瞬間、男は彼女に突き飛ばされ、蹌踉いて倒れた。

地面から燃え上る火のついたやうな男の笑ひ聲のうちに、彼女は小刻みに足を運び、幾分か前踞になつて、その背中には和らげられない悲哀と憤怒とを背負つてゐた。

男の駈けて行く跫音は、彼女の耳へ風に嬲られる横帆のやうに突き射つて來た。軈てそれは脅迫と哀哭との鈍い呻きに變つた。男は勝誇つた騎士のやうに薄闇を突いて消え失せてしまつた。

彼女は家の方へ通ずる小徑へ踏み入つた。彼女は默々として頂垂れてゐた。花床は、薄暗い紫色のなかに溶けこんで水の流のやうにほの白くひろがつてゐた。さうしてその一樣に乳白色に浮き上つてゐる花床からは　豊麗な香氣がそこら一面へ霧のやうにたてこめて搖れてゐた。

彼女は花床の周圍を巡りながら、袂の端で兩頬へ溢れてくる涙を軽く押へた。

彼女は店の方から家のなかへ這入つた。彼女の軀は旅疲れしたやうに重苦しかつた。彼女は奥の間へ注意した。

彼女は今にも奥の間から聲をかけられるやうに感じた。彼女は靜かに茶の間の柱時計を見上げて　店の方へ出た。さうしてなるべく音のしないやうに戸じまりをした。そのために店のなかは一層明くなつて、イルミネイションでも點し

たやうに輝いた。彼女はそのまばゆい明りの下へ彼女自身の姿を曝すのは氣恥しいやうに感じた。彼女は瞬間的にそんなことを考へながら力を入れるやうにしてスヰッチを切つた。店は花の香に滿ちた薄暗い闇に變つた。

再び茶の間へ引き返した彼女は、彼女自身で心苦しい一種の不安を感じてゐた。奥の間に寢てゐる良人に呼びかけられたなら思はずまごつきさうに感じられた。さうして彼女は先刻の落度を心配しないこともなかつた。店の者の歸つたあとでもあつたので、彼女の留守の間に客は來はしなかつたであらうか。今良人の言葉のない以上は　そんなこともあるまい。しかし次の瞬間に彼女は大膽になつてゐた。この店の習慣として、夜分になれば一度は必ず庭の方を巡廻する。さうしてそれが此頃のやうな花卉の季節であれば一層怠つてはならない爲事の一つでもあつたから。

「お休みになつてて？」

彼女は茶の間を退いて、奥の間へ這入るなり良人へ呼びかけた。返事はない。彼女はほつと溜息を漏らした。

彼女は牀へ横になると、直ぐ氣輕な氣分を味はつた。しかしそれはしばらくすると、氣に入りの詩でも朗誦するやうに一種の興奮を伴つて高潮して來た。彼女　はぢつとして横になつてゐるのがもどかしいほど苛立つ胸騷ぎを感じた。が、それをどうすることも出來ないと思ふと不甲斐なく思はれた。さうして彼女はパンに歎み、少女らしいつつましやかを知る昔のことが思ひ出された。

二

彼女は朧げながらも光り輝くこの「青い花の家」の主婦になるまでは、十中七八までの婦人のやうに樂しい少女時代

を送り、骨も折らずに、女としての美と愛とつつましやかと清潔と怜悧とによつて、ここまで登りつめたのではなかつた。

彼女は横濱の場末で、親なし兒として貧困のなかにその少女らしくなりかけた時代を送つてゐた。彼女はそこで或老人の世話になりながら、ストローの選り別けをしたり、造花を作つたりして一日の食物の財元を拵へてゐた。さうして手で働いたものが、直ぐ口のなかへ這入るといふやうな貧民窟の生活は彼女の天性の美をかなり奥深く隠してゐた。

— 四 —

或日彼女は街角で會つた見ず知らずの外人に、街の名前とそこへ行く順序とを訊ねられた。その時彼女は、その外人の子供らしい日本語のアクセントに半ば微笑みながら、はつきりとしかも少女らしい含羞みをつつましやかに軀全體の動作に現はして應へた。

— 五 —

彼女にとつてこの異樣な出來事は、偶然にも意外な結果を生んだ。その外國人は、彼女のつつましやかな言動とその楚々たる容貌とに心から動かされて、外國人らしい好奇心と金持の氣まぐれとから彼女を育ててみたいと彼の心に問ふた。さうしてその外國人は、彼女を引き取ることに決心した。

その年、彼女は、軈て十六歳にならうとするクリスマスの夜に、その外國人の許へ養はれることになつた。

彼女は可憐なしかも落着いた少女になつた。彼女は半ば驚きながらも平和な家庭の人となつた。彼女は滿足した。彼女の性格は悦びそのものにふさわしいやうに無邪氣でもあつた。

彼女の心は滿足して悅びに顫へた。
彼女は富に退屈を感じなかつた。
彼女には品位と洗錬された落着とがそなはつた。
彼女は彼女自身の貧困に苦しんだ過去のことを忘れはしなかつた。が、それは夢のなかの出來事のやうであつた。

彼女が十八歲の春であつた。―――
彼女は彼女自身の保護者と結婚した。彼女は女らしく心から滿足した。平和は二人の上に輝いた。彼女の心には新らしい記憶が一ぱいに滿ちた。さうしてその結婚後、七ケ月目に、彼女は一人の男子を分娩した。

彼女は良人のハーランドを信じてゐた。彼は彼女の愛情を受けるに足りるほどの人柄であつた。

――
その次の年のクリスマスの第四夜に、彼等の子は微笑むやうになつた。
天井裏を鼠が突然に馳け過ぎた時、彼等の小さなウヰリアムは泣いた。
"Bah, Don't cry Bill!"
ハーランドは半ば笑ひながら、妻の腕に抱かれてゐる子を横あひからあやした。
三人の生活は樂しく平和であつた。その親密な愛情は、廣間の片隅で幸福を撒きちらしてゐる鸚鵡の口眞似にまでの

ぼつた。

"Bah, Don't cry Bill!"

「何に敗けるものか！」

世界大戰の開始された頃の或日、彼女はハーランドの強い怒り聲を聞いて、恐ろしい深い一息を吐いた。

ハーランドは三十前後の獨逸系の亞米利加人であつた。

或朝彼女は寢牀のなかで跳び上つて、ウヰリアムを抱きながら啜り泣いた。彼女は柔かい子を抱きしめたまま何事も言はずにしづかに泣いた。さうして彼女はすべてが何でもない夢であることを望みながら、一晩も家をあけ切つて、彼等の話相手にはなつてくれない良人のことを思ひつづけた。

そのうちに一人の女中は逃げ出した。

ハーランドの商館は閉鎖された。

街は驟雨のやうに喧噪した。ホテルの前は人の群で埋まつた。それを通行人が十圓二十圓に取り圍んだ。

彼女は兇猛な妬みを感じたと同時に彼女の上に降りかゝつて來た不幸を嘆いた。さうして彼女は、ウヰリアムを抱きながら宣戰布告の號外を引き裂いた。

彼女は長い間、良人からの便りを待つた。
彼女の幸運は、涙とともに跡方もなく掃き去られてしまつた
彼女は長い間、良人の歸宅を待つた。
彼女は胸の底から湧いてくる動悸に戰いた。
富は彼女の軀へ古い記憶の烙印をやきつけたまま燃え切つてしまつた。
彼女の望むものは、子をしつかりと胸に抱きしめる愛であつた。
彼女は或レストランのウヰトレスになつた、
彼女の求めるものは富であつた。さくさくと鳴りひびく銀貨であつた。
彼女の顏は脂粉に輝いた。錢は彼女自身をさへびつくりさせた。
彼女の立派な姓や名譽を欲したのではなかつた。彼女は獨り彼女自身で恥ることもあつた。彼女は彼女自身が墮落したのであるとも考へた。さうしていづれは何時か何處かの片隅へぼろを纏ふたまま投げ出されてしまふのではあるまいかとも考へた。
青い光芒のなかに無數の目が時々閃いた。

彼女は腐敗の氣に染むまいとして、彼女自身の胸をしつかり抱きしめた。

彼女は現實の前では心の響を失ひがちであつた。——彼女は生存の影にひきづられてゐた。

「それから、ゼリビンズ——ウヰリアム、あなたはいゝ子です。お母アさんは、昨夜も遲れたのね、勘忍してね。」

赤や白のゼリビンズは、彼女の兩手から茶碗のなかへ寶石のやうに音をたててこぼれた。子は青白い頰へ半ば輝く涙を顫はして小さな手を拍つた。

齒輪は廻つた——時は跳ね飛ばされて礫のやうに碎けて散つた。

彼女の指には贅澤な指輪が輝いた。彼女は○座のセコンドヴアイオリスト三浦と婚約した。

三浦は混血兒であつた。彼の父系は伊太利亞人で、祖先代々からの貿易商であつたが、彼は見知らない父を夢見ながら、由あつて母系を名乘つてゐた。

三浦と糸子との生活は、親密な情愛を十分に持つてはゐなかつた——彼女はさうではないと思つたが——彼女は幸福ではなかつた。三浦は青年らしい快樂に滿足してゐた。その性格がまたそんなものに滿足する程に懶惰なものでもあつた。

彼等は別れた

一年又半の生活を、一瞬の出來事の結果でもあつたかのやうに——彼は何時もの惡習に馴れて、彼女へ爪をかけただけであつた。彼女にとつて、彼との生活は、恥と墮落との嘲を、世間へ向けて、極端に想像させたに過ぎなかつた。

ウヰリアムは色の蒼ざめた、目の窪んだ子になつた。さうして彼の着てゐる白い地に赤毛糸でふちどつたジヤケツは、その頸のところがそんな細い痩せた頸が二つも這入るやうにたるんでゐた。

——

さうして彼女が、東京へ出る一週間前に、ウヰリアムは貧乏な子供等が命をとられるあの急性胃腸カタルで死んでしまつた。

彼女は東京へ出ると、嘗て自身の經驗が敎へた爲事にたづさはつて、青白いシヤンデリアのなかに、悲しい顏を脂粉に塗りつぶして笑ひ得ざる微笑をたたえながらその哀れな繪姿を、喧噪と音樂と酒とビフテキとのなかに曝した。

三

小汀は店頭からちらりと見える茶の間と廊下との間に籐椅子を据ゑて、卷煙草を燻らしてゐた。彼は重苦しい氣分から解放されて、春らしい夜氣にすがすがしい長閑さを味つてゐた。遲い夕食を取り、しばらくぶりで口にしたポートワインが、彼をそんな珍らしい氣持にした。彼は彼自身でも珍らしいことであると思つた。この「青い花の家」の春は、すでにスヰートピーやシクラメンから賑ひはじめてゐたのであつたが、少なくとも彼だけは肉體までも食ひつくすやうな腦に侵されて、けふといふ今夜までそんな春らしい氣分には到底なりきれないでゐた。

けふ彼は夕方になると、ふとした不安から花壇の奥に設けられてある養魚場へ行つた。彼はそこの金魚をつくづく覗いて見た。すでに店の方へ金魚を陳列はしてあるものの、一通りは試驗的に見て置かなければならないと思つたからであつた。——彼は妻には内所で、そつと牀を離れて養魚場を見て、花壇まで一巡して來た。

それ以來彼は大へんに氣分がすぐれて來るやうに感じた。こんなにも突然に幸福らしい氣になつて來たのを悅ぶ者は彼一人ではなかつた。妻は良人が椽に腰かけてゐる姿を見つけた時は大仰に叫んだ。

「まあ、どうなさつたのです？」

さうして彼は妻が持出した坐布團をあらためて腰の下へ敷きながらかすかに微笑んだ。すると彼女は今まで隱してゐたものを見せびらかすやうに聲をたてて笑つた。

彼は妻の笑ひ聲を耳の遠くの方で聞きながら、今しがたシネラリヤやシクラメンやチューリップやプリムラやグロキシニアやロベリヤやパンジーやガーベラ等の香氣に咽せ返つて、花床の小徑でよろよろしてしまつたことを思ひ出して、

くすくすと忍び笑ひをした。彼女は彼女で、良人の氣分のいい姿を見て、心から微笑んだ。

彼等が結婚してから三年にもなるが、絶えてこんなことはすべて珍らしいことであつた。男も女も共に氣樂な生活を暮すことは、不賛成ではなかつたのであるが、どうしたものか人に隠れるやうに寂しい生活を欲した。それといふのも彼が一種の興奮から肺に關する研究をつきつめるために醫學を選んだが、その中途でその希望を斷念しなければならない腦病に侵されたその加減であつたかも知れない。――彼女にしても人生に對しては、特に男性に對しては、燃えるやうな憎惡を感じてゐた。この感じを深く感ずれば感ずるほどそれを腦の奥深くへ隠さうと骨折らなければならなかつた。さうしてその感ずる程度を顔へは表はしたくないと思へば、しぜん人の目には厭な姿に映つても冗談などは藥にしたくも持合せてはゐないやうな態度で氣むづかしくしやんとしてゐた。これは良人の氣むづかしさから受ける罪は十分にあつたとも言へるが。――

彼女の良人は三十にもならない青年であつたが、一見すると三十五六には見えた。皮膚の色が灰褐色で、骨々しい顔は、かなり鼻梁の張つた鼻で二分されてゐる。その各々が一つづつの尖つた眼を光らせてゐる。光るといつても、それは濁つた光り方である。どちらから見ても彼には常に元氣の持合せはなささうである。さうして彼は心の入口へしつかりと錠を卸してゐる。彼は必要以外のことは喋らない。それにしても、彼は世間へ向けて憎惡を持つてゐるのではない。彼はただそんなふうにぢつとして、何も喋らずにゐるのが好きなのである。彼には獨りで微笑む癖があるのを見ても、そのことは解る。それは故意に微笑むのではない。が、彼はその時心のなかの彼と何事かを話し合つてゐるのかも知れない。彼だつて種々雜多なことは考へてゐるのだから――彼は内心には樂しい獨樂を廻してゐるに違ひないのである。

彼等は結婚すると間もなく、この廣大な敷地を購入して、花園を作り花卉の賣買をはじめ、その次の年からは庭の奥にある沼のやうに大きい池を利用して養魚場を設け金魚の飼養をもはじめた。この商賣は彼に一番適してゐるらしかつた。さうしてその他には、白いペンキ塗りの店を開いて「青い花の家」と看板を掲げた。さうして店のことは一つさい妻の受持にまかせた。彼女は本氣で勢だして店の方を綺麗にする。店をじだらくにしたことはただの一度もない。若しも店が取り散らかされてあるとすれば、忙しい時でもあつたらう。が、彼女は花や草がちよつと取り散らかされてあることについては、かなりの自信をもつてその效果を知つてゐた。なるほどそのやうなことは見て見ばえのしないものではない。しかし彼女は十分注意して店のことは綺麗にする。さうしていくらかの暇を見つけ出しては、熱い珈琲でも上手に煮るのが無上の樂しみである。

彼女は三浦の出現をかなり恐れた――彼女は良人に對して三浦のことを闡明にする必要があると思つた。彼女は暗い、胸の惡くなるやうな恐ろしさに戰いた。彼女は三浦の出現を災難として諦めなければならなかつた。彼女は小汀に對して三浦との關係をどんなふうに説明していいのか迷はなければならなかつた。良人が病人であるといふことを第一條に設けて、昔の彼等の關係を良人が得心するまで説破するには十分骨の折れることであると思つた。正直にといふことが、彼女の心の全部を占めるるまでは三分の時間を待たなかつた。それにしても小汀は彼女の前生活を言はず語らずのうちに十分に知つてゐる筈であると思へば、心強くないこともなかつた。何故なら小汀と彼女との結婚の最初に於いてそんなことは、相方が十二分に打ちとけ合つてゐた筈であつたから――増して彼がレストランなどへ出入してゐた以上は――こんなことが、彼女の心頼みになる唯一のものであつた。

それにしても彼女は三浦のためにむざむざと幸福を奪ひ去られてしまひさうでならなかつた。彼女は彼女自身の良人へ向けて行く考へが、何となく餘りに獨り合點のやうに思はれてならないと瞬間的に感ずることもあつた。さうして彼女は、以前三浦とはつきりした言葉を取りかはして別れて置かなかつたことを非常に後悔してゐた。

彼女は良人へ三浦のことを打ちあける機會を失つてゐた。――彼女は三浦と會つてから三日も過ぎた晩、牀のなかで、良人へ話しかける機會を覗つてゐたが、良人の機嫌のいい心を亂したくないと思へば、一たいどうしていいのか迷はない譯には行かなかつた。

――

さうして彼女は、今年七才にもなつてゐた筈のウヰリアムさへ生きてゐたならきつとこんなことは持上がらなかつたらうにと考へる。あのウヰリアムは、三浦のことを舌の廻らない言葉で、何と言つたらう――「洒のみのおぢさん！」――あの子さへ生きてゐたなら、何ごともなく、昔の夢に見たやうな貧乏な生活に立ち返つて、直ぐそれに馴れてしまひ――

「そんなことは嫌です！」と、今彼女は彼女自身の心のなかの彼女へ叫びかけた。かういふ彼女の心のなかには、時間といふ觀念もなくなつて、その一人子なるウヰリアムが美事に成人して立派な紳士になつてゐた。さうして彼は彼自身の母のためにあらゆる艱難と闘つて來たしるしにその掌には胼胝が膨れあがつてゐた。さうして彼は若い青年紳士の言ふやうに、

「お母さん、僕はどんなに人生に對して興味を持つてゐるかを知つて下さいますか。」と言ふのである。さうして彼は胸

のうちでは泣いてゐる。――「子供は親を選擇する權利は持つてゐない。罪！罪！全く罪もなく生れた子供は、法律とか社會とかのために冷遇される。」――彼女はこゝまで彼の聲を聞くやうに感ずる。さうして彼女も成人したウヰリアムの異人種的な樣子に半ば驚きながら、――「だつて、結婚は人生の盛典です。そのためにどれ程私は身の碎けるやうな代價を費したことだらう。ウヰリアムやお聞き、お母さんはね、退屈はしなかつたよ。」――彼女がかう言つてゐる間に彼女の一人子は、彼の父が嬉しさうに彼女を眺める時にしたやうに、指をぱちぱち打ち合つて小唄を歌つてゐる。こんな時にひよこりと、ハーランドが戰爭から歸つて來る。ウヰリアムは彼の見知らない父を見て――「誰です？」と叫ぶ。さうして泣き崩れてゐる母を支へながら、半ば睨めつけるやうに、彼の見知らない父を見詰めてゐる。――「誰が、誰が、罪は誰にもない。私はもう誰とも係りあひたくはないのです。」――彼女は彼女自身の聲にびつくりして、牀のなかで目を醒した。さうして彼女はどつとこみあげて來る淚のなかから、瞬間的にではあるが、三浦との會見のことをまざまざと目前に思ひ浮べるのであつた。彼女は首をぶるぶるツと顫はしながら擡げて、氣のついたやうに良人の寢牀の方を注意する。良人はこのごろの氣分のいい生活に全く馴れ切つたものか、晝間の輕い疲勞に音もなく眠り入つてゐる。彼女はその樣子を見てほつとする。良人に對して申譯ないといふ氣持から何となく心が重くなつて、心臟がこまかに動悸する。彼女は秘密を抱いてゐると思ふ。實際彼女の持つてゐるものは秘密であるに違ひはない。彼女には重過ぎるものだ。こんなにも善良でか弱くしとやかな少女らしい昔の彼女には可哀さうすぎる重荷である。さうして今彼女が長いこと忘れかけて奧深い胸の底の方へしまひこんで置いた彼女自身の一圈の絃のはしくれは、いたづらなヴアイオリン彈きにちよつと觸れられたばかりに、とめどもなく鳴り出した。彼女の過去は怪しげな恰好をして、彼女の目前へ口口に滑稽なしかも淚もろいことをかこちながら押し合ひへし合ひして跟蹤いてゐた。

四

店は一ぱいの朝日をうけて花の香を漲らしてゐた。小汀は彼の眞白な色の店へ出て、棚を覗いてみたり、ガラスの金魚鉢を置き換へてみたりしてゐた。その傍ら彼は片隅のところへ椅子を据ゑて讀書に耽ける。何とも言へないのんびりした氣分である。さうしてぽかぽかと浮立つやうな春である。彼女は花鉢の陰になつたり、紅色の花房の後ろに現れたりして、半ば微笑み、半ば不安氣に彼の前後を行きつ戻りつして立ち働いてゐた。そのうちに店の者も出揃ふて、「青い花の家」は一層賑さを增した。が、誰も喋べる者はゐない。不氣味なほどしんとしてゐる。誠に春の朝の野邊らしく新鮮な香に一ぱい充ちてゐる。狹くて鬱陶しいやうな氣分は微塵もしない。日に照らされたものがみな光のなかへ溶け込んでしまひさうでもある。

客が見える。女學生連である。彼女等はお互に呼き合ひながら棚をゆつくりと眺めてゆく。さうしてその歸りには切花の百合を求めてゆく。遠くの方で子供の泣き叫ぶ聲がする。

「来子!」と、言ふところを三浦は危うく呑み込んで、カラーの前を指先きでもぢもぢさせながら、「青い花の家」の片隅に讀書してゐる男を見る。さうしてその眼を直ぐ笑ふやうにして彼女の方へ向けた。店の者は靴音を聞きつけて一樣に入口を見る。すぐれた美しさの男が、すばらしい服を纏ふて佇んでゐる。

彼女は突然小衝かれたやうに動悸がして、鉢の陰へ小さくなつて屈へた。彼女の眼はすばやく店の片隅の方へ走つた。良人はゆつたりと椅子に凭れて新聞を捧げるやうにして讀んでゐる。が、彼女には、彼がその新聞紙を屏風代りに

してちよいちよいこちらを覗いてゐるやうに思はれてならない。彼女にはその時三浦の出現がそんなにも長い時間を費してゐるやうに思はれた――彼女には數日以前から三浦とは會ひつづけてゐるやうに思はれたから――

三浦は彼女のところから少し離れて、笑ひたいやうな顏を噛み殺してゐる。時折は半ば氣のついたやうに小汀の方を盗み見しては、彼女のまはりをぐるりぐるりと巡りながら花の香を嗅ぎ廻つてゐた。

「これはどうです？――」

突然、三浦はかう言つて、白いガーベラジヤミソニの鉢を指してゐた。彼はその鉢を求めるといふのではなかつた。

――「これはいい花だ。一つ貰つて行くかな！」――と言ふところであつたのだ。が、彼はその場には移らない彼自身のうつかりした氣持に奇妙にもあせつてしまひ、思はずその一輪を手折つて、それを胸のところのボタンホールへ挿した。さうして彼は彼自身の方を見てゐる小汀の顏を感じながら、見ぬ樣子をして彼の片隅の方を盗み見して、

「やあ、これはしまつた！、御免なさいよ、ガーベラさん！」と、優しく言つて、彼女の方をずるさうに睨めたまま齒をむき出して大聲に笑つた。

店のなかは一瞬しんとしづまつた。

「珍らしい花が澤山咲いてますな。」

彼はてれ隱しのやうに小汀へ話かけた。小汀は唇を歪めて苦笑ひしながら首を振つて輕く應へた。さうして彼は椅子の脚をきゆきゆいはせながら立ち上つて、三浦の方へ近寄つた。

「お氣に召したのがありますか。」

「ええ、どれもこれも――」

三浦は受答へしながら、チョッキの右のポケットへ拇指を差し入れて、彼女の方をぢろりと見て眞面目な顔をした。さうして彼は胸の上のガーベラをふし目に見て、その匂ひを吸ふやうにちよつと鼻を鳴らした。彼の突き出た鼻は異様に顫動した。

彼女は良人に店をまかせて、庭の方へ出ようとしたが、良人に呼び止められてしまつた。その時、何故か彼女はぎくりと胸を貫されたやうに感じた。

三浦は庭の方を見たいと言ひ出した。小汀は少し眉をせばめたが、直ぐ承諾した。

店は彼女一人になつた――彼女はその軀が、下へ下へと沈下して行きさうに感じた。さうして彼等が言ひ合つた會話の一つ一つが胸へ應へて、燃え上つて來た。彼女は良人が三浦と知り合ひであるかのやうに思ひ做された。さうして彼女の心を試すために、彼等は相談の上、彼女自身を困らしてゐるのではないかと空想してみた。彼女にはそんなことがあり得よう筈がないと思へるが、どうしたはづみか彼女は今彼女自身へ降りかかつてゐる不幸をそんなふうに描いてもみた。かう考へて見ると、彼女には良人の心が少しも解らなくなつて來た。彼女は彼女自身で拵へてゐるのであるとも考へるが、今はそんな氣休めを空想してはゐられない羽目になつてゐると思ふ。

彼女は何もかも好く考へて見なくてはならないと思つた。さうして良人へ對して、何もかも打開けなければならないと思ふ。しかしこんなふうに考へるものの、良人の病氣のことを考へると、彼女の心は鈍りがちにならざるを得ない。彼女にはどう處地をつけていいのか解らなくなつた。丁度それは水銀のなかへ銀が迷ひ込んだやうなものである。少しも緘りはつかない。彼女は自分で吐き出す息の音さへ空恐ろしいやうに感じた。さうしてどちらかへ少しでも動くものなら、その身は深い、暗い、奈落の底へ落込んで行きさうな氣持がする。彼女は氣味の悪い夢に魘されてゐるやうに感

する。

三浦は庭の方から一人で歸つて來た。さうしてつかつかッと彼女の傍へ近寄つて來て、後ろを振り向きながら輕く挨拶をするやうに前身をかがめて、彼女の耳元へ小聲で囁いた。

「また十時だよ、今晩――――」

彼女の顏は大風に吹きあてられたやうに顰められたままうち向いてしまつた。さうして彼女が再び顏を擧げた時は、美裝した惡魔の影は見えず、その代りに彼女の良人が今までのやうに椅子へゆつたりと反り返つて、尖つた眼をぼんやりと天井へ向けて、そこへちらちら映つてゐる金魚鉢の水影の反射を眺めてゐた。

「莫迦になれなれしいな――――」

彼は妻の方を見ないやうにして言つた。彼女は狼狽てゝ彼の方へ近づく樣子をして棚の裏へ廻つた。

「ええ――――」

彼女は歩きながら齒痛でもするやうに、やうやうの思ひで言つた。

「あらあ、なんだらう、シネマホールの角のところの水菓子屋の娘をどうかしたといふ男だらう？今庭の方で忠三がそんなことを言つてたよ。」

「どうなさつたのです？」

彼女は力強く言つて、彼の傍へ立つた。

「忠三に聞くといいよ。」

彼女は無言で外の方を見た。彼女の顏には悦びが湧きあがつて來た。彼女は一つの血路を見つけたやうに思つた。さうして三浦のその時は眞實であらうと思つた。それが眞實であればあるほど彼女は力強くなつてくるのを覺えた。

「お前が心配するほどのことでもない。」

彼女には良人がぶつきら棒に言ふ、その言葉が二重の意味に解釋されないこともなかつた。彼女は何事も沈默してゐるべきであると思つた。彼女は急に何事もこはくはないやうに感じられることを不思議に思つた。さうして彼女の胸の扉のところでは呼くやうな聲がする。その聲は良人の聲であることはまぎれもない。――「默つてゐていい。おれがみな知つてゐる。こはくはないのだから安心して默つてゐていい。」――

彼女はそんなふうにこみ上げてくる悦びの聲を聞くと、つい涙が頬へこぼれてくる。彼女には何も見えなくなる。たつた一人愛する者のみが、彼女の手をぎつしりと握つてゐるその溫みがぞくぞくとするやうに胸まで感じてくる。彼女は力強く思ふ。かうして何にも言はずにぢつとして良人の顏を見詰めてみたいやうな衝動に馳られる。

彼女は眞實に良人の心持が、彼女自身の想像してゐるのと寸分も違はないと思ふ。が、一方では良人が默つて口を噤んでゐるのがもどかしいほど憎くも感じられる。さうして彼女はまたしても良人へ向つて、三浦のことを打開けようかと煩悶する。しかし彼女は、彼との關係に就いては最後まで胸のなかへ押へて置いて、彼女自身が今夜の十時になればそれを見事にかたづけてしまへると自負心を固める。が、彼女は彼女自身の心の生活を他人のことのやうに賴りなく感じた。

――

夕方になると、小　は散歩へ出かけた。さうしてその出かける時に――「明日にでも旅行をしよう。」と言ひ出し

た。

彼女は彼の考へてゐることが少しも解らなくなつた。彼は彼女の困つてゐることを少しも知らないのだらうか、それとも十分に知つてゐて、あんなことを言ふのであらうかと。彼女は思ひ惑ふて見なければならなかつた。さうして彼女は彼女自身の危機をすでに良人へは打開けてしまつてあるやうに感ずる。さうして彼女は良人の出て行くのを止めなかつたことを後悔した。一たい旅行すると言つても、この忙しい季節に彼等二人は共に旅へ出るのか、それとも彼一人で出かけるのかと、彼女は訊ねてみるべきであつたと考へた。彼一人で旅行をするのであるとすれば、彼女自身は一たいどうなることであらうか。さうしてそれとも彼は彼女のことは十分飲込んでゐるから安心して出て行くのか、それとも彼は彼等の以前の關係を知つてゐるから、何か都合の好い考へでも浮んで彼等をとつめる用意をするのであるか。かういふことは、彼女としても一應は思ひ浮べて見た。しかし彼女は闇の井戸の中で藻掻くやうに彼女自身の心身を痛めるばかりであつた。さうして彼女は彼女自身でつくり出す幻想のなかに煩悶をしつゞけた。また彼女は、心のなかに湧いた考へを口にしなければ、それは人へは通じはしないといふことを大へんにもどかしく思ふこともあつた。なほ彼女は清澄と怜悧と決斷との三つを缺く彼女自身が情なく悲しくなつて來るのであつた。さうしてさういふやうに思ひつめて行けば行くほど、彼女は彼女自身が正當の地位にゐるか否かを疑はなければならなかつた。彼女は彼女自身の短くもない過去のことを顧みて見る。さうして忘れようともせずに、胸の片隅へ押しやられてゐた考へや感情に捉へられてしまふのであつた。さうして彼女は彼女自身の心の沈んで行く反動で――「ウキリヤム」――と、欲望のやうな言葉に狂氣じみた聲を叫ぶのであつた。が、彼女は花の香に醉ふてゐる彼女自身を見出して、うつとりした氣分になつてしまひ、もとのつつましやかな婦人になるのであつた。

五

彼女が三浦の勝手に取り定めた約束を履行しまいと決心したのは、十時を三十分も廻つてゐた頃であつた。それに小汀の歸宅する時刻でもあつたので、彼女はなほのことその決心を翻すまいと心に固く誓つた。その時彼女の耳は、庭の奥の方で人聲がしてゐるやうに感じた。彼女は瞬間的に三浦が巡廻の警官にでも詰問されてゐるのかも知れないと思つた。と、その次の瞬間、犬の苦しむ時のやうな叫び聲が、むツと響いた。それ切り何も物音が聞えなかつたが、彼女は急に胸騒ぎを感じはじめた。それが何故であるか、彼女自身にもはつきり言へないほど、せわしく、恰も豫想してゐたことか現在目前へ迫つて來たかのやうに、彼女の胸のなかは騒ぎ廻されるままに波打つた。彼女の顏は自然と赤く火照りはじめた。さうして彼女は息苦しく、呼吸の切迫して來るのを感じた。彼女はのめつて倒れさうになつた。頭の心がづきづきと疼くやうにも覺えた。が、何ごとも一切が、彼女には解らなくなりはじめた。それでありながら、彼女にははつきりした頭腦が働いてゐるやうにも感じられた。

彼女は半ば夢中で戸外へ飛び出した。外は薄暗い紫色の霧でもたてこめてゐるやうに、ぼんやりとかすんでゐた。さうして夜の空の壁には、浮きあがつた星が幾つも幾つも重なり合ふて瞬いてゐた。彼女は内で聞きつけた叫び聲の方へ見當をつけて、跫音を忍ばせながら小刻みにしかも足早に近寄つて行つた。彼女の身邊へはいちじに花の香が襲ひかかつて來た。彼女は出來るだけ心を平靜に落着けて、何事もないやうにと半ば祈りながら一ばん奥の池の端に近い花壇のところまで出た。彼女が蹌踉けるやうに踏む時、その顏へ蜘蛛の巣のやうなものがべつとりと觸れて、チューリップの葉がぴんとその横頬を掠めた。

彼女は柔い土壤へ足の裏が喰ひ入るやうに踏むだまま眞黒な影が音もなく動いてゐるのを見定めた。その影の姿は苦しさうに何ものかを引摺つてゐた。白く輝く細いものが、彼女の瞳へ流れて來た。彼女にはそれがカラーのやうにも見えた。さうしてだんだんと薄暗に馴れかけた眼で見ると、その影は彼女の良人であつた。彼女はあツと叫ぶ聲を咽元で食ひしめて、ぢつと身内へ力を入れて固くなつた。さうして引摺られてゐるものは、一人の人間であつた。彼女は直感的にそれは三浦であるに違ひないと思つた。彼女は顫へる軀をどうすることも出來なかつた。彼女には、彼女自身の乳房が萎縮しながら一秒一秒に凝結して行つて、軈ては皮膚を裂き、肉を食ひ、血管を堰止め、肋骨を割り心の臓へまで吸ひつきさうに感じられた。さうして彼女の瞳はそれだけのことに最早苦痛を訴へるやうに朧ろにかすんで來た。彼女の歯は、顎の震へで小刻みにかつかつと鳴りつづけた。耳はぢ、ぢ、ぢと空鳴りをして、胸の動悸とともにその加速度を一層強めながら、迅速に大きくなり、それぞれが一連りになつて、一つの長い、高い、呼び聲のやうに流れ出た。さうして吸ひ込む息も吐き出す息も縺れ合つて、彼女の自由にはならない。

小汀は彼の引摺るものを池の傍まで近づけると、その死骸のやうに重いものをそこへ投げ捨てた。それはそれ自身の重量で、不氣味なほどしんとしてゐる周圍を驚かすやうに、恐ろしい音をたてて地面へどつと倒れた。それを見向きもせずに、小汀は足早に垣の外へ消えて行つた。彼女は中腰になつて、その倒れてゐるものの方を覗く。ボタンを外れたカラーは、はねあがつてその端でその男の鼻の入口をくすぐつてゐた。が、その顔はむくむくと盛り上つて張り切つてゐた。人中でも撃たれたのでなければこんなに見苦しくはならない。彼女にはそこへ行つてみたいといふ心が湧いた。が、彼女は躊躇した。何故か彼女はすべてを默つて見てゐる方が好くはないかと思つたから。軈て小汀は再び彼女の數間前へ現はれた。彼の手にはバアイオリンの箱と帽子とが支へられてゐた。彼は地面へ眼を這はせながら石塊を集め

た。彼は帽子のなかへ石塊を入れたり出したりして、結局二つほどの石塊を入れた。さうして彼はその鉢のやうになつた帽子を倒れてゐる男の顔が殆ど見えなくなるまで被せ蔽ふた。彼は尖つた眼を底の方で光らせながら、彼の周圍をじろりと一巡した。葉隠れになつてゐる彼女は思はずもその顔をふせた。さうして容易にその顔を上げ得なかつた。かすかな音が地上を這つて響いて來た。石と石とがかち合ふ音がする。その一瞬にヴァイオリンの絃が切れて、異様な響が空氣を震はした。彼女は歯をむき出すやうにして食ひしばりながら、その方へ眼を向けた。腰をかがめてゐる小汀は、ヴァイオリンの箱へ小石をぎつしりとつめてゐた。ヴァイオリンの腹がかすかに顫いてゐた。彼の手は半ば顫へてゐるやうに見える。さうして彼はヴァイオリンの箱へ石を詰め切ると、その倒れてゐる男の上衣のポケットへ石を入れはじめた。彼は一つ一つの石を吟味してゐるやうに、或ひは數へてゐるやうに、徐ろにポケットをふくらまして行つた。軈て彼はその倒れて半ば強直してゐる男の帯皮を利用して、ヴァイオリンの箱をくくりつけた。それから彼はその男のチョツキの開き目のところで半ば解けてゐるネクタイを解いて、それをしごきながらその男の兩足をしばつた。さうして彼はハンカチに包んだ石をそこへ結びつけて、中腰になつたまま、その男をずるずると引摺つて見た。彼は溜息を吐いてゐるやうに見えた。彼はその引摺つてゐる男を急に投げ出すと、肩息を吐いて、兩腕を前後左右へ振つた。彼はちよつと大空の方を見上げてまた肩息を抜いた。さうして彼は池の水面をいろいろの様子をして眺めた。彼は空手を後ろに組んで神經的に池の端を一巡した。さうして再び彼はもとの位置へ戻つて來て、池の底を覗いて見た。彼は安心したやうに、徐ろにその死骸を眺めて、足で蹴上げる眞似をした。彼はその死骸を引摺つて、池のすぐへりまで近寄つた。彼は池の上へ唾を吐いた。その刹那彼は少し身を蠢かしたやうであつた。軈て彼はその死體を地上から引き上げると、腰のへんまで浮かせて、突き差すやうに頭の方からするすると水のなかへ押し込んだ。星空を映した鏡のやうな水は、

音もなくゆるやかに揺れて、眞黑な大きい口を開らいた。さうして瞬く間にその死體を嚥みつくしてしまつた。

　彼女は顫へながら良人の前へ泣き崩れた。彼は唇さへ動かさずに半ばぼんやりしてゐるやうにぢつとして身動き一つしなかつた。春の夜は彼女の歔欷の聲を織り返しながら、一秒一秒と遠くの方へ退いて行くやうに見えた。彼は心持胸の震へるのを知つた。興奮のためであると思つた。彼は鼻梁の張つた鼻を性急に息でも吸ひ込むやうに蠢かしてゐた。腹のなかまで沁み透るやうな香氣は遠慮もなく吸ひ入れられる。彼はぐつたり疲れたやうに感ずる。さうして一刻も早く横になりたいと思ふ。彼の態度は文字通り平靜で落着いてゐた。その病氣であるやうな顏の色を除いてしまへば、彼は長途の旅行からでも歸つて來た時のやうに旅の疲れに弱つてゐるとより外は見えない。彼は何か言はなければならないことでもあるやうに口元をぶるぶると微動させる。と同時に尖つた瞼をせわしく瞬きする。彼は急に力が拔け切つてしまつたやうに感ずる。彼は何も言ひたくはないと思ふ。彼は妻の心持はよく飮込めると思ふからである。――三浦が妻の前へ再現した時から彼は、彼自身の心の臓は彼女自身のそれとともに、せわしく、はげしく、ものを考へつつ生活をしてゐたと思ふ。彼は彼の妻が、このことに對しては、怪しみながら抗議するかも知れないが、しかし彼は彼自身が妻の心とともにその心の生活を送つて來たのであると言ひ放すことが困難ではないと思ふ。

　彼はこんなことを思ひ惑ひつつ妻の片手をしつかりと握つて、家の方へ促して行つた。二人の跫音は靜かに土の上を掠めるやうにすれて行く。時々彼の下駄がきいきいと鳴る。彼女はもう息を吐いてゐないのかも知れない。彼女はぐつたりとなつて、良人の手に引かれるままになつてゐた。彼女は死人をいぢつた手で握られてゐると思ふと、嫌な氣持になつて身内がぞくぞくして來た。しかし彼女は一言も言葉を出せなかつた。さうして彼等は着物の端が植物の葉にでも

觸れるものなら、寒氣を感じでもしたやうに、ちよつと立ち止つて左の顔を覗き込む。夜の氣は冷く重いもののやうに感じられた。あたりは事の突發する一瞬時のやうにしんとしてゐた。

彼等が縁から部屋へ這入らうとした時、その縁は足を踏みかけられたままぎゆつと鳴つた。彼の手は彼女の手を握つてゐるままでぶるぶると震へた。彼は彼自身がこはがつてゐるのだらうかと不思議に思ふ。彼等は部屋へ這入つた。彼女は奥の間へ消えて、彼獨りその茶の間に殘つた。彼はそこに突き立つたままでゐる。さうして彼は彼自身の心へ向つて――おれは惡徒をこらしたばかりではないか――と話しかける。しかし彼はぼんやりしたやうに立つてゐる。彼には何か呻く聲が聞かれる。それは彼自身以外の者の聲であるが、その者は何を呻いてゐるのか、彼には殆ど聞きとれない。それは妻の聲ではない。彼の耳の入口が聲の言葉でただ震へてゐる。柱時計の振子が、しんとした空氣を切り刻んでゐる。そのなかにまじつて、妻の歔欷がかすかに響いてゐる。彼は何となく薄氣味惡く感じはじめたので、疊の上を首を振りながら歩きはじめた。彼の軀は、何處か解らないが、暗く冷い陷穽へでも沈下して行きさうに感じられる。彼は彼自身が落着いてゐなければいけないのであると思ふ。さうして彼は思ひ出したやうに、奥の間の妻を覗き込み、そのついでに店の方を見てみる。彼は急いで店へ降りて戸じまりをはじめた。彼自身で戸じまりなどをするのを珍らしいとも何とも思はない。彼はさうでもしなければうちのなかにはゐられないやうに思ふ。夜の氣に溶けこんで何か不可思議なものの氣が乘じて來さうでならない。彼は廊下の戸をしめるのに瞼を閉ぢてゐたほどに臆病になつてゐた。さうして彼はまた部屋のなかを歩き廻つた。彼はそんなことでもして動いてでもゐなければ、舞踏病に罹つた時のやうな軀の震へるのをどうすることも出來なかつた。彼は氣が挫けて四肢の張りが逃げて行つてしまひさうに感じた。さうすると彼は腹の立つて來るのを覺えた。彼は一言何か言つてしまへば、彼自身の心身が樂になるやうに感じた。しかし彼には

何を口にすればいいのかはつきりと掴めない。彼はあせつて苛々して來た。さうして彼は何かを掴まうと藻掻く。その藻掻が高潮すればするほど、何か非常に偉力のあるものが力強く働きかけて來る。さうして彼は三浦のことならただの一言でも言ふ必要はないと思ふ。生きてゐるその一秒時さへよいことは夢にも考へず、一歩途上へ出れば悪い種の外は撒いて廻らない男、そんな男ならこの世に生きてゐて貰ふ用は少しもない。そんな男である三浦が、どんなふうにならうと勝手なことではないか。彼のやうな者へ暖かい同情をかけることは許すことさへ出來ない。不幸を植ゑる者、恥を撒く者、道徳を腐敗の芥箱へ捨てる者、悲哀を背負はす者、純潔を瀆す者、愛を蹂躙する者——人人の生血を吸つてふざける悪魔は、どんなに憎んでもいい。撃つて、叩いて、蹴つて、踏んで、切つて、粉々に切り刻んで、彼奴の心臓を掴み出して投げ捨てる。彼はかう胸のなかで呟きながら興奮してゐた。さうして彼は再び妻へ向つては、何事も言ふことはないと思ふ。妻の心とともに生活してゐた彼自身であると考へれば、彼はほつと溜息を吐くのであつた。彼は思はず微笑んでゐた。さうして彼は最早彼自身の最期であると思ふ。この事件が發見されない前に、彼は彼自身の理性を失ふであらうと感じた。



未亡人

近松秋江

海軍大佐の未亡人星野定子の家でも、その晩はいづこの家とも同じやうに、殆ど露宿同様の一夜を明かしたのであつた。

家は柏木の郊外にあつたので、災害もさう大したことはなかつたが、それでも女主人の少家族のうへに、あの突然の襲來で、家がぎいぎい〳〵と、鳴るやうな氣味の惡い音をして揺れて來て、つゞいて、さながら此の世の破滅する時が來たかと思ふやうな凄じい響を揚げて屋根瓦ががら〳〵と落ちて來た時には、五年前夫の中佐が淡路沖で演習中火藥の爆發から不慮の慘死をした電報を手にした時に劣らない驚きを感じた。それは確かに事實であつた。何となれば、彼女には、自分は帝國軍人の妻であるといふ自信と、多少の誇りとがあつた。今日の軍人はいふまでもなく昔でいふ武士である。武士は昔から疊の上で死することを耻辱としてゐた。彼女は平常夫からも何斯につけて、そのことを說き聽かされてゐた。

「俺達は何時海の上で死なゝければならぬ時があるかも知れない。しかも今日の軍人は、昔の武士の時代とちがつて複雑な機械や、あらゆる文明の利器を取扱ふ技師のやうなものだ。文明の利器には必ず危險が伴ふ。そして、戰時には却つて覺悟して死に就くことが出來るが、吾々のやうに始終軍艦に乘つて海上生活をしてゐる者は、どんな不慮の災難に遭遇するかも知れない。お前もそのつもりで、腹を締めて居れ……。」

　すると、その言つたとほりの運命に見舞はれたのであつた。星野中佐は戰死者の取扱ひを受けることは困難であつたけれども、中佐としてはもう疾に古參の方であつたので死後直ちに大佐に昇格されたのであつた。さうして彼女は、やつと取つて二十八歲といふ人妻の盛りの時に夫に死別れて可惜若い姿の未亡人といふことになつたのである。

　けれども彼女は、未亡人としての生活には差づめ困りもしなかつた。といふのは、彼女には、夫からその當時やつと七歲になつたばかりの女兒を頭に四つの男兒と當歲の女兒との三人の子供を遺されたほかに、軍人にはめづらしく可なりの遺產もあつた。それは田舍の方にある夫の實家が元來相應な資產家であつたところから、その分け前として夫が父親から讓つて置かれたものであつた。

　年がまだやつと二十八といふ女ざかりであるので、その頃まだ存命であつた彼女の實家の兩親などは、死んだ者も死んだもの、幼い三人の子供達を、これから先き長い生ひ立ちを、今から兩親に別れさすのは何とも可哀さうであるが、それよりもまだ、若い定子を二十八を女の一期として、生涯寡婦として過させるのが一番に可哀さうであるといつて、何とかより善き方法はあるまいかと、隨分胸を痛めて心配したのであつたが、肝腎の本人が斷じてそんな心は無い、三人の子供の成長を樂みにして、今後の生涯は何處までも、星野の未亡人として過す覺悟に少しの搖ぎもないといふ堅い決心を告げたのであつた。爾來五年の月日は思つたよりも早く經つて、三人の子供もそれ〴〵一日々々と成育して行く

のであつた。

そんな譯で、夫の不慮の死の爲に、自分のそれからの後半生の幸福を悉く、三人の子達の犧牲にした悲みは可なり强かつたが、その不慮の死は必ずしも不慮の出來事とはいはれなかつた。彼女は何か知ら、常から、もしかしたらそんな運命に出會ふのではないかといふ氣もしてゐたのであつた。

最初の大きいやつが搖れて來た時には、それも、何處の家でも大抵同じことで、ちやうど、これからお晝飯にしようとして、彼女は、一番末の六つになるみき子とゝもに食卓に就いてゐる時であつた。女中のおよねもそこに居た。長女の照子と長男の速男は、二人ともゝう七月の末から逗子にある、定子の實家にいつてゐるのであつた。彼女の、亡くなつた父は古い海軍の軍醫であつた。そして晩年退役後は逗子に定住してゐた。母親も先年父につゞいて亡くなつて、今は工學士で海軍の技監である實兄がそこの主人であつた。定子も先達て中暫くそちらにいつてゐたが、つい四五日前に海水浴からみき子だけを連れて歸つて來たばかりのところであつた。それでも、今年二十四になる女中のおよねはもう足掛け五年も勤めてゐるので、何でも家の事をよく吞み込んで効々しく働いてゐるので助かつた。ほかに、家から中學校に通はしてゐる亡夫の故鄉の從兄の子で十七になるのが居つたが、それも休暇を利用して一寸和歌山縣の方の鄕里に歸省して、もう今日か明日か歸つて來る筈になつてゐた。

食卓に寄つて坐つたまゝ、搖れ出した時には、どうせ大したことはあるまいと、高を括つて、靜としてゐたが、震動は衰へるどころか次第に劇しくなつて、今にも家が壓し潰れるかと思ふやうに、ぎく〳〵ぎく〳〵慄へる如く鳴り動いた。

食卓を置いてゐる六疊の茶の室のはづれの處の板の間で、その時飯櫃をどうかしようとして坐つてゐた女中のおよねは、ちやうど膝を上げて起ちかけてゐたところへ、まるで揚げ板を下から跳ね返へすやうに、どつと揺れて來たので、中心を失つた、赤く肥つた頑丈の體は、宛かも毬でも轉がすやうに飯櫃と一しよにころ〳〵と、そこに轉がつた。そして、「奥さまア………」と、思はず一と聲悲鳴を揚げるやうに叫んだ。それと一時に、すぐ傍の壁際に置いてあつた大きな鼠入らずの戸棚ががちや〳〵と瀬戸物の壞れる音を立てゝ倒れた。それがもう少しのことでおよねの脚のうへに倒れ掛るところであつた。

みき子は、母に向つて食卓の横に坐つてゐたが、その消魂しい物音に、膝をもよう立てず、さつと一時に血の氣の退いたやうな顔を眞靑にして、いきなり定子の膝に轉がり寄つた。彼女はわが子の體を手繰るやうに犇と抱きかゝへながら、

「かうしてゐらつしやい！」と、叱咤するかのやうにいつて、自分の胸とみき子の胸とを確かと折り重ねた。そちらでも此方でも、ばた〳〵と壁土の剝げ落ちる音がして、天井の板の間から煤埃りが、さら〳〵と降るやうに落ちて來た。それに驚いて、ふつと、見るともなく眼を上げると、木と木と喰ひ合つた鴨居の隅の處が、今にもはづれるかと思ふやうに、ぱくり〳〵と音を立てゝ、口を開いてゐた。それに次いで緣廊の上に長く渡した杉丸の太い綱領が、ゆら〳〵と眼の眩むやうに揺れてゐるのが見えるとゝもに彼女は、氣も遠くなつて、眼界が暗くなつたやうな心地がしながら、じつと眼を瞑つて又一生懸命にみき子の體を抱き縮めた。そして自分達は今此處で五年前に死くなつたパツパアの後を追ふて死ぬのだと覺悟した。

何處の外の方でも、どろ〳〵どろ〳〵といふ鈍く太い轟響が聞えて、その間を劈くやうな悲鳴の聲が二三ヶ處から聞

えた。

そのうちに大きい揺れが、一と息吐いたやうに一寸鎮まつたので、彼女は少しく氣を取直して、

「さあ〳〵早く。今のうちに！」

と、女中のおよねを急き立てゝ、自分はみき子を抱きかゝえて、そのまゝ縁側から前庭に飛び降りた。およねは奥さんに、さういつて聲を掛けられたので、これも始めてほつとしたやうに生氣づいて、先刻から手を掛けたまゝでゐた飯櫃を持ち抱へたまゝ、板の間から腰を上げて奥さんの後につゞいて縁側に驅け出した。そして彼女がやつと軒の下を二た足か三足飛び離れるか離れないところへ、屋根から滑り落ちて軒先きで重なり合つてゐた瓦が又がら〳〵と墜落して來た。

檜葉の生垣と建仁寺垣とで取圍んだ庭は、かなりに廣かつた。左の方は、そのうへへ腰から上目隠くにした羽目板塀を境にして隣家の庭につゞいてゐた。そこは星野の家で貸して置く借家であつた。そちらにも二十坪ばかりの庭があつたが、定子が自分で住んでゐる方の庭は約その二倍以上も廣かつた。平庭の奥には一寸した、築山のやうな、こんもり土を盛つて芝草を生やした處があつて、そのまはりに檜だの杉だのゝ三四間もあるのが二十本ばかり密生してゐた。松も三四本交つてゐた。小山の裾には豐後竹が二坪ばかりの地面に繁植してゐて、そこに石燈籠が一基立つてゐたのが、笠も竿も無殘にその竹叢の中に轉がつてゐた。

定子はみき子を抱へてその檜の木の蔭に遁げ込んだ。女中のおよねも後から驅けて來た。そして、やつと胸一杯の大きな太息を吐きながら、

「まあ、奥様どうしたといふんでせう。」と、彼女は、はじめてそれだけの聲を出すことが出來た。

定子はその時みき子を地べたに立たしながら、ふつと氣が付いて、

「あらまあ、よねや、お前お櫃を持つて來たのほゝゝゝ。」

と、彼女はさういつて、思はず笑つた。

およねは、まつたく、奥さんにさういはれるまでは、自分でゐながら手に何を持つてゐたかを覺えなかつた。

「ほゝゝゝ、まあ奥樣どうしたつていふんでせう。わたし、餘り慌てたもんですから。」といつて、その中を覗いて見ながら、顔を顰めて、

「あら大變、こんなに泥が一杯溜つて……」

さうしてゐるうちに遠近で半鐘を亂打する音が消魂しく起つて來た。それとゝもに何か知ら、わあツといふやうな叫び聲が聞えた。

「火事だア火事だア」といふ、長く後を曳く聲がそれにつゞいた。

シルクのガウンを着たみき子は、それ等の物音におど／＼したやうな眼を瞬つて、

「おかあちやん！」といひながら、定子の中形の袖を堅く引張つた。

彼女は、自分も腹の中では、どうなることかと思ひながら、つとめて色を勵ましながら、

「恐かありません。大丈夫ですから、靜つと此處にかうしてゐるんですよ。……よねや、お前もつと此方の木の下に這入つておいで、木の根の處にゐるといゝんですよ。」

およねはその時植込みのはづれの處に突立つて、又しては搖れ返してくる家の方を見てゐたが、

「奥樣、わたくし、あちらに行つて、何か敷く物を取つてまゐりませう。」

「危いから、まあ、およしよ。今そんな物はなくたつていゝのよ。さあ、こつちへお這入り。こつちの涼しい處へ。」

さういつてゐたが、そのうち、氣丈者のおよねは、搖り返しの間を潜るやうにして家の中へ驅込んでいつて、莫蓙だの坐ぶとんなどを抱へて、茶簞笥にあつた西洋菓子と冷藏庫の水蜜桃などを一度に持つて來た。

そんなことをして二三時間時を過してゐる間に、それでも漸次と搖れるのが間遠うくなつて來た。家は建築してからまだ七八年と經たない頑丈な、棟の高い平家造りであつたので、瓦の落ちる音の凄じかつた割りに、壁の傷んでゐるほかは、木口など殆ど破損したところはなかつた。彼女達は、初めは恐る〳〵又、泥や埃だらけになつた家の中に這入つていつた。そして、七室ばかりもある小廣い家の中を悉く手を附けることは出來なかつたが、不斷定子の使つてゐる八疊に、茶の室、それから玄關や台處などを、二人とも尻つ端折りになつて泥や煤を掃き出したり、固く絞つた濡れ雜巾で疊の上を拭いたりした。さうしてゐる間も、ぞらッといつて、搖り返しの來るたびに雜巾を片手に庭に驅け下りた。押入れの襖が捩れたやうに曲つてしまつて、元のとほりにしようとしても、どうしても閾にはまらないのが出來たりした。

簞笥と並んで、枠などの太く頑丈に出來た舊い型の、背よりも高い、大きな姿見の鏡臺が据えてあつたのが、倒れたまゝめれんすの被ひに隱れてゐて、はじめは氣がつかなかつたが、取り起して被ひをとつて見ると、ちやうど中央のところが三つに割れてゐた。それには定子は二度吃驚して、

「あらッ大變だ。姿見が壞れてしまつた。」と、思はず聲を發した。その鏡は、彼女の實家から持つて來たので、何でも父が古く外國から持つて歸つたもので、今ではいくら金を出しても一寸買へないものであつた。

そして、あらかた一と片付きして彼女達は不安ながらに息を入れてゐるところへ、大久保の方から來る、もう何年も取付けてゐる米屋の若い衆が、自轉車で、用を聞きかた〳〵樣子を見に來てくれた。米はまだ、つい二三日前、又近いう

ちに人がふえるので一俵も取つて置いたのがあつたから、その心配はなかつた。

しかし、その米屋の若い衆はひどく氣になるやうなことをいつた。

「坊ちやんやお嬢さんはまだ彼方においでゝすか………、今此方へ來る途中で人の話してゐるのを聞いたのですが、横濱から先きが、東京よりまだ非道いさうですねえ、鎌倉の方は津波で大變な人死にださうです。」

定子はそれを聞いて、更に又胸にどつと大きな岩でも載せたやうな氣がした。そして、思はず唇が、ぴく〳〵と痙攣を感じた。

「まあ、さう！………」と、いつたきり、後少時は咽喉が詰まつたやうで、聲が出なかつた。

「庄どん、それは本當でせうか？………あんた何處でそんなことを訊いて來て？」

「私も委しいことはよく知りませんが、そこのステーションの方でそんなことをゐつてゐるのを、通りながら聞いて來ました。………ほんとにご心配ですね。」

定子は美しい顏にすつかり血の氣を失つてしまひ、途法に暮れたやうに、

「お米、どうしたらいゝだらうねえ。………それが本當なら、照子も達男もきつと波に浚はれて死んでしまつてゐるわ………」

およねも心配さうに聲を曇らせて、

「まさか、お嬢さまや坊ちやまにそんなことはございませんでせうけれどねえ……」といつたが、何となく不安であつた。

定子はもう自分達のことは忘れてしまつたやうに、米屋の顏を見ながら、

「庄どん、誰れか、もつと委しいことを知つてゐる者はないだらうかねえ……」といつて、今度は女中のお米の方に

眼を移して、

「よねやお前、何處かへいつて訊いてくる處はないかねえ、」

彼女のいふことは胸の中と丶もに千々に亂れていつた。

「さうでございますねえ……」と、お米も思案するやうにいつたが、差當つて訊きにいつてみる處もなかつた。「わたくし、そこの派出所へにいつて訊いてまいりませうか。」

「さあねえ、警察へいつて訊いても、今急に遠くの方のことは分らないだらうねえ。」

「え丶、そこの交番ではどうですかねえ。」米屋もいつた。

しかし、それは、ただ口でいつてみるだけで、今の場合急にどうすることも出來なかつた。やがて米屋も自分のところの方が心配なので間もなく歸つて去つてしまつた。

定子はその米屋の若い衆が歸つて去つたのさへ、何となく頼りなさを感じた。軍人の妻――殊に海軍々人の妻であつた彼女は、どうかすると半歳くらい夫の顔を見ないことさへあつた。夫が研究の爲めに英國に二年間派遣せられてゐた間も、彼女は凛として夫の不在を守つて來たのであつた。

さうしてゐる間も、新宿の方が燒けてゐるのは、まだ〳〵鎭火しないと思はれて、焚鐘は小休みなく亂打するのが聞え蒸汽ポンプが消魂しい音をさせて走つたりするのが尙ほしばらく地に響いてゐた。それでも四時五時といふ頃になると火勢はいくらか衰へたと思はれて、そちらの方の、もの〳〵しい騷擾の物音も段々靜かになつた。餘り遠い距離でない新宿の火事がさうして鎭まりかけると、星野の住居の居まはりは常から閑靜な處なので、時々輕微な地震が搖返して

來て、それに脅かされて立ち騷ぐ人聲のほかには、先刻から一と仕切りの騷ぎは殆ど忘れてしまつたやうに、又不斷のやうな靜かさに返つた。しかし、その靜かさは毎時のやうな靜かさとは全く異なつてゐた。見ると、西の方の空はまるで烏賊の墨を溶かしたやうな眞黑な雲が低く頭上に壓し懸つて、樹木の多いそこら邊りから、此方の高臺の下の低地を越して、西に見える中野の方の高い杉や欅の森が、その陰鬱な空の面に浮び上つて見えてゐる。地震につゞいて今度はどんな凄じい雷雨でもやつて來さうな氣配である。

さう思ひながら今度は東に當る四谷の方の空を見るともなく見ると、そちらの方は空は明るく晴れて、火事の煙もそれほどでなかつたが、その晴れた空の中心に向つて、四谷よりはまだ〳〵ずつと先きの空にあたる見當の處に、何ともいひやうのない積雲がもく〳〵と潰えかゝるやうに湧き出でてゐた。それは夏の末ころの空に屢々見る雲であるが、いつも見る普通の入道雲とは異つて、とても不思議な不氣味な形をしてゐた。そして、その雲は、初めのうちは、だん〳〵西に傾く太陽の光線を腹に受けて白く輝いてゐたが、太陽が沈み際になるにつれて夕映えを一面に浴びて少時薄紅に火照つてゐた。その間も雲の形は少しづゝ絶えず動いてゐたが、大空の東半を掩ふた大入道のやうな雲のたゝずまひは、何時になつても崩れる樣子はなかつた。そのうち太陽が沈んでしまつたと思はれて、雲の色は赤く火照つてゐたのが、次第に光を失つて、煙のやうな暗い灰色に移つていつた。

やがて七時頃になつて、とつぷり日が暮れるとゝもに、生垣の外の方を通つて行く者の話聲で、東京の方が一面眞赤に燒けてゐると云つてゐるのが聞えた。

「よねや、どうしようね。今晩はとても家の中には寢られやしないから。」定子は思案するやうにいつた。

「奥樣、わたくしそれで好いことを考へました。今お隣の女中さんもいつてゐました。お隣りでも今晩は外にお寢みに

なるんださうでございます。」といつて、お米は湯殿の中から板の簾の子を有りつたけ庭の方に持ち出して來た。

「奥さま、これを座板にいたしませう。」

「おゝ、ほゝゝゝそれは好い分別だ。あたしも手傳ふわ。それから、あの、張板も持つて來るといゝわ。」

定子はさういゝながら、起ち上つて又尻つ端折りになり、涼しいめれんす友禪の腰卷の裾を見せて自分もお米に手を貸した。

お米は効々しく歩きや張板などを運んで來て、庭の植木の間に都合よく一坪ばかりの座板を造つて、それに茣蓙を敷いた。それから洗濯竿を木と木との間に渡して細引のやうなもので縛り、蚊帳を吊る工夫をした。

夜に入つても勿論電燈は點らない。定子は、暗くなつた空を見上げながら、

「もし雨が降つて來た時には困るわねえ。」といふと、お米もその事はすつかり忘れてゐたといふやうに、頭の上を仰いで見て、

「あつちの方がひどく曇つてゐますから、降るかも知れません。」

「もし降られたら、大變だわ。」

「奥樣、降る用意もして置かなければなりません。」

と、いつて、お米は竿を渡してゐた手を一寸休めて考へたが、女手で、尙ほその上に高い處にどうして雨除けをこしらへていゝか當惑した。

定子も手傳ふ手を遊ばして思案しながら、

「雨具の合羽のやうなものならあるけどねえ、テントの一部も探したらたしか有るかも知れぬ。屋根をどうして拵へる

かねえ！……」

楠木を利用して三つ所だけ蚊帳を吊る工夫をしたお米は、どうしても一とゝころは新しく杭を打つて、棒でも立てなければならなかつた。

二人が女手にそれを持て剩してゐるのを目隱しの羽目板の彼方から見てゐたと思はれて、生垣の隙間から、

「お手傳ひいたしませうか。」と、隣家から聲がかゝつた。

定子とお米は一緒に夕暗みの中でそちらを振返つてみた。隣家へは家は貸しては置くが、星野の方では自分の方が家主であるだけに、殊に女主人のことゝて、何事も借りて住む方に對しては愼ましく控へ目にして置くのであつた。それが爲に、不斷双方の交渉といふやうなことは、たゞ、きつ〳〵と毎月末に屆けて來る家賃の受取證に認印を捺して渡すことよりほかには無いのであつた。

隣家は銀行に勤めてゐるまだ三十五六の夫婦で、不斷は小さい子供が二人と、それに主人か妻君かの母親で六十ばかりの老婦人が一人と、他に女中一人だけであつた。この頃夏の中になつて、時々二十七八の學生らしい青年の白地の姿がちら〳〵見えてゐた。お米が生垣越しに、向うの女中から聽いて來た話によると、それは妻君の兄さんで京都の帝國大學にいつてゐるのであるが、なか〳〵道樂者とかで、そのためにも本當ならもう二三年前に大學を卒業してゐなければならぬのであるが、今年やつと及第したとか、せぬとかいふのであつた。鼻の下に短く刈り込んだ髭を生やしてゐた。そして、背のすらつとした。なか〳〵の好男子であつた。

聲のした生垣の際には猿股に半シャツのまゝで突立つてゐる男子の姿が見えた。

お米は目敏く、それが隣家の妻君の兄さんだといふ青年であることを薄暗の中に認めた。そして彼女は、そうつと定

を秘めて、
「奥様、お隣の……」と囁いた。
定子はその時お米にさういはれなくとも、自分も、それが隣家に近頃見る青年であることはすぐ感づいてゐた。
二人は一寸顔を見合はせながら、低聲で相談するやうにいつた。
「お頼みいたしませうか？」
「折角ご深切に仰有つて下さるんだから、さうするといゝわ。」
定子は小聲でお米に承諾を與へた。それでお米は、垣根の方に歩み寄つて、一年の中に殆ど一度開いたことがあるかないかわからないくらいの木戸を開きながらいつた。
「ほんとうに濟みませんでございます。あんまり高い所なもんでございますから……」
すると青年は飽くまで氣さくな調子で、
「なに………私のとこでも今までやつてゐたのです。」と、いひながら、つかつかシャツ一枚の裸體で庭の中に入つて來た。そして定子の方に向つて聲を掛けて挨拶をした。
「裸體でご免下さいまし。」
それに對して定子は、何か知ら稍々氣を置くやうな調子で、
「どうぞそのまゝ…………ほんとうに濟みませんでございますねえ。」
「こんな時にはお互さまですよ。…………お宅はいかゞですか」
「えゝ、あんな恐ろしい音ほどのこともございませんですけれど、でも壁など大部傷みました。そちらのお宅もどうだ

かと思ひながら、つい、病人のうへに、こんな場合なものでございますから、まだお訊ねにも出ませんで。皆さまお負傷もございませんでしたか。」

「ええ、お蔭で擦り傷も………」

それから隣家の青年は、女中のおよねに手傳はせて、蚊帳の上に、もし雨の降つた場合に覆ひをするやうな簡單な裝置をしてくれた。

さうしてゐるうちに日はすつかり暮れて、夜に入るとともに、そこらからは見えないが、東京の方の空が一面に眞赤だ、大變な火事だといふ話が傳はつて來た。定子は、みき子と女中と三人で、悄々としながら庭の樹の枝に提燈を吊り下げて、幽かな夕食を濟ました。けれども逗子の方の安否を氣使ふと、彼女は食べる物も碌に咽喉へ通らなかつた。どんな遠洋の方にいつて居つてもいゝ、夫が此の世に居るのであつたら、こんな心配にも、もつと力がつくであらうと、そんな効なきことを思つてもみたりした。

（作者の家族に重病者出來。止むを得ず次號にて完結す。）



窓展く

佐藤春夫

電車通りから四五間奥まつた路次に、鳥籠のやうな格好の揃ひの家が七八軒一廓をしてゐる。私の家はその一廓のうちで表に一番近いところにある。それでなくつてさへ小つぽけな貸家の、ましてや街の中のことだから、庭などといふものゝあらう筈はない。でも、申しわけだけに裏に三坪程あるにはある。しかし、そこは、さる高貴な人のお邸に接してゐて、高い煉瓦塀で、ところがその煉瓦塀だけでもまだ不充分と見えてその上へもつて來てトタン塀をもう一層高くつぎ足して築いて、完全に日光を私の庭から遮つてゐる。おかげで立枯れになつてしまつた躑躅が二本、それにこれもやはり枯れ木の柘榴が一本。躑躅の方はひつこ抜いて　そこの片隅へ隱して置いたが、柘榴は厄介なことに、ちよつとした大木なものだから、どうにも仕方がない。手輕るに抜き取る事もならず、抜いたにしたところが、それの捨場所もない。どこかへ持ち出さうにも、この家の兩脇はぴつしり隣家へくつついて、人ひとりがどうやら辛うじてといふほどの、空地とも呼べない空地なのだから、こんな

枝を張つた木などは五十片にでも切り刻まなければ、外へ運び出せもしない。もともと腰かけに住んでゐるのではあり、それ程の面倒をするがものもないので、木は枯れたまゝで立つてゐる、その枯木がまた、表を自動車でも疾走する度にひどくふるへる。それが例の煉瓦塀の上のトタン塀へ小枝が觸れてゐるものだから ガタン〳〵と騒々しい音を立てる。家の小屋組は地震ですつかりゆるんでしまつたところへこの物音だから、知らない人はまた地震かと目を見据へるほどである。かういふ困つた木のほかには、家主が縁日ででも仕入れて植えたらしいつまらない灌木がそれほど、不思議に枯れもせずにゐる。これが色も香もない私のとこの庭である。私は時々故郷の田園の廣い庭を思ひ出して、自分の都會での居住を、屢々自ら呪ふことがある。ついでに一般の都會居住者をも憐れむのである。……

現在、この家に住んでゐるのが四人――でも、ひとりに四疊以上の廣さを占めることが出來る。

その人々とは第一が私。

それからA。

それからR。

それからT。

最後の人物だけはちよつと紹介するが、これは私の内縁の妻である。半年ほど前からこの家にゐる。

で、大たいに於て私は幸福だと言つていい。即ち、平凡にもの事が運んでゐるの訳である。

ここでついこの間のことであつたが、――さう、まだ十日とは經つまい。或る雨あがりの美しい朝であつた。楊子をつかひながら見てゐると、三坪ほどの空地を掃くためにRは、庭帚と塵とりを持つて、雪隠のうらへ出た……

「や！、どうもすみません。あとで掃除をします」

先刻、さう言つたのは、背中合せになつてゐる豆腐屋のおやぢだつた。それが思ひがけないところから首を出してゐたのだ。おや！妙なところへ穴をあけやがつたな。私もその時初めて氣が付いた。それは私の家の雪隱の窓と向ひ合つて、豆腐屋では一つの新らしい窓を設けたのである。いや、まだ出來上つてはゐない。出來上りつつあつた。大工も何もない、ただ男がふたりで、鋸をゴシゴシ操りながら家の脊中へ無雜作に、穴をあけたのである。大きさはまづ二尺平方だつた。朝寢坊な私の家でまだ氣つかないうちに、大部分の仕事は已に終つてゐて、細部を工夫してゐるところだつた。

私は豆腐屋の言葉には返事もせずに部屋へかへつた。言葉數の少いRも何一つ答へた樣子はなかつた。

「今、ものを言つたのはうちへ言つたのぢやなかつたの？」Tがさう訊ねた。

「さうだよ」

「なぜなんとか返事をなさらないの？」

私にはこの窓が氣に入らなかつた。それや、自分の家の脊中へ自分で穴をあけるのは、こちらで文句はないが、私の家の雪隱とあまり近いからだ。彼の家と私の家との間はほんの二尺とはない。私の雪隱の窓から手を出せば、彼の窓に手がとどくどころではない。手は窓をとほして彼の家の空氣をつかむことさへ出來るのだ。――それよりも私はもともとこの豆腐屋を甚だ憫んでゐる。彼は、私の家から彼の屋根へ唾をするとか、ものを投げたとか、さては自分の家の脊中で焚を燃したりして貰つては、ここにはいい布團が納つてあるから燻ぶるとか、さういふ抗議を持つて家主へ私の家

を排斥に行つたことがある。彼の屋根が汚くなることも本當ではあるし、埃を燃したので誤つて彼の家の板が少しこげたことも事實である。そのころ何しろ男ばかりの家でだらしなくはしてあつた。しかし私の家の誰もわざ〲そのやうなことをしたことはないのである。私の家の二階の窓から何げなくやることが、みんな彼の家の屋根に落ちかかる。問題は家があんまり接近してゐることだ。なるほどまた、そんな市中で火を燃しては惡いとは云へ、たかが埃でせいぜい煙草の吸殼が落つて汚いからといふぐらいのことだ。それを直接私の方へ注意をすることか、わざ〲家主へ言つて行く程のものはないのである。しかし言はれてみればこちらが惡いのだからあやまつては置いた。しかしこちらから喧嘩をするつもりなら、彼と同じぐらゐな言ひ分はあつたのだ。雨がふると彼の家の物置きの屋根のしぶきが私の家の廊下へはげしく飛沫をあびせかけて、そこを開けては置けない。それは向ふの屋根が遠慮もなくこちらへ突き出して來てゐるからだ。また火を使ふ商賣である彼の家の煙突が非常に低くつて、風の工合でその煙が私の二階へ吹き込む。煙だけではない、その低い煙突のところへ鉋屑や紙屑を放り込むと見えて、その燃料の形をして火の子が盛んに舞ひ込む。夏のうち、白い干しものでもしてゐると、その爲めに汚れるほどである。それだけの低さの煙突ならば、きつと石炭を燃す筈で許可されてゐるに相異ない。だが、近所合壁で一々そんなことを言ひ合つてゐては仕方がない。私たちはただ相手が自分の受ける不快だけ知つてゐて、自分の與へる不快を一向氣づかない蟲のよさを苦笑してすましてゐた。

　それだけならば何でもなかつたのだが、この春のころの事である。私は或る家から小犬を預けられた。――轉居するに就て今度の家は新築で、隣家との間にまだ垣根が出來てゐない。直ぐに垣根をこしらへるからほんのしばらく預れといふのであつた。（私の犬好きは有名だつた。）それはまだ二ケ月とは經たない小犬だつたのですぐに私の家に馴れた。それが或る朝見えなくなつたのだ。捜すと、近所の子供の話に、犬は豆腐やのおやぢに殺されてどこかへ持つて行かれ

たといふのである。理由は、小犬は豆腐やのひとり子にぢやれついて、子供は大きな聲で泣いたのださうである。もう少し大きな子供の見聞では、おやぢがいきなり出て來て、鑑札も何もない奴だから殺してもいいのだ。狂犬かもしれなぞと言ひながら太い鐵の棒で頭を打ち据えた。小犬はその場でタルッと一まはりするとそのまま打倒れた。そいつを豆腐やはつまみ上げて行つて、大通の泥溝のなかへほり込んだといふのである。そこへまたもうひとり別に近所のそばやの小僧が來て、犬はまだ死んではゐない。溝のなかでもがいてゐたのを小僧自身拾ひ上げて、泥だらけだつたから水をかけて洗つてやつて來たと知らしてくれた。飯たきを頼んでゐた婆やが、そのことをまだ寢てゐる私に報告に來て、その瀕死の小犬を一たいどうしようかと相談をした。仕方がない、放つて置かう。死にさうになつてゐるのを動かすのも悪いし、それよりはそんなに苦しんでゐる者を見たくない。その代り死んでしまつたら、おれが自分で行つて豆腐やの店さきへ投り込んでくれるからと言ひながら、私は起き直つた。婆やは自分のせゐのやうに詫びて、庭から外へ出さないやうに注意してゐたのだたのに、犬は自分で出たのだと言つた。また、尤も豆腐やは二三日來業を煮してゐたかも知れない——犬は與へてやつた寢床を嫌がつて、豆腐やの床下へもぐつてそこに寢てゐた。時々鼻をならすものだから豆腐やでもうるさいと思つてゐた所からだつたのださうとも言つた。婆や自身もうるさがつてゐたらしい口吻が私を一さう不機嫌にした。窓の外はじめじめした春雨であつた。私は豆腐のトタン屋根へ唾を吐つかけてやつた。さうしてこんなせせつ込ましいところへ犬なんど預けに來た人間が腹立たしくなつて來た。

　通には死にかかつてゐる小犬を見るために人だかりがしてゐた、とさう來客のひとりが話した。それや私の家の犬だ。まだ死なないでゐるのかと問ふと、八分どほりは死んでゐたといふ事であつた。そのうちに私の家の前がどや／＼と騒がしくなつて、近所の子供たちが、うちの婆やを口々に呼びかけた——おばさん。犬が來たよ。おばさん。犬が來たよ。

よろめいて辛じて歩いゐてた。一心に地面を嗅ぎながら、目はつり上つて、呼んだけれど瞳を動すことさへも出來ないらしかつた。不憫を感ずる前に物凄かつた。頭は腫れ上つて、ぐつしよりと泥に濡れた體は板のやうにつぶれてしまつてゐた。まだ朝飯もやつてなかつたのである。食物を與へたがもとより見むきもしなかつた。一日間、小犬は水さへ飲まなかつた。しかし回復した。私は喜びながら四這ひになつてよろめいて歸つて來た、犬の眞似をして皆を笑はせた。興に乘じて私は獨白で犬の心理描寫を試みた——……俺はひよつとすると今死ぬかも知れない。……俺のまはりのこの人だかりは俺を見物に來てゐるのだな。……それにしてもここはどこだらう。さうだ。ここはどこかの道ばたぢやないか。——俺は道ばたで死なうとしてゐる。みんなは俺を宿なしの野良犬だと思ひ込んでゐるに違ひないが、俺はそんな者ではない。ちやんとした家がある。家の人たちは俺の事を案じてゐるだらうな。然うだ。ここでこのまま死んだのでは俺は死恥を曝すのだ。ともかくも俺はどうにかして吾が家へ歸らなけやならない。これがこの際の急務だ。……そこで、犬を眞似て倒れてゐた私は、よろめきながら立つて——……それにしても俺の家は一たいどの方角だつたらう。——犬の私は目を引きつらせて鼻を疊にすりつけてふら／＼と歩き出した……

すべてはTがまだこの家へ來る以前のことであつたから、彼女は私が豆腐やを憎んで口も利かない理由は知らなかつたのだ。實際、私は諸君が冷靜に考へるより案外この豆腐やを憎んでゐるのだ。最初はただ身勝手な男とばかり思つてゐたのを、その後「花を愛するものは詩人だ。動物を愛するものは善人だ」といふ私の箴言によつて、私は豆腐やを惡人の仲間へ入れてしまつた。又、鑑札を受けてゐないから殺してもいいといふ彼の正義觀がへんに私に氣に入らなかつ

た。私の家では彼から豆腐を買はない事にした。尤も豆腐を私はあまり好きではない。ところでこの男が私の家の便所や庭（といふのも、前述のとほり滑稽だが）を唯一の眺望として勝手に窓をつくる。それから、いやどうも濟みませんなどと、自分の都合の悪い時にはなまなか溫和さうに人並の口を利くのだ。そんな男に返事をする口は私は持たない。私は自分によつて人を侮蔑した覺えは一度もないだけに、相手を高が豆腐やのおやぢとは思へないで、その厚かましさを憎むのである。そのくせ私は當の豆腐やのおやぢの顏は別に見覺えてもゐない程である。この種の私の偏癖は實におとなげなくをかしいものであることを私は自分で氣がつく。どうも、をかしくつても仕方がない。

ともかくも、私は豆腐やには返答をしなかつた。私のつもりでは、豆腐やがそこへ窓を設けたことを、私が認めないのである。

窓と窓とはこのやうに向ひ合つて、私の家の便所からは隣の一室は見とほしになつた。先方でそんなへんなところへ勝手に窓をこしらへたのを、何もこちらで遠慮をしてやることはないといふので、私は敢て私の便所の窓をしめてやらない。先方ではガラスに紙を張つたものを嵌込むやうにこしらへてゐるのに、何故かそれを開放してある。かうして私の便所の窓も亦、一つの展望を持つことになつた。

その部屋といふのは、離れ座敷で——座敷といふのもをかしいが、ともかくも一つの獨立した屋根の下にある。そのトタン屋根は前に私たちがそこを汚くするといふので抗議されたところだし、その床の下は例の小犬がもぐつて行つたところなのだ。屋根の大きさから判斷すると六疊ほどある。しかし、便所の窓から見えるところによると押入れがあるやうだから四疊半だらう。そこにひとり男が世帶を持つてゐる。どうも新らしくそこへ住むことになつたらしい。豆腐やが部屋貸しをしたのだらう。さうしてあまり薄暗いとでもいふので、あんなところへ窓をきつたらしい。この同居

——私にとつては新らしい隣人は三十すぎの男だつた。それ以上には、どんな顔の、何をする男だらうといふ程な興味すらも私には持たなかつた。ただその新らしい窓に對する敵意もどうやら薄らいだ。豆腐やのおやぢなら、もし間違つて紙屑一片でも投げたら吐鳴りつけてやらうぐらいの氣持は、この窓に對してもう無かつた……

「男やもめに何とかと言ふけれど、一たいどんなことをして暮してゐるのでせうねえ」女には多少の興味があるらしくTはそんなことを言つてゐたけれども、その後、話題にならなかつたところを見ると面白い發見も別になかつたらしい。それが、一昨晩のことだつた——

客があつてみんな二階にゐた。不意にTが下から呼んだ、

「Aさん！Rさん！おりて來てごらんなさい。珍らしいものがあるんだから」

何か冗談らしいのだが、その聲がほんとうだつたからAもRも下りて行つた。それから梯子段のところで何か話し合つてゐる。客といふのは極く親しい人ではあり、私も何かと思つて客をほり放しにして下りて行つてみた。Tは梯子段の中ほどにゐて、例の窓の方を指しながら性急に囁いた——

「いま、お嫁さんが來たんですよ。——え、お嫁入りですよ。周旋屋がつれて來たの。周旋は両方から十五圓づつとるのですね。金を受取つてゐたわよ。それから里がへりがどうのなんて、いろんなことを言つてゐるのが聞えたわ……」

つまらない事を發見して來てTは子供のやうに珍しがつて喜んでゐる「氣の早い。もう丸髷を結つて來てゐるのよ。ちよつと覗いてごらんなさい。」

私もちよつとした興味に驅られて覗いて來てみた。なるほど丸髷の女二十五六のがひとり窓の正面に見える。しかし私はそれ以上に覗き込むほどの好奇心もなかつた。ただ、こんなところから、こんな結婚式を見ることが一種奇妙にを

かしかつた。ユーモラスといふことの正當な意味はからでもあらうかと思へる。聞けば隣人はともかくも羽織にセル袴をちやんと着用してゐるさうである。眞面目なめでたい結婚に相違ないのだ。その花婿に周旋屋が「お前さんもまあそのうち、それや一週間後でも半年後でもいい、懐の都合もあるだらうから工面のいい時に、一つ花嫁の實家へ二人づれで行つて安心もし安心もさせたがよからう」といふやうなことを云ひながら、十五圓受取つてゐたさうだ。外にも三四人ぐらゐの人がゐると見えて　酒氣を帶びた談笑の聲が手にとるやうに聞えて來た。

「さう〳〵」とTが思ひ出したらしく言つた「さう言へば、きのうお友達らしい人が來て話をしてゐたのはやつぱりお嫁さんの事だつたのね。十八九のがひとり、外にもうひとりあるがそれは少し年をとつてゐる、二十六七だから、若い方がいいだらう。とさう言つてゐたが、年とつた方がよかつたと見えるわね。歸りぎわにそのお友達のやうな人が、財布でも開けて云つたのでせう――つまらないな、一錢銅貨一つだつてありやしないといふと、だからさ、飯ぐらひ食つて行けよ――と隣の人が言つてゐてよ。あれ新潟の人ぢやないか知ら。そんな言葉つきだけれど」

　すると無口のRが言つた「今、考へるとおとつひも面白いことがあつたのです――やつぱりそのきのふの友達かも知れない。ふたりでね、自由結婚論をしてゐたつけが」

「ふむ？どんな自由結婚論をね？」

「いや、何でもない、たゞ、男は三十以上、女なら二十五以上、勝手に結婚することが法律上いいといふやうなことだけですけれどね」

「どんな男だい、俺はよく見ないが」

「さあね。わからないわ。髮を分けて眼鏡をかけて、ニコ〳〵がすりの單衣などを着て、何を商賣にする人だか知らな

いが　おなべに袋はりなど内職してゐたわ。きつとお嫁さんを貰ふのでかせいでゐたんでせう。簞笥見たやうなものもあるし、風入らずなども買つて來てありますよ」

隣の談笑は十一時半ごろまでつづいた。私たちもそのころまで隣の噂をした。それぞれ寢に就かうといふので便所へ入ると、又新らしい發見をした。それは手まはしのいい丸髷の花嫁と思つたのは間違ひで、あれはいづれ世話をした友達の女房か何からしくもう歸つてしまつてゐて、その代りにはやはり昨日の話のとほり若い十七八の島田髷がひとり殘つてゐたさうである。——これもやつぱりTの發見である——「ガスの着物にメリンスの帶で島田だけはでも結ひ立てよ」私はまた私で誰も見なかつたけれど男の聲だけを聞いた。それは何のことだか知れないけれども「正直にやつてさへすればね」といふ一言だけだつた。

寢る前に二階の窓から首を出してみると十三夜にこの上なく靜かな月夜だつた。そのせゐもあるだらう、私は「正直にやつてさへすればね」と言つた新夫婦を祝福する好い隣人の心を持つてゐた。

次の日の朝になつて、——つまり昨日の朝だが、私は多少の好奇心を持つてそつと隣をうかがつて見た。男は窓の方をうしろにしてもつと明るい方に机に向つてゐた——そこに机があつたことは、少し意外だつた。男はその机によつて手紙を書いてゐるらしい。すでに書き上げたのが五六通ばかりもそのうしろに置いてある。女は？少しのび上つて注意してみると男のうしろに、お尻を向けあつて櫃の上へこごみ込んでゐる。さういふ新境界に於かれた男女の自然な狀態として單にてれてゐるのだといふやうにも思へるし、また妙に不安のある靜かさのやうにもある。何か氣に入らない事があつたのぢやないかなと、人ごとながら少し氣がかりだつた。朝飯を了つてそれから新聞をのこりなく見てから、私は唾をはくために庭の方へ首を差延べた。さうして何氣なくその方を見ると、あの小窓はここからも見えるので、そこ

へ深く肘をかけた女がぢつと俯向いたまま私のすさまじい庭の土を見つめてゐる。この朝はその前夜のよい月夜にくらべて思ひがけない雨だから、そのやうな樣子をしてゐる女が少し陰氣すぎていけない。

それでも、そのうちに、私は隣から洩れたごく低い笑い聲を一度聞いた。今日は昨日よりもよけいに話聲がするではないか。

今も笑い聲が聞える。又、鋸の音のやうなのがしてゐるが、今度はもう窓を展くのではあるまい。恐らくは閉すのであらうか——工合の思はしくなかつた障子をもう一度細工しなほして。それがいい。私たちはもう覗かないつもりだけれども、それでも、もう秋涼を覺えるではないか。

「秋ふかき隣は何をする人ぞ」

編輯だより

□桐葉謝し、朝顔の花凋落して秋の新生命が延びはじめました。重陽の頃ひより冷涼流るゝが如く眞に讀書の好時節として我黨の書入れです。

□謙虚の丞相職に懶く、總理の湘南行がカンフル注射だと貶すものあり。財政整理、普選の前途が思ひやられる。

□嗚、段の南朝氣取もすさまじいものなり。此將軍道義なく、血なく、人なく、眼中銀貨と虛名あるのみ。吳佩孚の奈翁を以つて居るのも流石に時代錯誤の國にてありけり。直隷の旗光りなく、一葉散るも齊盧は未だ秋に醒めず。列國干渉の夜叉どもは門前に篝火を焚いて待つている。

□市政は亂麻の如し。三木、鳩山は當年の森久保、高橋と指彈せらる。天下の公事を成すに私心彼等の如くでは慨はしい限りだ。つまりは市會議員に彼等を選んだも市民の罪が大きい。

□本誌は毎號農村問題に對する代表的論策を紹介する。八月號では那須博士の「農村問題の歸趨」を掲げ九月號には末弘博士の「小作爭議と小作調停法」の堂々六十頁近くの大論文を掲げました。現下の紛糾せる小作問題は本論を見ればその梗概と根本問題とを掴み得る我國での代表的論文で、全國の小作者、資本家、農村研究家、司法官、學生等必讀の雄篇だと思ひます。加之、九月號には執行官たる長島司法省參事官が「小作調停の目的、精神並に其内容の梗概」の論策は當局者が必讀の價値ある一文です。それから小野武夫、有馬賴寧、岡田温室伏高信君は各政黨の農村政策批判を九月號で執筆して下さいましたから農村研究者には九月號は絶對的必要な一本です。

□本月號には河田博士が情理兼到の「農民心理と時代思潮」一文を下さいました。十一月號にも或る有力なる農村問題論文が貰へることになつています。農村の本誌に對する期待は異常なもので、地方の購讀者が一ケ月は一ケ月と隨分增加して來る。現今我國で購讀者の增加するのは他に見られぬ例である。

□九月號から毎號短歌を本誌に登載することとした。本誌に發表するものは歌壇の尤も鮮清な表的なものであつて欲しい。假令代表的人物であつても、まづいものは發表してもらいたくない。

□『厨川白村集』は近く本社と警醒社の共同出版にて發行する。エツセイストとしての彼文壇の奇才としての彼の俤は本集によりて遺憾なく窺ひ知ることが出來ることを樂みにしておる。

□震災で紙型を燒失して久しく品切中であつた賀川豐彦氏「死線を越えて」芥川龍之介氏「沙羅の花」小泉信三氏「價値論と社會主義」熊谷一彌氏「テニス」は漸く出來したそうです。

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	八拾錢	貳錢
半ケ年	五圓六拾錢	增大號共郵稅不要
壹ケ年	拾壹圓廿錢	增大號共郵稅不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲外國よりの御註文は郵稅實費を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事

▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

(價八拾錢)

大正拾參年九月廿日 印刷納本
大正拾參年十月一日 發行

編輯兼發行人 東京市芝區愛宕下町一ノ一
印刷人 東京市牛込區市ケ谷加賀町一ノ一二 平田貫一郎
印刷所 秀英舍

發行所 東京芝區愛宕下一ノ一 改造社
振替東京八四〇二
電話高輪四九九三

冨山房重版圖書

文學博士 井上哲次郎著
日本朱子學派之哲學
定價五圓 郵稅拾八錢

文學博士 井上哲次郎著
日本陽明學派之哲學
定價一圓五拾錢 郵稅拾八錢

文學博士 井上哲次郎著
日本古學派之哲學
定價四圓八拾錢 郵稅拾八錢

文學博士 中島力造著
倫理學說十回講義
定價貳圓八拾錢 郵稅拾貳錢

文學士 大森金五郎著
大日本全史 全三卷
定價各七圓 郵稅廿四錢

文學博士 箕作元八著
フランス大革命史 全二册
定價各五圓五拾錢 郵稅各廿四錢

文學博士 箕作元八著
ナポレオン時代史
定價六圓九拾錢 郵稅廿四錢

文學博士 吉田東伍著
維新史八講と徳川政教考
定價貳圓貳拾錢 郵稅拾貳錢

文學博士 吉田東伍著
日本歷史地理之研究
定價六圓九拾錢 郵稅廿四錢

文學博士 吉田東伍著
新編日本讀史地圖
定價六圓五拾錢 郵稅拾八錢

漢文大系第一卷
四書
定價五圓 郵稅廿四錢

漢文大系第十二卷
詩經書經
定價五圓 郵稅廿四錢

文學博士 兒島獻吉郎著
支那文學史綱
定價貳圓六拾錢 郵稅拾貳錢

野中元三郎著
口譯論語詳解
定價參圓參拾錢 郵稅拾八錢

文學博士 坪井雄藏著
縮刷 通俗倫理談
定價壹圓五拾錢 郵稅六錢

文學博士 遠藤隆吉著
縮刷 常識百話と生活の趣味
定價貳圓 郵稅八錢

東京神田通神保町 **冨山房** 振替東京五〇一番

野上彌生著

海神丸

◇定價壹圓參拾錢
◇送料十五錢

新刊

生に對する人間の恐ろしき執着を語る「海神丸」。生命の芽を貞淑の名によりて抑へつゝある家庭の淑女の惱ましさと淋しさを寫せる「多津子」。借家人の悲哀と家主の困惑とを捉え來りて現代社會制度の不合理を暗示する「所有」の三篇。何れも創作壇の名星野上女史が心をこめた名作をあつむ。

東京市芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

正宗白鳥著

ある心の影

◇最新刊◇

四六判上製

定價壹圓六十錢

郵送料十七錢

文壇の老將たる正宗氏の近什「或る心の影」「人間の幸福」「秘密」「白壁」を收めたものである。練熟の筆を以て錯綜せる世相を寫し、人心の機微、運命の不思議を浮彫の如く讀者に示す、流石は白鳥氏の腕と何人をも首肯せしむる。

發行所

東京市芝區愛宕下町

振替東京八四〇二番

改造社

谷崎潤一郎作

戲曲 愛なき人々

（四六判上製）

定價貳圓 書留送料拾七錢

卅五版

幽谷に白蘭を見る氣高かさ、天上の星と語る神祕さ、美はしさは此作者獨歩の境地であり、そして人間の底ひも知れぬ惡魔的愛慾を自由に解剖する氏の藝術力の絶大なるは古今比儔すべきものがない、我々の心の奥に潜む煩悶、憤怒、悲嘆を無造作に引きずり出して暗に漂ふ宿命の情緒に涙をそゝらし、對角、三角、四角の戀愛をも曇りなき名刀にてグン〱解決して行く冴えは讀者をして一種の恐れをさへ抱かしむ。明治大正は云ふも更なり、我國の古今を通じ、世界の各國を通じて氏の如く惡魔的精神に徹するものありや、谷崎氏を通じて不朽の藝術力を味へ、そして唯美的精神の琴線に觸れよ。本書は「愛すればこそ」の姉妹篇であります。

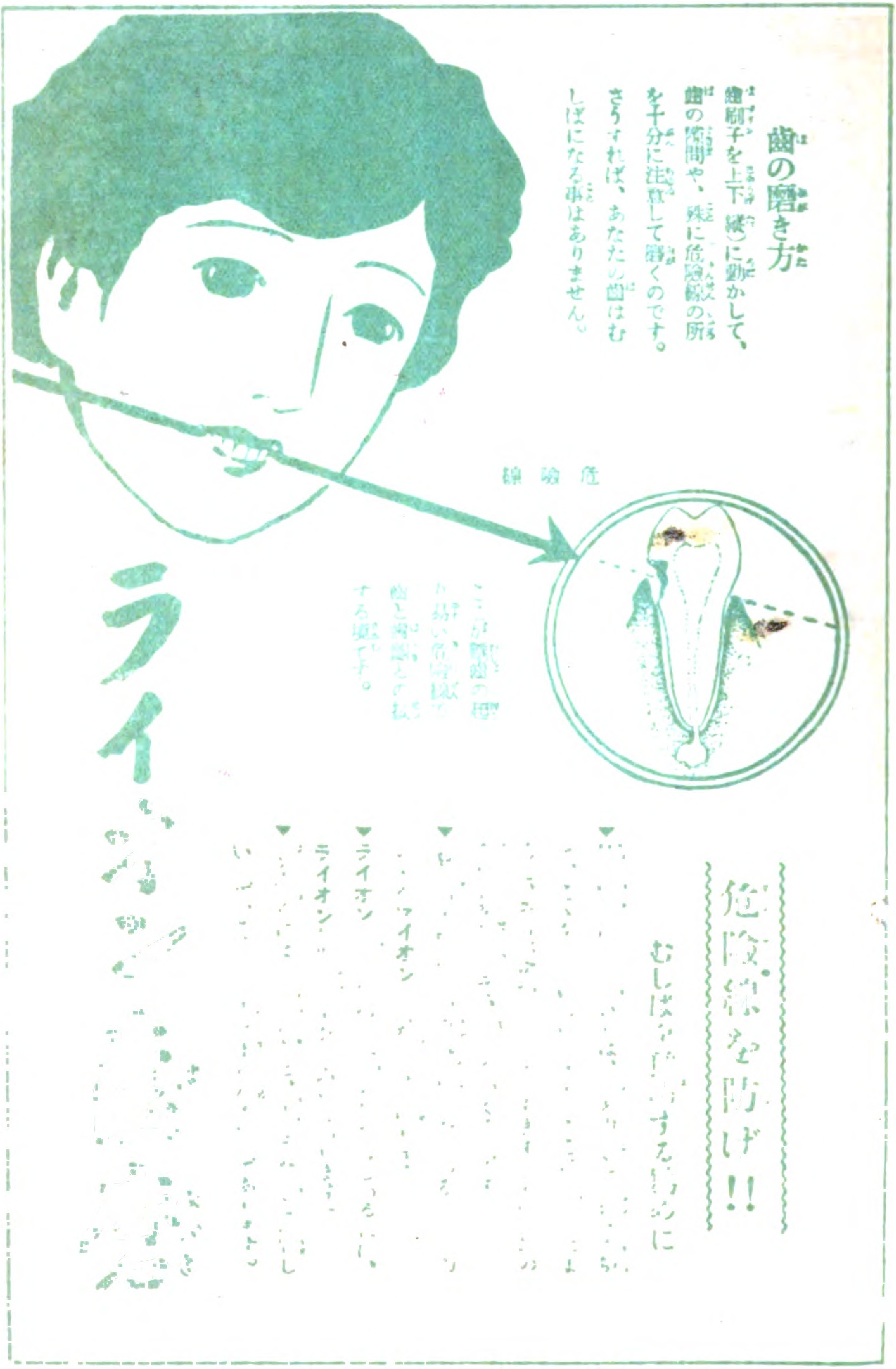
谷崎潤一郎著

愛すればこそ

（百二版）

定價壹圓六十錢 送料十五錢

東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二


歯の磨き方
歯刷子を上下（縦）に動かして、歯の隙間や、殊に危険線の所を十分に注意して磨くのです。さうすれば、あなたの歯はむしばになる事はありません。
危険線
ここが齲歯の起り易い危険線で歯と歯齦との接する處です。
危険線を防げ!!
ライオン

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF
POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: EIGHTY SEN A COPY, TWELVE YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, 1 ATAGOSHITAMACHI SHIBA, TOKIO.

大正八年三月廿一日 第三種郵便物認可
大正十三年[illegible]定價金八拾錢

東京秀英舍印刷